

たか いこく ほづね い せき

高畠遺跡 2

-高畠遺跡 第20次調査報告-

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1150集



2012

福岡市教育委員会

高畠遺跡 2

福岡市埋蔵文化財調査報告書第一一五〇集

2012

福岡市教育委員会



高畠遺跡 2

- 高畠遺跡第20次調査報告 -

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1150集



調査番号 0833
遺跡記号 TKB-20

2012

福岡市教育委員会

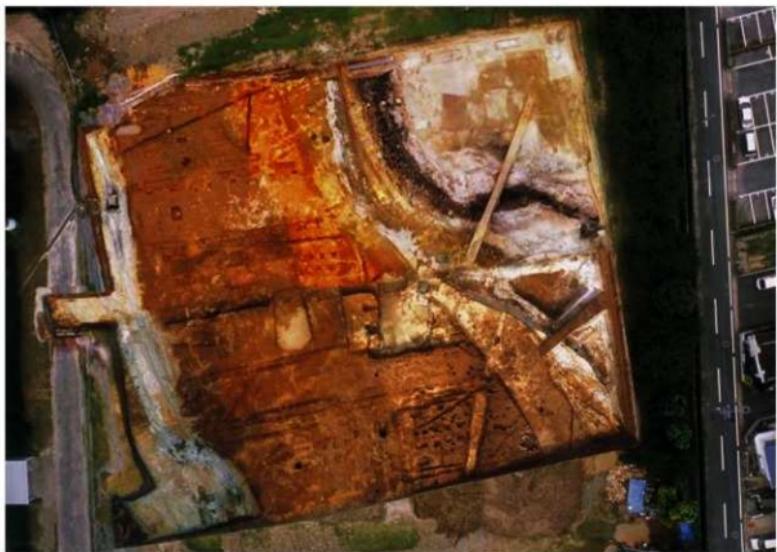
題字は、福岡市博多区在住の書家 濱フミ子氏の揮毫による



(1) 4号井戸断面(西から)



(2) 99号井戸断面(西から)



(1) 10号河川全景(南から)



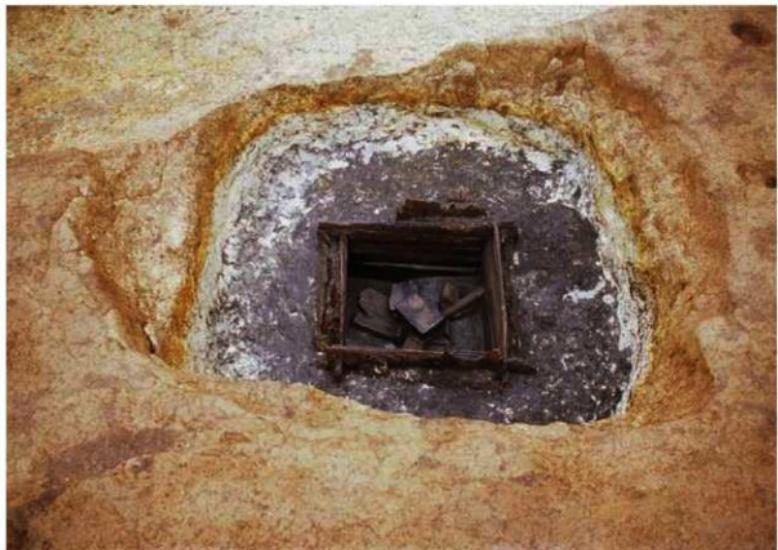
(2) 10号河川東半部遺物出土状況(南から)



(1) 10号河川西半部遺物出土状況(南から)



(2) 10号河川建築材出土状況(北から)



(1) 9号井戸全景(北から)



(2) 9号井戸 井戸枠断面(東から)



(1) 9号井戸底桶断面(東から)



(2) 9号井戸 井戸枠・桶(縮尺不同)



(1) 100 号道路遺構全景(西から)



(2) 100 号道路遺構(北から)



(1) 9号井戸出土鬼瓦(縮尺不同)



(2) 軒丸瓦・軒平瓦(縮尺不同)



(1) 丸瓦・平瓦(縮尺不同)



(2) 墉(縮尺不同)

序

いにしえの昔から大陸文化の窓口として栄えた福岡市には、豊かな歴史を語る数多くの遺跡が残されています。なかでも御笠川左岸の台地上に立地する板付遺跡は、我が国で最初に稻作文化を受け入れた地として著名な遺跡あります。これらの歴史的遺産を後世に伝えていくことが現代人の重要な責務であります。

しかしながら、開発によってやむなく失われる埋蔵文化財については、将来にわたって記録を保存するための発掘調査を行っています。

本書は、九州管区警察学校研修寮の建設に先立って実施した、高畠遺跡第20次調査の発掘調査報告書です。高畠遺跡は、日本における稻作文化発祥の地「板付遺跡」の南縁に連なる弥生時代初めから古代の遺跡です。今回報告する高畠遺跡第20次調査では、弥生時代中期から古墳時代を経て古代へと続く遺構群が発見されました。殊に古代の国道である官道と古代寺院跡「高畠廃寺」を示唆する鬼瓦等の検出はきわめて貴重な発見となりました。

本書は、これらの発掘調査の成果を取録したものです。本書が市民のみなさんに広く活用され、埋蔵文化財保護に対するご理解の一助になるとともに、学術研究に活用していただければ幸いです。

なお、発掘調査から整理報告までの間には、国土交通省九州地方整備局および九州管区警察学校の関係諸氏をはじめ多くの方々のご指導とご協力をいただきました。記して心から感謝の意を表する次第であります。

平成24年3月16日

福岡市教育委員会

教育長 酒井 龍彦

-----れいげん-----

- 本書は、福岡市教育委員会が福岡市博多区板付6丁目1番1号に所在する九州管区警察学校研修寮の建設に先立って、平成20(2008)年8月18日～平成21(2009)年8月2日までに緊急発掘調査した高畠道路第20次調査の発掘調査報告書である。
- 本書に使用した方位はすべて磁北方位である。
- 遺構は、堅穴住居をSC、据立柱建物をSB、土壌をSK、木棺墓をSR、道路遺構をSF、溝および田河川をSD、ピットをSPと記号化して呼称し、その後にすべての遺構を01から通番してNo.を付した。
- 本書に掲載した遺構は小林義彦が実測した。また、遺物は小林と谷直子が実測したが、一部は山口謙治(元福岡市埋蔵文化財課長)と今村ひろ子が実測した。博図は小林、谷と今村が浄書したが、一部は林由紀子と柴田志乃が浄書を依頼した。
- 本書に掲載した遺構の写真は小林が撮影したが、遺物写真是文化財写真工房の岡紀久夫氏に、また全景写真撮影と古代官道の図化は埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
- 本書の執筆は、II-2-7)とII-3-2)・II-4-1)・3)・4)の遺構を谷が、その他は小林が担当した。編集は小林と谷が行った。また、9号井戸や河川から出土した木器の樹種同定とプラントオーバル、寄生虫の分析は古環境研究所に委託し、その分析レポートを巻末に掲載した。
- 本書に係わる遺物と記録類は一括して埋蔵文化財センターに保管している。

調査番号：0832	遺跡略号：TKB-20	分布地図番号：24-0095
調査地點：福岡市博多区板付6丁目1番1号		
工事面積：3,850m ²	調査対象面積：3,850m ²	調査実施面積：5,067m ²
調査期間：平成20(2008)年8月18日～平成21(2009)年8月2日		

本文目次

序	
I.はじめに	1
1.発掘調査にいたるまで	1
2.発掘調査の組織	1
3.立地と歴史的環境	4
4.これまでの調査	7
II.調査の記録	10
1.調査の概要	10
2.弥生時代の調査	12
1)竪穴住居	12
2)掘立柱建物	17
3)井戸	20
4)貯蔵穴	23
5)木棺墓	23
6)土壙	24
7)井堰状杭列・河川	24
3.古墳時代の調査	48
1)土壙	48
2)河川	50
4.古代の調査	123
1)井戸	124
2)道路遺構	167
3)溝遺構	167
4)土壙	183
5.中近世の調査	185
1)溝遺構	185
III.おわりに	189

挿図目次

Fig. 1 周辺遺跡分布図(1/25,000)	2
Fig. 2 高畠遺跡周辺旧地形図(1/25,000)	3
Fig. 3 高畠遺跡調査区位置図(1/5,000)	5
Fig. 4 高畠遺跡第20次調査区周辺旧地形図(1/4,000)	6
Fig. 5 高畠遺跡第20次調査区周辺現況図(1/2,000)	8
Fig. 6 高畠遺跡第20次調査区位置図(1/1,000)	9
Fig. 7 遺構配置図(1/300)	折込

Fig. 8 弥生時代の遺構配置図(1/500)	11
Fig. 9 2号住居実測図(1/40)	13
Fig. 10 2号住居出土遺物実測図(1/4)	14
Fig. 11 5号住居実測図(1/40)	15
Fig. 12 6号住居実測図(1/40)	16
Fig. 13 5・6号住居出土遺物実測図(1/4・1/8)	17
Fig. 14 126～129号建物実測図(1/80)	18
Fig. 15 130～132号建物実測図(1/80)	19
Fig. 16 4号井戸実測図(1/30)	20
Fig. 17 4号井戸出土遺物実測図(1/4)	21
Fig. 18 99号井戸実測図(1/30)	22
Fig. 19 99号井戸出土遺物実測図(1/3・1/4)	22
Fig. 20 135号貯蔵穴実測図(1/30)	23
Fig. 21 8号木棺墓実測図(1/30)	23
Fig. 22 8号木棺墓出土遺物実測図(1/1)	23
Fig. 23 86号土壤実測図(1/30)	24
Fig. 24 138号井堰状杭列実測図(1/60)	24・25
Fig. 25 137号河川出土遺物実測図1(1/4・1/8)	26
Fig. 26 137号河川出土遺物実測図2(1/2・1/3・1/4)	27
Fig. 27 137号河川出土遺物実測図3(1/3・1/6)	28
Fig. 28 137号河川出土遺物実測図4(1/4)	35
Fig. 29 137号河川出土遺物実測図5(1/4・1/8)	36
Fig. 30 137号河川出土遺物実測図6(1/4)	37
Fig. 31 137号河川出土遺物実測図7(1/4)	38
Fig. 32 137号河川出土遺物実測図8(1/8)	39
Fig. 33 古墳時代の遺構配置図(1/500)	48
Fig. 34 12号土壤実測図(1/30)	49
Fig. 35 12号土壤出土遺物実測図(1/4)	49
Fig. 36 85号土壤実測図(1/30)	49
Fig. 37 85号土壤出土遺物実測図(1/4)	49
Fig. 38 10号河川遺物(土器)出土状況図1(1/150)	折込
Fig. 39 10号河川遺物(木製品)出土状況図2(1/150)	折込
Fig. 40 10号河川出土遺物実測図1(1/4)	51
Fig. 41 10号河川出土遺物実測図2(1/4)	52
Fig. 42 10号河川出土遺物実測図3(1/4)	53
Fig. 43 10号河川出土遺物実測図4(1/4)	54
Fig. 44 10号河川出土遺物実測図5(1/4)	55
Fig. 45 10号河川出土遺物実測図6(1/4)	56
Fig. 46 10号河川出土遺物実測図7(1/4)	57
Fig. 47 10号河川出土遺物実測図8(1/4)	58
Fig. 48 10号河川出土遺物実測図9(1/4)	59

Fig. 49	10号河川出土遺物実測図 10 (1/4)	60
Fig. 50	10号河川出土遺物実測図 11 (1/4)	61
Fig. 51	10号河川出土遺物実測図 12 (1/4)	62
Fig. 52	10号河川出土遺物実測図 13 (1/4)	63
Fig. 53	10号河川出土遺物実測図 14 (1/4)	64
Fig. 54	10号河川出土遺物実測図 15 (1/4)	65
Fig. 55	10号河川出土遺物実測図 16 (1/4)	66
Fig. 56	10号河川出土遺物実測図 17 (1/3)	67
Fig. 57	10号河川出土遺物実測図 18 (1/4)	67
Fig. 58	10号河川出土遺物実測図 19 (1/2)	68
Fig. 59	10号河川出土遺物実測図 20 (1/4)	95
Fig. 60	10号河川出土遺物実測図 21 (1/4)	96
Fig. 61	10号河川出土遺物実測図 22 (1/4)	97
Fig. 62	10号河川出土遺物実測図 23 (1/4・1/8)	98
Fig. 63	10号河川出土遺物実測図 24 (1/4)	99
Fig. 64	10号河川出土遺物実測図 25 (1/4)	100
Fig. 65	10号河川出土遺物実測図 26 (1/4)	101
Fig. 66	10号河川出土遺物実測図 27 (1/4)	102
Fig. 67	10号河川出土遺物実測図 28 (1/2・1/4)	103
Fig. 68	10号河川出土遺物実測図 29 (1/16)	104
Fig. 69	10号河川出土遺物実測図 30 (1/8)	105
Fig. 70	10号河川出土遺物実測図 31 (1/8)	106
Fig. 71	10号河川出土遺物実測図 32 (1/8)	107
Fig. 72	10号河川出土遺物実測図 33 (1/1・1/2・1/3)	122
Fig. 73	古代の構造配置図(1/500)	123
Fig. 74	9号井戸実測図(1/30)	折込
Fig. 75	9号井戸出土遺物実測図 1 (1/10)	125
Fig. 76	9号井戸出土遺物実測図 2 (1/10)	126
Fig. 77	9号井戸出土遺物実測図 3 (1/10)	127
Fig. 78	9号井戸出土遺物実測図 4 (1/10)	128
Fig. 79	9号井戸出土遺物実測図 5 (1/4)	129
Fig. 80	9号井戸出土遺物実測図 6 (1/4)	130
Fig. 81	9号井戸出土遺物実測図 7 (1/4)	131
Fig. 82	9号井戸出土遺物実測図 8 (1/4)	132
Fig. 83	9号井戸出土遺物実測図 9 (1/4)	133
Fig. 84	9号井戸出土遺物実測図 10 (1/4)	134
Fig. 85	9号井戸出土遺物実測図 11 (1/4)	135
Fig. 86	9号井戸出土遺物実測図 12 (1/4)	136
Fig. 87	9号井戸出土遺物実測図 13 (1/4)	137
Fig. 88	9号井戸出土遺物実測図 14 (1/4)	138
Fig. 89	9号井戸出土遺物実測図 15 (1/4)	139

Fig. 90	9号井戸出土遺物実測図 16 (1/4)	140
Fig. 91	9号井戸出土遺物実測図 17 (1/4)	141
Fig. 92	9号井戸出土遺物実測図 18 (1/4)	142
Fig. 93	9号井戸出土遺物実測図 19 (1/4)	143
Fig. 94	9号井戸出土遺物実測図 20 (1/4)	144
Fig. 95	9号井戸出土遺物実測図 21 (1/4)	145
Fig. 96	9号井戸出土遺物実測図 22 (1/4)	146
Fig. 97	9号井戸出土遺物実測図 23 (1/4)	147
Fig. 98	9号井戸出土遺物実測図 24 (1/4)	148
Fig. 99	9号井戸出土遺物実測図 25 (1/4)	149
Fig.100	9号井戸出土遺物実測図 26 (1/4)	150
Fig.101	9号井戸出土遺物実測図 27 (1/4)	151
Fig.102	9号井戸出土遺物実測図 28 (1/4)	152
Fig.103	9号井戸出土遺物実測図 29 (1/4)	153
Fig.104	9号井戸出土遺物実測図 30 (1/4)	154
Fig.105	9号井戸出土遺物実測図 31 (1/1・1/3)	155
Fig.106	9号井戸出土遺物実測図 32 (1/2・1/4)	155
Fig.107	133・134号井戸実測図(1/30)	166
Fig.108	133・134号井戸出土遺物実測図(1/4)	166
Fig.109	100号道路構築実測図(1/200)	折込
Fig.110	100号道路構築土層断面実測図(1/50)	折込
Fig.111	100号道路構築出土遺物実測図(1/4)	167
Fig.112	1・3号溝実測図(1/40・1/150)	168
Fig.113	1号溝出土遺物実測図(1/1・1/3・1/4)	169
Fig.114	136号溝遺物出土状況実測図(1/150)	171
Fig.115	136号溝出土遺物実測図 1 (1/4)	172
Fig.116	136号溝出土遺物実測図 2 (1/4)	173
Fig.117	136号溝出土遺物実測図 3 (1/2・1/4)	174
Fig.118	136号溝出土遺物実測図 4 (1/4)	175
Fig.119	136号溝出土遺物実測図 5 (1/4)	176
Fig.120	136号溝出土遺物実測図 6 (1/2・1/3)	178
Fig.121	103・104・112～114号土壤実測図 (1/30)	184
Fig.122	105・112・114号土壤・116号ピット出土遺物実測図 (1/4)	185
Fig.123	101・102号溝断面図(1/100)	186
Fig.124	101号溝出土遺物実測図(1/3・1/4)	187
Fig.125	102号溝出土遺物実測図(1/4・1/8)	188
Fig.126	高畠遺跡主要遺構推定図(1/4,000)	190
Fig.127	水城東門・西門ルート復原推定図(1/50,000)	197

図 版 目 次

- 卷頭PL. 1 (1) 4号井戸断面（西から） (2) 99号井戸断面（西から）
卷頭PL. 2 (1) 10号河川全景（南から） (2) 10号河川東半部遺物出土状況（南から）
卷頭PL. 3 (1) 10号河川西半部遺物出土状況（南から） (2) 10号河川建築材出土状況（北から）
卷頭PL. 4 (1) 9号井戸全景（北から） (2) 9号井戸 井戸枠断面（東から）
卷頭PL. 5 (1) 9号井戸底桶断面（東から） (2) 9号井戸 井戸枠・桶（縮尺不同）
卷頭PL. 6 (1) 100号道路遺構全景（西から） (2) 100号道路遺構（北から）
卷頭PL. 7 (1) 9号井戸出土鬼瓦（縮尺不同） (2) 軒丸瓦・軒平瓦（縮尺不同）
卷頭PL. 8 (1) 丸瓦・平瓦（縮尺不同） (2) 塼（縮尺不同）

PL. 1 調査区全景（西から）
PL. 2 (1) 調査区東南部全景（西から） (2) 2号住居全景（西から）
PL. 3 (1) 2号住居全景（東から） (2) 2号住居遺物出土状況（南から）
PL. 4 (1) 5・6号住居全景（北東から） (2) 5号住居全景（北東から）
PL. 5 (1) 6号住居全景（北から） (2) 6号住居遺物出土状況（東から）
PL. 6 (1) 126～132号掘立柱建物（西から） (2) 126～132号掘立柱建物（南から）
PL. 7 (1) 4号井戸全景（西から） (2) 4号井戸上層遺物出土状況（西から）
PL. 8 (1) 4号井戸下層遺物出土状況（東から） (2) 4号井戸全景（西から）
PL. 9 (1) 99号井戸全景（南から） (2) 99号井戸断面（南から）
PL. 10 (1) 135号貯藏穴全景（東から） (2) 8号木棺墓全景（南から）
PL. 11 (1) 138号杭列全景（北から） (2) 138号杭列（東から）
PL. 12 (1) 138号杭列東側（北から） (2) 138号杭列断面（東から）
PL. 13 (1) 138号杭列タモ網出土状況（西から） (2) 138号杭列鉄斧柄出土状況（北から）
PL. 14 (1) 138号杭列エブリ出土状況（北から） (2) 137号河川Ⅲ・Ⅳ区全景（南から）
PL. 15 (1) 12号土壤全景（東から） (2) 10号河川全景（南から）
PL. 16 (1) 10号河川Ⅰ区全景（東から） (2) 10号河川Ⅱ区全景（西から）
PL. 17 (1) 10号河川船形模造品出土状況（西から） (2) 10号河川紡織具出土状況（南西から）
PL. 18 (1) 10号河川Ⅰ区遺物出土状況（南から） (2) 10号河川Ⅰ区遺物出土状況（東から）
PL. 19 (1) 10号河川Ⅰ区遺物出土状況（東から） (2) 10号河川建築材出土状況（東から）
PL. 20 (1) 10号河川鍬・砧出土状況（西から） (2) 10号河川Ⅰ区大足出土状況（北から）
PL. 21 (1) 10号河川自在カギ出土状況（南から） (2) 10号河川Ⅱ区編錘出土状況（北から）
PL. 22 (1) 10号河川容器出土状況（西から） (2) 10号河川Ⅱ区鍬出土状況（東から）
PL. 23 (1) 9号井戸上面遺物出土状況（南から） (2) 9号井戸上面鬼瓦出土状況（西から）
PL. 24 (1) 9号井戸全景（東から） (2) 9号井戸枠検出状況（西から）
PL. 25 (1) 9号井戸神功開寶出土状況（南から） (2) 9号井戸東側井戸枠裏込板検出状況（東から）
PL. 26 (1) 9号井戸東側井戸枠裏込板（東から） (2) 9号井戸井戸枠検出状況（東から）

- PL. 27 (1) 9号井戸井戸底桶検出状況（南から） (2) 9号井戸井戸枠断面（東から）
PL. 28 (1) 9号井戸井戸底桶検出状況（東から） (2) 9号井戸井戸底桶（東から）
PL. 29 (1) 9号井戸遺物出土状況（東から） (2) 9号井戸底桶内遺物出土状況（北から）
PL. 30 (1) 133・134号井戸（南から） (2) 133号井戸遺物出土状況（南から）
PL. 31 (1) 100号道路遺構南半部（南から） (2) 100号道路遺構南端部（南から）
PL. 32 (1) 100号道路遺構北半部（南から） (2) 100号道路遺構北端部（北から）
PL. 33 (1) 1号溝（西から） (2) 1号溝南半部（南から）
PL. 34 (1) 136号溝南半部（南から） (2) 136号溝中央部遺物出土状況（南から）
PL. 35 (1) 136号溝北半部遺物出土状況（南から） (2) 136号溝鬼瓦出土状況（西から）
PL. 36 (1) 101・102号溝（南から） (2) 101号溝遺物出土状況（南から）
PL. 37 出土遺物 1（縮尺不同）
PL. 38 出土遺物 2（縮尺不同）
PL. 39 出土遺物 3（縮尺不同）
PL. 40 出土遺物 4（縮尺不同）
PL. 41 出土遺物 5（縮尺不同）
PL. 42 出土遺物 6（縮尺不同）
PL. 43 出土遺物 7（縮尺不同）
PL. 44 出土遺物 8（縮尺不同）
PL. 45 出土遺物 9（縮尺不同）
PL. 46 出土遺物 10（縮尺不同）
PL. 47 出土遺物 11（縮尺不同）
PL. 48 出土遺物 12（縮尺不同）
PL. 49 出土遺物 13（縮尺不同）
PL. 50 出土遺物 14（縮尺不同）
PL. 51 出土遺物 15（縮尺不同）
PL. 52 出土遺物 16（縮尺不同）
PL. 53 出土遺物 17（縮尺不同）
PL. 54 出土遺物 18（縮尺不同）
PL. 55 出土遺物 19（縮尺不同）
PL. 56 9号井戸 井戸枠 1（縮尺不同）
PL. 57 9号井戸 井戸枠 2（縮尺不同）
PL. 58 9号井戸出土遺物（縮尺不同）
PL. 59 136号溝出土遺物（縮尺不同）
PL. 60 1・136号溝出土遺物（縮尺不同）
PL. 61 (1) 9号井戸 井戸枠・桶（縮尺不同） (2) 鬼瓦（縮尺不同）

表 目 次

Tab. 1	高畠遺跡調査一覧表	10
Tab. 2	出土遺物(土器)一覧表 1	29
Tab. 3	出土遺物(土器)一覧表 2	30
Tab. 4	出土遺物(土器)一覧表 3	31
Tab. 5	出土遺物(土器)一覧表 4	32
Tab. 6	出土遺物(土器)一覧表 5	33
Tab. 7	出土遺物(土器)一覧表 6	34
Tab. 8	出土遺物(木製品)一覧表 7	40
Tab. 9	出土遺物(木製品)一覧表 8	41
Tab. 10	出土遺物(木製品)一覧表 9	42
Tab. 11	出土遺物(木製品)一覧表 10	43
Tab. 12	出土遺物(木製品)一覧表 11	44
Tab. 13	出土遺物(木製品)一覧表 12	45
Tab. 14	出土遺物(木製品)一覧表 13	46
Tab. 15	出土遺物(木製品)一覧表 14	47
Tab. 16	出土遺物(土器)一覧表 15	69
Tab. 17	出土遺物(土器)一覧表 16	70
Tab. 18	出土遺物(土器)一覧表 17	71
Tab. 19	出土遺物(土器)一覧表 18	72
Tab. 20	出土遺物(土器)一覧表 19	73
Tab. 21	出土遺物(土器)一覧表 20	74
Tab. 22	出土遺物(土器)一覧表 21	75
Tab. 23	出土遺物(土器)一覧表 22	76
Tab. 24	出土遺物(土器)一覧表 23	77
Tab. 25	出土遺物(土器)一覧表 24	78
Tab. 26	出土遺物(土器)一覧表 25	79
Tab. 27	出土遺物(土器)一覧表 26	80
Tab. 28	出土遺物(土器)一覧表 27	81
Tab. 29	出土遺物(土器)一覧表 28	82
Tab. 30	出土遺物(土器)一覧表 29	83
Tab. 31	出土遺物(土器)一覧表 30	84
Tab. 32	出土遺物(土器)一覧表 31	85
Tab. 33	出土遺物(土器)一覧表 32	86
Tab. 34	出土遺物(土器)一覧表 33	87
Tab. 35	出土遺物(土器)一覧表 34	88
Tab. 36	出土遺物(土器)一覧表 35	89

Tab. 37	出土遺物(土器)一覧表 36	90
Tab. 38	出土遺物(土器)一覧表 37	91
Tab. 39	出土遺物(土器)一覧表 38	92
Tab. 40	出土遺物(土器)一覧表 39	93
Tab. 41	出土遺物(土器)一覧表 40	94
Tab. 42	出土遺物(木製品)一覧表 41	108
Tab. 43	出土遺物(木製品)一覧表 42	109
Tab. 44	出土遺物(木製品)一覧表 43	110
Tab. 45	出土遺物(木製品)一覧表 44	111
Tab. 46	出土遺物(木製品)一覧表 45	112
Tab. 47	出土遺物(木製品)一覧表 46	113
Tab. 48	出土遺物(木製品)一覧表 47	114
Tab. 49	出土遺物(木製品)一覧表 48	115
Tab. 50	出土遺物(木製品)一覧表 49	116
Tab. 51	出土遺物(木製品)一覧表 50	117
Tab. 52	出土遺物(木製品)一覧表 51	118
Tab. 53	出土遺物(木製品)一覧表 52	119
Tab. 54	出土遺物(木製品)一覧表 53	120
Tab. 55	出土遺物(木製品)一覧表 54	121
Tab. 56	出土遺物(木製品)一覧表 55	156
Tab. 57	出土遺物(木製品)一覧表 56	157
Tab. 58	出土遺物(木製品)一覧表 57	158
Tab. 59	出土遺物(木製品)一覧表 58	159
Tab. 60	出土遺物(木製品)一覧表 59	160
Tab. 61	出土遺物(木製品)一覧表 60	161
Tab. 62	出土遺物一覧表 61	162
Tab. 63	出土遺物一覧表 62	163
Tab. 64	出土遺物一覧表 63	164
Tab. 65	出土遺物一覧表 64	165
Tab. 66	出土遺物(土器)一覧表 65	170
Tab. 67	出土遺物(土器)一覧表 66	179
Tab. 68	出土遺物(土器)一覧表 67	180
Tab. 69	出土遺物(土器)一覧表 68	181
Tab. 70	出土遺物(土器)一覧表 69	182
Tab. 71	古代官道(道路状遺構)一覧表 70	198
Tab. 72	古代官道(道路状遺構)一覧表 71	199
Tab. 73	古代官道(道路状遺構)一覧表 72	200

I. はじめに

1. 発掘調査にいたるまで

高畠遺跡は、福岡市南東部の御笠川中流域の左岸に連なる洪積丘陵上にあり、丘陵の東には御笠川分流の那珂古川が、西には諸岡川が北流している。昭和初期の地形図によれば、丘陵は東西が300m、南北が500m、標高が15m余の小高い丘陵で、10～15m幅の切通が丘陵を二分するよう南北に伸び、水田として可耕されていた。昭和15（1940）年頃、この丘陵は軍需工場建設によって大きく開削され、丘陵は失われてしまった。しかし、敗戦後まもなく九州管区警察学校がこの地に建設されて今に至っている。逆説的に云えば、九州管区警察学校によって遺跡は開発から守られたと云える。

開校から50年を経た九州管区警察学校では、施設の老朽化に伴って研修寮の建て替えが旧自動車教習場跡地に計画された。高畠丘陵の東部に位置する建設用地は、周辺部の調査データから律令時代の官道や丘陵縁には弥生時代から古墳時代の集落域が拡がっていると予測されたために平成11（1999）年より数回にわたって試掘調査が実施された。試掘調査では、推定される明確な官道は検出されなかったが、丘陵の東縁部には弥生時代から古代の遺構が存在することが明らかになった。この結果を受けて申請地全域を発掘調査して記録保存を図ることとなった。

発掘調査は、平成20（2008）年8月18日にパワーショベルを導入して表土層を除去することから始め、竪穴住居や掘立柱建物、井戸、木棺墓のはか大溝や旧河道などを検出して平成21（2009）年8月2日に無事終了した。猛暑の中で始まり、嚴寒の冬を越して猛暑の中で終わる一年間にわたる長い発掘調査であった。建設工事の着手が迫る平成21（2009）年7月には二度も記録的な豪雨に見舞われた。なかでも7月24日の豪雨は、1時間に110mmを超す観測史上記録的なもので、間近な福岡空港が冠水し、九州自動車道の法面が崩壊する被害をもたらした。発掘調査区も難を逃れられず、貴重な遺物や遺構は泥土に埋没した。このような困難を乗り越えて調査を終えたのは、発掘調査に従事された人々と関係者諸氏の御協力と御指導のお陰である。改めて深く感謝いたします。

2. 発掘調査の組織

調査委託 国土交通省九州地方整備局

九州管区警察学校

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 文化財部埋蔵文化財第1・2課

埋蔵文化財第1課長 漢石哲也 山口譲治

埋蔵文化財第2課長 田中寿夫

埋蔵文化財第2課調査係長 米倉秀紀

調査庶務 文化財管理課 古賀とも子 井上幸江 垣替美香

調査担当 埋蔵文化財第2課 小林義彦

技能員 谷直子（田尻直子） 境聰子

発掘調査や報告書の作成にあたっては、大塚初重（明治大学名誉教授）小田富士雄（福岡大学名誉教授）山田昌久（首都大学東京）氏をはじめ、山崎純男（元文化財部長）、山口譲治（元埋蔵文化財第1課長）、長家伸、榎本義嗣、常松幹雄、池崎謙二（福岡市埋蔵文化財センター所長）氏など文化財部の先輩方から貴重な指導と助言を頂いた。また、国土交通省九州地方整備局および九州管区警察学校の関係者諸氏には多大のご協力とご配慮をいただいた。改めて深く感謝申し上げます。

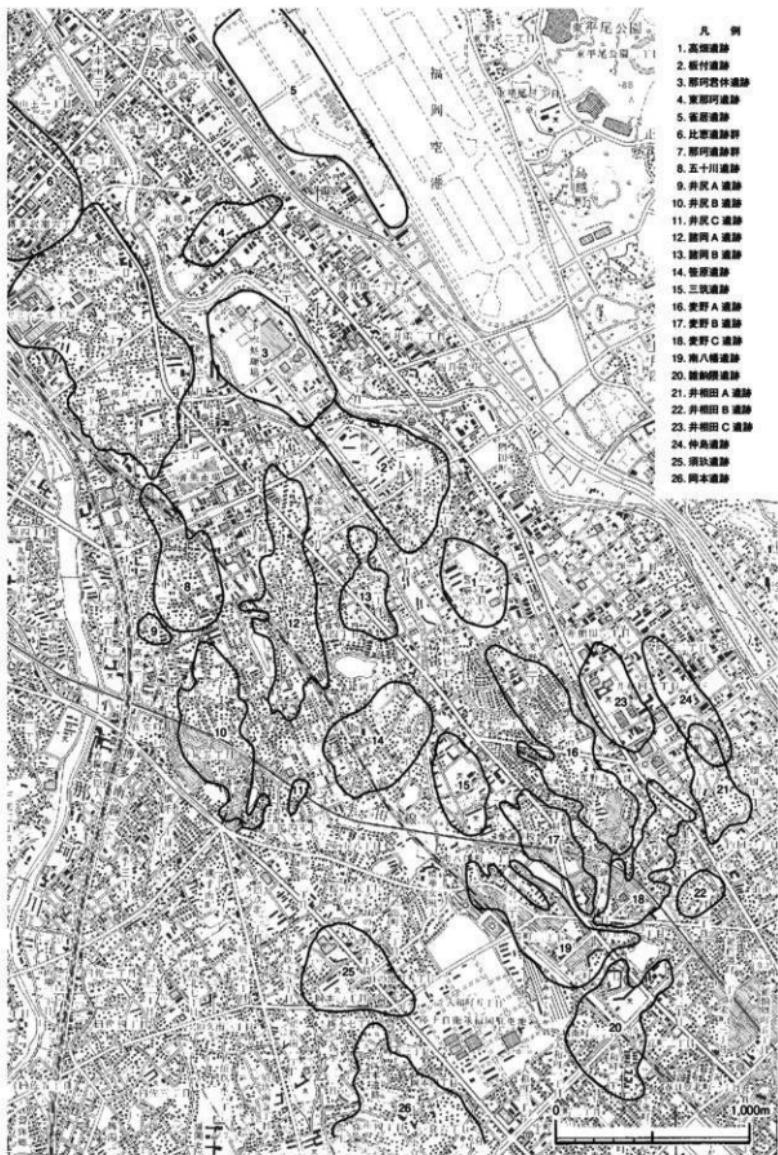


Fig.1 周辺遺跡分布図(1/25,000)



Fig.2 高烟遺跡周辺旧地形図(1/25,000)

3. 立地と歴史的環境 (Fig. 1 ~ 3)

博多湾にむかって開口する福岡平野は、三方を三郡山系や背振山系からのびる小山塊に囲まれた沖積平野である。この福岡平野には、東縁の月隈丘陵に沿って流れる御笠川と西縁の油山丘陵に沿って北流する那珂川の二大河川が博多湾に注ぎ込み、流域には肥沃な沖積地を形成している。この両川に挟まれた沖積地には、観音山から派生した洪積台地が須玖岡本や雑削隈を経て開析谷を形成しながら断続的に長くのびている。春日丘陵と総称されるこの洪積台地は、花崗岩風化礫層を基盤とし、その上層には阿蘇山の火砕流による八女粘土層と鳥栖ローム層が堆積している。

高畠遺跡は、福岡平野の東を北流する御笠川の中流域左岸に拡がる洪積台地上に立地する。この洪積台地は、河川の開析によって幾つにも寸断され、低平な沖積地の中に点々と飛び石状に拡がっている。これらの開析された丘陵上には弥生時代から古墳時代、古代の集落域や墳墓域が連絡と営まれている。高畠遺跡もそのうちのひとつで、沖積地の鞍部を挟んで北には、最初に稻作耕作が始まった国史跡の板付遺跡があり、南には麦野遺跡や雑削隈遺跡が拡がる麦野丘陵が対峙している。

高畠遺跡の周辺に目を転じると、弥生時代の集落域としては、すぐ北には二重環壕の周間に水田域を形成した板付遺跡があり、板付田端遺跡の壇棺墓には細形銅劍や銅矛が副葬されていた。また、後期の堅穴住居跡からは小銅鐸が出土している。この板付遺跡の北西には比恵から那珂・井尻・須玖岡本へと洪積台地が断続的に続き、その台地上にも集落域と墳墓域が濃密に拡がっている。那珂遺跡では、縄文時代晚期の二重環濠集落や弥生時代の環濠集落・壇棺墓群があり、比恵遺跡の壇棺墓には紺布の巻かれた細形銅劍が副葬されていた。同時に奴国王墓域とされる須玖岡本遺跡を取り巻く須玖水田遺跡や須玖五反田遺跡を中心にして比恵や那珂・井尻遺跡からは銅劍や銅戈・方製鏡の鋳型が出土しており、青銅器生産拠点的集落域が広く展開していたと考えられる。また、諸岡川を挟んだ独立丘陵上にある諸岡 B 遺跡からはゴホウラ貝輪を装着した壇棺墓のほか朝鮮式無文土器や旧石器時代のナイフ型石器が出土している。一方、御笠川を隔てて北へ5kmの距離にある雀居遺跡では、大型建物群が検出されている。雀居遺跡の東にあって福岡平野と糟屋平野を画す月隈から金隈丘陵の裾野には国史跡の金隈遺跡をはじめ上月隈遺跡や宝満尾遺跡などに壇棺墓や土塙墓からなる墳墓群が拡がっており、中広形銅劍や内行花文鏡などが副葬されていた。

古墳時代も同様で、比恵から那珂・井尻・須玖岡本と続く台地上には一層濃密に集落域が拡がり、その中に那珂八幡古墳や東光寺剣塚古墳・日拝塚古墳・下白水大塚古墳などの前方後円墳が築かれる。那珂八幡古墳は、福岡平野最古の前方後円墳で第2主体部からは三角縁神獣鏡が、日拝塚古墳からは金製耳飾りなどが出土している。後期の前方後円墳である東光寺剣塚古墳には阿蘇凝灰岩製の石屋形が安置されている。これらの前方後円墳群は、福岡平野の首長墓の系譜を構成するものである。また、比恵遺跡では、古墳時代後期の柵列に囲繞された大型の建物群が発見されている。日本書記の宣化天皇元年(536)条に記された「那津官家」の地と推定されている。

一方、高畠遺跡の南西部にある井相田 C 遺跡や仲島遺跡は、弥生時代から古代・中世の集落遺跡群であり、王莽錢の貨布や後漢鏡片・青銅製鋤先・銅矛鋒型・滑石製模造品・人面墨書き土器・新羅土器・石椎などが出土している。更に、井相田 C 遺跡の西に対峙し、高畠遺跡南の開析谷を挟んで連なる麦野丘陵上の麦野遺跡や雑削隈遺跡・南八幡遺跡では弥生時代に増して集落域が拡がっている。雑削隈遺跡では7世紀末から8世紀初めの官衛的施設と考えられる方形に配された大型建物群が報告されている。また、御笠川を隔てた月隈丘陵の裾野でもこの期の掘立柱建物群が拡がっている。

このように高畠遺跡のある御笠川と那珂川に挟まれた丘陵地帯は、福岡平野でも有数の遺跡密集地であると同時に水城東門から博多へ延びた官道が通る重要な地域である。

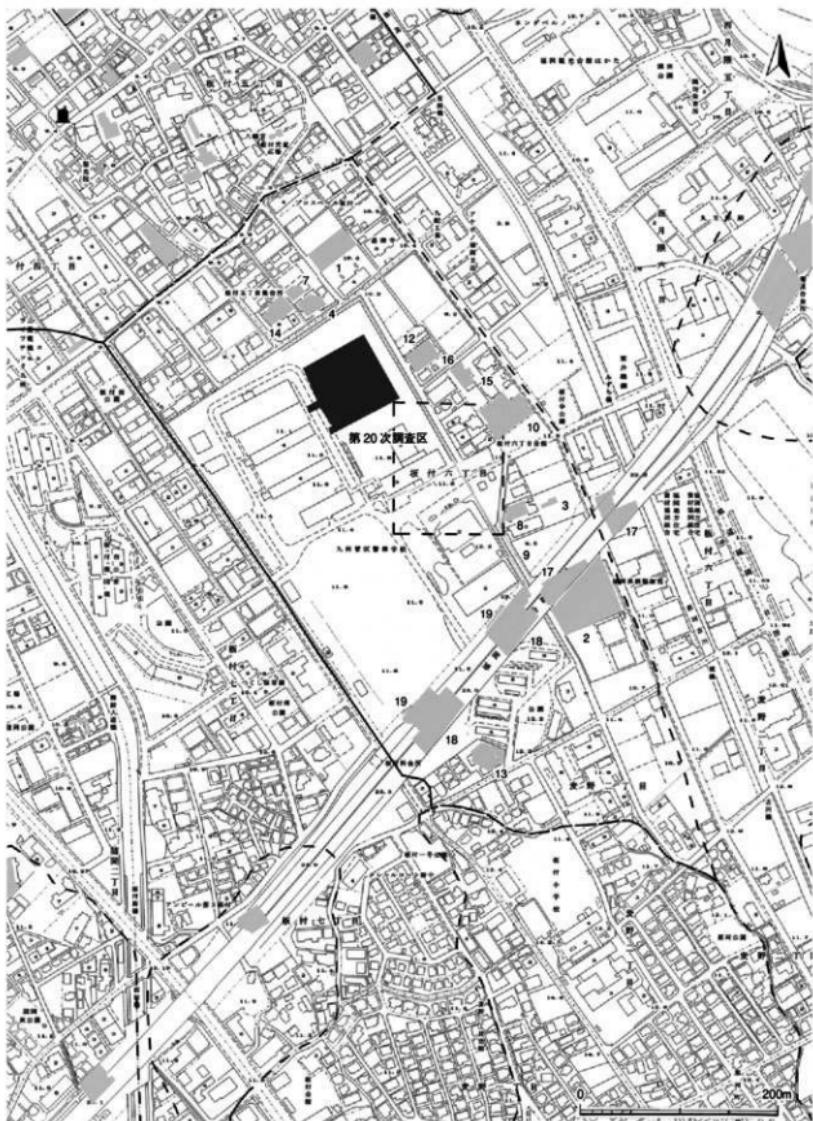


Fig.3 高烟道路調査区位置図(1/5,000)

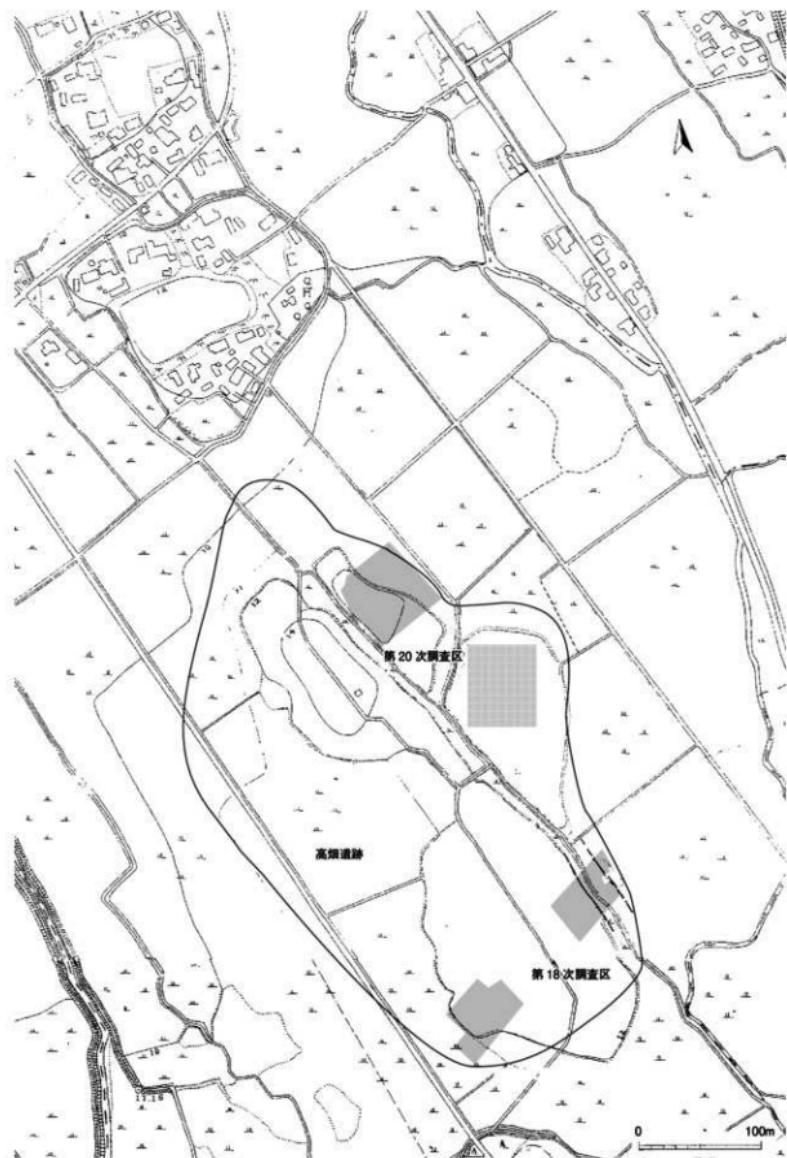


Fig.4 高烟遗址第20次调查区周辺旧地形図(1/4,000)

4. これまでの調査

高畠遺跡の発掘調査は、これまでに19次にわたって実施されており、本調査で20次目を数える。高畠遺跡の調査は古く、昭和48（1973）年の板付周辺遺跡緊急調査に始まる。これは昭和49（1974）年の板付遺跡の国史跡指定を受けて、板付台地とその周辺における板付遺跡の全容把握を目的として行われ、開発に際して継続的に調査が進められた。この調査にあたっては、福岡市地図「板付」を100mの方眼に区切って東から西へA・B・C……、北から南へ1・2・3……とし、調査地点をこの方眼の組合せ番号で呼称した。これに従って云々高畠遺跡第1次調査区は、板付D-9・10地点になる。昭和59（1984）年の第10次調査まではこの地点名で呼称されたが、九州管区警察学校内の下水道工事に伴う調査で初めて「高畠遺跡」として周知の遺跡に登録された。これによって板付周辺遺跡の10地点の調査区に第1次から10次調査の呼称が付与され、旧地点名と併用されることとなった。

本調査区（第20次調査）は、旧地形からすると高畠丘陵の最高所に位置している。遺構は、この丘陵頂を中心として丘陵上とその縁辺部の沖積地に拡がっており、調査区の立地に因って検出される遺構の性格も大きく異なっている。本調査区の北、丘陵の北縁では第1・4・7・14次調査区がある。このうち第4・7次調査区では、古墳時代の大溝から古式土師器や木製品が大量に出土した。また、古代の溝が第14次調査区まで延びている。

次に、丘陵東側の縁辺部には、第2・3・8・9・10・12・15・16・17次調査区があり、調査区が集中している。北側には、丘陵の裾野に沿う第10・12・15・16次調査区では南東から北西方向にむかって古墳時代の大溝が延びており、大量の古式土師器や木製品が出土している。この大溝は、北縁の第4・7次調査区の大溝に繋がる溝である。この大溝から出土する大量の木製品の中には漆を塗った鉢の柄や小型模造船など儀器と考えられるものも出土している。また、南側の第2・8・9・10・17次調査区では、古代の大溝が検出されている。この大溝は、第2次調査区から丘陵の縁辺を北流し、第10次調査区で東へ大きく流れを変えている。この古代の大溝からは、瓦や埴、墨書き土器、人面土器、木簡、人形、斎串などが出土している。

さらに、丘陵の南縁部には第13次調査区があり、弥生時代後期から古墳時代前期の井戸や土壙が検出されている。土壙からは碧玉製管玉のほかガラス小玉や滑石製白玉が出土している。また、丘陵の西縁部では第5・6次調査区があるが、八女粘土層まで削平されて遺構は検出されていない。それ故か調査番号は付与されず、発掘調査報告書にはなんら記されておらず、正確な位置は不明である。

一方、丘陵上には、第11・18次調査区がある。第11次調査区は、警察学校内の下水道工事に際して実施された調査で、調査区幅が1m、総延長が550mのよぶトレンチ調査で、丘陵の縁辺部からは弥生時代初めから古墳時代の堅穴住居や貯蔵穴、井戸などが検出された。また、丘陵上を初めて面的に調査した第18次調査区では、堅穴住居や掘立柱建物、井戸、土壙、溝など弥生時代後期から古墳時代後期にかけての集落域が検出されている。このうち古墳時代中期の堅穴住居は滑石製白玉の製作工房跡で、滑石製白玉やその未成品、原石が大量に出土している。また、調査区の東端で切通しを伴う道路状遺構いわゆる「官道」が検出されている。

このように高畠遺跡は、丘陵の北から東縁部に偏って調査されている。検出された集落域や大溝などの遺構や瓦堀、墨書き土器、木製品などの出土遺物に加えて昭和初期の丘陵開削時に礎石らしき大石群が動かされたとする古談から方1町余の古代寺院跡「高畠庵寺」とする説がある。その反面、舟形や鳥形、斎串、陽物形木製品などの祭祀遺物や人面墨書き土器などが出土していることから郡衙的施設跡とする説があるが、現状では特定し得る確定的な根拠は見出されていない。

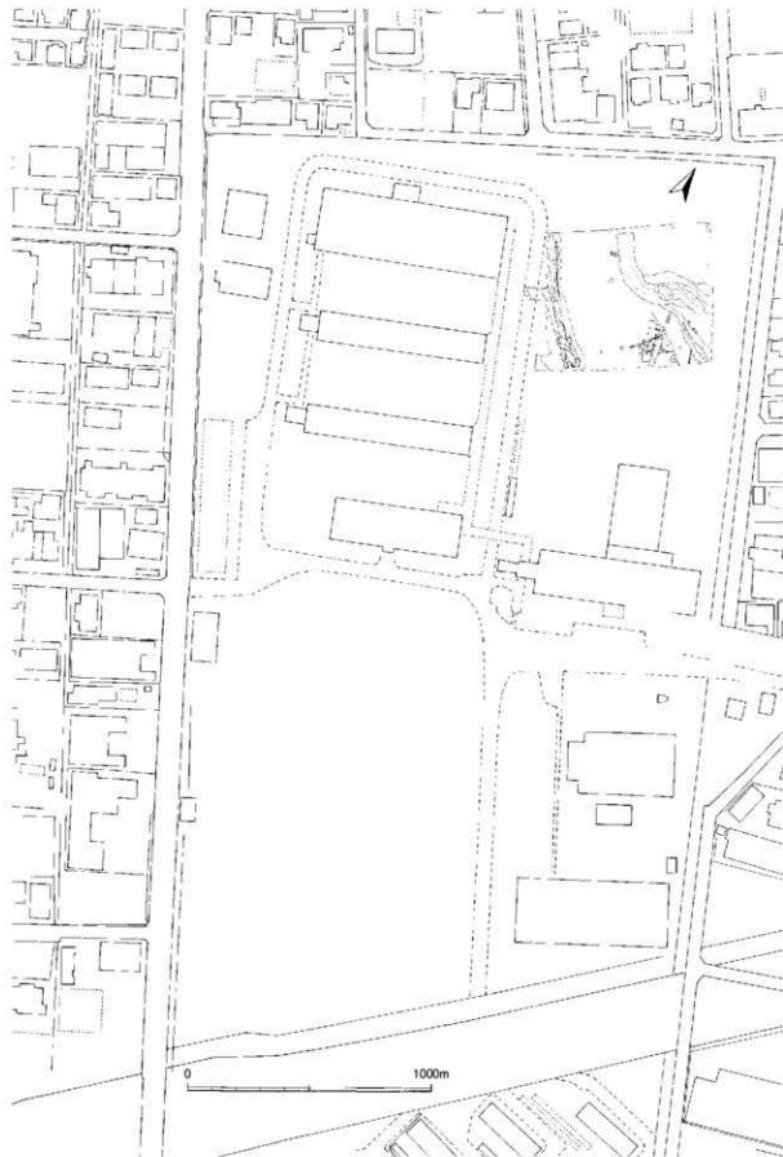


Fig.5 高畠道路第20次調査区周辺現状図(1/2,000)

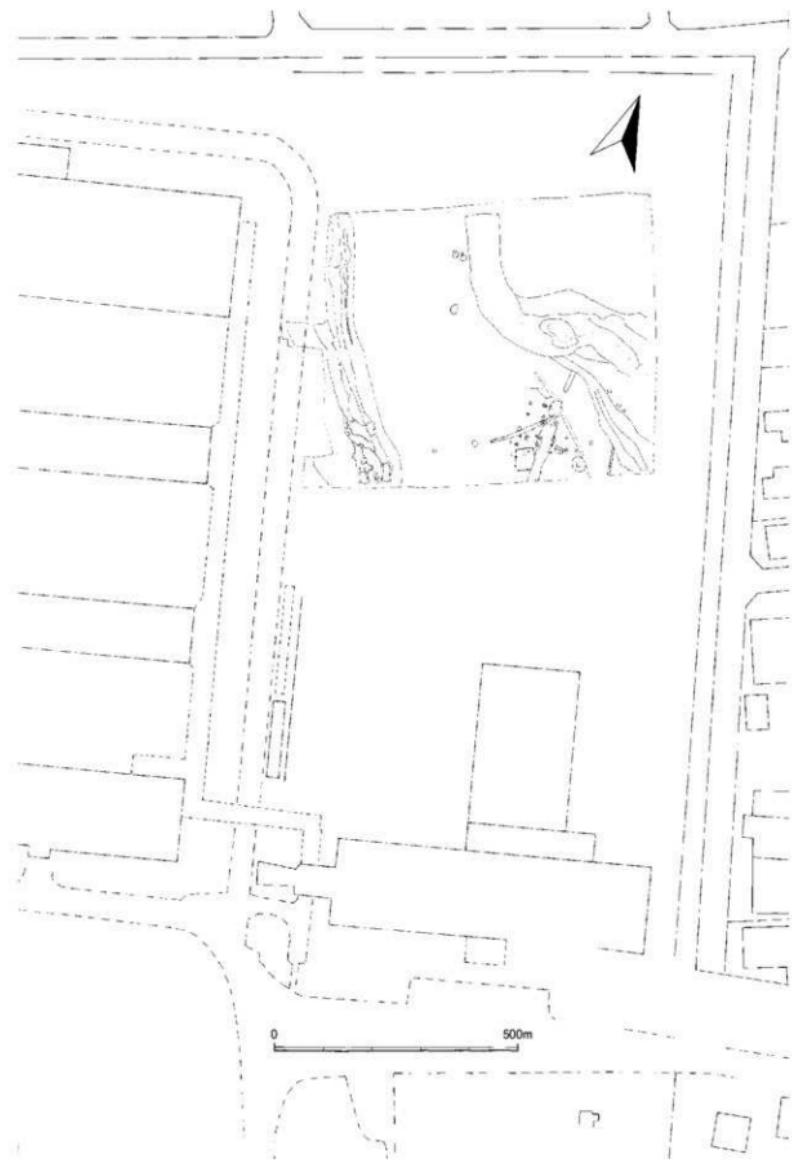


Fig.6 高烟遗址第20次调查区位置图(1/1,000)

II. 調査の記録

1 調査の概要 (Fig. 4 ~ 6 ph. 1)

高畠遺跡第20次調査は、九州管区警察学校研修寮の建設に先立って平成20(2008)年8月18日から平成21(2009)年8月2日に実施した。昭和初期の旧地形図を参照すると、高畠丘陵の中央部には標高が15mほどの高まりがあり、そのやや東よりに一筋の切通が南北に延びている。この切通は、10mほどの幅で東端には水路が流れ、その西側の狭地は水田として使われていた。本調査区は、高畠丘陵の北東部、切通東側の緩斜面上に位置するが、昭和15年頃に大きく開削されて旧状はまったく留めていない。

本調査区は、高畠丘陵のはとんどを占める九州管区警察学校敷地内にある。警察学校では、老朽化した研修寮の建て替えが旧自動車教習場跡地に計画された。ここは高畠丘陵を貫通する切通北東部の緩斜面上に位置することから律令時代の官道や丘陵縁には弥生時代から古墳時代の集落域が拡がっていると予測された。平成11(1999)年より数回にわたって試掘調査を実施した。試掘調査では、推定される明確な官道は検出されなかったが、丘陵の東縁部には弥生時代から古代の遺構が存在することが明らかになった。この結果を受けて申請地全域を発掘調査して記録保存を図ることとなった。

発掘調査は、平成20(2008)年8月18日にパワーショベルを導入して表土層を除去することから始まった。研修棟は、南北に東西棟を2棟、その西に接して南北棟1棟を建設する配置で、平成21(2009)年4月には南側の東西棟の建設に着手する計画案が示された。この案では、平成21(2009)年3月末までには南北部の調査を終えて、埋め戻しを完了しておくことが必須であった。そのための遺構の検出で生じた堆土は、調査区の北部に仮置きして南北部の調査終了を待って埋め戻し、北半部の表土

Tab.1 高畠遺跡調査一覧表

次 数 調査 番号	地點	所在地	調査期間	調査面積 (m ²)	報告書	時代	概要	備考
1 7312	板D-9-10	板付5丁目9-6	197310.~ 197310.~	48.0	29	弥生	旧河川氾濫原	弥生土器
2 7313	板A-B-13	板付6丁目11-2	197305.~ 197309.~	72.0	29		遺構ナシ	弥生土器、土器類、須恵器、瓦
3 7509	板B12a	板付6丁目10-3	19750422 ~ 19750508	400.0	36	弥生~古代	土壌、杭列	弥生土器、土器類、須恵器、瓦
4 7933	板D10a	板付5丁目8-3	19790816 ~ 19791011	370.0	57	5c, 8c~9c	土壌、杭列	
5							遺構ナシ	
6 0080							遺構ナシ	
7 8138	板D10b	板付5丁目8-10	19810914 ~ 19811015	180.0	83	5c, 8c~9c	溝	土師器、須恵器、木製品
8 8220	板B12b	板付6丁目10-6	19820416 ~ 19820602	330.0	98	8c~9c、中世	土壌、井戸、水田	土師器、須恵器、木製品、木簡、瓦
9 8221	板B12c	板付6丁目	19820604 ~ 19820723	94.0	98	8c~9c	土壌、溝、杭列	土師器、須恵器、木製品、瓦
10 8436	板B11a	板付6丁目	19840305 ~ 19840714	1560.0	115	5c, 8c~9c, 13c~14c	溝、土壌	土師器、須恵器、木製品
11 8441		板付6丁目1-4	19841210 ~ 19850125	550.0	115	弥生、5c、奈良	竪穴住居、窓戸、井戸	弥生土器
12 8649		板付6丁目2-9、10	19861117 ~ 19870208	600.0	154 ~ 216	弥生後期~古墳初頭	溝	弥生土器、土師器、須恵器、木製品
13 8702		板付6丁目1-37、56	19870428 ~ 19870605	480.0		弥生後期、古墳	井戸、土壌	土師器、須恵器、玉類、瓦
14 9368		板付5丁目8-4	19940314 ~ 19940331	566.0	458	8c~9c	溝、旧河川	弥生土器、瓦
15 9753		板付6丁目9-13、10	19971118 ~ 19980110	254.5	212	弥生後期、古墳前~中期	溝、旧河川	弥生土器、瓦
16 9774		板付6丁目2-23	19980309 ~ 19980331	70.0	934	4c後半	溝	弥生土器、土師器、木製品
17 9833		板付6丁目地内	19980309 ~ 19990326	2963.0	676	绳文、弥生、8c前半~10c、11c後半	溝、土壌、水田、旧河川	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦、石器、木製品
18 9936		板付6丁目地内	19990901 ~ 20000229	4750.0	699	弥生前~後期、古墳前	竪穴住居、窓戸、井戸、土壌、溝、柱建物	弥生土器、土師器、須恵器、陶質土器、瓦、埠、玉類、古代官道
19 0061		板付6丁目1-88他	20030121 ~ 20030228	204.0	799	弥生末、5c、中世	竪穴住居、井戸、土壌、溝	弥生土器、土師器、須恵器、瓦、石器
20 0833		板付6丁目1-1	20080818 ~ 20090802	5067.0	本報告書	弥生中期、5c、8c~9c、中~近世	竪穴住居、掘立柱建物、井戸、窓戸、土壌、溝、古代官道、旧河川	弥生土器、土師器、須恵器、陶質土器、瓦、埠、玉類、石製品、木製品、皇朝十二段

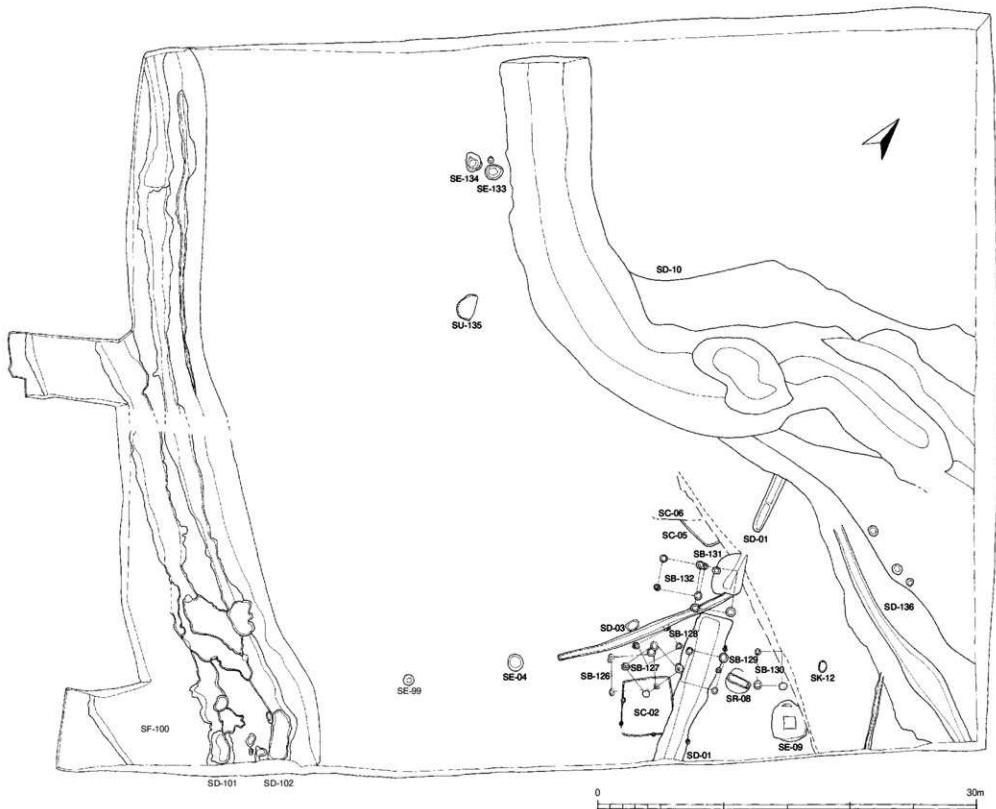


Fig.7 遺構配置図(1/300)

層を除去しておくことが必要であった。ところが、年度末に至って建設方針が変更され、調査終了後一括して建設に着手する案が示され、これに要した時間と労力がまったく無に帰した。

発掘調査は、調査区を便宜的に4区分し、南東部をI区、南西部をII区、北東部をIII区、そして北西部をIV区とし、I・II・III区の順で発掘調査した。

発掘調査では、弥生時代中期から古墳時代、古代の遺構を中心に近世までの遺構を検出した。主な遺構は、弥生時代中期の竪穴住居、掘立柱建物、井戸、貯蔵穴、木棺墓のほか古墳時代の河川（大溝）や古代の井戸、官道などを検出した。このうち、古墳時代の河川からは大量の土師器や木製品が、また古代の井戸や官道からは瓦塼が出土し、その検出や実測、取り上げに多大の時間と労力を要した。加えてこの年の梅雨は雨が多く、7月には二度の豪雨で多大の被害を被った。殊に、調査終了を一週間後に控えた7月24日は観測史上記録的な豪雨で、1時間に110mmを超す雨が降り、調査区はアツと云う間に冠水し、雨水は調査事務所にまで溢れ出して床上浸水の危機に瀕した。遺構内に残された遺物は流失を免れたものの泥土に埋没し、その排水と復旧に3日余りを要した。そのために古墳時代の河川の北端部の10m余りは、遺物の出土地点とレヴェルの測定しか出来ず、甚だ不本意な結果になってしまったが、8月2日に発掘調査は無事終了した。これは1年と云う長きにわたって猛暑や戦寒にも関わらず発掘調査に従事された人々の協力と労苦のお陰である。殊に豪雨後の作業は、泥土に塗れたものであり、加えて時間的余裕がない中で日没まで発掘作業にあたって頂いた。改めてその労苦に深く感謝いたします。

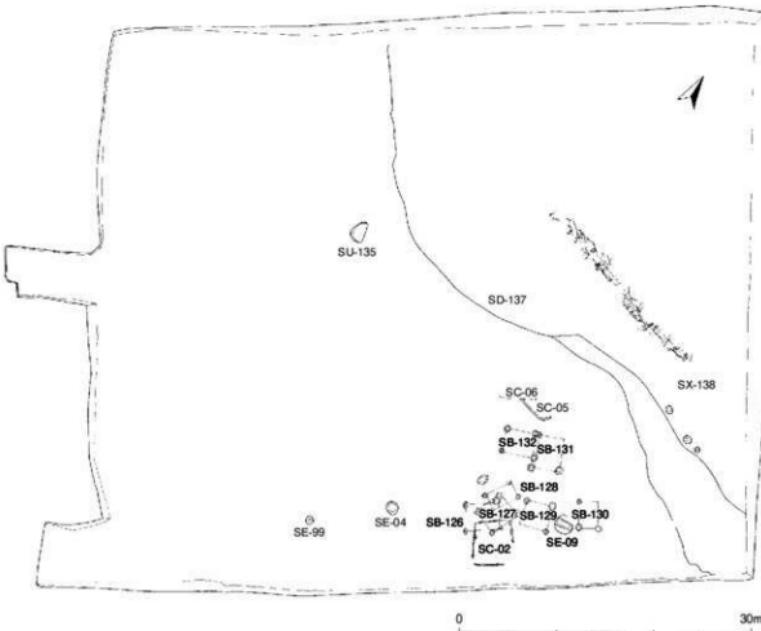


Fig.8 弥生時代の遺構配置図(1/500)

2 弥生時代の調査

弥生時代の遺構としては、竪穴住居3棟と掘立柱建物7棟、井戸2基、貯蔵穴1基、木棺墓1基、土壙4基+ α のほかに柱穴多数を検出した。これらの遺構群は、貯蔵穴(SU-135)と井戸(SE-04・99)を除いて調査区南東部のきわめて狭小な区域に重複して濃密に分布している。これは99号井戸や135号貯蔵穴の遺存状況が物語るように昭和15(1940)年頃の丘陵開削と丘陵端の可耕地化に伴う削平に起因するもので、本来的には丘陵全域に分布していたことが容易に想起される。また、この丘陵端の可耕地化は、丘陵の東縁を巡る標高12~10mのラインに沿っている。このラインに沿って弥生時代の河道が流れている。堆積土は薄いシルト質土を挟みながらほとんどが砂層で、河岸から20m余を経た調査区の北端に至っても河道東岸の立ち上がりは確認できず、那珂古川の氾濫原と考えられる。また、この河道の西岸に沿って古墳時代の河川が第10・12・15・16次調査区から蛇行しながら延び、大きく弧を描いて北の第4・7次調査区へと北流している。

1) 竪穴住居(SC)

竪穴住居は、調査区の南東隅で3棟を検出したが、北部の2棟は丘陵の開削による消失が著しく、本来的には削平された北西部や南西部に分布していた可能性が想起される。立地的には、丘陵が東側を北流する旧河川にむかって緩やかに傾斜していく裾野に占地している。

2号住居 SC-02 (Fig. 9 PL. 2・3)

2号住居は、調査区の南東隅に位置する竪穴住居で、東南隅は1号溝に削平されている。126・127号建物と重複し、それよりも新しい。平面プランは、東西長が415cm、南北長が455cmの方形を呈する。壁面は、垂直に立ち上がり、壁高は18~25cmである。壁下には、幅が8~10cm、深さが5cmの周溝が北東隅部を除いて巡っている。北東隅の床面レヴェルは、四周に比べて3~10cmほど低く、周溝の深さを勘案すると本来的には全周していたものと考えられる。床面は、堀方に黄褐色粘土ブロックを8~15cmほどの厚さに固く敷き詰めて貼床としており、南から北へ向かって5cmほどの比高差で緩やかに傾斜している。この床面の中央よりやや西に寄って炉を切っている。炉は、直径が55cm、深さが10cmの円形プランで、断面形は門レンズ状をなしている。炉内は焼土粒の混入した炭灰層で、炉壁は良く焼けていた。主柱穴は、炉を囲むようにした4本柱である。柱間は、東西長が北側(P1-P4)で180cm、南側(P2-P3)が230cm。南北長は東側(P1-P2)が230cm、西側(P3-P4)が200cmで南西柱が炉側に寄った四辺形を呈している。遺物は炉から東に寄った床面上に壺や甕、鉢片がまとまって散乱していた。

出土遺物 (Fig. 10)

1~3は壺である。1は、口径が18.8cmで頸部は如意状に緩やかに外反し、胴部との境には小さな三角突帯が1条巡っている。調整は、ヨコナデで外面は暗文状にナデ付けている。胎土は微細~中砂粒と雲母微細、赤褐色粒を含む。暗茶灰色。2は、底径が7.8cm。外面はタテハケ目、内面はナデ後に粗いハケ目。胎土には微細~小砂粒を多く含み、明赤褐色。3は、胴部が大きく膨らむ壺で、底径は7.2cm。内外面とも押圧ナデ調整。胎土は微細~小砂粒と雲母微細を含む。内面は黒灰色、外面は、淡黄橙色。

4~13は甕である。4・5は円盤貼付の底部から胴部は直線的に立ち上がり、口縁部は小さく内傾する小型甕である。外面は粗いタテハケ目、内面は押圧ナデ調整。4は、口径が11.1cm、底径が7.2cm、器高は13.1cm。5は、底径が6.7cm。6は、口径が15.3cm。口縁部は小さく「く」字状に外反し、偏球形の胴部は肩の張りが小さい。外面は粗いタテハケ目、内面は指頭押圧ナデ調整。胎土は微細~粗砂粒を多く含む。淡明赤褐色。7は、口径が18cmで、肥厚した口縁部は端部を平坦に整える。胴部

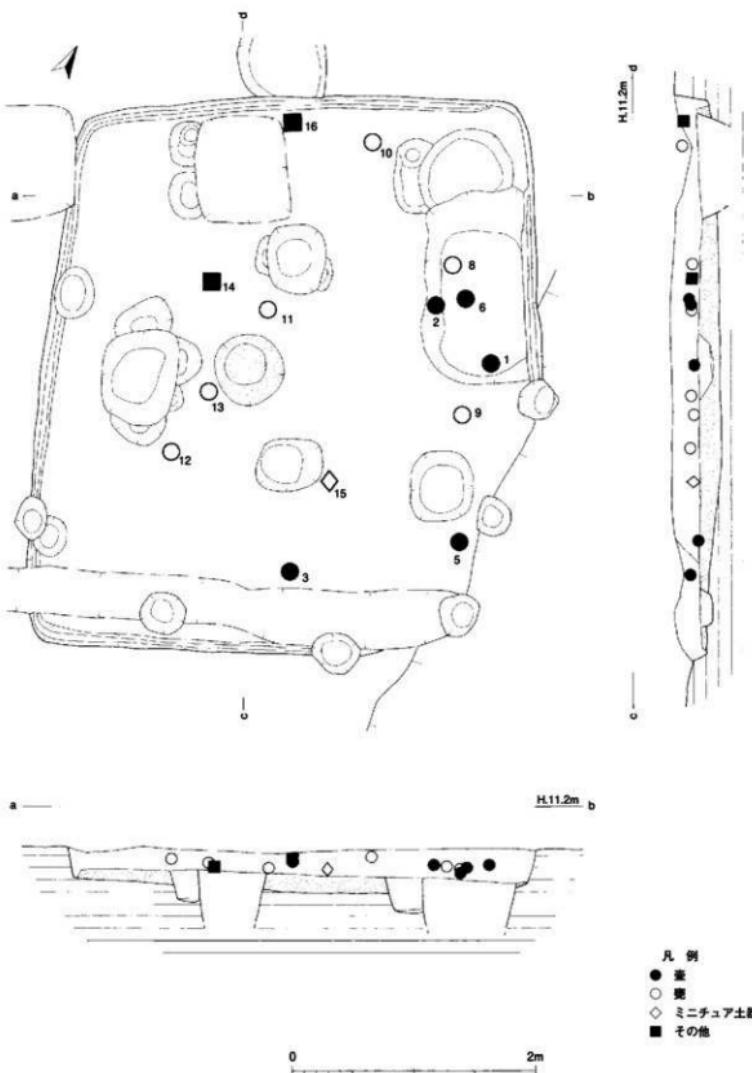


Fig.9 2号住居実測図(1/40)

は倒卵形をなす。胴部外面は粗いハケ目後にナデ、内面は押圧ナデ調整。胎土には微細～中砂粒を多く含み、色調は明赤橙色。8は、口径が21.5cmで器高は25.5cmにならうか。口縁部は倒卵形の胴部から緩やかに屈曲して短く外反する。内外面とも調整は、ヨコナデ～粗いハケ目。胎土は良質で多くの微細～中砂粒と少量の雲母微細を含む。内面は淡黄褐色、外面は淡黄褐色～黒灰色。9は、口径が21.8cmで、口縁部は強く外反する。胴部は倒卵形をなす。調整は口縁部がヨコナデ、胴部は外面がハケ目、内面はナデ。胎土は微細～小砂粒と雲母微細を含む。内面は明赤褐色、外面は淡明赤褐色～黄橙色。10～13は、底部片で胴部は倒卵形をなす。10は、底径が9.8cm。胎土はやや粗く、微細～小砂粒と雲母微細を多く含む。色調は内面がくすんだ淡黄灰色、外面はくすんだ淡黄橙色～淡茶色。

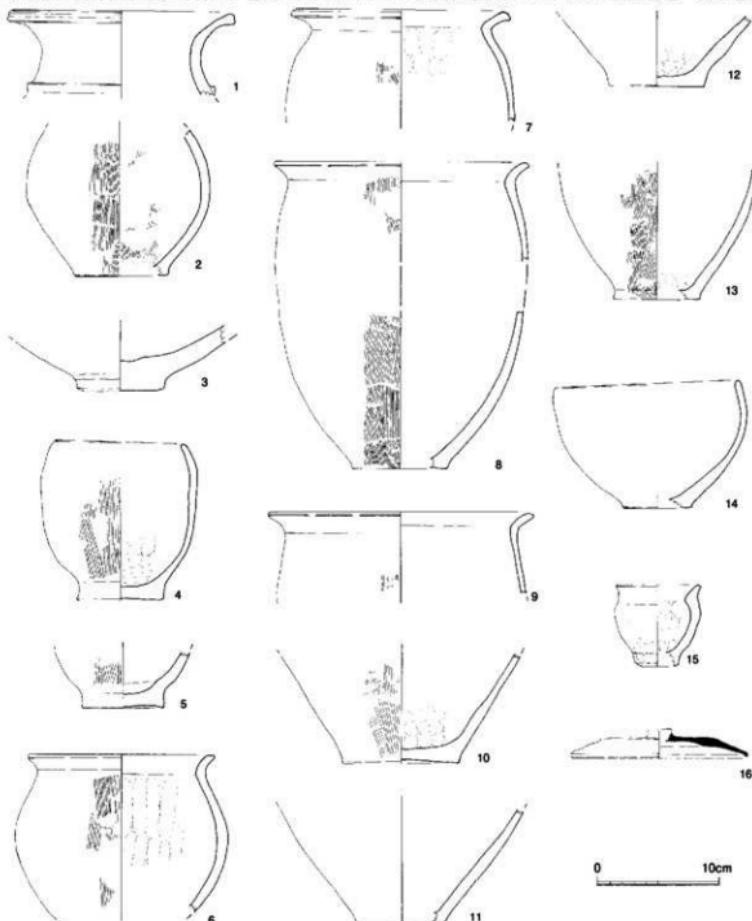


Fig.10 2号住居出土遺物実測図(1/4)

11は、底径が7.2cm。外面はナデ、内面は押圧ナデ調整。胎土には雲母微細と赤褐色粒を含み、色調は淡黄橙色。12は、底径が7.9cm。調整は外面がナデ、内面は押圧ナデ～指頭押圧ナデ。胎土には比較的多くの微細～中砂粒と少量の雲母微細、赤褐色粒を含む。外面は明赤橙色～淡赤橙色、内面は純い赤灰色。13は、底径が7.2cm。調整は外面がハケ目、内面は押圧ナデ。胎土は良質で、微細～小砂粒と雲母微細を含む。外面は淡明橙色、内面は淡黄橙色。

14は、口径が15.3cm、底径が5.8cm、器高が10.5cmの鉢である。口縁部は偏球形の胴部から小さく屈曲して内傾する。調整は口縁部がヨコナデ、胴部は内面が指頭押圧ナデで、外面は粗い搔上げナデ～押圧ナデで一部にハケ目が残る。胎土はやや粗く多くの微細～小砂粒と比較的の少量の雲母微細を含む。

15は、口径が7cm、底径が3.6cm、器高が6.7cmの手捏のミニチュア鉢である。口縁部は短く外反する。調整は口縁部がヨコナデ、胴部は外面が押圧ナデ、内面は指頭押圧ナデ。胎土はやや粗く小～粗砂粒を多く含み、色調は赤橙色。

16は、口径が14.6cm。口縁部はヨコナデ、天井部外面はヘラケズリ、内面はナデ調整。胎土は精良で、少量の微細～小砂粒を含む。色調は灰色。

5号住居 SC-05 (Fig.11 PL.4)

5号住居は、調査区の中央部東縁に位置し、東側は中世以降の水田開削によって大きく削平されている。また、北壁は6号住居と重複し、6号住居の南壁に切られている。

平面形は、大半が開削によって消失しているが、西壁が現長280cm、南壁が現長85cmで南壁は西壁に対して鈍角的に開いている。壁高は18cmで垂直に立ち上がり、壁下には幅が8cm、深さが約5cmの周溝が巡っている。床面は黄褐色粘土ブロックを10～14cmほど厚く敷き固めて貼床としている。柱穴は、南西隅壁側にあり、4本柱と考えられる。遺物は弥生土器小片と須恵器片がわずかに出土しているが、須恵器片は混入物と考えられる。

出土遺物 (Fig.13)

17は、口径が11.8cm、底径が8cm、器高が3.3cmの須恵器壺である。口縁部はストレートに外反する。調整は、体部がヨコナデ、内底面がナデ、外底面はヘラケズリ。胎土は良質で、焼成は良好。色調は灰色。

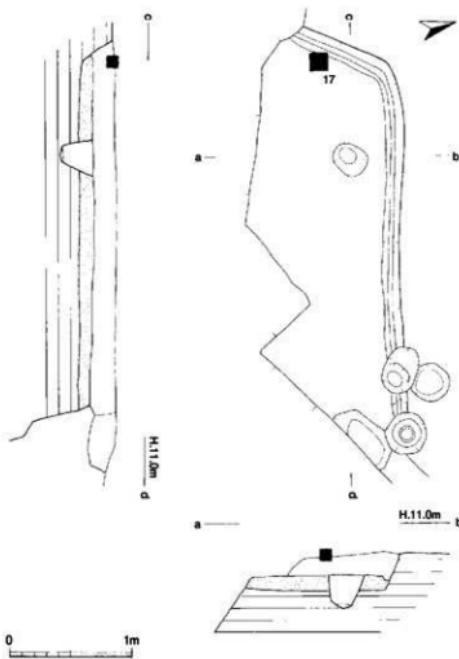


Fig.11 5号住居実測図(1/40)

6号住居 SC-06 (Fig. 12 PL. 4・5)

6号住居は、調査区の中央部東縁に位置し、南壁を除いて大きく削平されている。南壁は、5号住居の西壁と重複し、これよりも新しい。南壁の現長は190cmで、平面形は方形プランになろう。壁高は15cmで、壁下に周溝は巡っていない。床面は黄褐色粘土ブロックを5~8cm敷き詰めて貼床している。わずかに残る床面上には柱穴が想起されるピットがあるが、主柱穴は特定できなかった。遺物は、無頸壺とその蓋、瓢形壺、壺のほか石包丁片が住居中央部の床面上にまとまって出土した。このうち無頸壺は、5号住居から出土した小片と接合した。

出土遺物 (Fig. 13)

18は、口径が15cm、器高が3.1cmの無頸壺の蓋である。天井部はやや丸く、口縁部には2孔一对の円孔を穿っている。胎土は良質で、微細~中砂粒と雲母微細を比較的多く含み、焼成は良好。淡明黄橙色。19は、口径が12.8cm、器高が10.6cmの無頸壺である。口縁部は、偏球形の胴部から頸部が大きく屈曲して外方に突き出す。胎土は精良で、赤褐色粒をわずかに含む。淡赤橙~淡黄橙色。20は、瓢形の壺である。接点はないが床面上から一括して出土しており、同一個体であろう。胎土は精良で、微細~石英砂と雲母を含む。内面は淡明黄褐色、外面は淡明黄橙色。21~23は壺である。21は、口径が38cm、復原器高が49.8cm。23は、口径が36.6cmで「く」字状の口縁部は内唇気味に立ち上がる。22は、底径が10.4cm。いずれも胎土には微細~中砂粒と雲母微細を比較的多く含む。24は、高環の脚部で、胎土には微細~小砂粒と雲母微細を含み、焼成は良好。色調は淡明黄橙色。

25は、凝灰岩質の石包丁である。

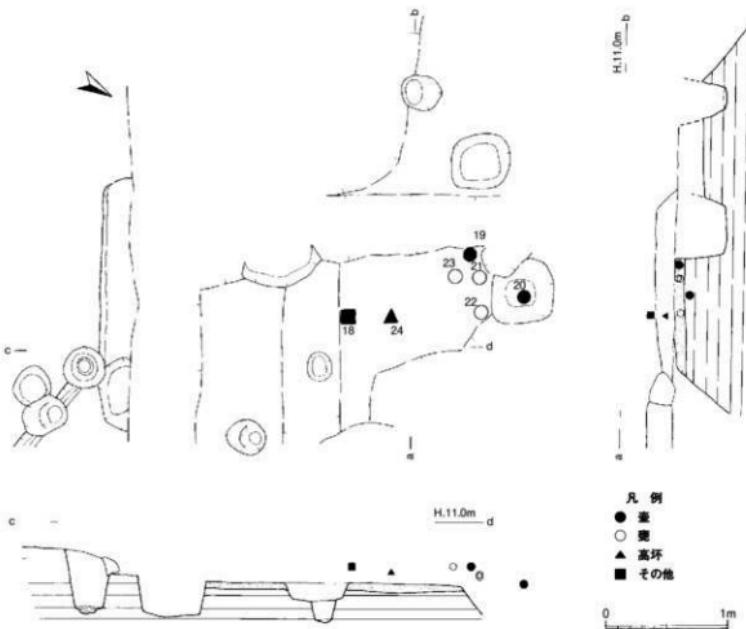


Fig.12 6号住居実測図(1/40)

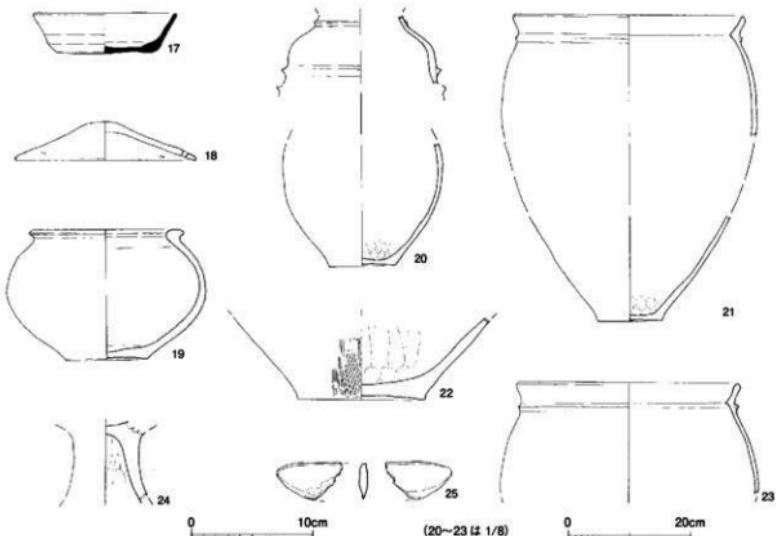


Fig.13 5・6号住居出土遺物実測図(1/4・1/8)

2) 堀立柱建物 (SB)

堀立柱建物は、7棟を検出した。しかし、柱穴内に柱痕跡を残しながらも建物として把握できなかつたものがあり、本来的には更に数棟の建物があったと考えられる。分布的には削平された西方や調査区外の南方にあることが考えられる。規模的にはいずれも1間×1間の最小の単位で、これを超えるものは検出できなかった。また、その重複関係から少なくとも3期に亘る建て替えがあったことが想起される。

126号建物 SB-126 (Fig. 14 PL. 6)

126号建物は、南西部に拡がる遺構群のやや西寄りに位置し、2号住居や127・128号建物と重複し、2号住居と127号建物より後出するが、128号建物との新旧は明らかでない。1間×1間の東西棟の堀立柱建物で、梁行長は270cm、桁行長は350cmである。柱穴は、40～50cm×65～70cmの楕円形プランを呈し、深さは40～60cmを測る。床面積は9.45m²。

127号建物 SB-127 (Fig. 14 PL. 6)

127号建物は、1間×1間の東西棟の堀立柱建物である。2号住居および126・128号建物と重複し、2号住居よりも古く、126号建物よりも新しい。また、東隅柱は1号溝に切られている。建物の梁行長は270cm、桁行長は300cmであるが、北隅柱はやや南に寄り、西桁行長は東桁行に比べて20cm短い280cmになる。柱穴は、短辺が45～55cm、長辺が85cmの楕円形プランを呈し、東側梁柱には直径が20cmの柱痕跡が残っている。床面積は8.1m²。

128号建物 SB-128 (Fig. 14 PL. 6)

128号建物は、調査区南東部に拡がる建物群中の西寄りにある堀立柱建物で、126・127号建物と重複し、北隅柱は3号溝に切られている。梁行長が180cm、桁行長が300cmの1間×1間の東西棟で

ある。柱穴は、短辺が40～55cm、長辺が50～70cmの長方形プランを呈し、深さは35～60cmである。柱穴内には15cm径の柱痕跡が残っていた。床面積は5.4m²。

129号建物 SB-129 (Fig. 14 PL. 6)

129号建物は、建物群中のほぼ中央にある1間×1間の東西棟の掘立柱建物で、1号溝よりも古い。梁行長は270cm、桁行長は280cmではほぼ正方形プランをなし、床面積は7.56m²。柱穴は、40～60cmの円形プランをなし、深さは20～60cmと深浅差があり、丘陵の開削に因るものであろう。

130号建物 SB-130 (Fig. 15 PL. 6)

130号建物は、建物群中の最も南東端に位置し、西には8号木棺墓、南には9号井戸が隣接している。

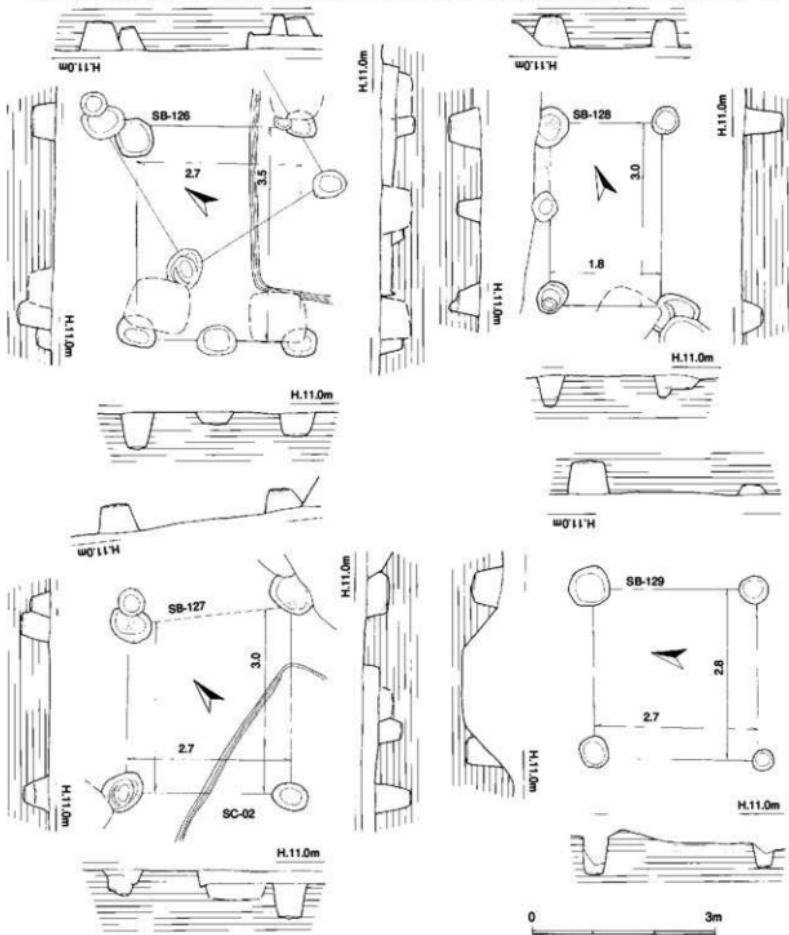


Fig.14 126～129号建物実測図(1/80)

建物は1間×1間の南北棟の掘立柱建物で、梁行長は200cm、桁行長は270cmである。床面積は5.4m²。柱穴は、45～60cm径の楕円～方形プランを呈し、深さは40～60cmである。北東隅柱は、水田開削によって消失している。

131号建物 SB-131 (Fig. 15 PL. 6)

131号建物は、建物群中の北部に位置する1間×1間の南北棟の掘立柱建物で、132号建物よりも古く、北東隅柱は1号溝に切られて消失している。建物は、梁行長が300cm、桁行長が320cmで床

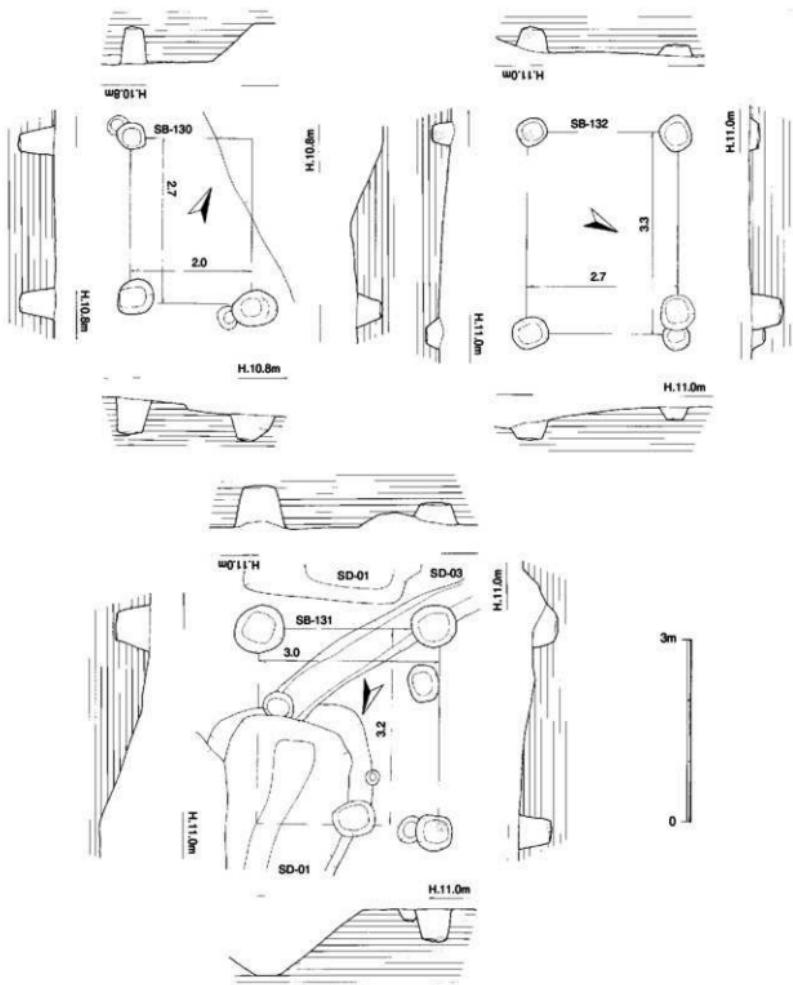


Fig.15 130～132号建物実測図(1/80)

面積は9.6m²である。柱穴は、60～85cm 径の円形プランを呈し、深さは55～60cmである。

132号建物 SB-132 (Fig. 15 PL. 6)

132号建物は、建物群中の最北西端に位置する1間×1間の東西棟の掘立柱建物で131号建物よりも新しい。梁行長は270cm、桁行長は330cm、床面積は8.91m²である。柱穴は、短辺が45～55cm、長辺が55～60cmの方～長方形プランを呈し、深さは15～50cmと深浅差がある。

3) 井戸 (SE)

井戸は、2基を検出した。いずれも素掘りで、井戸底までの深さは、1.75～3.2mと大きく差があるが、最深部はいずれも八女粘土層まで達している。位置的には調査区南縁のはば中央部にあたり、丘陵を開削して北西方向へ延びる官道と旧河川とのほぼ中間点にある。4号井戸は、調査区の南東部に拡がる遺構群の西縁にあたり、この井戸を西限として官道との間には99号井戸を除いて遺構は全く存在しない。本来的には丘陵から旧河川にむかって住居や掘立柱建物群が拡がっていたものと推考される。

4号井戸 SE-04

(Fig. 16 卷頭PL. 1 PL. 7・8)

4号井戸は、調査区の南東部に拡がる遺構群の最西縁に位置する素掘りの井戸で、7m東には2号住居、7.5m西には99号井戸がある。平面形は、南北が140cm、東西が135cmの円形プランを呈する。深さは3.15mとやや深く、標高は7.72m。壁面は、40cm×47cmの楕円形の井戸底にむかって直線的に窄まる。井戸底には10点余りの壺や器台がまとまって投棄されていた。一方で上層からは、壺や甕・器台・ミニチュア土器が出土している。上層と井戸底の中間層には遺物が少なく、出土状況に二極化が見られ、廃絶に際して一気に上層まで埋め戻されたと考えるのが合理的である。検出面より-1m、標高9.7m付近に鳥栖ローム層と八女粘土層の境界があり、ここに湧水点がある。

出土遺物 (Fig. 17 PL. 37)

26～32は、上層出土。26・27は、手捏のミニチュア鉢。26は、口径が5.2cm、器高は3.5cm。体部は短くストレートに外反し、口縁部は小さく摘み上げている。27は、口径が4.7cm、器高は3.8cm。口縁端部は小さく直口する。28は、口径が9.6cm、底径が3.6cm、器高が5.8cmの小型鉢。体部は内擣気味に立ち上がる。胎土は比較的多くの微細～小砂粒と少量の雲母微細、赤褐色粒を含む。29・30は、甕の底部。底径は、29が8.6cm、30が7.4cm。31・32は器台。31は、底径が12.4cm。32は底径が12.6cm。短く開く脚裾部は端部を内方に摘み出し、受部は屈曲して短く

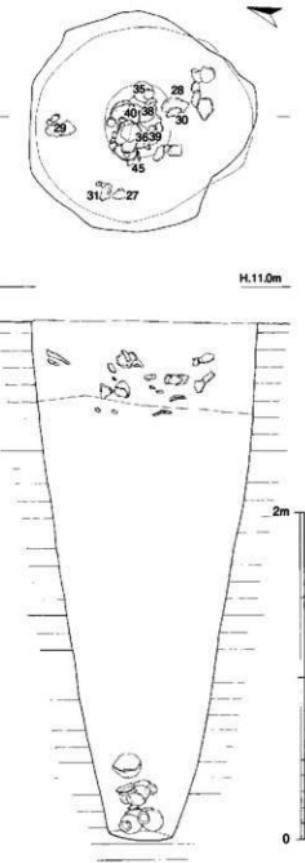


Fig.16 4号井戸実測図(1/30)

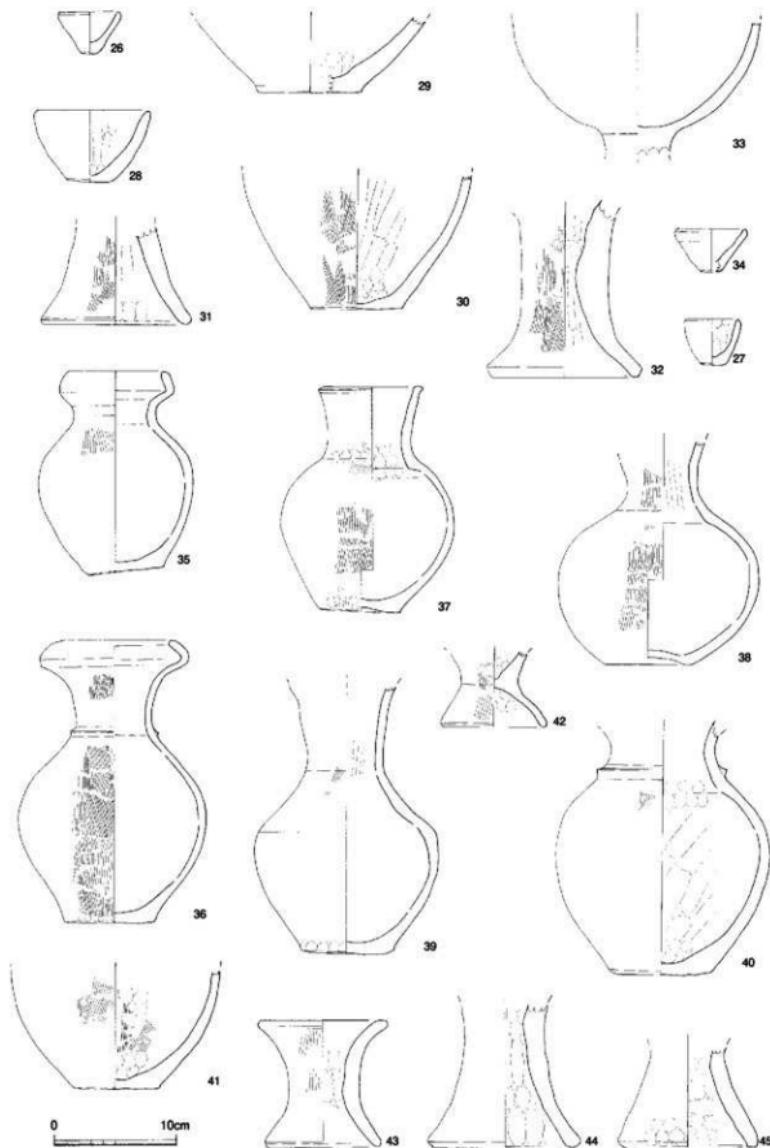


Fig.17 4号井戸出土遺物実測図(1/4)

外反する。33・34は、中層出土。33は、体部が半球形をなす高壺。胎土はやや粗く多くの小～粗砂粒と雲母微細を含む。34は、口径が6cm、器高が3.5cmの手捏のミニチュア鉢。体部はストレートに外反し、口縁部は小さく摘み上げる。35～45は、井戸底から出土した。35～41は壺。35は、口径が9.5cm、底径が6.6cm、器高は16.3cm。口縁部は、短い頸部から緩やかに外反した後に厚く直線的に内傾する。胴部はやや肩の張った卵形をなす。36は、口径が9cm、底径が7.4cm、器高が23.2cmの袋状口縁壺。口縁部は、直線的な頸部から緩やかに外反した後に膨らみ気味に鋭く内傾する。屈曲面は指頭による強い押圧ナデで膨らみを付けている。頸部との境には三角突帯が巡る。37は、口径が8.6cm、底径が7.4cm、器高が18.5cmの長頸壺。口縁部はストレートに外反し、平坦な端部は外唇を小さく摘み出す。胴部は肩の張った球形。38は、上げ底の底部に玉壺状の偏球形の胴部が付く。底径は6.8cm。内面は押圧ナデ調整で頸部には絞り痕がある。胎土は良質で、多くの微細～粗砂粒と若干の赤褐色粒を含む。39は、肩が鋭く張った偏球形の胴部にやや長い頸部が付く壺で、底径は7.4cm。外面はナデ後にハケ目、内面は押圧ナデ調整で頸部には絞り痕が残る。胎土には多くの微細～中砂粒のはか雲母微細と赤褐色粒を含む。40は、底径が8.6cm。胴部は、やや肩の張った球形で頸部は短く内傾した後に外反する。胴部と頸部との境には1条の鋭い三角突帯が巡る。胎土には多くの小～粗砂粒のはか雲母微細と赤褐色粒を含む。淡灰白色。41は、底径が7.2cmで胴部は球形をなす。42は、脚径が8.6cmの台付壺。脚は短く内縫気味に開く。胎土は良質で、微細～小砂粒のはか少量の赤褐色粒を含む。43～45は、器台。43は、受部径が10.6cm、底径が9.6cm、器高は10.4cm。受部は短く直口する筒部から緩やかに外反し、脚裾部はストレートに開く。44は、底径が12.6cm。脚部はやや長く、裾部は短く開く。45は、底径が11.6cm。脚裾部はストレートに外反し、端部は平坦に整える。

99号井戸 SE-99 (Fig. 18 卷頭 PL. 1 PL. 9)

99号井戸は、調査区南東部にある素掘りの井戸で、4号井戸と調査区の西縁に開削された官道の中間地点に位置している。平面形プランは、直径が85～88cmの正円形を呈する。深さは175cmで、4号井戸に比べて浅く、標高は9.06m。壁面は、検出面より1mほど垂直に掘り込み、そこから小さく袋状に抉れて40～43cmの円形の井戸底にむかって緩やかに窄まる。この小さく窄まつた標高が9.6m地点に鳥栖ローム層と八女粘土層の境界があり、ここから水が湧き出している。4号井戸との間に深浅の差はあるものの粘土層の境と湧水点の位置はほぼ一致している。遺物は壺片がわずかに出土した。

出土遺物 (Fig. 19)

46は、底径が6.8cmの壺。底部は凸レンズ状にやや丸く、胴部は倒卵形をなす。外面が粗いハケ目、内面は押圧ナデ～ハケ目。胎土は微細～石英小砂粒と雲母微細を含む。47は、片岩質の石包丁片。

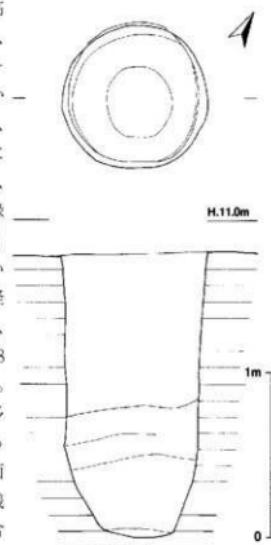


Fig.18 99号井戸実測図(1/30)

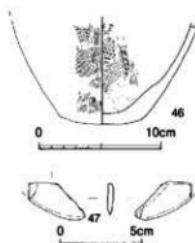


Fig.19 99号井戸出土
遺物実測図(1/3・1/4)

4) 貯藏穴 (SU)

貯藏穴は、1基を検出した。位置的には、調査区北東部の丘陵が旧河川へ落ちていく東縁にあたる。付近一帯にこの期の遺構群が広がっていたものと考えられる。

135号貯藏穴 SU-135

(Fig. 20 PL. 10)

135号貯藏穴は、調査区北東部の台地縁に位置し、9m北西に133号井戸がある。壁面は、床面から34cmほどが残り、西壁は袋状に内彎している。平面形は、長辺が202cm、短辺が165cmの楕円形になろう。本来は、床面から4~50cmの高さから大きくドーム状に内溝して窄まり入口部へ至るものでその高さは15mほどにならうか。

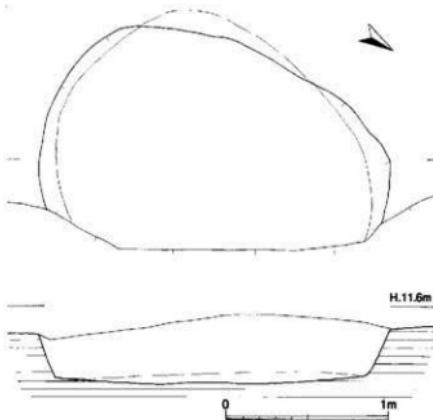


Fig.20 135号貯藏穴実測図 (1/30)

5) 木棺墓 (SR)

木棺墓は、1基を検出した。墳墓はこの木棺墓だけであるが、台地縁や旧河川からは大型甕片が出土しており、削平された丘陵を中心には甕棺墓域が広がっていたと考えられる。

8号木棺墓 SR-08

(Fig. 21 PL. 10)

8号木棺墓は、調査区南東部の台地縁にあり、東には9号井戸が隣接している。平面形は長辺が203cm、短辺が62~69cmの長方形である。木棺墓は、墓壙底に黄褐色粘土ブ

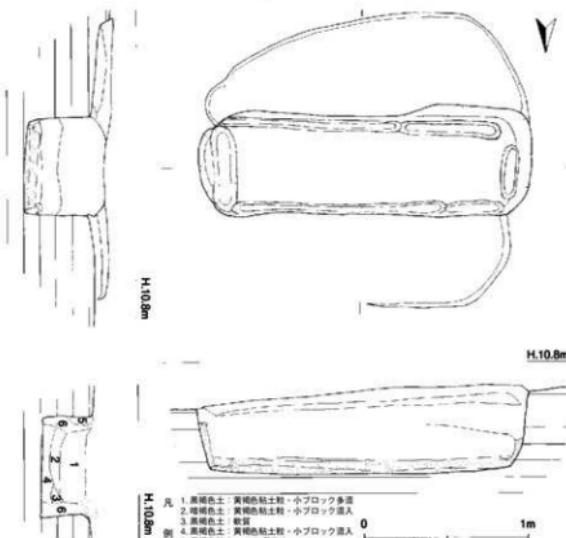


Fig.21 8号木棺墓実測図 (1/30)

ロックを6~8cm敷き詰めてその四周に棺材を埋め込む4~8cm幅の小溝を掘り込んでいる。棺材をその小溝内に立て、裏面に黄褐色粘土を詰め込んで棺材の安定を図っている。墓壙の両側壁に蝶の羽のような半楕円形の浅い掘り込みがあり、この段に蓋材を横架したと考えられる。この浅い掘り込みが削平された1次墓壙で、本来的には2段掘



Fig.22
8号木棺墓
出土遺物実
測図 (1/1)

りの木棺墓である。棺床までの深さは33cm。覆土は黒褐色～暗褐色土で、灰白色粘土ブロックが多く混入し、墓壙上縁に貼付いた粘土ブロックがあり、蓋材は灰白色粘土で目貼りされていたと考えられる。遺物は、覆土中から管玉が1点出土した。

出土遺物 (Fig. 22 PL. 37)

48は、長さが6.5mm、直径が2mmの碧玉製管玉である。
1mm弱の円孔は両側から穿孔している。

6) 土 壤 (SK)

土壤は4基検出したが、調査区の削平が大きく本来的にどのような分布を示していたかは明らかでない。出土遺物も少なく時期は決し難いが、覆土は堅穴住居と大差がない。また、137号河川の河岸に沿って3基の円形土壤を検出したが、冠水によって壁面が崩落し、図示できなかった。プラン的には径が80～100cm、深さが70cmほどの円形で、黒灰褐色の粘質土が堆積し、壙底からはドングリ等の種子が出土した。

86号土壤 SK - 86 (Fig. 23)

86号土壤は、調査区南東部の遺構群の北西部に位置する南北軸の小土壤で、南西隅壁は3号溝と接している。平面形は、短辺が68cm、長辺が104cmの隅丸長方形プランで主軸方位をN-32°-Eにとる。壁面は北小口壁が緩やかなばかりは急峻に立ち上がる。壁高は36cm。床面は北小口壁へむかって緩やかに傾斜し、断面形は浅い凹レンズ状をなす。覆土は、淡黒褐色土の単一層である。

7) 井堰状杭列・河川 (SD)

調査区の東部で1条の河川とその岸際に打ち込まれた杭列を検出した。隅から西へむかって延びる砂の厚い堆積層を検出した。砂層は、岸側の深さが1m余で、北端部へむかって緩やかにさがる。

137号河川 SD - 137 (Fig. 7 PL. 14)

137号河川は、調査区の南東隅から西へ緩やかにカーブを描きながら北流し、中央部で緩やかに流れを変えて北西方に延びていく。堆積土は、薄いシルト質土を互層的に挟んだ砂層の単一層で上層は細～小砂、下層は粗砂層である。西岸から北端までは35m余あり、東岸は確認できていない。深さは、西岸際が1m余で、北へむかって緩やかに傾斜し、比高差は1m余を超える。便宜的に河川としたが、低位段丘上の那珂古川の氾濫原の可能性も考えられる。

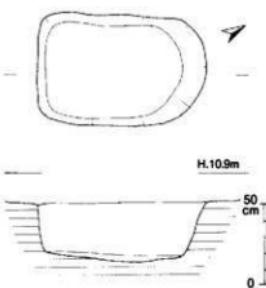
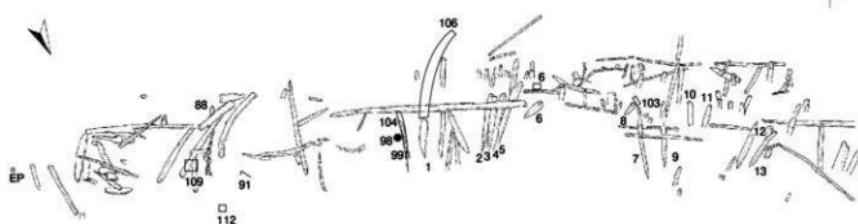


Fig.23 86号土壤実測図(1/30)



出土遺物 (Fig. 25 ~ 32 PL. 25 ~ 27)

49は丹塗の無頭壺。口縁部は短く鋭角的に外反し、上唇部に円孔を焼成前に穿つ。胴部は偏球形をなす。52～56は二重口縁壺。52は、口縁部がのびやかに外反した後に鋭く内傾し、外唇を小さく摘み出す。この外唇と突帯状の屈曲部にヘラ工具による刻み目が巡る。偏球形の胴部下半と頸部との境に1条の三角突帯を貼り巡らし、下半部の突帯には刻み目がある。53の口縁部は外反した後に鋭く直線的に内傾し、端部は上方に短く摘み上げている。倒卵形の胴部と頸部の境にはシャープな1条の三角突帯が巡る。55は、口縁部が外反した後にストレートに内傾し、屈曲面と頸部の境に巡る1条の三角突帯にはヘラ工具による刻み目を施している。56は、器高が77.2cmの大型壺。口縁部は、緩やかに外反した後に鋭角的に屈曲して直線的に内傾する。倒卵形の胴部と頸部の境に1条、下半部に2条のコ字突帯が巡る。59～62はく字状口縁の壺で胴部は倒卵形をなす。62は、口縁部が直口気味に小さく外反し、胴部は丸みを帯びた卵形をなす。63～67は高壺。63は壺部が半球形をなす丹塗高壺。口縁部は水平に屈曲して外反する。64は丹塗の高壺で脚部はラッパ状に開く。65は脚部が朝顔状に大きく開く。68～72は器台。68は器壁が厚く、受部は短く外反する。ストレートに開く脚裾部は内唇を内方に小さく摘み出す。69は筒部が直線的で細く、受部と脚裾部は短く外反して上下端は水平に整えている。72は器高が23.8cmの大型器台。受部は緩やかに外反し、脚裾部は筒部からストレートに開く。73～76は上層の混入である。73は口径が8.8cmの小型丸底壺。口縁部は、偏球形の胴部からストレートに外反する。74は口径が13.5cmの土師器壺。口縁部は、扁平な半球形の体部から小さく屈曲して垂直に摘み上げている。75は口径が13.4cmの須恵器壺。口縁部は緩やかに外反し、疊付は外方に開く。76は、手捏のミニチュア鉢。口縁部は直口して立ち上がり、盃状をなす。77は直径が5cm、厚さが1.3cmの土製紡錘車で、6.2～7mmの円孔を穿つ。79は、長さが4.5cm、厚さが0.9cmの頁岩製石錘。幅が1.2mmの結節溝は、横から縦の順で彫り込んでいる。80は、安山岩製の石彈。81は凝灰岩製の石包丁。82は、砂岩質の砥石である。83は安山岩質の凹石。84は、玄武岩の敲打石。85は、長さが17.1cm、幅が12.5cm、厚さが3.7cmの石鍤で、両側縁に紐掛の打ち欠きがある。

138号井堰状杭列 SX-138 (Fig. 24 PL. 11～14)

138号井堰状杭列は、調査区の東部を北流する137号河川が流れを北西方に変えるあたりに河川と直交する突き出た杭列で総延長は16mである。検出時は10号河川下層の流木類と考えたが、黒色粘質土層下の砂層深くまで打ち込まれており、河川に伴うものであった。杭は外にむかって左右から打ち込まれている。この杭の交差部に2～4mの丸材を横架し、その間に横木或いは縦木を絡めていた。杭材は、直径が6～9cmで長さは短いものが50～110cm、長いものは200cmあり、垂木や横架材を転用したものが多い。また、杭間からエブリヤタモ網などが検出された。(小林義彦)

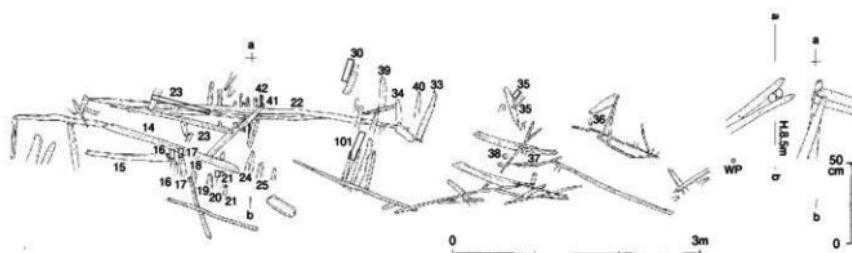


Fig.24 138号井堰状杭列実測図(1/60)

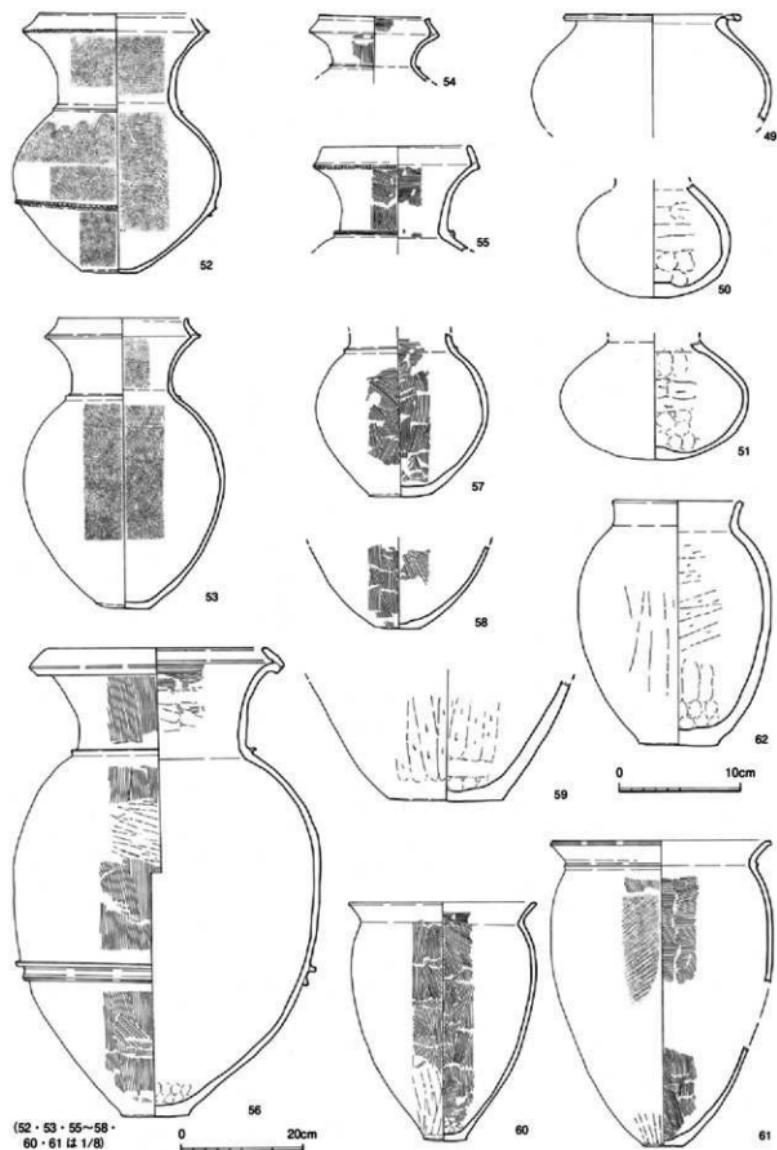


Fig.25 137号河川出土遺物実測図 1 (1/4 · 1/8)

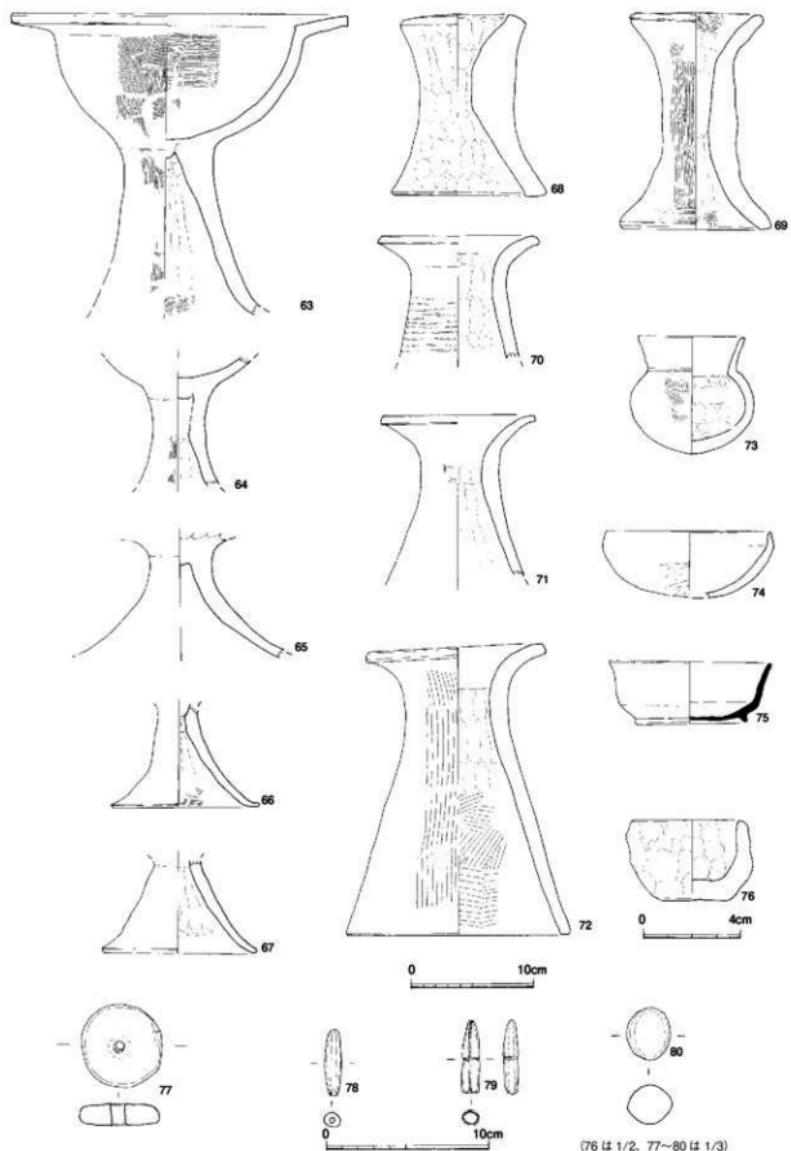


Fig.26 137号河川出土遺物実測図2(1/2・1/3・1/4)

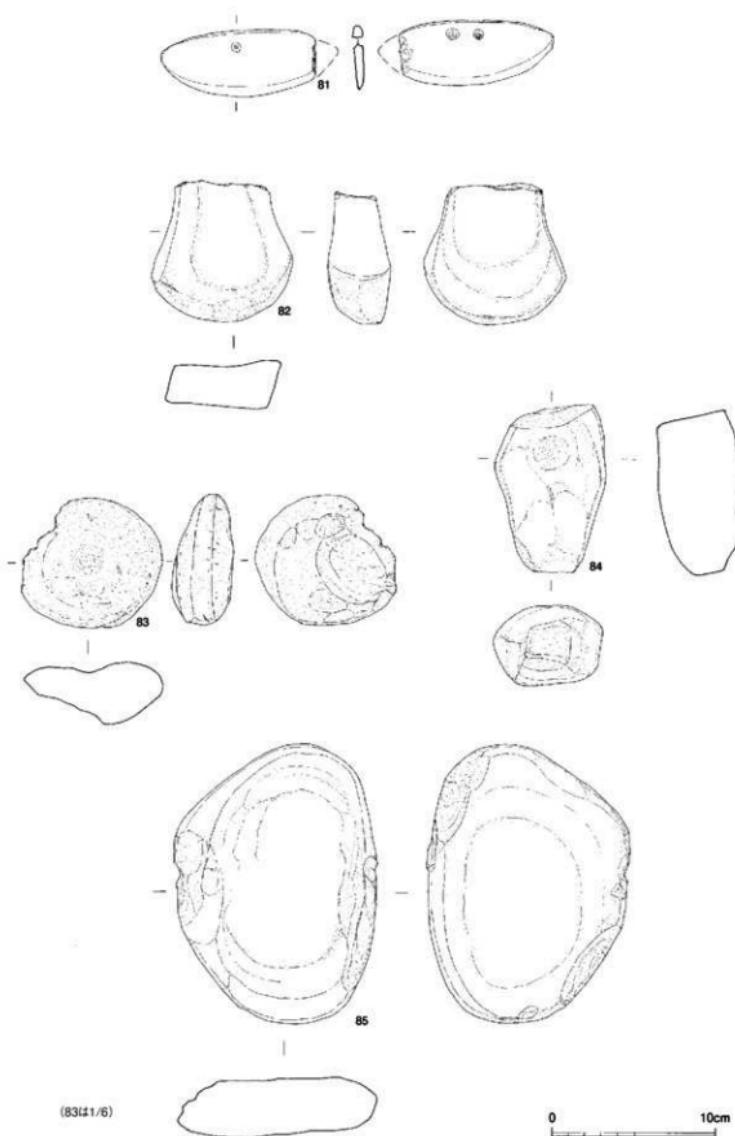


Fig.27 137号河川出土遺物実測図 3 (1/3・1/6)

Tab.2 出土遺物(土器)一覧表1

Fig.	No.	時代	器種	造形	サイズ (器高・口径・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig10	1	弥生	甕	SC-02	6.8+ α	良質、微細～中砂粒を比較的多く含む、雲母微細、赤褐色粒を少量含む	良好	暗茶灰色	ヨコナデ	ナデ	
					18.8						
									ナデ後暗茶状のナデ		
Fig10	2	弥生	甕	SC-02	12.0+ α	良質、微細～石英小砂粒を多く含む、雲母微細を少量含む	良好	明赤橙色	タテハケ目	ナデ後やや粗いハケ目	黒斑
					7.8						
									指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig10	3	弥生	甕	SC-02	5.2+ α	良質、微細～石英小砂粒と雲母微細を含む	良好	(内) 黒灰色 (外) 淡黄橙色	粗いナデ	押圧ナデ	
					7.2						
Fig10	4	弥生	甕	SC-02	12.8 ~ 13.1	良質、微細～石英中砂粒と雲母微細を比較的多く含む	良好	(内) 淡黄茶褐色 (外) 淡明赤橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	外側に黒斑
					10.8 ~ 11.1				粗いハケ目	押圧ナデ	
					7.1 ~ 7.2				押圧後へラ状工具によるナデ	指頭押圧ナデ	
Fig10	5	弥生	甕	SC-02	4.7+ α	微細～石英小砂粒と雲母微細を多く含む	良好	(内) 黒褐色 (外) 淡黄褐色～灰黑色	粗いタテハケ目	押圧ナデ	
					6.7				ヘラ状工具によるナデ	指頭押圧ナデ	
Fig10	6	弥生	甕	SC-02	17.5+ α	やや粗い、微細粗砂粒を多く含む、雲母微細を含む	良好	淡明赤橙色	粗いタテハケ目	指頭押圧ナデ	
					15.3						
Fig10	7	弥生	甕	SC-02	9.0+ α	微細～石英中砂粒を多く含む、雲母微細を含む	良好	明赤橙色	ヨコナデ	押圧ナデ	
					18				やや粗いハケ目後ナデ		
Fig10	8	弥生	甕	SC-02	25.1 ~ 25.5	良質、微細～石英中砂粒が多く含む、雲母微細を少量含む	良好	(内) 淡黄褐色 (外) 淡黄褐色、淡黒～黒灰色	ヨコナデ	やや粗いヨコハケ目	外側全体に黒斑
					20.8 ~ 21.5				粗いハケ目		
					7.8 ~ 8.0						
Fig10	9	弥生	甕	SC-02	6.8+ α	微細～小砂粒を比較的多く含む、雲母微細を含む	良好	(内) 明赤褐色 (外) 淡明赤褐色～黄橙色	ハケ目	ナデ	
					21.8						
Fig10	10	弥生	甕	SC-02	9.0+ α	やや粗い、微細～石英小砂粒を多く含む、雲母微細を多く含む	良好	(内) くすんだ淡黄褐色 (外) くすんだ淡黄褐色～淡茶色	粗いタテハケ目	指頭押圧ナデ	
					9.8				粗いナデ		
Fig10	11	弥生	甕	SC-02	10.4+ α	雲母微細と赤褐色含む	良好	淡黄褐色	ナデ	押圧ナデ	
					7.2						
Fig10	12	弥生	甕	SC-02	6.0+ α	微細～石英中砂粒を比較的多く含む、雲母微細と赤褐色粒少量含む	良好	(内) 鮎い赤褐色 (外) 明赤橙色～淡赤橙色	ナデ	押圧ナデ	
					7.9						
Fig10	13	弥生	甕	SC-02	10.8+ α	良質、微細～石英小砂粒を多く含む、雲母微細を含む	良好	(内) 淡黄褐色 (外) 淡明赤橙色			
					7.2				ハケ目	押圧ナデ	

Tab.3 出土遺物(土器)一覧表2

Fig.	No.	時代	器種	造形	サイズ (器高・口径・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig10	14	弥生	鉢	SC-02	9.8~10.5	やや粗い、微細～石英小砂粒を多く含む、雲母微細を含む	良好	(内)明赤橙色 ～暗赤橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	底部に黒斑
					15.3			押圧ナデ、一部細かいハケ目	指頭押圧ナデ		
					5.8			粗い搔き上げ			
Fig10	15	弥生	ミニチュア鉢	SC-02	6.7	やや粗い、微細～石英小～粗砂粒を多く含む	良好	赤橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	底部に黒斑
					7			押圧ナデ	指上半による押圧ナデ		
					3.6				指頭押圧ナデ		
Fig10	16		壺蓋	SC-02	1.9+ α	精良、微細～小砂粒を少量含む	堅硬	灰色	ヨコナデ	ヨコナデ	一対の円孔
					14.6			ヘラケズリ	ナデ		
					3.3						
Fig13	17		壺	SC-05	11.8	精良、微細～小砂粒を多く含む	堅硬	灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	一対の円孔
					8			ヘラケズリ	ナデ		
					3.1						
Fig13	18	弥生	壺蓋	SC-06	15	良質、微細～中砂粒、雲母微細を比較的多く含む	良好	淡明黄橙色	ナデ	ナデ	外底面に淡黒斑
					10.6			(内)淡赤橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	
					12.8				押圧ナデ		
Fig13	19	弥生	無頭壺	SC-06	6.8	精良、微細～細砂粒と雲母微細を含む、僅少の赤褐色粒を含む	良好	(外)淡黄橙色 ナデ			外底面に淡黒斑
					40.5						
Fig13	20	弥生	瓢箪壺	SC-06	49.8	精良、微細～小砂粒を比較的多く含む、雲母微細を含む	良好	(内)淡明黄褐色 (外)淡明黄橙色 ナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	外底面に2次被熱による赤変
					38					押圧ナデ	
										指頭押圧ナデ	
Fig13	21	弥生	中型壺	SC-06	6.8+ α	精良、微細～石英小砂粒と雲母微細を比較的多く含む	良好	(内)淡明黄褐色 (外)明橙色 ナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	外底面に2次被熱による赤変
										押圧ナデ	
					10.4					指頭押圧ナデ	
Fig13	22	弥生	壺	SC-06	18.2+ α	精細～石英中砂粒と雲母微細を比較的多く含む、赤褐色粒を僅かに含む	良好	(内)淡明黄褐色 (外)くすんだ淡赤橙色 ナデ	ヨコナデ	押圧ナデ	外底面に2次被熱による赤変
					36.6						
Fig13	23	弥生	中型壺	SC-06	6.0+ α	良質、微細～小砂粒、雲母微細を含む	良好	(内)淡明黄褐色 (内)やや黄褐色ぎみ ナデ?	ヨコナデ	押圧ナデ	外底面に2次被熱による赤変
Fig17	26	ミニチュア鉢	SE-04		3.5	精良、微細～小砂粒と雲母微細を含む	良好	淡灰黄色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	脇部外面に黒斑
					5.2						
					1.6						
Fig17	27	ミニチュア鉢	SE-04		3.8	やや粗い、細～石英中砂粒を多く含む	良好	淡明黄褐色	ナデ?	指頭押圧ナデ	脇部外面に黒斑
					4.7						
					2						

Tab.4 出土遺物(土器)一覧表表3

Fig.	No.	時代	器種	造形	サイズ (器高・口径・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig17	28	弥生	小型鉢	SE-04	5.8	良質、微細～小砂粒を比較的多く含む、雲母微細と赤褐色粒を少量含む	良好	淡黄橙色	ヨコナデ	ヘラ状工具によるナデ	
					9.6				ナデ	指頭押圧ナデ	
					3.6						
Fig17	29	弥生	甕	SE-04	6.3+ α	良質、微細、石英小～中砂粒を比較的多く含む、雲母微細を含む	良好	(内) 淡黄白色	ヘラ状工具によるナデ	押圧ナデ	
					8.6			(外) 淡黄橙色			
Fig17	30	弥生	甕	SE-04	11.2+ α	良質、微細～小砂粒を比較的多く含む、雲母微細を含む	良好	淡黄白色	粗いタテハケ目	押圧後ヘラ状工具による粗いナデ	胴部内面に 押圧痕
					7.4					指頭押圧ナデ	
Fig17	31	弥生	器台	SE-04	8.0+ α	良質、微細～石英小砂粒を比較的多く含む、雲母微細を含む	良好	(内) 淡黄橙色	粗いタテハケ目	絞痕	
					12.4			(外) 淡黄橙～赤橙色		指頭押圧ナデ	
Fig17	32	弥生	器台	SE-04	14.6+ α	良質、微細～小砂粒を含む、雲母微細を含む	良好	(内) 淡灰褐色	粗いタテハケ目	押圧ナデ	
									ヨコナデ	ヨコナデ	
					12.6						
Fig17	33	弥生	高环	SE-04	12+ α	やや粗い、小～粗砂粒を多く含む、雲母微細を含む	良好	淡黄灰褐色	ナデ	押圧ナデ	2次被熱による 変色
										指頭押圧ナデ	
Fig17	34	ミニチュア鉢	SE-04		3.5	精良、微細～小砂粒少量を含む、雲母微細を含む	良好	淡黄橙色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	外部 側部に 淡黒斑
					6						
					1.8						
Fig17	35	弥生	袋状口縁壺	SE-04下層	16～16.3	良質、微細、石英小～中砂粒を比較的多く含む、雲母微細を含む	堅緻	淡灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	胴部外面に 淡黒斑
					9.5				押圧ナデ	押圧ナデ	
					6.2～6.6				ナデ		
Fig17	36	弥生	袋状口縁壺	SE-04F層	23.2	良質、小～石英中砂粒を比較的多く含む、赤褐色を若干量含む	良好	灰黃褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	胴部外面に 淡黒斑
					8.8～9.0				粗いタテハケ目		
					7.4				指頭押圧ナデ		
Fig17	37	弥生	長頭壺	SE-04F層	18.1～18.5	良質、微細砂、石英小～中砂粒を多く含む。	堅緻	くすんだ灰白色	ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部 外側に 淡黒斑
					8.6				ハケ目後ヨコナデ	ハケ目後ヨコナデ	
					7.4				押圧ナデ後ハケ目	指頭押圧ナデ	
Fig17	38	弥生	長頭壺	SE-04F層	18.3+ α	良質、微細、石英小～粗砂粒を多く含む、赤褐色を若干量含む	堅緻	くすんだ灰白色	ハケ目後ヨコナデ	ヨコナデ、絞り痕	底部外面に 淡黒斑
									粗いタテハケ目	押圧ナデ	
					6.8				指頭押圧ナデ		
Fig17	39	弥生	袋状口縁壺	SE-04F層	22.0+ α	良質、微細、石英小～中砂粒を多く含む、雲母微細、赤褐色を含む	堅緻	淡灰白色	押圧後ナデ	絞り痕	
									粗いハケ目		
					7.4				ナデ		
Fig17	40	弥生	甕	SE-04F層	21.0+ α	やや粗い、石英小～粗砂粒を多く含む、雲母微細、赤褐色を含む	堅緻		ヨコナデ	指頭押圧ナデ	
									タテハケ目、ナデ	ヘラナデ	
					8.6				ナデ	指頭押圧ナデ	

Tab.5 出土遺物(土器)一覧表4

Fig.	No.	時代	器種	造形	サイズ (器高・口径・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig17	41	弥生	壺	SE-04下層	9.7+ α	良質、微細砂粒、石英小~中砂粒を比較的多く含む、雲母微細を含む	良好	(内)薄い灰褐色	粗いハケ目	指頭押圧ナデ後ハラ状工具によるナデ	
					7.2			(外)淡灰黄色			
Fig17	42	弥生	台付壺	SE-04下層	6.2+ α	良質、微細~小砂粒を含む、雲母微細、赤褐色粒を少量含む	良好	(壺内)濃灰黒色	粗いタテハケ目	指頭押圧ナデ	底部外面に淡黒斑
					8.6			(壺内~外面)淡灰黄色			
Fig17	43	弥生	器台	SE-04下層	10.4	やや粗い、微細、石英小~中砂粒を比較的多く含む、雲母微細を含む	良好	(内)くすんだ淡黄褐色	粗いタテハケ目	ナデ	
					10.6			(外)淡黄褐色	押圧ナデ		
					9.6				絞り痕		
Fig17	44	弥生	器台	SE-04下層	11.6+ α	やや粗い、中~粗砂粒を比較的多く含む、雲母微細を含む	堅密	(内)薄い灰褐色	ナデ	指頭押圧ナデ	
					12.6			(外)くすんだ淡赤橙色			
Fig17	45	弥生	器台	SE-04下層	8.2+ α	やや粗い、微細、石英小~中砂粒を比較的多く含む、雲母微細を少量含む	堅密	ややくすんだ淡灰黄色	押圧ナデ	ヨコ方向の指頭押圧ナデ	外面上に灰化物
					11.6				指頭押圧ナデ		
Fig19	46	弥生	壺	SE-99	8.6+ α	微細~石英小砂粒を比較的多く含む、雲母微細を含む	良好	(内)淡灰褐色	やや粗いハケ目	押圧ナデ	外面上に灰化物
					6.8			(外)淡灰~灰褐色	ナデ		
Fig25	49	弥生	丹浦無頭壺	SD-137	9.0+ α	良質、微細~細砂粒と雲母微細を含む	良好	(内)くすんだ淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	丹浦里
					14.6			(外)暗赤褐色	ナデ後研磨?		
									押圧ナデ		
Fig25	50	弥生	小型壺	SD-137	9.3+ α	精良、微細~粗砂粒を少量含む、雲母微細を僅かに含む	良好	(内)淡黃白色	ナデ	指頭押圧ナデ	
								(外)淡明黄褐色			
Fig25	51	弥生	長頭壺	SD-137	9.8+ α	石英細~小砂粒を比較的多く含む、雲母微細を含む	良好	(内)黄灰褐色	ナデ	指頭押圧ナデ	内面上に粘土細痕
								(外)淡黄褐色~暗灰茶色	ヨコナデ		
Fig25	52	弥生	二重口縁壺	SD-137	41.8	繊~石英中砂粒を比較的多く含む、雲母微細を含む	良好	(内)暗黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	波状文割目突帯
					25.2			(外)淡黄褐色	タタキの方向のタタキ後ナデ		
					9.7				タタキの当て具痕		
Fig25	53	弥生	二重口縁壺	SD-137	47	良質、微細~小砂粒を比較的多く含む	良好	(内)淡明黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	外面上にスス付着
					21				ハケメ状のタタキ		
					9.2				指頭押圧ナデ		
Fig25	54	弥生	二重口縁壺	SD-137	10.4+ α	微細~石英小砂粒と雲母微細を比較的多く含む	良好	(内)明赤橙色	ハケ目	口縁部内外面上に灰化物種黑色物	
					18.3				押圧後やや細かいハケ目		
					23.6				押圧後ナデ		
Fig25	55	弥生	二重口縁壺	SD-137	17.0+ α	微細~小砂粒を比較的多く含む、雲母微細を少量含む	良好	(内)淡黄灰色	やや粗いハケ目	ヨコナデ	
									ナデ後やや粗いハケ目		
									指頭押圧ナデ		

Tab.6 出土遺物(土器)一覧表表5

Fig.	No.	時代	器種	造形	サイズ (器高・口径・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig25	56	弥生	二重 口縁壺	SD- 137	76.4 ~ 77.2	粗い、細～石英 粗砂粒を多く含む、雲母粒を北 較的多く含む	堅 密	淡明赤橙色	やや粗いタテハケ目	やや粗いヨコハケ目	外側に マンガン 付着
					35.2				タタキ	板状当て具痕	
					11				やや粗いタテハケ目	指頭押圧ナデ	
Fig25	57	弥生	壺	SD- 137	26.7+ α	微細～小砂粒と 雲母粒を多く含む	良好	(内) 淡黄灰褐色 (外) 淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	
					10.4				ハケ目		
					6 + α	良質、細～小砂 粒を多く含む、 雲母微細を僅か に含む			ケズリ状の搔き上げナデ	押圧後粗いハケ目、ナデ	
Fig25	58	弥生	壺	SD- 137	10.2+ α	細～石英中砂粒 を比較的多く含む、 雲母微細と赤褐色 粒を少量含む	堅 密	暗黃褐色	やや細かいタテハケ目	やや粗いハケ目	
					9.2 ~ 9.6						
					39	微細～小砂粒を 比較的多く含む、 雲母微細を含む			(内) 淡明赤橙色 (外) 暗黃褐色	搔き上げ状のナデ上げ	
Fig25	59	弥生	壺	SD- 137	31		良好	(内) 淡黄褐色 (外) 黄褐色	ナデ	指頭押圧ナデ	外側に 炭化物様 黒色物
					7. ~ 7.5						
					50	細～石英中砂粒 を多く含む、雲母 微細と赤褐色 粒を少量含む			ヨコナデ	ヨコナデ	
Fig25	60	弥生	壺	SD- 137	36.4		良好	淡黄白褐色	やや粗いハケ目	ハケ目	
					6.6				ナメ方向のタタキ	指頭押圧ナデ	
					20.1	粗い、微細～石 英粗砂粒を多く 含む、雲母微細 を含む			ヨコナデ	ヨコナデ	
Fig25	61	弥生	壺	SD- 137	10.8		良好	淡黄褐色	ヘラ状工具による粗いナデ	指頭押圧ナデ	外側に スヌ状 黒色物
					62 ~ 72						
					24.5+ α	粗い、細～石英 粗砂粒を多く含む、 雲母微細を含む			ヨコナデ	ヨコナデ	
Fig26	63	弥生	月彌 高环	SD- 137	27.8		良好	(外) 明赤橙色 絞り痕押圧ナデ	ナデ～ハケ目	ナデ	外側に丹塗 内側に炭化 物様黒色物
					10.8+ α				明赤色	ナデ	
					10.5+ α	精良、細砂粒と 雲母微細を含む			ハケ目	ナデ	
Fig26	64	弥生	月彌 高环	SD- 137	8.4+ α	微細～石英小砂 粒を比較的多く 含む、雲母微細 を少量含む	良好	淡明黄褐色	絞り痕押圧ナデ	ナデ	内外面に 丹塗
					12.2						
					15	微細～細砂粒と 雲母微細を比較的 多く含む			ナデ	指全体による押圧ナデ	
Fig26	65	弥生	高环	SD- 137	10.4	微細～石英小砂 粒と雲母微細を 比較的多く含む	良好	淡明赤橙色 淡明褐色			粘土繩
					12.7				ヨコナデ	ヨコナデ	
					7.6+ α				ヘラ状工具によるナデ	指頭押圧ナデ	
Fig26	66		高坏	SD- 137	12.2		良好	(外) 淡明黄褐色		ナデ後ハケ目	
					12.8						
					15	粗い、微細～石 英小砂粒を多く 含む、雲母微細 を含む			ナデ	指全体による押圧ナデ	
Fig26	67		高坏	SD- 137	10.4		良好	淡明褐色			受部に黑色 物 外側に マンガン
					12.7						

Tab.7 出土遺物(土器)一覧表6

Fig.	No.	時代	器種	造形	サイズ (器高・口径・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig26	69	弥生	器台	SD-137	17.7	やや粗い、微細～石英中砂粒を比較的多く含む、雲母微細を僅かに含む	良好	淡黄褐色	押圧ナデ	押圧ナデ後ハケ目	受部内面～外面全体炭化物様黒色物
					11				やや粗いタテハケ目		
					12.5				押圧ナデ		
Fig26	70	弥生	器台	SD-137	10.2+ α	石英細～小砂粒を多く含む、雲母微細を含む	良好	(内) 淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	
					13.2			(外) 淡黄灰色	タタキ痕	指頭押圧ナデ	
Fig26	71	弥生	器台	SD-137	13.2+ α	細～石英小砂粒と雲母微細を含む	良好	(内) 淡赤橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	
					13.7			(外) 淡灰黑色	ハケ目	タテ方向押圧ナデ	
Fig26	72	弥生	器台	SD-137	23.8	粗い、細～石英中砂粒を多く含む、雲母微細を含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	
					14.7				やや粗いタテハケ目	指頭押圧ナデ	
					18.4					やや粗いタテハケ目	
Fig26	73	小型丸底壺		SD-137	9.6	良質、微細～細砂粒と雲母微細を比較的多く含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	2次焼熱によるスス付着黒変
					8.8				やや粗いハケ目	指頭押圧ナデ	
									ナデ		
Fig26	74	环		SD-137	5.5	良質、細～小砂粒を多く含む、雲母微細を含む	良好	(内) 明赤橙色	ヨコナデ	押圧ナデ	
					13.5			(外) 淡黄白色	ヘラケズリ		
Fig26	75	环		SD-137	5.2	精良、微細～細砂粒と雲母微細を少量含む	良好	淡灰紫色	ヨコナデ	ヨコナデ	
					13.4						
					9.2				ナデ	ナデ	
Fig26	76	ミニチュア鉢		SD-137	3.3	微細～細砂粒を比較的多く含む、石英小砂粒と雲母微細を僅かに含む	良好	淡灰茶色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
					4.7				ナデ		
					3.1						

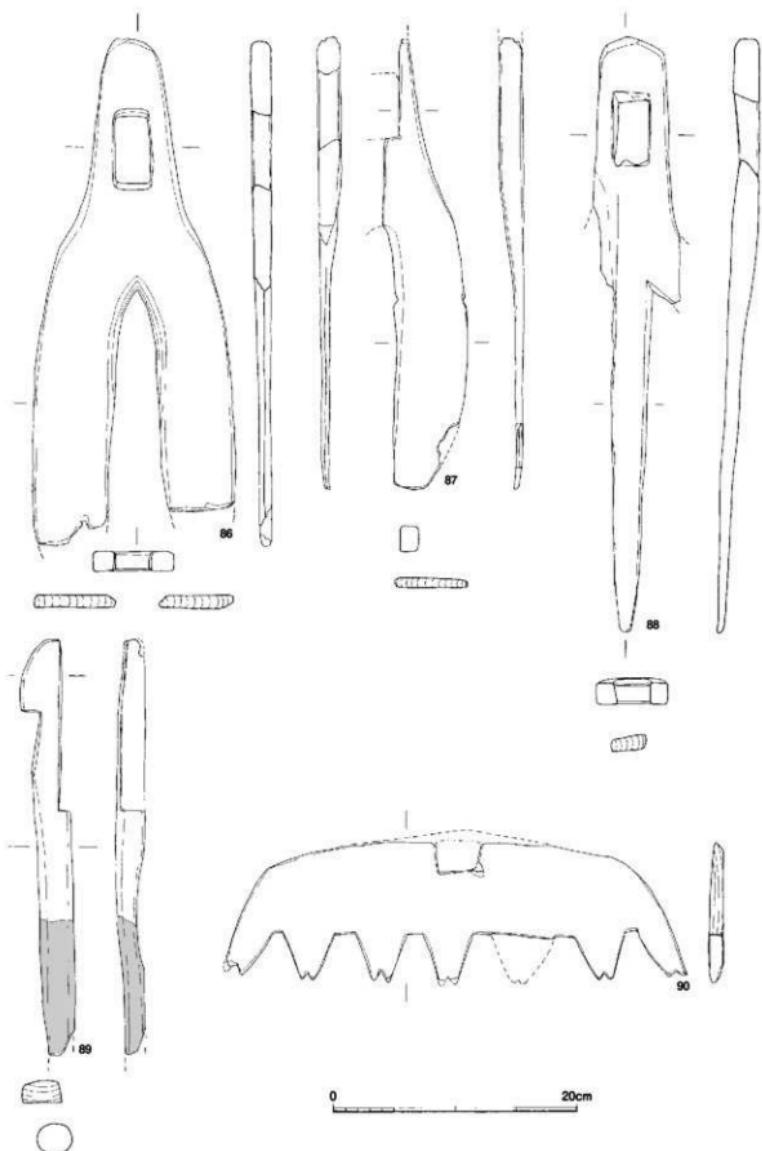


Fig.28 137号河川出土遺物実測図 4 (1/4)

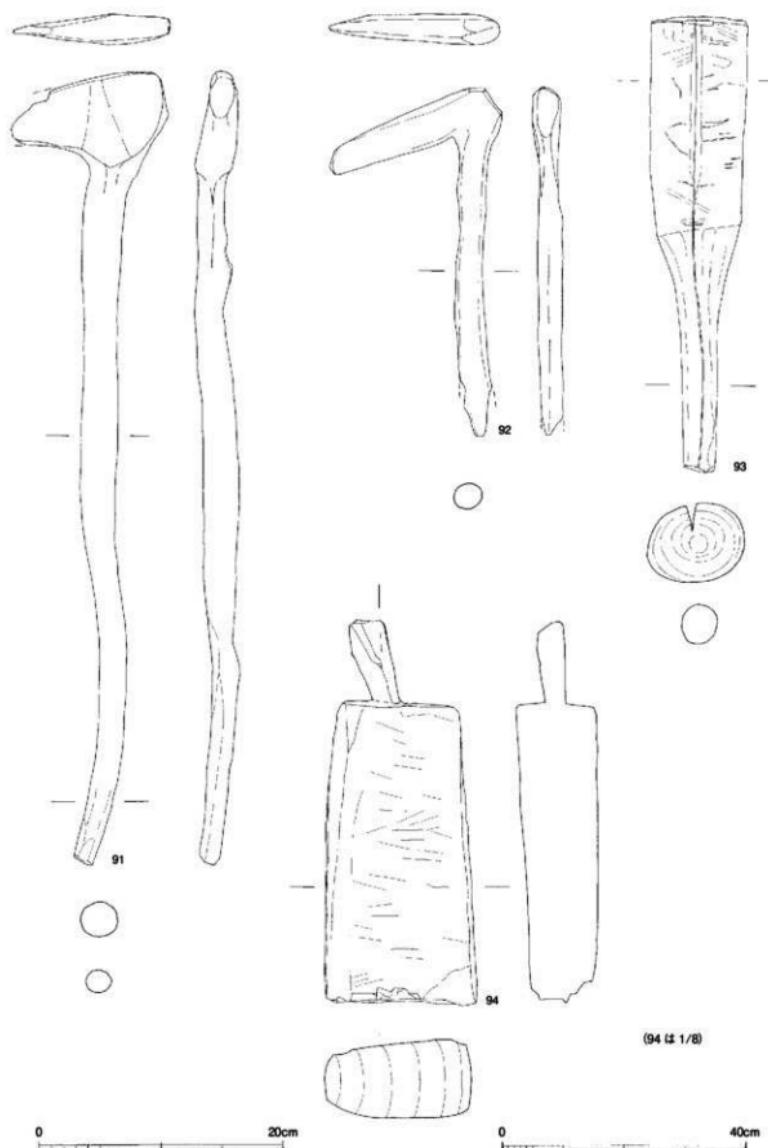


Fig.29 137号河川出土遺物実測図5(1/4・1/8)

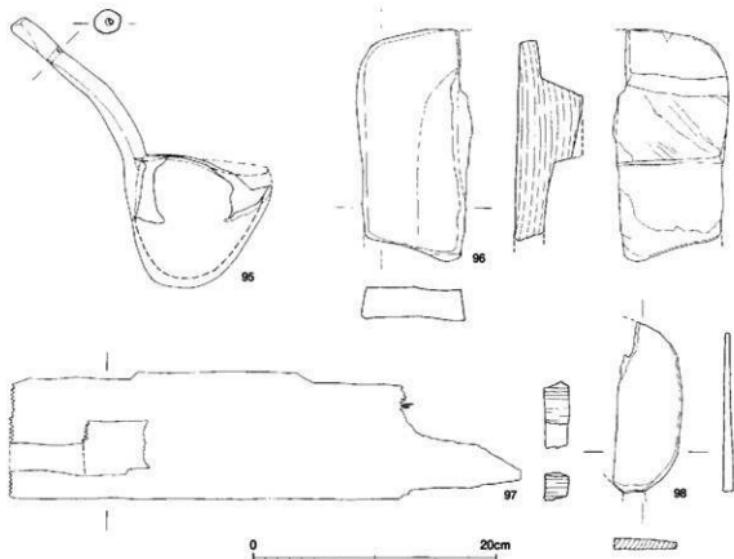


Fig.30 137号河川出土遺物実測図 6 (1/4)

出土遺物 (Fig. 28 PL. 11 ~ 14)

86から90は農具で、すべてカシ材である。86・87は方形孔の二又鋤で、いずれも柵目材である。86は歯の先端を欠損する。孔のつくりから柄との角度は鈍い。87は全体の左半分を欠損するが、孔の観察から柄との角度は86よりも急である。88は方形孔の三又鋤で柵目材を用いる。左右の歯を欠損する。柄との角度は87と同様である。全体に丁寧な面取りが施される。89は鋤の柄である。柄の端部は焼けており、本来の長さは不明。先端部の加工は丁寧である。90はエブリで柵目材を用いる。7本歯で、歯の先端に切れ込みがある。全体に丁寧なつくりで、柄を装着する孔の部分と歯の一部を欠損する。91・92は鉄斧の柄である。いずれもサカキを使用しており、鉄斧を装着する側が幹、柄の部分が枝部分である。91は鋳造鉄斧の柄である。柄の端部と鉄斧の装着部分は丁寧に面取りされている。92は袋状鉄斧の柄である。鉄斧の装着部分は丁寧に加工されている。先端部のみ残存。93は横柵である。ヤツバキの芯持材を用いる。表面は敲打痕がみられ、使用のため断面は梢円に変形している。柄の端部は面取りが明瞭である。搾部は未使用である。94は把手付きの作業台である。カシ材の柵目材を用いる。表面に金属の刃物の痕跡が多数見られる。柄と反対側の端部は切断した痕跡が良く残る。95は杓子である。クスノキの瘤を利用して、内面を幅5mm位の彫刻刀の丸刀状の工具でヨコ方向に削り出して、身の部分を作り出す。柄には穿孔がある。96は椅子か連座下駄の一部と考えられるが、中央部にすり減ったような浅い凹みがあり、椅子である可能性が高い。接地面にはナナメ方向のキズが多数見られる。97は机の天板である。スギの柵目材を用いており、板状の脚がつく机と思われるが、蟻じゃくりのミゾなどの加工は見られない。方形の孔は意図的なものではなく、欠損したものかもしれない。98は團扇である。ガマズミ属の追柵目材を、長梢円形に丁寧に

加工し、表面を黒色に塗る。柄が付いていた痕跡がある。99はタモ網の枠である。マキ属の枝材に網を付けるための小孔を多数設けている。枝の幹側に四角い孔をつくり、先端側を孔に差し込んで輪にして使用するが、先端側は欠損している。100から105は杭材である。100・101は横架材を転用している。100は断面を横長六角形に面取りした芯持材で両端が尖るが、一方には横架材として使用した際に加重で曲がったと思われる凹みがある。もう一方は明瞭な加工痕が残り、こちらは杭用に再加工された可能性がある。101も100と同様であるが、断面は四角形に面取りしている。両端とも尖り、加工上の差は見られないことから、横架材として使用時には、すでに両端とも尖る加工が施されていたと考えられる。102・104は垂木を転用しており、芯持材を使用している。102は他の建築材と組み合わせるためにV字状の切り込みが施される。104は先端部が加重により変形している。103はサスを転用した杭で樹皮が残る芯持材である。垂木の可能性もあるが、直径が9cm前後と太く、サスとした。先端部の杭の加工痕とは別に、他の建築材と組み合わせる為の加工がある。105は樹皮の残る自然木の芯持材を杭に加工したもので、杭の加工痕が明瞭である。反対の端部は欠損している。今回図化したもののほかにも、138号井堰状杭列を中心に、多量の杭、柱材などの建築部材、槽や農具などの破片が出土したが、多量で残存状態も良くないため、計測値を中心とし表に示した。(谷直子)

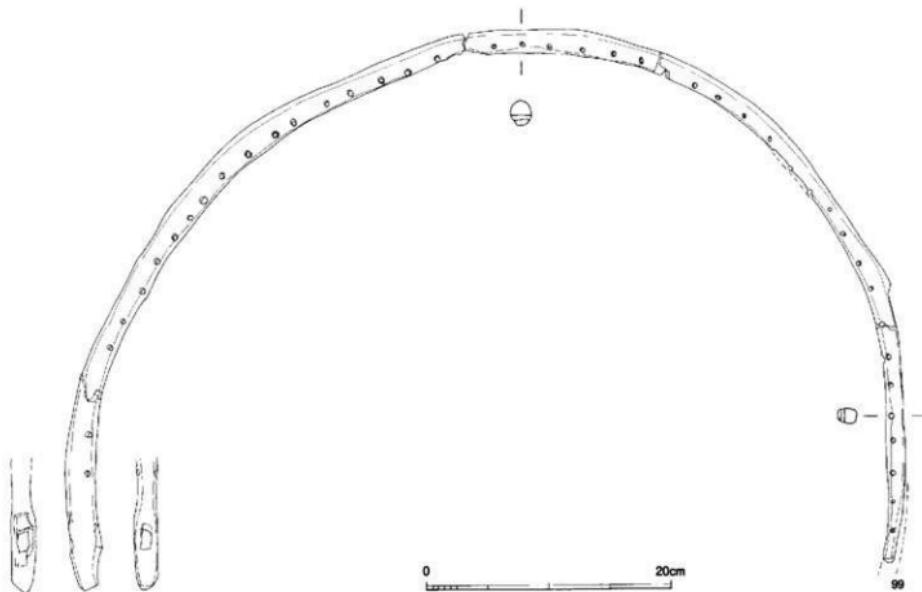


Fig.31 137号河川出土遺物実測図7(1/4)

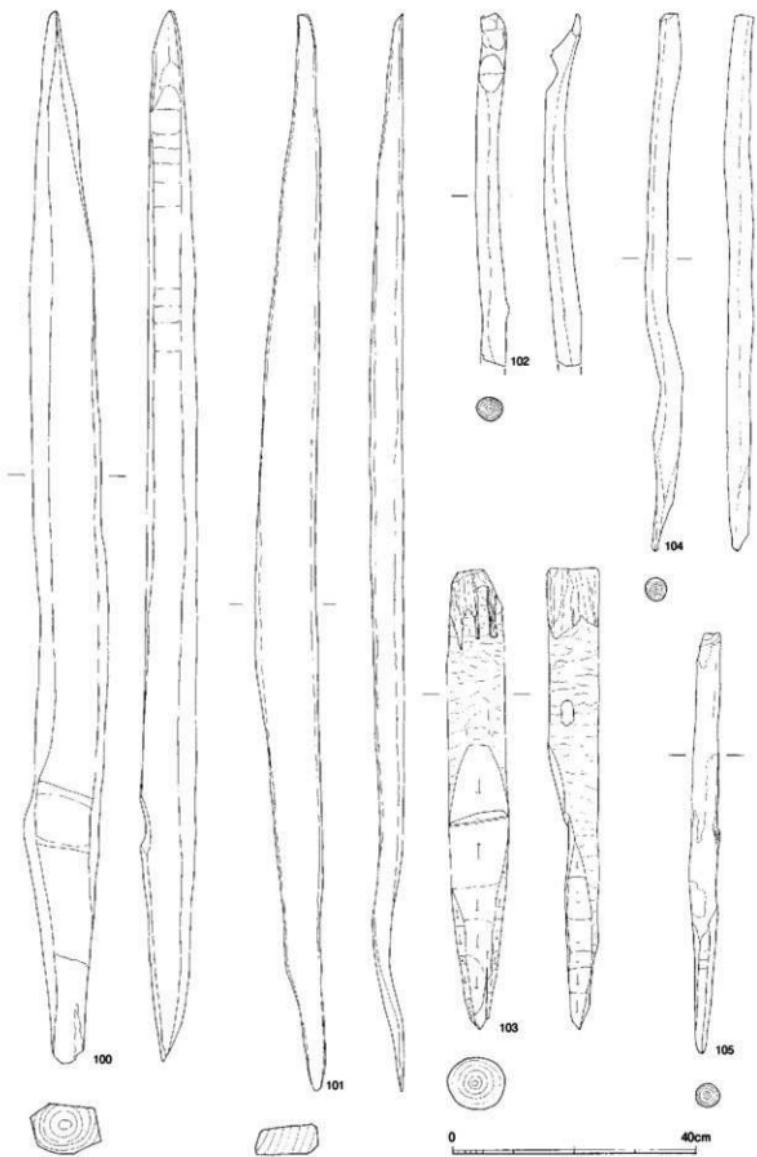
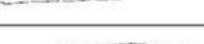


Fig.32 137号河川出土遺物実測図 8 (1/8)

Tab.8 出土遺物(木製品)一覧表7

遺物	形状	器種	材質	木取り	法量	備考
Fig28-86		方形孔の二又叉	コナラ属 アカガシ 栗属	板目	41.7	4c ~ 5c 孔のつくりは比較的真直ぐで 柄の角度は鈍い
Fig28-87		方形孔の二又叉			37	孔の部が欠損していて 柄の角度は不明
Fig28-88		方形孔の三又叉			48.7	4c ~ 5c のものか 全体に丁寧な加工が施される
Fig28-89		柄	広葉樹	板目	6.5	柄の下端部分が火を受けている
Fig28-90		エブリ?			34	柄
Fig28-90		エブリ?			3.5	全体に丁寧な加工が施される
Fig28-90		エブリ?	コナラ属 アカガシ 栗属	板目	2.3	
Fig28-91		鉄造鉄斧の柄			11.5	
Fig28-91		鉄造鉄斧の柄			37.7	
Fig28-91		鉄造鉄斧の柄	サカキ	枝部分	1	
Fig28-92		袋状鉄斧の柄			65	柄が枝部分
Fig28-92		袋状鉄斧の柄			13	鉄斧の装着部分が幹側である
Fig28-92		袋状鉄斧の柄	サカキ	枝部分	3	
Fig28-93		横槌	ヤツバキ	芯持材	28.5	柄が枝部分
Fig28-93		横槌			14	鉄斧の装着部分が幹側である
Fig28-93		横槌			2.5	
Fig28-93		横槌	ヤツバキ	芯持材	37.2	表面に敲打痕が残り、断面は
Fig28-94		作業台			8	つぶれて梢円形を呈する
Fig28-94		作業台			6.4	
Fig28-94		作業台	コナラ属 アカガシ 栗属	板目	61 ~ 61.7	表面に金属器による
Fig28-94		作業台			23 ~ 25	刃物痕が残る
Fig28-94		作業台			124 ~ 135	124 ~ 135
Fig30-95		杓子	クヌキ	板目	26.6	木のこ板を利用し、こぶの内側を
Fig30-95		杓子			12	機方向にケズり出して杓子部分を
Fig30-95		杓子			9	つくり出す。把手に穿孔する
Fig30-96		進前げたの脚欠品か椅子	広葉樹	板目	13.8	中央部にすりへりがみられる
Fig30-96		進前げたの脚欠品か椅子			9.3	下駄の形状の部分には
Fig30-96		進前げたの脚欠品か椅子			5.2	ナナメ方向のキズが多数
Fig30-97		机の天板 板状の脚がつく	スギ	板目	41.8	板状の脚が付く机の天板と
Fig30-97		机の天板 板状の脚がつく			10.4	思われるが職ミの加工は
Fig30-97		机の天板 板状の脚がつく			2	見られない
Fig30-98		团扇 儀器	ガマズミ属	板目	13.8	
Fig30-98		团扇 儀器			5.3	表面は黒塗りされている
Fig30-98		团扇 儀器			0.8	
Fig31-99		タモ棒	マキ属		69.5	
Fig31-99		タモ棒			2.8	端部同士を差込あわせて
Fig31-99		タモ棒			2	輪にして使用
Fig32-100		横架材を転用した杭	広葉樹	芯持材	176	断面六角形に加工した横架材を
Fig32-100		横架材を転用した杭			11.5	杭に転用。加重で変形してない方
Fig32-100		横架材を転用した杭			8	の端部を杭に再加工。
Fig32-101		横架材を転用した杭	広葉樹	板目	126.8	両端を尖らせ断面四角形に
Fig32-101		横架材を転用した杭			10	加工している杭に転用している
Fig32-101		横架材を転用した杭			5	が、杭の為の再加工はない。
Fig32-102		垂木を転用した杭	広葉樹	芯持材	88	
Fig32-102		垂木を転用した杭			4.5	先端を V 字形に加工した垂木を
Fig32-102		垂木を転用した杭			4	杭に再加工している
Fig32-103		サスを転用した杭	広葉樹	芯持材	75.3 ~ 77	脚皮付き自然木にサスとして
Fig32-103		サスを転用した杭			8 ~ 9	使用する為の加工後
Fig32-103		サスを転用した杭			8 ~ 9.5	杭材に再加工して転用している
Fig32-104		垂木を転用した杭	広葉樹	芯持材	58	
Fig32-104		垂木を転用した杭			4.5	垂木を転用したと思われる
Fig32-104		垂木を転用した杭			4	杭用に先端を加工している
Fig32-105		杭	広葉樹	芯持材	68	脚皮付き自然木を
Fig32-105		杭			4.3	杭として先端加工
Fig32-105		杭			3.9	

Tab.9 出土遺物(木製品)一覧表8

遺物	形状	器種	材質	木取り	法量	備考
SD-137 砂層		柱状	広葉樹			
						柱の上端部の受け
SD-137 下層		板材或片				ホゾ孔
SD-137 下層		柱材 農具素材か	アカガシ	ミカン 削り材		直径 20cm 級
						長上 40cm + a
SD-137 F層		構造部材			35	
					12	
					12	
SD-137 下層		横架材片		桟目	20	
					15	一部炭化
					5	くさび削りにして製作
SD-137 2996		板材 大型槽の 断欠品	針葉樹		54	
					15	
					5	
SD-137 2997		板材 鉢				方形孔
SX-138 杭列3		杭		芯持材	69	
					6	樹皮付きの自然木の 一方の先端を杭に加工
SX-138 杭列4		杭		半削材	95	
					12.5	一方の先端を杭に加工
					6.5	
SX-138 杭列5		杭		芯持材	88.5	
					6	樹皮付きの自然木の 一方の先端を杭に加工
					3.5	
SX-138 杭列6		サス木を 転用した 杭	広葉樹	芯持材	52.5	
					8 ~ 9	サスとして使用した時の 切り込み加工有
					8 ~ 9	その後杭に再加工
SX-138 杭列7		杭		芯持材	92.5	
					7	一方の先端に杭用の加工有
					4	
SX-138 杭列9		杭		芯持材	96.5	
					9	樹皮付きの自然木の 一方の先端に杭用加工有
					35 ~ 55	
SX-138 杭列10		杭		芯持材	82	
					7	樹皮付きの自然木の 一方の先端に杭用加工有
SX-138 杭列11		杭		芯持材	74	
					8.5	樹皮付きの自然木の 一方の先端に杭用加工有

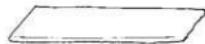
Tab.10 出土遺物(木製品)一覧表9

遺物	形状	器種	材質	木取り	法量	備考
SX-138 杭列12		杭		芯持材	79	樹皮付きの自然木の一方の先端に杭用加工有
					8.5	
SX-138 杭列13		杭		芯持材	70.5	樹皮付きの自然木の一方の先端に杭用加工有
					7.5	
SX-138 杭列14		杭	広葉樹	芯持材	60.5	加工痕は不明 両端を欠損 6.5 ~ 9
					6.5 ~ 9	
					6.5 ~ 9	
SX-138 杭列15		板材 長木ソ柱を転用した杭		板目	117	側面に 5cm × 2.5cm × 8mm 位の ホリ孔有
					9	
					4.5	
SX-138 杭列16		垂木を 転用した杭		芯持材	117	自然木に他の木材と 組み合わせる為の加工をしている 一方の先端を杭に再加工
					70	
SX-138 杭列17		横枠材を 転用した杭		芯持材	90	加圧により幅15cm 程のくぼみが 有
					6.5	
					5.5	
SX-138 杭列18		杭		芯持材	104	樹皮付きの自然木の 一方の先端に杭用の丁寧な加工
					7.5	
					7.5	
SX-138 杭列19		建築材を 転用した杭		芯持材	97	樹皮付き自然木の両端を加工 枝はとつてある
					5.5	
					5.5	
SX-138 杭列20		杭		芯持材	101	樹皮付きの自然木の 一方の先端面を杭用加工
					8	
SX-138 杭列21		垂木を 転用した杭		芯持材	68	元々の曲がりに加工して 垂木の仕口にしている その後杭に再加工
					7	
					6	
SX-138 杭列22		杭?		芯持材	253	削減が激しいが 先端は杭用にとがる
					9.5	
					75 ~ 90	
SX-138 杭列23		柱か横枠材 を転用した 杭		芯持材	130.5	全体に方形になるよう面取り加工後 杭用に一方を再加工
					7 ~ 8	
					7 ~ 8	
SX-138 杭列24		杭		芯持材	111.5	樹皮付き自然木の 一方の先端を杭用に加工
					8	
SX-138 杭列25		杭		芯持材	107	自然木の両端を加工している 一方は丁寧な面取り加工
					6.5	
					6.5	
SX-138 杭列26		柱か横枠材 を転用した 杭		半削材	175	両端とも加工が有、側面も面取り しているので横枠材として使用時 に既に両端を加工したと考えられ る
					43	
					53	

Tab.11 出土遺物(木製品)一覧表10

遺物	形状	器種	材質	木取り	法量	備考
SX-138 杭列28		杭		半削材	172	一方の先端を杭用に加工 もう一方は欠損
					12	
					5.5	
SX-138 杭列29		板材		板目	50	目立つ加工はない
					9	
					2.5	
SX-138 杭列30		柱か横架材を転用した 杭		ミカン 削材	178	先端を杭用に加工
					7.5~9	
					6	
SX-138 杭列31-①		不明		半削材	50	半削材で加工は不明
					5	
					3	
SX-138 杭列31-②		杭		芯持材	55	一方の先端を杭用に加工
					8	
					8	
SX-138 杭列32		杭		芯持材	128.5	先端を一部加工か
					9	
					5.5	
SX-138 杭列32-①		杭		半削材	134	面取加工有 先端も杭用の加工有 後に欠損
					7.5	
					6.5	
SX-138 杭列32-②		杭?		芯持材	64.5	目立つ加工はない
					5.8	
					6	
SX-138 杭列34		杭?		芯持材	78	目立つ加工はない
					9	
					7	
SX-138 杭列35		柱か 横架材を 転用した 杭	ツブライ	半削材	189.5	横架材として使用時の加圧による へこみと仕口としての加工 杭として使用するための加工有
					10	
					5.5	
SX-138 杭列36		杭?		芯持材	176	
					11.5	
					8	
SX-138 杭列37-①		杭		半削材	29	元は柱かもしれないが痕跡無
					5~8.5	
					5~8.5	
SX-138 杭列37-②		杭		半削材	100	樹皮付きの半削材の 一方の先端を杭用に加工
					6~9.6	
					6~9.6	
SX-138 杭列38		杭		芯持材	151	一方の先端を杭用に加工
					10	
					10	
SX-138 杭列39		杭		芯持材	158	樹皮付き自然木の 一方の端部を加工 洞がある
					8.5	
					9	

Tab.12 出土遺物(木製品)一覧表 11

遺物	形状	器種	材質	木取り	法量	備考
SX-138 杭列40		杭		芯持材	145	樹皮付き自然木の一方の先端を杭用に加工 6~7 6~7
SX-138 杭列41					130.5	
					10	
					5.5	
SX-138 杭列42		杭?		芯持材	124	目立つ加工はない
SX-138 杭列43					65	
					116	
SX-138 杭列44		柱材?		芯持材	13.5	こげ(ふし穴で加工ではない) 使った痕のある柱材 9.5
SX-138 杭列102					9.5	
					11~12.5	
					11~12.5	
SX-138 杭列104-①		杭		芯持材	56	横枠材をのせるための仕口加工有
SX-138 杭列104-②					8	
					1.5	
SX-138 杭列106		不明		半削材	124.5	焼けている 杭用の加工有
SX-138 杭列109					7	
					6	
SX-138 杭列110		底板			79	縫かけ痕有
SX-138 杭列112					13.5	
					8	
SX-138 杭列114		曲物の底?			86	自然木 火災にあってる
SX-138 201					7.5	
SX-138 202					3.5	
					26	5mmの穿孔
					9	
					0.7	
					53	焼け痕有
					4	
					5	
					36	
					6	
					1.5	
					41	
					5	
					0.8	
					116	樹皮付きで杭用の加工有
					50~6.5	
					50~6.5	
					103	自然木の曲りを利用して 垂木として使用後杭に利用 中5mmの縫かけ痕有
					7	
					7	

Tab.13 出土遺物(木製品)一覧表 12

遺物	形状	器種	材質	木取り	法量	備考
SX-138 203		杭		芯持材	102	先端を杭用に加工
					7.0~9.0	
					7.0~9.0	
SX-138 204		重木を 転用した杭		芯持材	86	重木として使用する為の えり加工有 杭用の再加工有
					7	
SX-138 501				芯持材	75.5	樹皮付き自然木 加工痕なし
					3~4	
					3~4	
SX-138 502		不明		芯持材	65	樹皮付き自然木 加工痕なし
					3~3.5	
					3~3.5	
SX-138 503		杭		芯持材	54.5	樹皮付き自然木 一方の先端に杭用の加工
					6	
					6	
SX-138 504		杭		芯持材	50	樹皮付き自然木 一方の先端に杭用の加工
					4.5~5.5	
					4.5~5.5	
SX-138 505		加工棒材を 杭用に転用		芯持材	48	一方の端部は四角形に加工 もう一方の端部を杭用に加工
					4	
					4	
SX-138 506		横架材の 一部		板目	48	面取加工 両端は欠損
					10	
					4	
SX-138 507		横架材の 一部		板目	39	面取加工 両端は欠損
					9.5	
					2.5	
SX-138 508		棒状材	広葉樹	板目	65.5	四角に面取加工
					8.5	
					5	
SX-138 509		杭		芯持材	72	樹皮付き自然木の 一方の先端を杭用に加工
					4.5	
					4.5	
SX-138 510		杭		芯持材	71	樹皮付き自然木の 一方の先端を杭用に加工
					7	
					7	
SX-138 511		建築材		芯持材	57	自然木 柱などか? 加工痕不明
					9	
					8	
SX-138 512		杭 横架材を 杭用に転用		ミカン 割材	92.2	面取加工後に 一方の先端を杭用に加工
					9	
					4.5	
SX-138 513		杭?		芯持材	132.5	樹皮付き自然木 一方の先端に杭用加工
					4.5	
					3.5	

Tab.14 出土遺物(木製品)一覧表 13

遺物	形状	器種	材質	木取り	法量	備考
SX-138 514		杭		芯持材	60.5	樹皮付き自然木 一方の先端に杭用加工
					53	
					5	
SX-138 515		杭		芯持材	88.5	樹皮付き自然木 一方の先端に杭用加工
					5	
					4.5	
SX-138 516		不明		芯持材	199	樹皮付き自然木 磨耗が激しい
					65	
					6	
SX-138 517		横梁材の転用した杭		芯持材	28	仕口のための加工有 仕口と反対の端部が焼けている
					9	
					6.5	
SX-138 518		不明		芯持材	42	樹皮付き自然木 加工不明 両端が切り落とされている
					6	
					5	
SX-138 519		不明		芯持材	62	樹皮付き自然木 両端が折れている
					7.5	
					5	
SX-138 520		建築材	針葉樹	半削材	72	くさびを入れたり半削りする時に 出来たキズがある
					12	
					5	
SX-138 521		柱材		芯持材	203	樹皮付き 長ホゾ柱の可能性有
					85~14	
					85~14	
SX-138 522		角材		板目	166	柱材か 表面に手斧痕が残る
					12	
					3.5	
SX-138 523		柱材		芯持材	71	一方の端部にホゾ孔の加工痕有
					8~10.5	
					8~10.5	
SX-138 524		サスか 垂木を 転用した杭		芯持材	130	樹皮付き自然木に垂木かサスとし て使用するための仕口有 その先端を杭に再加工
					8.5	
SX-138 525		柱材を 転用した杭		芯持材	58	樹皮付き ホゾ孔の加工有 先端は杭用に丁寧な加工
					55~7	
					55~7	
SX-138 526		杭		芯持材	41	樹皮付き自然木の 一方の先端を杭用に加工
					4.5~6	
					4.5~6	
SX-138 527		不明		芯持材	58	樹皮付き自然木 加工不明
					10	
					6.5	
SX-138 528		板材か 壁材		板目	45	薄い板目板だが磨耗が激しい
					13	
					4	

Tab.15 出土遺物(木製品)一覧表 14

遺物	形状	器種	材質	木取り	法量	備考
SX-138 929		杭		芯持材	53	
					6	一方の端部を杭に加工 もう一方の端部は焼けている
					48	
SX-138 901		杭?		芯持材	82	
					65~9	磨滅が激しく加工痕不明
					65~9	
SX-138 902		杭		半削材	70	
					12	杭用に先端をやや粗く加工
					6.5	
SX-138 904		棒状材	針葉樹	芯持材	84.5	
					2	加工痕不明
					1.8	
SX-138 905		杭		芯持材	105	
					9	杭用に先端を加工
					6	
SX-138 906		杭?		芯持材	95	
					8.5	自然木の枝分かれした部分 焼けている
					7	
SX-138 907		板材		半削材	78.3	
					9.3	一方の端部に加工有
					2.8	
SX-138 908		板材	広葉樹	板目	63	
					11	磨滅が激しい
					1.5	
SX-138 908		板材		板目	47	
					6.5	磨滅が激しい
					2	
SX-138 909		柱材		芯持材	78	
					12	樹皮付き 目立つ加工痕なし
					12.5	

3 古墳時代の調査

古墳時代の遺構としては、土壙 2 基と旧河川 1 条を検出したのみで数的にはきわめて少ない。唯一検出した 2 基の土壙は、丘陵の南東部に隣接しており、立地的には丘陵が西の丘陵頂から東の沖積地にむかって緩やかに傾斜してゆく丘陵端に占地している。昭和初期までは、小高い丘陵があったが、開削によって丘陵全体が大きく削平されて一帯は耕地化している。そのため調査区の大半は、南東部の遺構群を除いて丘陵とともに消失しているが、これを加味しても弥生時代の遺構群に比べて密度的にはきわめて稀薄であり過ぎる。このことは、集落域自体が拡がっていないことを示していると云え、これが本調査区周辺に限ってのことなのか、あるいは丘陵全域にわたってのことかは即断できない。一方、調査区東辺から西へ延びた後に緩やかに流れを変えて北西流する旧河川は、丘陵の東部を 10 次調査区から 12 次調査区へ続く流路で、両調査区と同様に多種多様な遺物が多量に出土した。

1) 土 壙 (SK)

土壙は、調査区の南東部で 2 基を検出したが、丘陵の開削による消失が著しい。殊に、丘陵の東縁に位置する 12 号土壙は、近世以降の水田化に伴って 1m ほど更に削平されている。この河段面にある土壙の壙底からは湧水が観察された。本来的には河床にむかって緩やかに傾斜してゆく丘陵縁に占地していることと河床に近いことを勘案すると、井戸の可能性をまったく否定することは出来ない。

12 号土壙 SK-12 (Fig. 34 PL. 15)

12 号土壙は、調査区の南東部に拡がる遺構群の中でもっとも東に位置する小型の土壙である。立

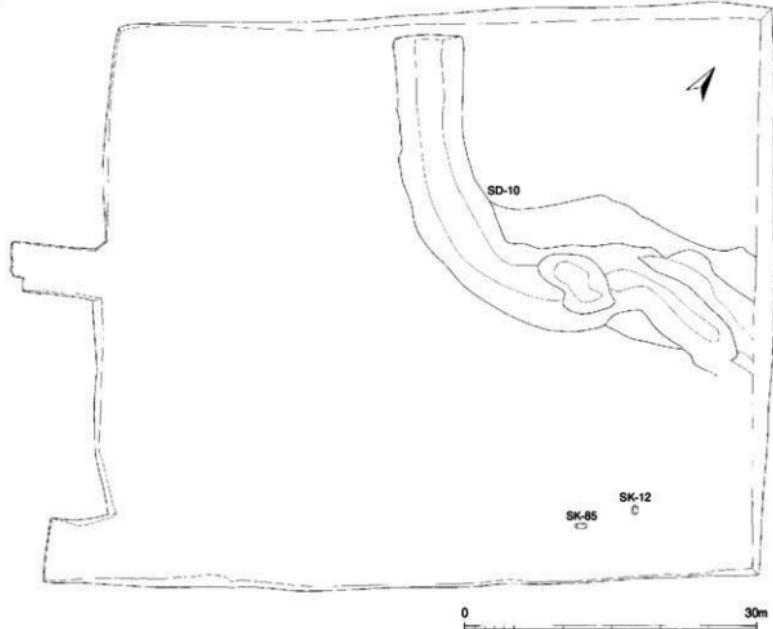


Fig.33 古墳時代の遺構配置図(1/500)

地的には、水田化による開削で1段低くなつた段丘上に占地しており、南へ3mの距離には9号井戸がある。平面形は、短辺が66cm、長辺が85cmの隅丸方形プランを呈する。壁面は急峻に立ち上がる。

壁高は85cmで、断面形は浅い舟

底状を呈する。覆土は、茶褐色土の単一層で、壙底は灰白色粘土粒を含んだ暗茶褐色土層が堆積していた。遺物は、小型丸底壺や土師器甕が比較的まとまった状態で出土した。壙底より30cmほど上層に鳥栖ローム層と八女粘土層の境があり、若干の湧水が観られた。検出面が水田化の開削によって大きく削平されていること等を勘案すると、井戸の可能性もなくはない。

出土遺物 (Fig. 35)

106・107は小型丸底壺である。106は口径が6.8cm、器高は8.8cm。口縁部は偏球形の頸部から緩やかに屈曲してストレートに外反する。胎土には比較的多くの微細～小砂粒、雲母微細と少量の赤褐色粒を含む。赤橙～くすんだ黄橙色。107は口径が9cm。口縁部は内縫気味に立ち上がる。淡灰黒色。108は口径が12.6cm、器高が17.2cmの小型甕である。「く」字状の口縁部は鋭く外反し、短い倒卵形をなす頸部外面にはタキ痕が残る。外面は明橙色、内面は淡明橙色～灰褐色。109は土師器高杯の脚部。脚部は朝顔状に大きく外反する。胎土は精良で、微細～小砂粒と雲母微細を含み、色調は淡黄橙色。

85号土壙 SK - 85 (Fig. 36)

85号土壙は、調査区の南東部に拡がる遺構群の南東部に位置し、すぐ南には9号井戸が、西には8号木棺墓がある。平面形は、東小口壁が消失しているが、短辺が45cmの長方形プランをなし、長辺は140cmほどにならうか。壁面は、北側壁がやや急峻なほかは緩やかに立ち上がる。壁高は25cmである。壙底は、中央にむかって緩やかに傾斜し、断面形は浅い舟底状をなす。覆土は淡茶褐色土の単一層で、壙底から土師器甕や皿片が出土した。

出土遺物 (Fig. 37)

110は底径が7.8cmの土師器甕。111は口径が16.6cm、器高は2.1cm。体部は短くストレートに外反し、端部は小さく上方に摘み上げている。体部はヨコナデ、内底面はナデ、外底面はヘラ調整。

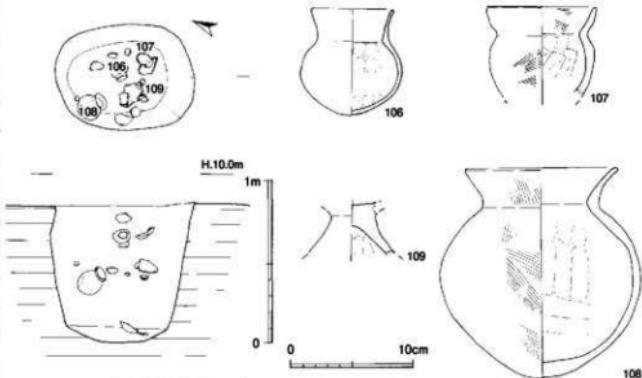
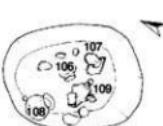


Fig.34 12号土壤実測図(1/30)

Fig.35 12号土壤出土遺物実測図(1/4)

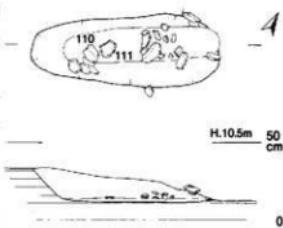


Fig.36 85号土壤実測図(1/30)

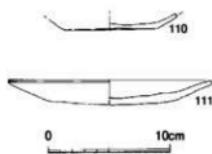


Fig.37
85号土壤出土遺物実測図(1/4)

2) 河 川 (SD)

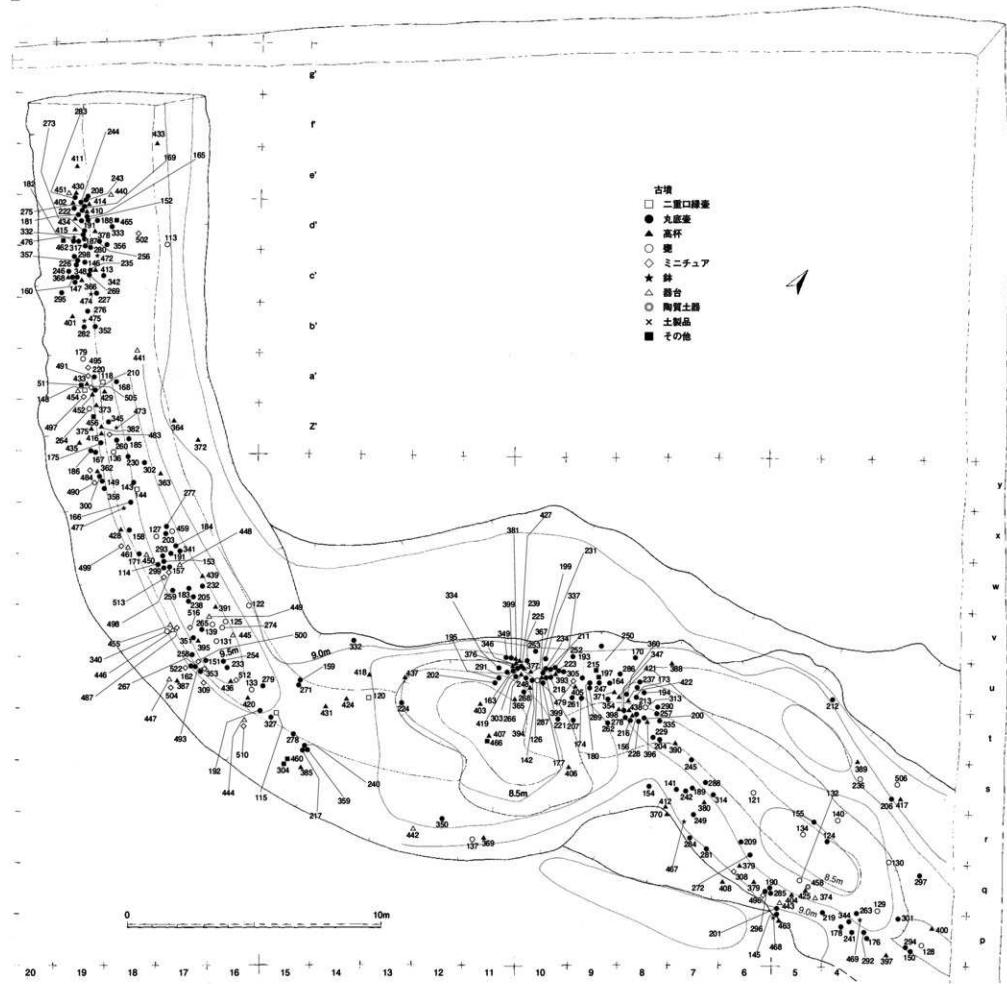
調査区の東部で1条の溝とは云い難い大きな流路を検出した。この流路は、東に接する第12次調査区から延びて北西に接する第4次調査区へと続く一筋のもので、大溝として報告されている。本調査区では、その幅や深さなど規模的、構造的に人為的な構造物とするには懷疑的な面が看取されるところから敢えて河川とした。この河川は、弥生時代の河道（氾濫原）の厚い埋没土である砂層上をその河岸に沿って抉るように流れている。この河川の流路は、第10次調査区から発して北西方の第15次調査区へ流れ、その後さらに第12次調査区へむかって緩やかに左へ弧を描くように西に流れを変えて本調査区へ繋がっている。西へむかって流れる河川は、本調査区で再び北西に流路を変えて第4次・7次調査区へと北流している。

10号河川 SD-10 (Fig. 38・39 卷頭 PL. 2・3 PL. 15～22)

10号河川は、調査区の東にある第12次調査区から北西の第4次調査区へと繋がる大溝と呼称された流路である。第12次調査区から延びた河川は、調査区東側壁の中央部から出現する。東側壁から延びた流路は、一旦緩やかに左へ弧を描くようにして25mほど西へむかって延びる。その後、調査区の中央部近くで大きくL字状に流れを北西へ変えて25mほど北流し、調査区を越えて第4次調査区の大溝へと繋がる。川幅は、東壁際が10～15m、流れを変える屈曲地点が7～8m、第4次調査区へ繋がる北壁側が7mで下流にむかって若干狭くなり、屈曲地点より東は北側に緩やかな傾斜段を有する。深さは東端が75～80cm、屈曲地点が60cm、北西端が80cmで流れを変える屈曲点がもっとも高く、その両側は深くなっている。なかでも東側は河床が階段状に低くなり、屈曲点の手前には5m×8mの楕円形の大きな窪みがある。河床からの深さは60～70cmである。東の上流から流れてきた水は、この窪みに落ちて渦を巻くようにして下流に流れる。そのため流れ着いた軽い木製品は、この周辺に沈み、流れにくい大きな建築材ほどまとまって堆積している。この河川からは土器類のはかに石製品や木製品等多種多量の遺物が出土した。なかでも木製品は、建築材や農具のはか容器、儀器、形代などが流れに沿うようにして出土している。また、土器は小型丸底壺のはか高杯、甕、器台、ミニチュア土器が折重なった木製品や流木類の上面や隙間に潜り込むようにして出土したものと木製品下の黒色粘土層下から出土したもある。しかし、この10号河川の北半部は137号河川の西岸に沿って北流し、その上層には136号溝が西岸を重ねて流れている。そのため10号河川の黒色粘質土層と136号河川の暗黒褐色土層の区分が曖昧で遺物の取り上げに混乱が生じている。

出土遺物 (Fig. 40～72 PL. 39～55)

112は弥生中期の丹塗無頭壺である。大きく外反した口縁部の上縁には2孔1対の円孔を穿っている。口径は13.3cm。113～120は二重口縁壺。113は口縁部が鋭く内傾し、胴部との境に1条の三角突帯が巡る。胴部は倒卵形で平底の底部が付く。114・115は頸部がわずかに内傾し、短く内傾する口縁部は鋭く屈曲して直口ぎみに立ち上がる。116～118は緩やかに外反した口縁部が鋭く屈曲して三角突帯状の段を作り、一旦直口ぎみに立ち上がった後に緩やかに外反する。調整はいずれも外面がナデ～ハケ目、内面は頸部下と底部が指頭押圧ナデ、胴部はヘラケズリ。121～140は甕である。121は頸部が短く内傾し、口縁部は直口ぎみに立ち上がった後に緩やかに外反する。内唇は短く水平に摘み出す。122～126と131～138は口縁部が「く」字状に外反する甕。122・123は口縁部がやや長くのびやかに、126はやや短く外反する。124・125・127の口縁部は直線的に外反する。131～133の口縁部は鋭角的に外反する。129・130は直行して立ち上がり、口縁端部は小さく外方に摘み出す。胴部はいずれも球形をなす。136の口縁部は大きく外反し、倒卵形の胴部には小さな底部が付く。137・138は胴部が長胴形をなす。調整は外面がナデ～ハケ目、内面は頸部下と底部が指頭押圧ナデで胴部はヘラケズリ。127・128・136の外面にはタタキ目痕が残る。(小林義彦)



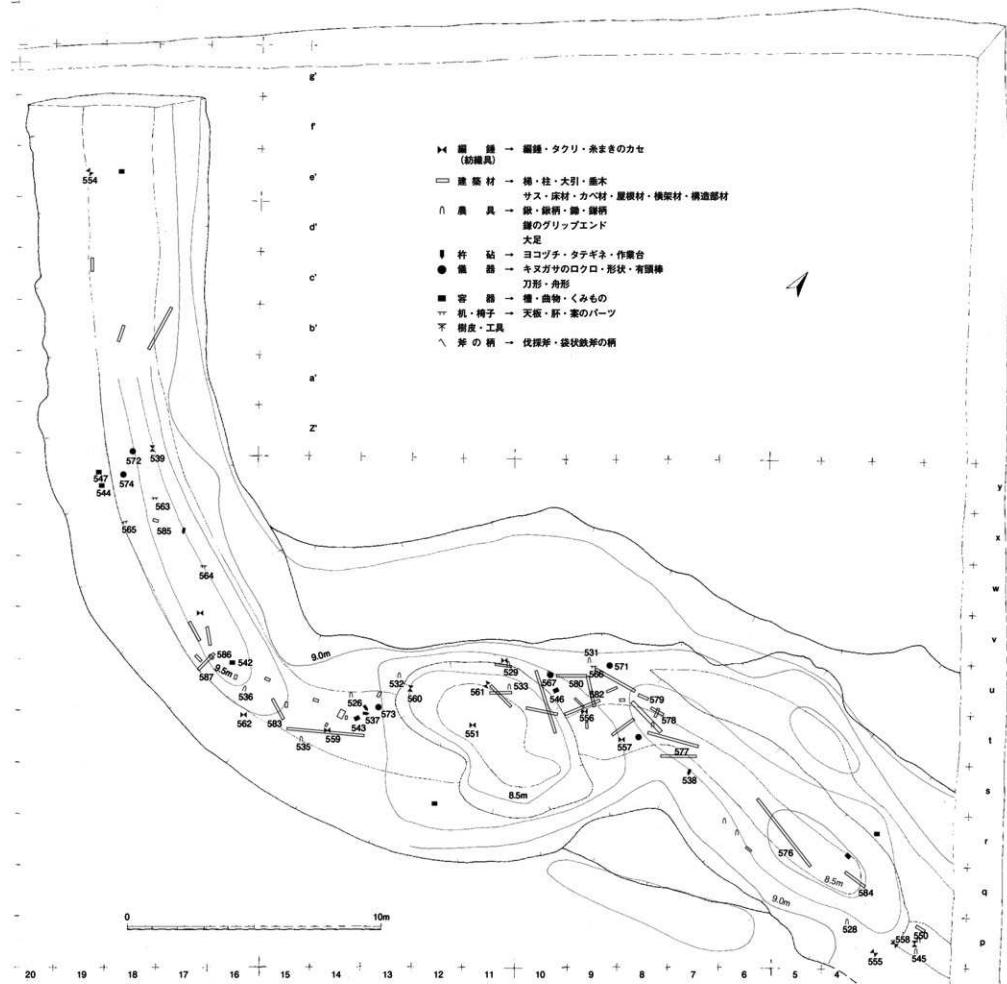


Fig.39 10号河川遺物(木器)出土状況図(1/150)

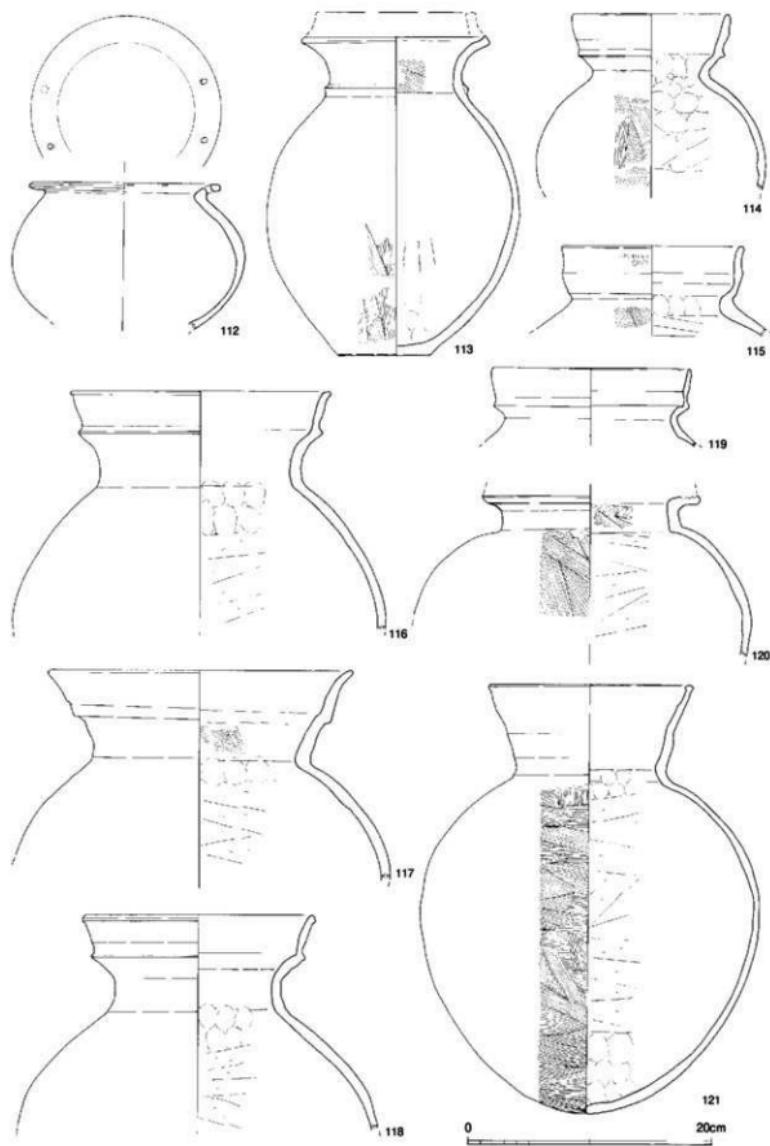


Fig.40 10号河川出土遺物実測図1 (1/4)

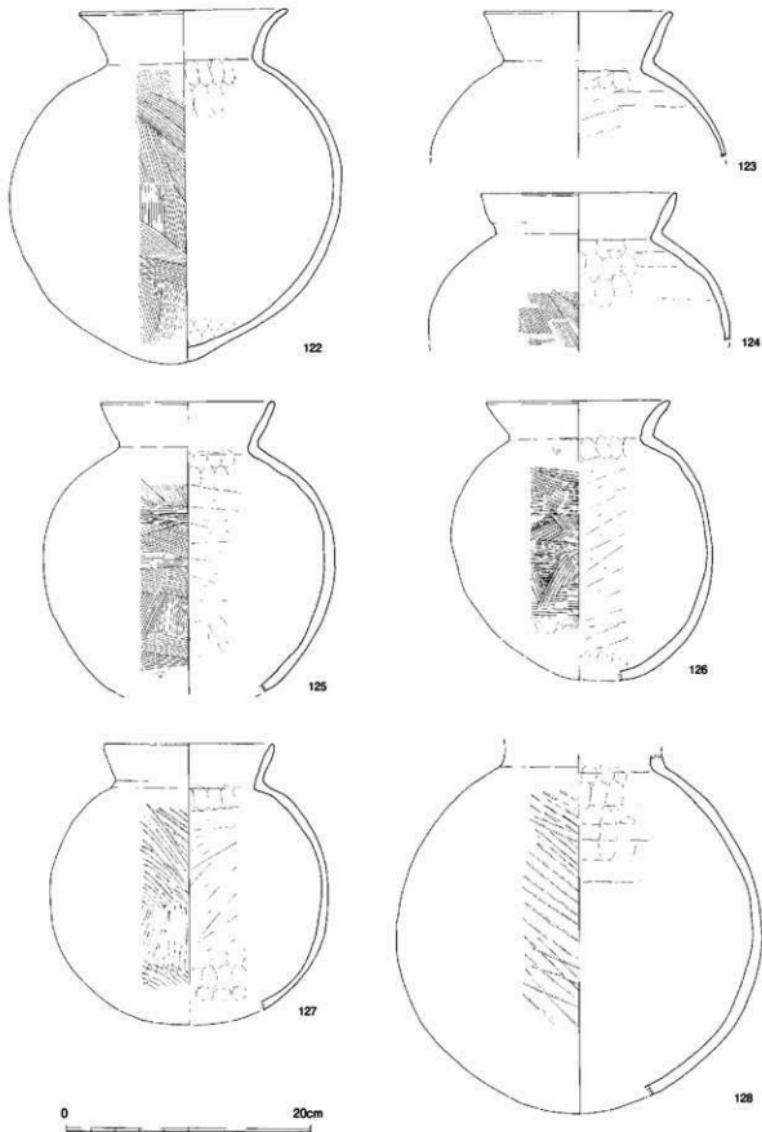


Fig.41 10号河川出土遺物実測図2(1/4)

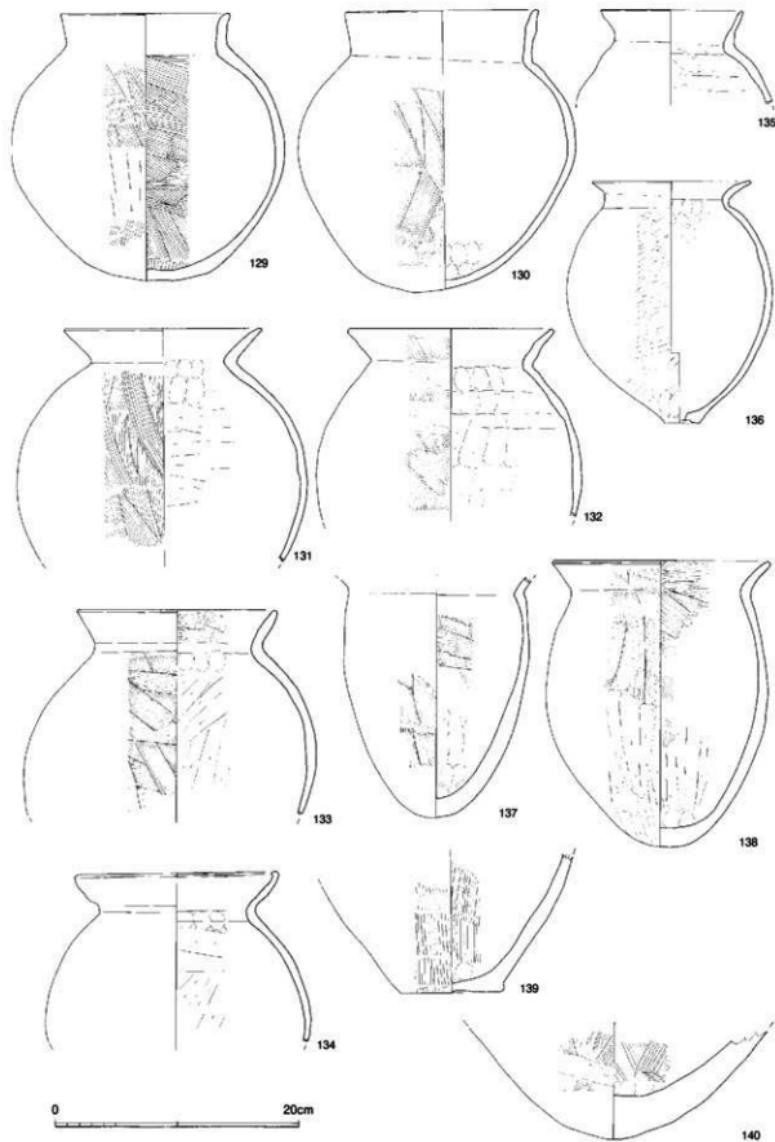


Fig.42 10号河川出土遺物実測図3(1/4)

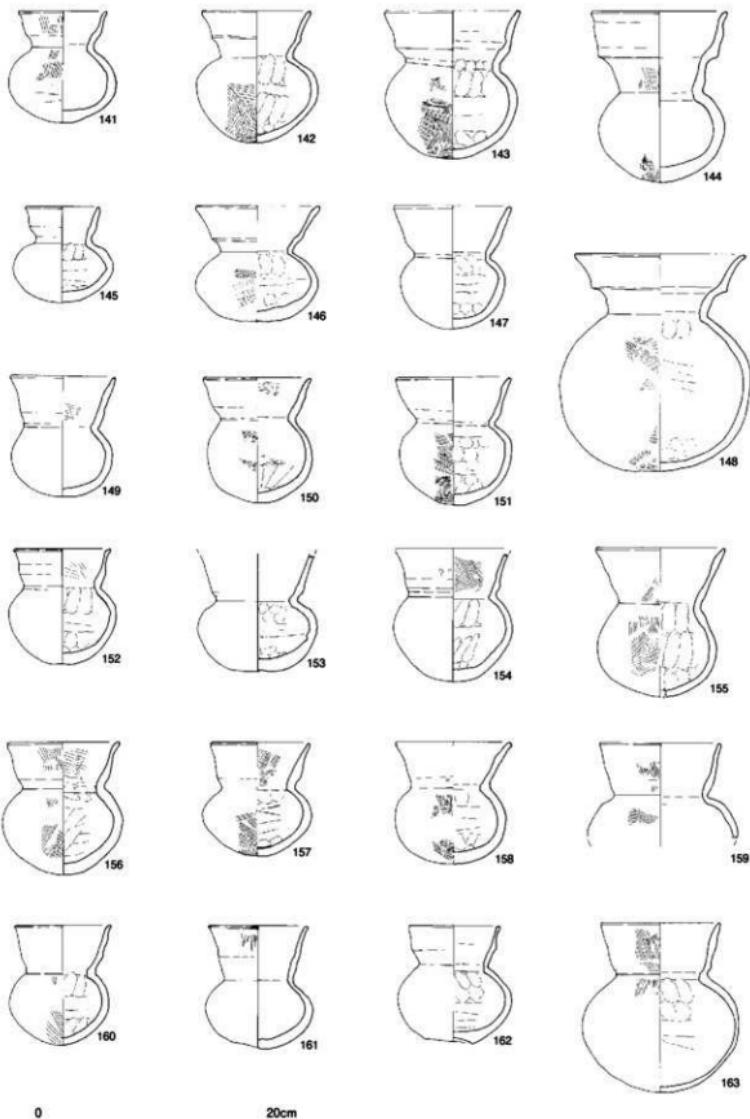


Fig.43 10号河川出土遺物実測図4(1/4)

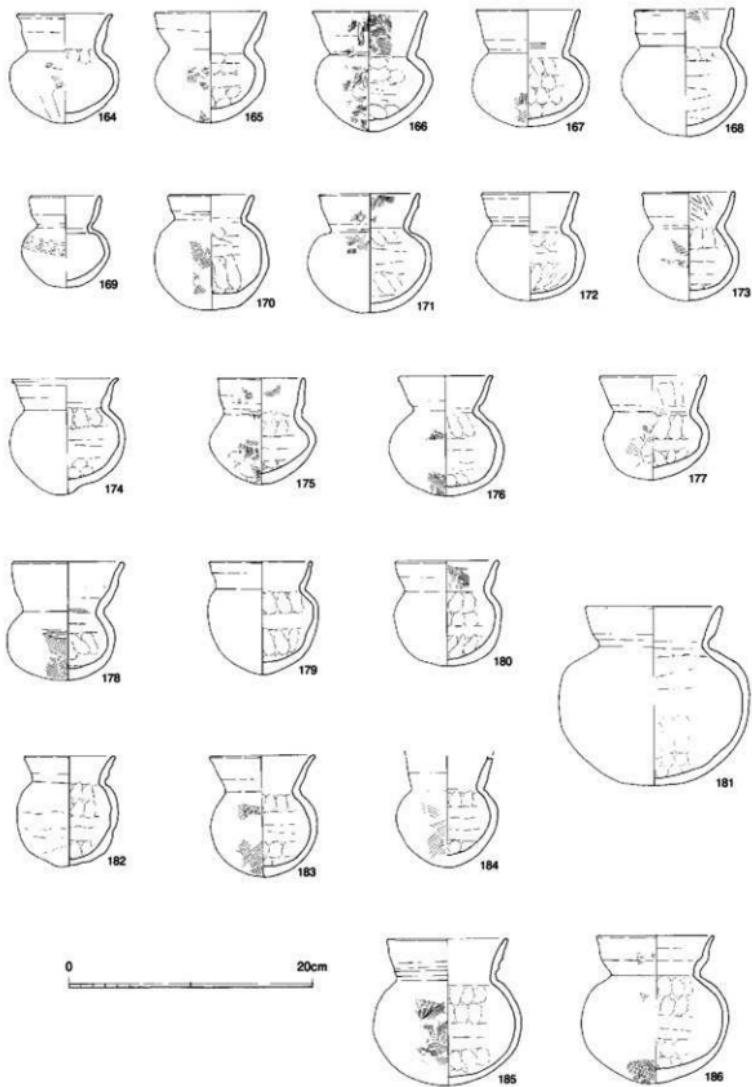
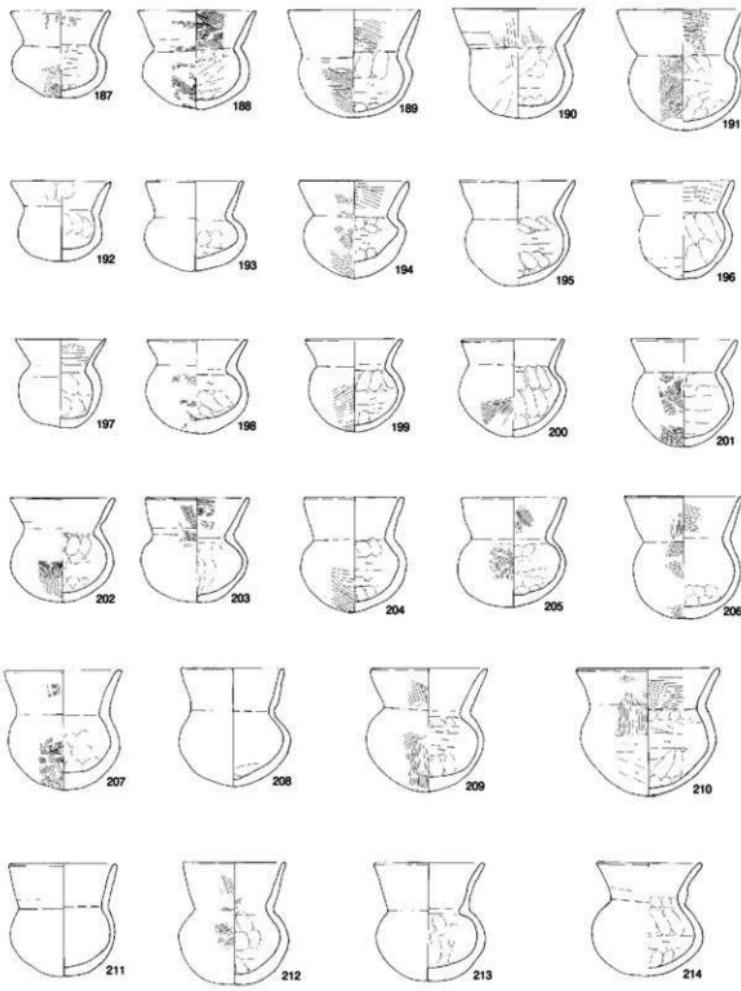


Fig.44 10号河川出土遺物実測図5 (1/4)



0 20cm

Fig.45 10号河川出土遺物実測図 6 (1/4)

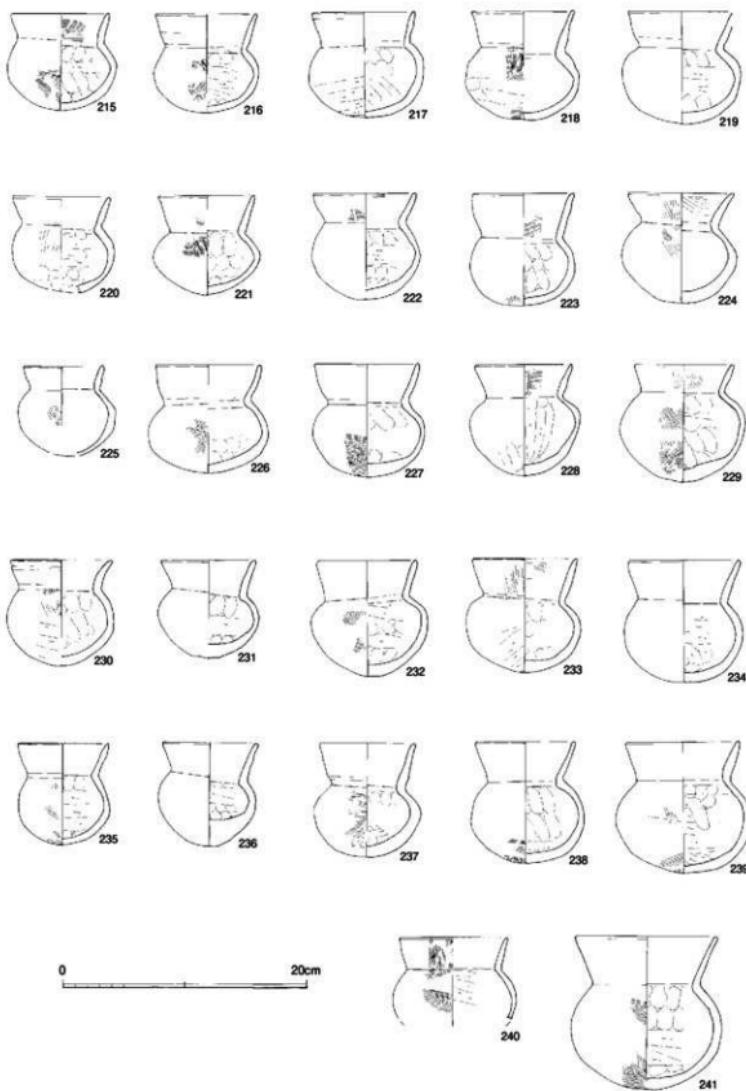


Fig.46 10号河川出土遺物実測図7(1/4)

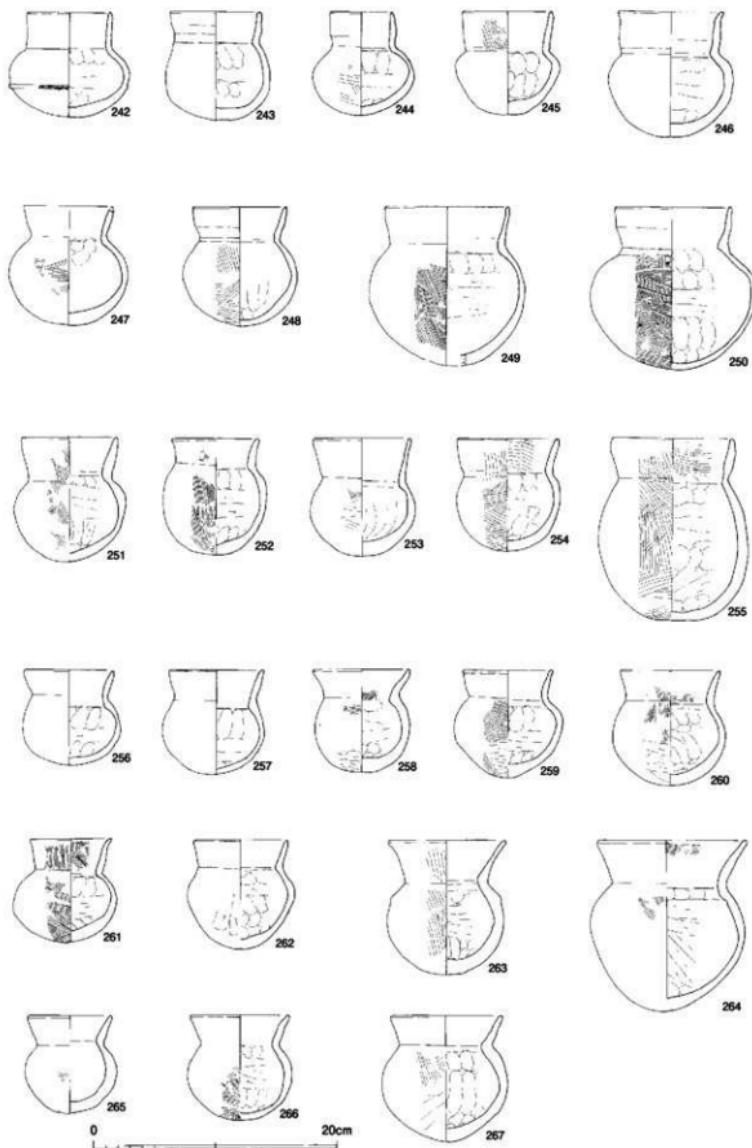


Fig.47 10号河川出土遺物実測図8(1/4)

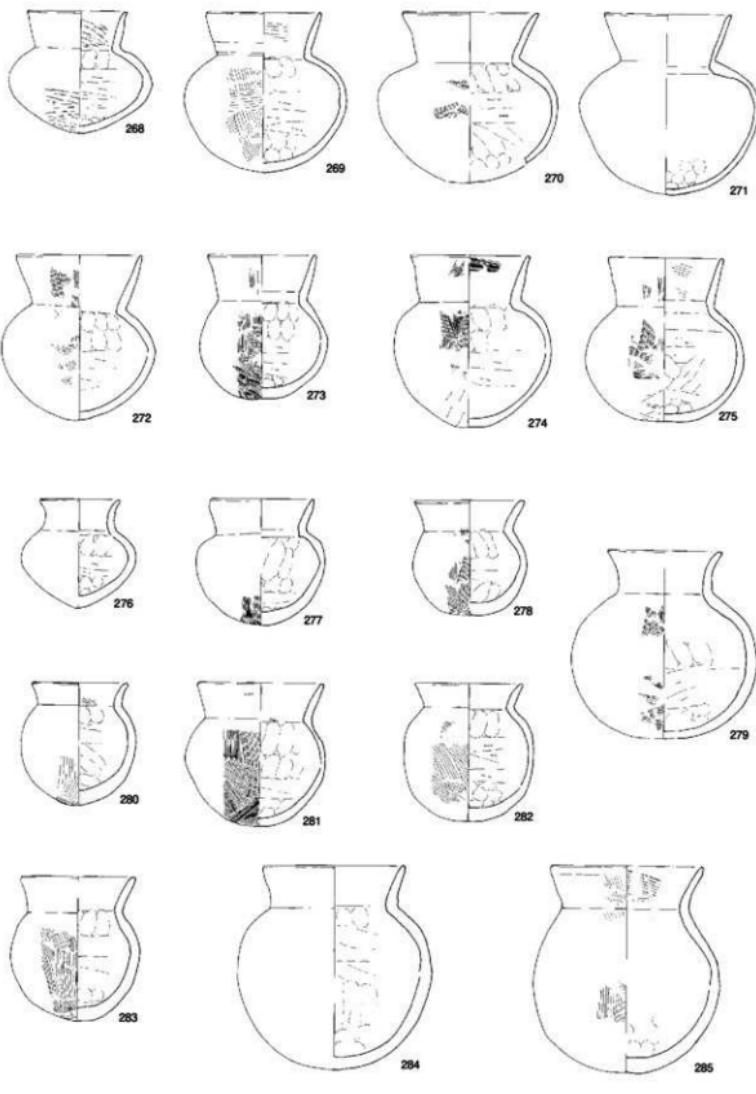


Fig.48 10号河川出土遺物実測図9(1/4)

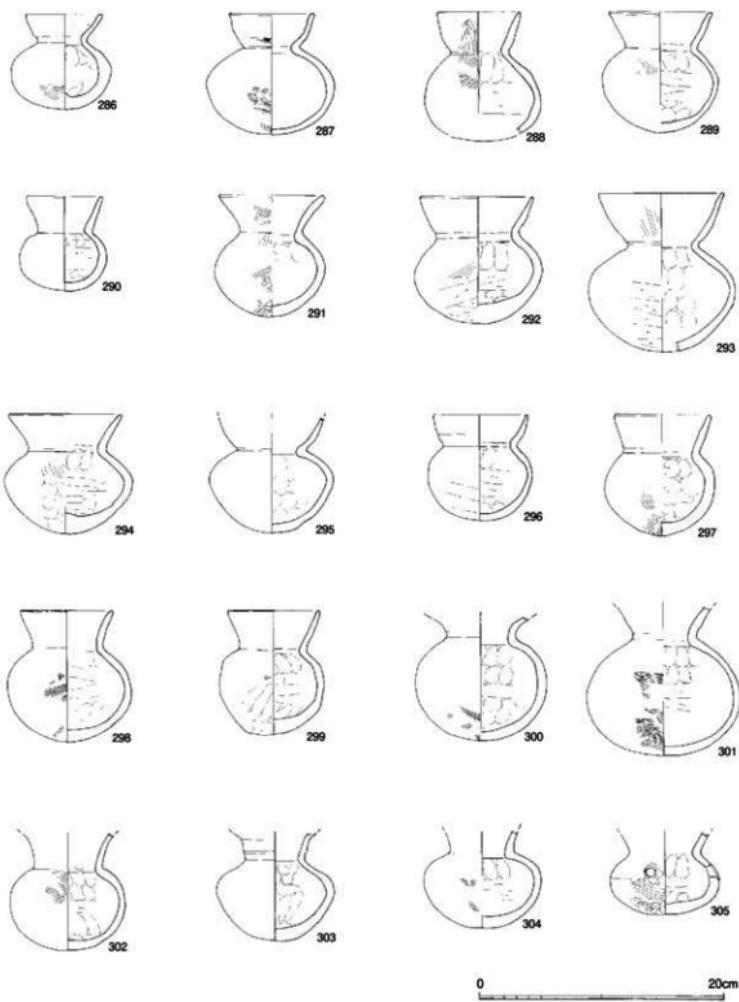


Fig.49 10号河川出土遺物実測図 10 (1/4)

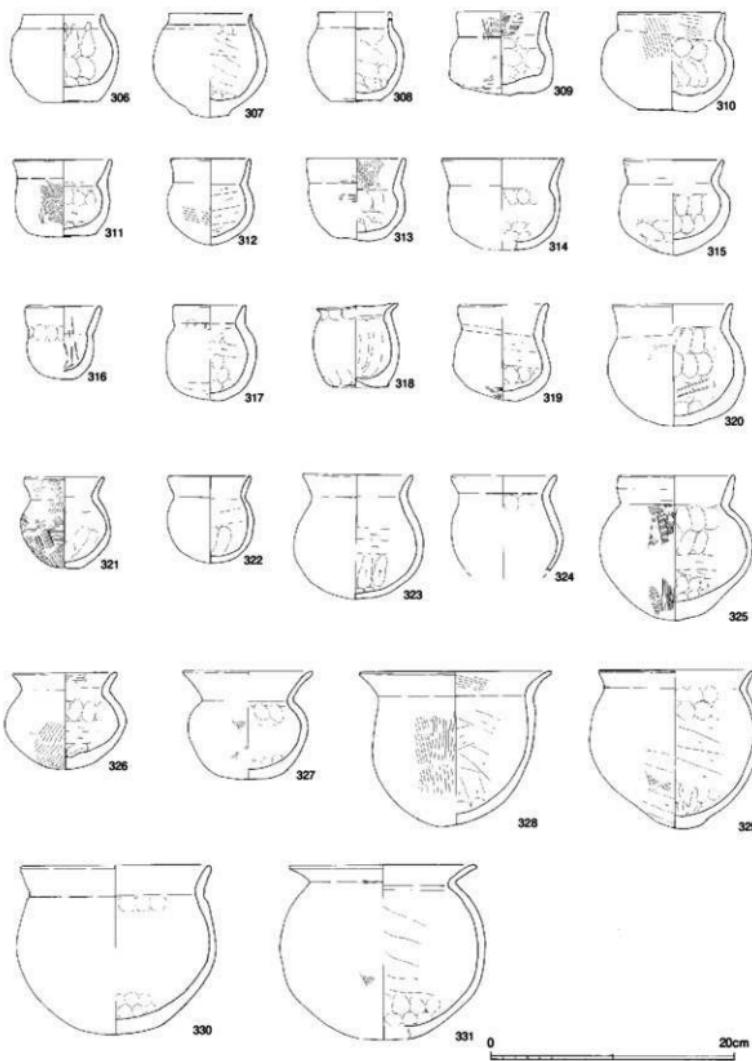


Fig.50 10号河川出土遺物実測図 11 (1/4)

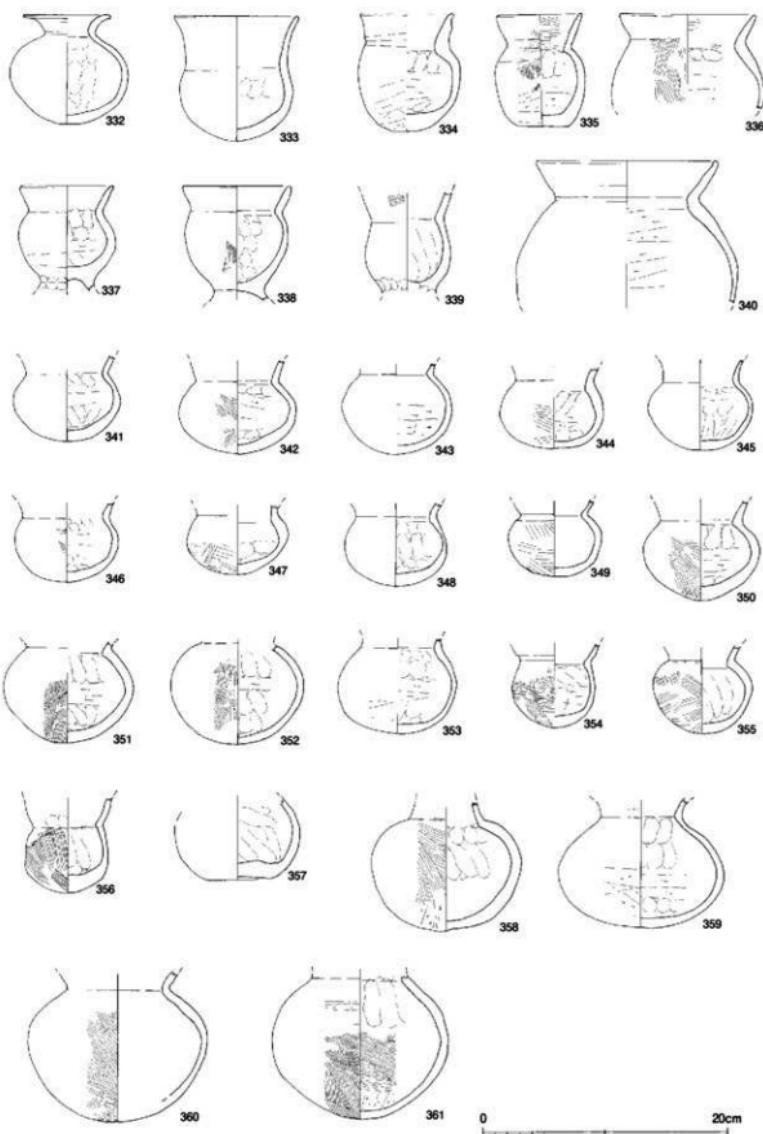


Fig.51 10号河川出土遺物実測図 12 (1/4)

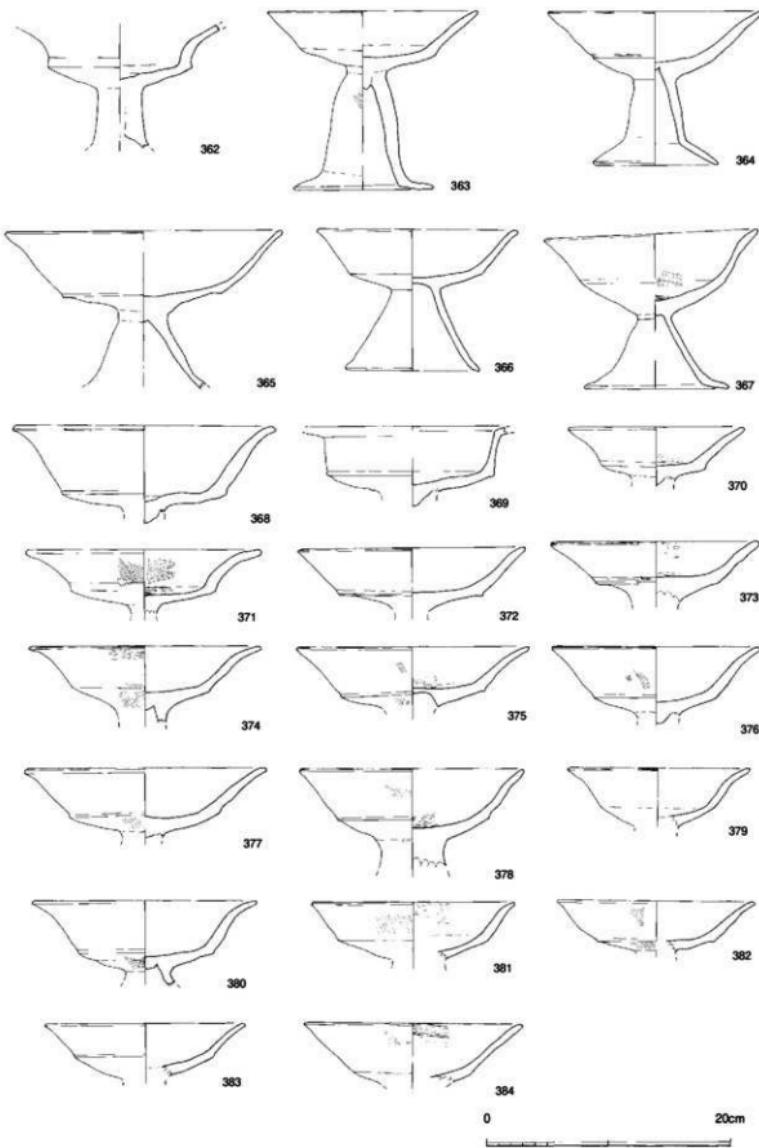


Fig.52 10号河川出土遺物実測図 13 (1/4)

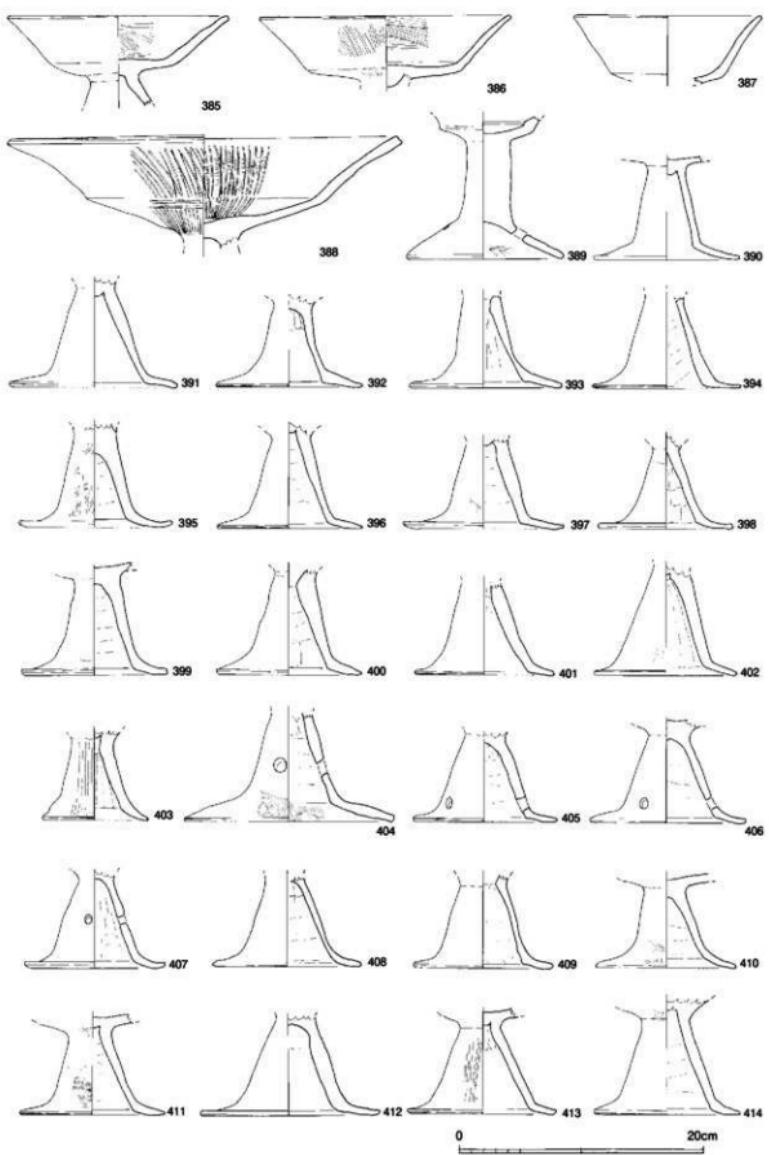


Fig.53 10号河川出土遺物実測図 14 (1/4)

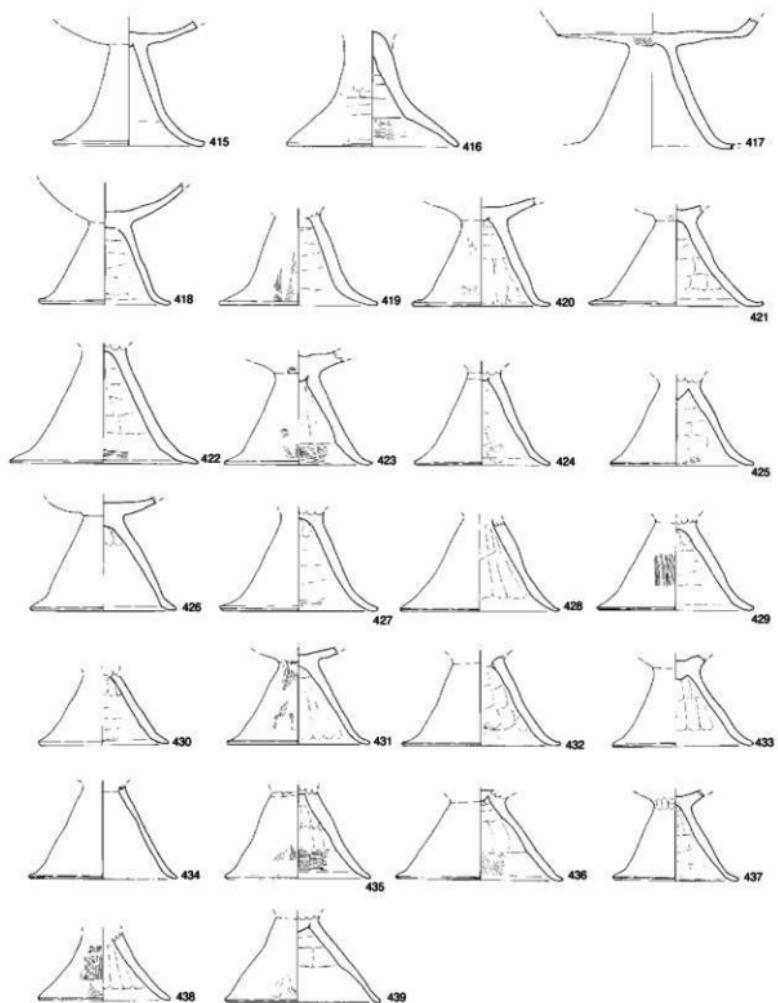


Fig.54 10号河川出土遺物実測図 15 (1/4)

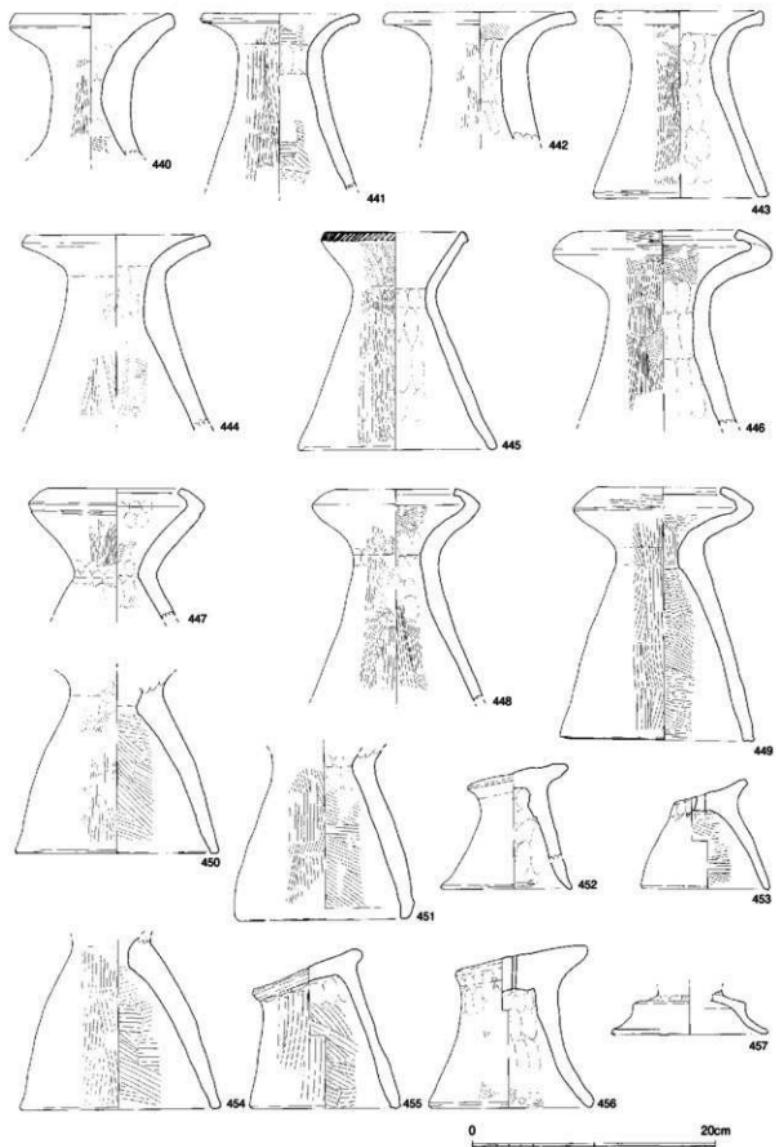


Fig.55 10号河川出土遺物実測図 16 (1/4)

141～327・330・332～361は小型丸底壺である。141～186は二重口縁の丸底壺である。口縁部が明らかな二重口縁(141～144・148)のものと疑似二重口縁(145～147・149～186)のものに大別される。187～304は口縁部が「く」字状に外反する丸底壺で「く」字状にのびやかに外反するものの(187～241・256～285)とスレートに直口する(242～250・253・255)ものがある。287・292・293・295は内彎ぎみに外反する。305は偏球形の胴部に穿孔があるハソウである。332縮まった頸部に大きく外反する口縁部が付く。362～439は高坏である。坏体部が直口して立ち上がり、口縁部が緩やかに外反するもの(362・369)、内彎ぎみに立ち上がった後に口縁部が小さく外反するもの(367)とのびやかに外反するもの(363～366・368・370～388)がある。440～451は器台、452～456は支脚である。458は陶質土器の壺である。口縁部は短く外反し、胴部は肩の張りが弱い。外面は斜格子目タタキ。459・460は台付壺、461～466は台付鉢である。467～477は鉢で、467・468・473～475は浅鉢。470は外底に葉脈状の線刻がある。478～525はミニチュア土器で、丸底壺(478～493)や鉢(494～510)、台付鉢(511～513)、器台(517～525)状のものがあり、多様性に富んでいる。

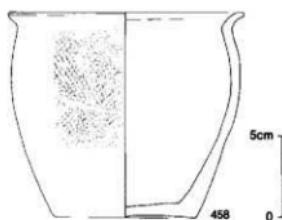


Fig.56

10号河川出土遺物実測図 17 (1/3)

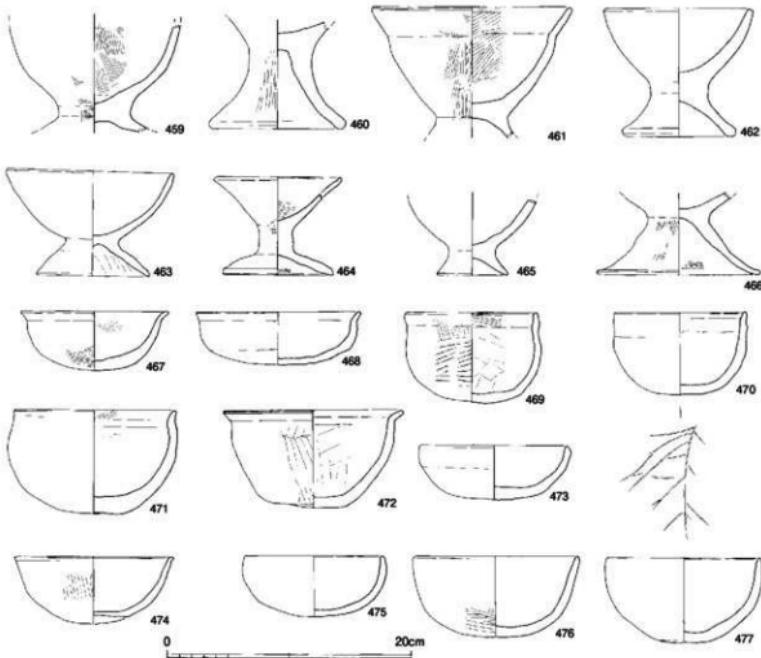


Fig.57 10号河川出土遺物実測図 18 (1/4)

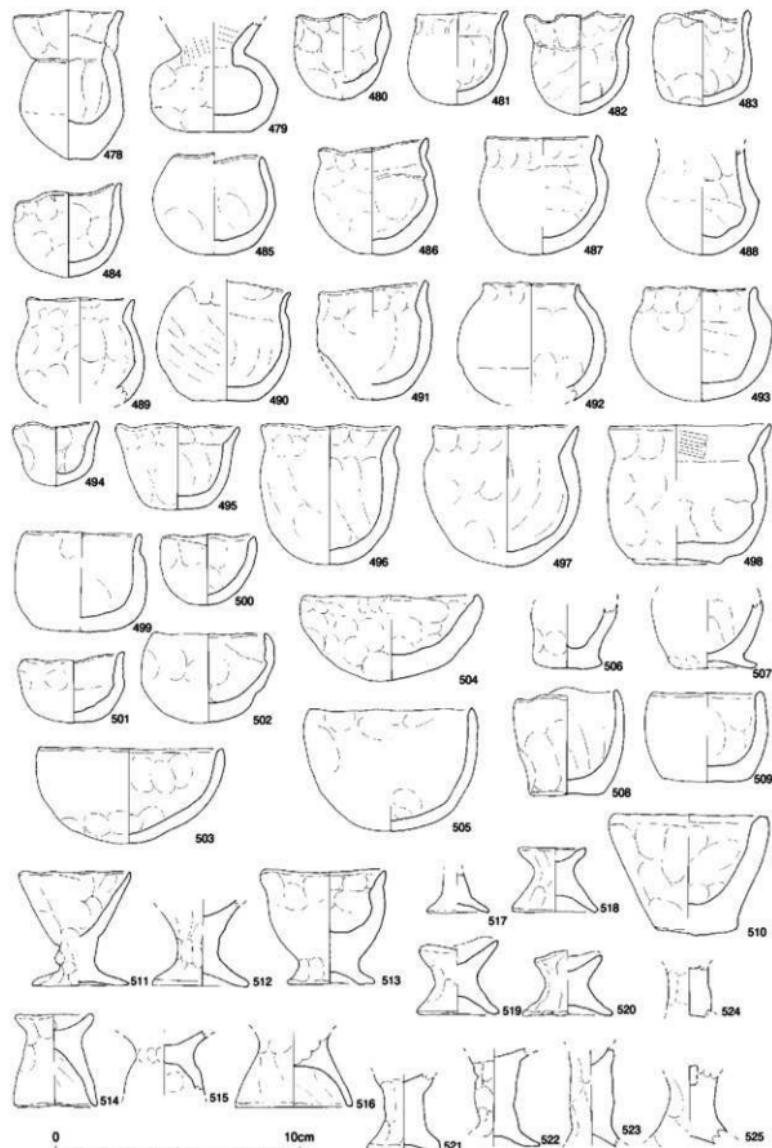


Fig.58 10号河川出土遺物実測図 19 (1/2)

Tab.16 出土遺物(土器)一覧表15

Fig	No.	土器 等	器種	サイズ (器高・口径・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig40	112	赤生 丹塗無 頭壺		11.9+ α 13.3	精良、微細と雲母微細を多く含む	堅緻	淡黄灰色	ヨコナデ ナデ後ケズリ	ヨコナデ 押圧ナデ	丹塗痕 口唇部に2孔一対の円孔有
				13.3						
Fig40	113	土 頭壺 器	二重 口縁壺	26.1 15.4 7.6	細～石英小砂粒と雲母微細を多く含む	良好	淡明黄橙色	ナデ 種上げ状ナデ粗いハケ目	ヨコナデ 押圧後ナデ	
				15.4						
				7.6				ナデ ハケ目	指頭押圧ナデ	
Fig40	114	土 頭壺 器	二重 口縁壺	14.2+ α 口縁壺	良質、微細～石英小砂粒と雲母微細を含む	良好	淡明橙色	ヨコナデ ハケ目	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
				口縁壺						
Fig40	115	土 頭壺 器	二重 口縁壺	7.4+ α 15.0	微細～石英小砂粒を比較的多く含む。雲母微細を少量、赤褐色を僅少含む	良好	淡黄橙色	ヘラ状工具によるヨコナデ ハケ目	ヨコナデ	胴部外面淡い黒斑、口縁部内面に2次被熱による淡い黒斑
				15.0						
Fig40	116	土 頭壺 器	二重 口縁壺	19.5+ α 21.4	細～石英小砂粒を多く含む。雲母微細を少量含む	良好	ややくすんだ淡黄灰褐色	ヨコナデ 押圧後ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	胴部外面淡い黒斑、口縁部内面に2次被熱による淡い黒斑
				21.4						
Fig40	117	土 頭壺 器	二重 口縁壺	17.0+ α 25	細～小砂粒を多く含む。雲母微細を含む	良好	淡黄灰色	ヨコナデ ナデ後暗紋状の粗い研磨	ヨコナデ	口縁部内外黒度
				25						
Fig40	118	赤生 器	二重 口縁壺	17.5+ α 19	微細～石英粗砂粒を比較的多く含む。雲母微細を多く含む	良好	淡灰黃褐色	ヨコナデ ヘラ状工具による粗いヨコナデ	ヨコナデ 押圧後ヨコナデ	口縁部外面指先による幅広い凹穂、口縁部内面炭化物様の黒色物
				19						
Fig40	119	土 頭壺 器	二重 口縁壺	6.3+ α 16.4	やや良質、小砂粒と雲母微細を含む	良好	茶褐色～黒色	ヨコナデ ナデ	ナデ	胴部にコゲ付着
				16.4				ケズリ		
Fig40	120	土 頭壺 器	二重 口縁壺	13.1+ α	微細～石英粗砂粒を多く含む。赤褐色を僅かに含む	良好	淡黄橙色	ヨコナデ 細かいハケ目	ヨコナデ 押圧後細かいハケ目	接合時の刻み目有
Fig40	121	土 頭壺 器	要	35.2 16.7	細～石英中粗砂粒を多く含む。雲母微細を少量含む	良好	(外)くすんだ黄褐色 (内)淡黄褐色	ヨコナデ ナデ後ハケ目	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	内面黒斑
				16.7						
Fig41	122	土 頭壺 器	要	29.0 17.2	細～石英粗砂粒を多く含む。雲母微細と赤褐色を少量含む	良好	(外)明黄褐色 (内)明赤橙色	ヨコナデ ハケ目	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	胴部外面スス付着、被熱による赤変有
				17.2						
Fig41	123	土 頭壺 器	要	11.7+ α 15.4	細～石英中砂粒を多く含む。雲母微細と水溶色を少量含む	良好	淡明黄橙色	ナデ 押圧後ヘラケズリ	ナデ 押圧後ヘラケズリ	胴部内面粘土様の膜目有
				15.4						
Fig41	124	土 頭壺 器	要	12.0+ α 16.0	微細～石英小砂粒を比較的多く含む。雲母微細と赤褐色を少量含む	良好	明赤橙色	ヨコナデ 細かいハケ目	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	胴部外面スス
				16.0						
Fig41	125	土 頭壺 器	要	23.7+ α 14.4	微細～石英小砂粒を比較的多く含む。雲母微細を少量含む	良好	(外)淡黄橙色 (内)淡黄褐色	ヨコナデ やや細かいハケ目	ヨコナデ 押圧ナデ 粗いハケ目	胴部外面スス付着、底部内面炭化物様の黒色物
				14.4						
								ヘラケズリ		
Fig41	126	土 頭壺 器	要	22.8 19	細～石英中砂粒を比較的多く含む。雲母微細、粒を含む	良好	淡黄灰色	ヨコナデ 細かいハケ目	ヨコナデ 指頭押圧ナデ 横方向ヘラケズリ	
				19						
Fig41	127	土 頭壺 器	要	23.0+ α 14 ~ 142	微細～小砂粒を多く含む。雲母微細を少量含む	良好	(外)黒色 (内)淡黄橙色	平行タキ	平行タキ	外側全体スス様の黒色物、胴部内面炭化物様の黒色物
				14 ~ 142						
								ヘラケズリ		

Tab.17 出土遺物(土器)一覧表16

Fig	No.	土器 部類	器種	サイズ (器高・口径・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig41	128	土器 部類	要	28.0	細～小砂粒を比較的多く含む。雲母微細を含む	良好	(外)淡黄褐色 (内)淡黄灰色	押圧後タタキ	指頭押圧ナデ	内部に粘土織ぎ目痕
				31.0				ナデ		
Fig42	129	土器 部類	要	21.9	良質、細～石英中砂粒を比較的多く含む。雲母微細を含む	良好	(外)淡黄褐色 (内)淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	底部外面黒斑
				13.9				やや粗い搔き上げ 粗いハケ目	押圧後ハケ目	
Fig42	130	土器 部類	要	19.1+ α	微細～小砂粒と雲母微細。赤褐色を僅かに含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	胸部外面黑色物
				16.1				ハケ目	指頭押圧ナデ	
Fig42	131	土器 部類	要	26	微細～石英中砂粒を比較的多く含む。雲母微細と赤褐色を僅かに含む	良好		ヨコナデ	ヨコナデ	胸部外面被熱によるスス付着
				15.8				指頭押圧ナデ		
Fig42	132	土器 部類	要	15.4+ α	微細～小砂粒を比較的多く含む。雲母微細と赤褐色を僅かに含む	良好	淡黄褐色	粗いハケ目	ハラ状工具によるヨコナデ	
				16.9				指頭押圧ナデ		
Fig42	133	土器 部類	要	16.9+ α	微細～石英中砂粒を比較的多く含む。雲母微細を少量含む	良好	(外)淡黄褐色 (内)淡黄褐色	ヨコナデ	ハケ目	胸部外面スス様黑色物
				16.4				やや粗いハケ目	指頭押圧ナデ	
Fig42	134	土器 部類	要	13.9+ α	良質、微細～石英小砂粒を比較的多く含む。雲母微細と赤褐色を僅かに含む	良好	淡明黃褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	内部淡い黒斑
				16.6				指頭押圧ナデ		
Fig42	135	土器 部類	要	7.6+ α	微細～石英中砂粒を比較的多く含む。雲母微細、粒を少量含む	良好	(外)くすんだ淡黄褐色 (内)淡黄茶褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	胸部外面2次被熱による赤変、胸部内面粘土織目痕
				11.7				押圧ナデ		
Fig42	136	土器 部類	要	19.7	細～石英小砂粒を多く含む。雲母微細を含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	胸部外面スス付着、胸部内面粘土織目痕、底部内面灰化物様黑色物
				12.9				ナメのタタキ痕	指頭押圧後粗いナデ	
Fig42	137	苏生	要	3	細～石英小砂粒を含む。雲母微細を含む	良好	淡黄褐色	指頭押圧後タタキ	押圧後ナデ上げ	胸部外面スス付着、底部内面灰化物様黑色物
				19.4+ α				ハケ目	やや粗いハケ目	
Fig42	138	苏生	要	23.4	良質、細～石英中砂粒を比較的多く含む。雲母微細、粒を少量含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ後ハケ目	ヨコナデ後ハケ目	胸部外面スス付着、底部内面炭化物付着
				17.9				タテハケ目	タテハケ目	
Fig42	139	苏生	要	11.3+ α	粗い、細～石英粗砂粒を多く含む。雲母微細を少量含む	良好	ややくすんだ淡黄褐色	タテハケ目	タテハケ目	胸底部外面黑色物
				8.4				ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig42	140	苏生	要	9.0+ α	微細～石英中砂粒を比較的多く含む。雲母微細、粒を含む	良好	くすんだ淡黄灰色	押圧後に粗いハケ目	指頭押圧後粗いハケ目	
Fig43	141	土器 部類	小型丸底窓	9.2	微細～石英小砂粒を比較的多く含む。雲母微細と赤褐色を僅かに含む	良好	ややくすんだ淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	
				7.3				ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig43	142	土器 部類	小型丸底窓	10.8	微細～石英小砂粒を多く含む。雲母微細を少量含む。	良好	淡棕茶褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	
				88～90				ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig43	143	土器 部類	小型丸底窓	12.1	細～小砂粒を比較的多く含む。雲母微細、粒を含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	
				11.2				やや粗いハケ目	指頭押圧ナデ	

Tab.18 出土遺物(土器)一覧表17

Fig	No.	土器 部類	器種	サイズ (器高・口径・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig43	144	土 師 器	小型丸 底垂	14.0	精良、微細、赤褐色 色粒、雲母微細を僅かに含む	良好	淡明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	
				11.2				やや粗いハケ目		
								細かいハケ目		
Fig43	145	土 師 器	小型丸 底垂	7.9	良質、微細～小砂粒を比較的多く含む 雲母微細を僅かに含む	良好	淡褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	
				6.1				ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig43	146	土 師 器	小型丸 底垂	9.5	精良、微細～石英 小砂粒と雲母微細を多く含む	良好	淡黄褐色～ 淡明赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	脚部外面2次比 熱によるスス状 黒色物付着
				10.3				ハケ目後板状工具によるナデアゲ	押圧ナデ	
									指頭押圧痕	
Fig43	147	土 師 器	小型丸 底垂	10.0	良質、細～小砂粒を比較的多く含む、雲 母微細を含む、赤褐色を僅かに含む	良好	淡明褐色	摩擦著しく不祥		
				9.6					押圧ナデ	
Fig43	148	土 師 器	小型丸 底垂	17.7	精良、微細～細砂 粒と雲母微細を少 量含む	良好	(外)淡黃灰色 (内)淡明黃褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	外顎化粧土塗布
				13.9				やや細かいハケ目	指頭押圧ナデ	
Fig43	149	土 師 器	小型丸 底垂	9.9	精良、微細砂と雲 母微細を含む、赤 褐色を含む	良好	淡明黃褐色	ヨコナデ、粗いハケ目	ヨコナデ	脚部外面に淡い 黒斑
				8.5					指頭押圧ナデ	
Fig43	150	土 師 器	小型丸 底垂	10.2	良質、微細～石英 小砂粒と雲母微 細、粒を多く含む	良好	くすんだ淡黃褐色		ヨコナデ後ハケ目	
				8.6～8.8					押圧ナデ	
									板状工具によるナデアゲ	
Fig43	151	土 師 器	小型丸 底垂	10.4	良質、微細～小砂 粒と雲母微細を比 較的多く含む	良好	淡明赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	
				9.4				細かいハケ目	指頭押圧ナデ	
Fig43	152	土 師 器	小型丸 底垂	9.5	良質、微細～小砂 粒と雲母微細を少 量含む、赤褐色を含 む	良好	(外)淡黃褐色～淡 明褐色 (内)淡灰白色	ヨコナデ	ヨコナデ	底部外面黒斑
				8.0				ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig43	153	土 師 器	小型丸 底垂	9.6 + α	精良、微細砂と雲 母微細を含む	良好	(外)淡明黃褐色 (内)淡明黃褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	脚部外面黒斑
				6.6				ナデ		
Fig43	154	土 師 器	小型丸 底垂	11.6	雲母微細を僅かに 含む	良好	淡黄灰褐色	ヨコナデ	ハケ目	
				9.4				ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig43	155	土 師 器	小型丸 底垂	12.2	微細～石英小砂粒 を多く含む、雲母 微細を少量含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	
				10.7				粗いハケ目	指頭押圧ナデ	
Fig43	156	土 師 器	小型丸 底垂	9.9	精良、微細～細砂 粒と雲母微細を比 較的多く含む	良好	ややくすんだ淡黃灰 褐色	押圧ナデ後粗いハケ目	押圧ナデ後粗いハケ目	
				9.2～9.8				ハケ目後ナデ	粗め方向の包み押圧ナデ	
Fig43	157	土 師 器	小型丸 底垂	9.3	精良、微細～石英 小砂粒を含む、雲 母微細含む	良好	(外)淡灰黑色 (内)淡明褐色	ヨコナデ	ヨコハケ目	
				8.7				粗いハケ目～ヨコハケ目	指頭押圧ナデ	
Fig43	158	土 師 器	小型丸 底垂	10.0	良質、微細～石英 小砂粒を比較的多 く含む、雲母微細 を少量含む	良好	(外)淡明黃褐色 (内)淡黃褐色	ヨコナデ	押圧後ナデ	底部外面黒斑
				9.6				細かいハケ目後ナデ	指頭押圧ナデ	
								ナデ		
Fig43	159	土 師 器	小型丸 底垂	7.8+ α	精良、微細～小砂 粒を含む、雲母微 細を僅かに含む	良好	淡明黃褐色	ナデ後ハケ目		被熱によるスス 様黒色物付着
				10						

Tab.19 出土遺物(土器)一覧表18

Fig	No.	土器 部類	器種	サイズ (器高・口径・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig43	160	土 師 器	小型丸 底壺	8.8	良質、微細～細砂 粒と雲母微細を含む	良好	(外)淡黃灰色 (内)淡黃褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	胴部外面黒斑
				8.0				押圧後ナデ	ハラ状工具によるナデ	
Fig43	161	土 師 器	小型丸 底壺	10.0	微細～細砂粒を比 較的多く含む。雲 母微細を少量含む	良好	淡明黃褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	内外面に2次被 熱
				8.2				ナデ		
Fig43	162	土 師 器	小型丸 底壺	9.6	良質、細砂～石英小砂粒 を比較的多く含む。雲 母微細を少量含む	良好	明赤橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	上底面で重み著し い
				7.7				ナデ		
				4.2						
Fig43	163	土 師 器	小型丸 底壺	13.9	細～小砂粒多く含 む。雲母微細を少 量含む	良好	淡黃褐色	ヨコナデ、やや粗いハケ目	ヨコナデ	外面大きな黒斑
				9.9				ケズリ状のやや粗いナデ	指頭押圧ナデ	
Fig44	164	土 師 器	小型丸 底壺	9.0	微細～石英小砂粒 を比較的多く含む。 雲母微細を握 かに含む	良好	くすんだ暗黃褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	
				7.8				ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig44	165	土 師 器	小型丸 底壺	9.1	良質、微細～細砂 粒を比較的多く含 む。雲母微細を少 量含む	良好	淡明橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	底部外面黒斑
				9.7				やや粗いハケ目	指頭押圧ナデ	
Fig44	166	土 師 器	小型丸 底壺	9.8	微細～細砂粒少量 含む。雲母微細を 握かに含む	良好	淡黄～淡黃白色	ヨコナデ後ハケ目	細かいハケ目	底部外面黒斑
				9.4				ナデ後細かいハケ目	指頭押圧ナデ	
Fig44	167	土 師 器	小型丸 底壺	9.6	良質、微細～石英 小砂粒比較的多く 含む。雲母微細を 少量含む	良好	淡黄褐色		細かいヨコハケ目	
				8.5				やや粗いハケ目	指頭押圧ナデ	
Fig44	168	土 師 器	小型丸 底壺	10.4	精良、微細と雲 母微細を比較的多 く含む	良好	(外)淡明白色～ 淡明黃褐色 (内)淡明黃褐色	ヨコナデ	ハケ目後ヨコナデ	内面押圧痕明瞭
				8.1 - 8.3				指頭によるヨコナデ	ヨコ方向の押圧ナデ	
Fig44	169	土 師 器	小型丸 底壺	7.5	やや粗く粗砂粒を 多く含む	良好	橙色	ナデ	ナデ	
				6.0				ヨコハケ目	ナデ	
Fig44	170	土 師 器	小型丸 底壺	9.4	微細～石英小砂粒 含む	良好	(外)淡明黃褐色 (内)くすんだ暗黃 褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	胴部に黒斑
				6.7 - 7.0				ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig44	171	土 師 器	小型丸 底壺	8.2	精良、微細～細砂 粒と雲母微細を比 較的多く含む	良好	淡明黃褐色	ハケ目後ヨコナデ	ヨコナデ	
				9.7				ハケ目後ヨコナデ	指頭によるヨコナデ、側面 押圧	
Fig44	172	土 師 器	小型丸 底壺	8.8	良質、微細～石英 小砂粒を多く含 む。雲母微細を少 量含む	良好	淡明黃褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	
				7.4 - 7.8				ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig44	173	土 師 器	小型丸 底壺	8.9	良質、微細～小砂 粒と雲母微細を含 む。赤褐色粒を握 かに含む	良好	(内外面上半)、淡明 赤褐色 (下半)淡黃褐色	ハケ目	ハケ目	外側黒斑
				7.8				ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig44	174	土 師 器	小型丸 底壺	9.5	良質、微細～細砂 粒と雲母微細を含 む。石英小砂粒と赤 褐色粒を少量含む	良好	淡明黃褐色	ナデ	指頭押圧ナデ	胴部外面黒斑、 底部押圧痕
				8.7				ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig44	175	土 師 器	小型丸 底壺	8.7	良質、微細～細砂 粒と雲母微細少量 を含む	良好	淡明黃褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	
				7.2				ナデ	指頭押圧ナデ	
								ナデ後ハケ目		

Tab.20 出土遺物(土器)一覧表19

Fig	No.	土器 部品	器種	サイズ (器高・口径・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig44	176	土器 部品	小型丸 底塗	9.8 7.6 - 7.9	良質、微細～細砂 粒と雲母微細含む	良好	くすんだ淡黄褐色	ヨコナデ ナデ 細かいハケ目	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig44	177	土器 部品	小型丸 底塗	8.6 8.7	微細～石英小砂粒 を多く含む。雲母 微細含む	良好	(外)くすんだ灰黃褐色 (内)灰黃褐色	ヨコナデ 押圧ナデ、一部ハケ目	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig44	178	土器 部品	小型丸 底塗	9.8 9.0	微細～小砂粒と雲 母微細を含む	良好	くすんだ淡黄褐色	ヨコナデ 粗いタテハケ目	ヨコナデ 押圧ナデ	
Fig44	179	土器 部品	小型丸 底塗	9.3 9.5	微細～細砂粒を比 較的多く含む。雲 母微細を少量含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	外面に黒斑
Fig44	180	土器 部品	小型丸 底塗	8.6 8.5	良質、微細～細砂 粒を含む。雲母微 細を少量含む	良好	ややくすんだ 淡黄褐色	ヨコナデ 押圧ナデ 細かいハケ目 指頭押圧ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig44	181	土器 部品	鉢	8.5 13.3 4.2	良質、微細～細砂 粒を比較的多く含 む。雲母微細を少 量含む	良好	(外)明赤橙色 (内)くすんだ灰黃褐色 24-27cmの扇円形のスタンプ模の筋有	ヨコナデ ナデ 24-27cmの扇円形のスタンプ模の筋有	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	外面に炭化物付 着、底部被熱による 赤変
Fig44	182	土器 部品	小型丸 底塗	9.1 7.9	良質、微細～細砂 粒を比較的多く含 む。雲母微細を少 量含む	良好	淡明黃白色	ヨコナデ ナデ 押圧ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	頭部内部粘土繊 目
Fig44	183	土器 部品	小型丸 底塗	10.0 8.7	良質、微細～細砂 粒を比較的多く含 む。雲母微細を少 量含む	良好	くすんだ淡黄橙色	ヨコナデ ハケ目	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig44	184	土器 部品	小型丸 底塗	9.0+ α	良質、微細～細砂 粒を少量含む。赤褐色を僅 かに含む	良好	くすんだ淡黄褐色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig44	185	土器 部品	小型丸 底塗	9.9	微細～小砂粒を少 量含む。雲母微細 を少量含む	良好	淡黄褐色	押圧後ヨコナデ ナデ	押圧後ヨコナデ 指頭押圧ナデ	頭部内部初期 成部炭化物様の 付着物
Fig44	186	土器 部品	小型丸 底塗	12.1 9.8	良質、微細～細砂 粒を含む。雲母微 細を少量含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ 粗いナデ 粗いヨコハケ目	ヨコナデ 指頭押圧ナデ 粗いヨコハケ目	口縁部外部被熱 による赤変、胴部 黒度、底部内 部炭化物付着
Fig45	187	土器 部品	小型丸 底塗	7.1 8.2	良質、微細～細砂 粒と雲母微細を多 く含む	良好	(外)淡黄橙～淡黄褐 色 (内)淡橙～淡灰黑色	ヨコナデ タテ方向のナデ 粗いハケ目	ヨコナデ、一部にヨコハケ目 指頭押圧ナデ	外面にスヌ状黒 色物付着、3箇所 横円状の剥離
Fig45	188	土器 部品	小型丸 底塗	8.1 9.7	やや粗い、繩～石英小 砂粒を多く含む。石英 小砂粒を僅かに含む。雲 母微細、粒を少量含む	良好	ややくすんだ淡黄褐色	ハケ目後ヨコナデ 押圧ナデ後細かいハケ目	ハケ目 ケズリ状ナデアゲ	
Fig45	189	土器 部品	小型丸 底塗	8.8 10.9	微細～細砂粒と雲 母微細を比較的多く 含む	良好	暗灰茶褐色	ヨコナデ 粗いハケ目	ヨコナデ後ハケ目 指頭押圧ナデ	
Fig45	190	土器 部品	小型丸 底塗	9.0 10.8	微細～細砂粒を比較 的多く含む。雲母微 細を少量含む。石英中～ 粗砂粒を僅かに含む	良好		ヨコナデ ナデ ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ 指頭押圧ナデ	底部外面黒斑
Fig45	191	土器 部品	小型丸 底塗	9.9 10.5	良質、微細～細砂 粒と雲母微細を比 較的多く含む	良好	(外)淡黄褐色～ (内)くすんだ灰茶色 (内)淡黒灰色	ヨコナデ 粗いハケ目	やや粗いヨコハケ目 指頭押圧ナデ	外面に炭化物様 の黒色付着物

Tab.21 出土遺物(土器)一覧表20

Fig	No.	土器 部類	器種	サイズ (器高・口径・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig45	192	土器 部類	小型丸 底垂	6.5	良質、小~中砂粒 を含む	良好	灰褐色	ナデ	工具ナデ	
				8.2				ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig45	193	土器 部類	小型丸 底垂	7.4	良質、微細~石英 小砂粒を比較的多く 含む、雲母微細 を含む	良好	ややくすんだ 淡灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	胴部外面に黒斑
				7.7~8.0				ナデ		
								指頭工具による 腹側向かうびの低いナデ		
Fig45	194	土器 部類	小型丸 底垂	8	良質、微細~細砂 粒と雲母微細を少 量含む	良好	淡黄褐色	ハケ目後ヨコナデ	粗いハケ目	底部内面淡い黒 斑
				9				ナデ後粗いハケ目	指頭押圧ナデ	
Fig45	195	土器 部類	小型丸 底垂	8.6	微細~小砂粒を比 較的多く含む、雲 母微細を少量含む	良好	淡黄褐色~淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	胴部外面ス状 付着物内面全体 黒斑
				9.7				ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig45	196	土器 部類	小型丸 底垂	8.0	小~粗砂粒を含む	良好	灰黄褐色	ヨコナデ	ハケメ	
				8.4				ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig45	197	土器 部類	小型丸 底垂	7.2	小~中砂粒を少量 含む	良好	灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	
				7.4				ナデ	ハケ目	
Fig45	198	土器 部類	小型丸 底垂	7.6	良質、微細~石英小 砂粒を比較的多く含 む、雲母微細と赤褐 色を僅かに含む	良好	(外)淡黄白褐色 (内)淡明橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	
				8.6				押圧ナデ後ハケ目	指頭押圧ナデ	
								ヘラ状工具によるナデ		
Fig45	199	土器 部類	小型丸 底垂	7.6	微細~石英小砂粒 を多く含む、雲母 微細を比較的多く 含む	良好	淡黄灰褐色	ヨコナデ	ヘラ状工具によるヨコナデ	胴部外面黒斑
				8.1				ナデ	押圧後叩き板状の粗いハケ目	
Fig45	200	土器 部類	小型丸 底垂	8.0	微細~細砂粒を比 較的多く含む、雲 母微細を少量含む	良好	淡黄灰色~淡灰黑色	ヨコナデ	ヨコナデ	
				8.4				ナデ	指頭押圧ナデ	
								粗いハケ目		
Fig45	201	土器 部類	小型丸 底垂	8.9	微細~細砂粒を含 む、雲母微細を少 量含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	胴部外面淡い 黒斑
				85~88				やや細かいハケ目	指頭押圧ナデ	
Fig45	202	土器 部類	小型丸 底垂	8.5	良質、細~小砂粒 と雲母微細、粒を 比較的多く含む、雲 母微細を少量含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部内外面、 胴部外面黒斑
				8.2				細かいハケ目	指頭押圧ナデ	
								ナデ		
Fig45	203	土器 部類	小型丸 底垂	8.6	良質、微細砂と雲 母微細を含む	良好	淡灰褐色	ナデ後ハケ目	粗いヨコナデ	胴部外面黒斑、 胴内面に明瞭な 指頭押圧痕
				85~87				ナデ	指頭押圧ナデ	
								指頭押圧ナデ		
Fig45	204	土器 部類	小型丸 底垂	9.5	細~石英小砂粒を 多く含む、雲母微 細と赤褐色を少 量含む	良好	淡明橙色	ヨコナデ	ヘラ状工具によるヨコナデ	
				8.2				粗いハケ目	指頭押圧ナデ	
Fig45	205	土器 部類	小型丸 底垂	9.0	良質、微細~小砂 粒を比較的多く含 む	良好	ややくすんだ淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	
				8.6				やや細かいハケ目	指頭押圧ナデ	
Fig45	206	土器 部類	小型丸 底垂	10.0	微細~小砂粒と雲 母微細を含む赤褐 色を僅かに含む	良好	淡黄褐色	ハケ目後ヨコナデ	粗いハケ目後ヨコナデ	口縁部黒斑有
				9.8				ナデ	押圧ナデ	
Fig45	207	土器 部類	小型丸 底垂	9.8	良質、微細~石英 小砂粒を比較的多く 含む、雲母微細を含 む	良好	淡黄褐色	細かいハケ目後ヨコナデ	ヘラ状工具によるヨコナデ	胴部に明瞭な粘 土縫目痕
				9.6				ナデ	指頭押圧後引き上 げ痕ナデ	
								ハケ目		

Tab.22 出土遺物(土器)一覧表21

Fig	No.	土器 部品	器種	サイズ (器高・口径・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig45	208	土器 部品	小型丸 底塗	9.7	良質、微細雲母 微細を多く含む	良好	淡明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	2次被熱による スス付着
				7.7 - 8.5				ナデ	押圧ナデ	
								粗面による変形状の 悪いナデ		
Fig45	209	土器 部品	小型丸 底塗	10.1	微細～細砂粒と雲 母微細を含む	良好	ややくすんだ淡黃褐 色	粗いハケ目後ヨコナデ	ヨコナデ	2次被熱による スス付着
				9.6				ナデ	粘土織目オーバーハング	
								粗いハケ目	指頭押圧ナデ	
Fig45	210	土器 部品	小型丸 底塗	10.5	微細～細砂粒と雲 母微細を比較的多 く含む。石英砂粒を 含む	良好	淡黃褐色	ハケメ後ヨコナデ	ハケメ	2次被熱による スス付着
				11.8				ハケメ	指頭押圧ナデ	
								ヘラケズリ		
Fig45	211	土器 部品	小型丸 底塗	9.2	良質、微細～石英 小砂粒を比較的多 く含む。赤褐色を 少量含む	良好	(外)淡黄白褐色 (内)淡明黃褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	2次被熱による スス付着
				8.8				ナデ	押圧ナデ	
								板状工具によるヨコ方向の 悪いナデ		
Fig45	212	土器 部品	小型丸 底塗	10.0	微細～細砂粒と雲 母微細を比較的多 く含む	良好	(外)淡黃褐色～ 灰黃褐色 (内)淡灰黃褐色	ハケ目後ヨコナデ		黒色物付着
				8.4				ナデ	指頭押圧ナデ	
								ナデ		
Fig45	213	土器 部品	小型丸 底塗	9.7	微細～石英小砂粒 を多く含む。雲母 微細含む	良好	ややくすんだ淡黃褐 色	ヨコナデ	ヨコナデ	外面全体に2次 被熱による黒色 スス付着
				9.8				ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig45	214	土器 部品	小型丸 底塗	9.3	微細～細砂粒を多 く含む。雲母微細 含む	良好	(外)くすんだ黄褐色 (内)くすんだ黄灰色	押圧後ヨコナデ	押圧後ヨコナデ	外面に黒斑
				8.7				ナデ	指頭押圧ナデ	
								ナデ		
Fig46	215	土器 部品	小型丸 底塗	8.0	良質、微細～細砂 粒を含む。石英小 砂粒を僅かに含む	良好	淡黃～黃褐色	ヨコナデ	ハケ目	脚部外面スス付 着
				8.1				ナデ	指頭押圧ナデ	
								ナデ後ヘラ		
Fig46	216	土器 部品	小型丸 底塗	8.1	良質、微細～石英 小砂粒を比較的多 く含む。雲母微 細を少量含む	良好	(外)淡黃褐色 (内)ややくすんだ淡 黃褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	脚部方向の押圧ナデ
				8.4 - 8.6				細かいハケ目	指頭押圧ナデ	
								ナデ	横方向の押圧ナデ	
Fig46	217	土器 部品	小型丸 底塗	8.6	良質、細砂粒を比較的 多く含む。雲母微 細を少量含む	良好	淡黃褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部に2次被 熱によるスス状 の黒色物
				8.4 - 8.6				ナデ	指頭押圧ナデ	
								ヘラケズリ		
Fig46	218	土器 部品	小型丸 底塗	8.9	良質、微細～小砂 粒を多く含む。雲母 微細含む	良好	ややくすんだ淡黃褐色	板状工具によるヨコナデ	板状工具によるヨコナデ	口縁部に2次被 熱によるスス状 の黒色物
				8.5				細かいタテハケ目	指頭押圧ナデ	
								ヨコ方向の指頭押圧ナデ		
Fig46	219	土器 部品	小型丸 底塗	9.2	細砂～石英小砂粒 を多く含む。雲母 微細を少量含む	良好	くすんだ暗褐色 (外底部)黃褐色	ヨコナデ	ヨコナデ、指頭押圧ナデ	枕きこぼれ状の 黒色物付着
				8.9				ヘラ状工具によるナデ	頭部内面粘土織目痕	
Fig46	220	土器 部品	小型丸 底塗	7.9	良質、微細～石英小 砂粒を比較的多く含 む。石英粗砂粒と赤 褐色を僅かに含む	良好	淡灰黑色	ヨコナデ	ヨコナデ	内面底部炭化物 付着
				8.0				粗いハケ目後ナデ	押圧ナデ	
								ナデ		
Fig46	221	土器 部品	小型丸 底塗	8.1	良質、微細～細砂 粒と雲母微細を比 較的多く含む	良好	若干くすんだ 淡黃褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	内面底部炭化物 付着
				7.9				細かいタテハケ目	指頭押圧ナデ	
								押圧ナデ		
Fig46	222	土器 部品	小型丸 底塗	8.6	微細～石英小砂粒 を比較的多く含 む。雲母微細を含 む	良好	淡黃褐色、外縁は 鉄分付着により赤茶 色	ハケ目後ヨコナデ	ヨコナデ	外縁に淡い黒斑
				8.4				ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig46	223	土器 部品	小型丸 底塗	9.2	良質、微細～小砂 粒を含む。雲母微 細を少量含む	良好	ややくすんだ 淡灰黑色	ヨコナデ	ハケ目後ヨコナデ	外縁に淡い黒斑
				8.4				ナデ	指頭押圧ナデ	
								ヘラ状ヨコナデ		

Tab.23 出土遺物(土器)一覧表22

Fig	No.	土器 部品	器種	サイズ (器高・口径・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig46	224	土器 部品	小型丸 底壺	9.0 8.2 - 8.6	良質、微細と小砂 粒と雲母微細を比 較的少量含む	良好	くすんだ淡黄褐色	粗いハケ目後ヨコナデ ナデ	粗いハケ目後ナデ	
Fig46	225	土器 部品	小型丸 底壺	7.4 7.1	精良、微細～小砂 粒を含む、雲母微 細を僅かに含む	良好	灰白～淡茶色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ	
Fig46	226	土器 部品	小型丸 底壺	8.8 8.5	微細と雲母微細 を比較的多く含む ・石英小～中砂 粒を少量含む	良好	ややくすんだ淡黄褐色	ヨコナデ ナデ、やや細かいナデ	ヨコナデ 押圧ナデ	
Fig46	227	土器 部品	小型丸 底壺	9.3 8.6	細～石英小砂粒を 多く含む、雲母微 細を少量含む	良好	(外)赤褐色 (内)淡黒色	ヨコ～テ方向の擦いいハケ目	指頭押圧ナデ	
Fig46	228	土器 部品	小型丸 底壺	9.1 8.0	良質、微細～細砂 粒と雲母微細を含 む	良好	くすんだ灰色を 帯びた淡黄褐色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 抜削状の擦痕(ナデ上げ) 押圧ナデ上げ	
Fig46	229	土器 部品	小型丸 底壺	9.6 8.2	良質、微細～石英小 砂粒と雲母微細を 多く含む、兩褐色 を比較的多く含む	良好	(外)淡明黄褐色 (内)淡黄桃色～赤褐色	ハケ目後ヨコナデ ナデ	ハケ目後ヨコナデ 指頭押圧ナデ	頭部に粘土繊目 痕
Fig46	230	土器 部品	小型丸 底壺	8.7 8.4 - 8.6	やや粗い、石英～ 中砂粒を多く含 む、雲母微細含む	良好	(外)淡黄灰褐色 (内)淡黄褐色	ヨコナデ ハケ目後ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig46	231	土器 部品	小型丸 底壺	8.1 7.8 - 8.4	良質、細～石英中 砂粒と雲母微細を 含む	良好	(外)淡灰黄褐色 (内)暗灰褐色	ヨコナデ 押圧ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	外面黒斑、口縁 内面と外面炭化 物様黒色物
Fig46	232	土器 部品	小型丸 底壺	9.5 8.3 - 8.5	良質、微細～石英 小砂粒を比較的多 く含む、雲母微細 含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ 押圧ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	頭部に粘土繊目 痕
Fig46	233	土器 部品	小型丸 底壺	9.3 8.6	良質、微細～小砂 粒と雲母微細を比 較的多く含む	良好	ややくすんだ淡黄褐色	粗いハケ目後ヨコナデ ヘラケズリ	ハケ目後ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig46	234	土器 部品	小型丸 底壺	10.0 9.2	良質、微細～小砂 粒と雲母微細を比 較的多く含む	良好	くすんだ淡黄褐色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig46	235	土器 部品	小型丸 底壺	8.3 7.5	微細～小砂粒を多 く含む、赤褐色 を僅かに含む、雲 母微細を含む	良好	淡黄褐色	押圧後や粗いハケメ	指頭押圧ナデ	
Fig46	236	土器 部品	小型丸 底壺	8.5 7.8	精良、微細と雲 母微細含む	良好	(外)淡黄灰褐色～ 灰白色 (内)淡黄灰褐色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	底部が異様に厚 い
Fig46	237	土器 部品	小型丸 底壺	9.3 7.9	良質、微細～小砂 粒と雲母微細を比 較的多く含む	良好	ややくすんだ黄褐色	ヨコナデ 粗いハケ目	ヨコナデ 押圧ナデ	底部外面黒斑
Fig46	238	土器 部品	小型丸 底壺	9.9 8.2	良質、微細～小砂 粒と雲母微細を含 む	良好	ややくすんだ淡黄褐色	ヨコナデ 比較的丁寧なナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	外面全体に黒斑
Fig46	239	土器 部品	小型丸 底壺	10.8 9.4	やや粗い、細～石 英小砂粒を多く含 む、雲母微細を含 む	良好	(外)淡黄褐色 (内)淡黄茶色	ヨコナデ ハケ目後ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	粘土繊目有 外面スヌ状黑色 物付着 底部外面黒斑

Tab.24 出土遺物(土器)一覧表23

Fig	No.	土器 部品	器種	サイズ (器高・口径 ・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig46	240	土器 部品	小型丸 底盤	6.8+ α 8.9	良質、微細～細砂 粒と雲母微細を含む ・赤褐色粒を僅かに含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ ハケ目	ヨコナデ ケズリ状のナデアゲ	
Fig46	241	土器 部品	小型丸 底盤	12.5 11.8	良質、微細～細砂 粒と雲母微細を比較的 多く含む	良好	黄灰～暗灰茶褐色	ヨコナデ ナデ・ハケ目	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	胴部外面黒色物
Fig47	242	土器 部品	小型丸 底盤	8.6 7.9	精良、微細と雲 母微細を含む	良好	ややくすんだ淡黄灰 色	ヨコナデ ナデ・ヘラ状工具による削目	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	削目直帶1条
Fig47	243	土器 部品	小型丸 底盤	8.9 7.5	細～石英小砂粒を 多く含む・赤褐色 小粒を僅かに含む	良好	淡明赤褐色	摩滅著しく調整不詳		
Fig47	244	土器 部品	小型丸 底盤	8.5 6.2	良質、微細～細砂 粒と雲母微細を比較 的多く含む	良好	赤褐色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig47	245	土器 部品	小型丸 底盤	8.5 7.4	微細～細砂粒を比 較的多く含む・雲 母微細を僅かに含 む	良好	淡黄褐色	ハケ目	指頭押圧ナデ	
Fig47	246	土器 部品	小型丸 底盤	10.2 8.7	精良、微細～細砂粒 と雲母微細を比較的 多く含む・赤褐色 粒を僅かに含む	良好	淡明黃褐色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	外面全体に黒斑
Fig47	247	土器 部品	小型丸 底盤	9.8 7.2	微細～石英小砂粒 を比較的多く含む・雲 母微細を僅かに含む	良好	くすんだ淡黄褐色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	胴部外面黒斑・底 部滑付圧痕・内面 頭部粘土膜日輪
Fig47	248	土器 部品	小型丸 底盤	9.7 7.8	微細～石英小砂粒 を多く含む・雲 母微細と赤褐色粒 を少量含む	良好	(外)赤褐色～淡黄褐色 (内)淡灰黑色	ヨコナデ 粗いハケ目	ヨコナデ 押圧ナデ	外面一部に黒斑 あり
Fig47	249	土器 部品	小型丸 底盤	13.0 10.3	良質、微細～細砂 粒と雲母微細を少 量含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ 細かいハケ目	ヨコナデ 押圧後ヘラ状工具によるナデ	外面2次被熱に よるスス付着・内 面酸化物付着
Fig47	250	土器 部品	小型丸 底盤	13.3 9.7 - 9.9	微細～石英小砂粒 を多く含む・雲 母微細を少量含む	良好	淡黄茶褐色	ヨコナデ やや細かいハケ目	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	外面全体被熱に よるスス付着
Fig47	251	土器 部品	小型丸 底盤	7.9 10.1	良質、微細～細砂 粒を比較的多く含 む・赤褐色粒を僅 かに含む	良好	ややくすんだ淡黄褐 色	ハケ目後ヨコナデ ハケ目後ナデ	ヨコナデ 指頭押圧によるヨコナデ	
Fig47	252	土器 部品	小型丸 底盤	9.5 7.2	微細～石英小砂粒 を比較的多く含 む・雲母微細、赤 褐色粒を少量含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ 粗いタテハケ目 ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	胴部外面黒斑
Fig47	253	土器 部品	小型丸 底盤	9.6 8.0 - 8.2	良質、微細、雲 母微細を含む	良好	ややくすんだ 淡灰褐色	ヨコナデ ハケ目 横方向のナデ	ヨコナデ 指頭によるナデ	
Fig47	254	土器 部品	小型丸 底盤	9.3 8.4	細～石英小砂粒を 比較的多く含む	良好	(外)明白灰色 (内)淡明黃褐色	ヨコナデ 粗いハケ目 粗いヨコナメのハケ目	ヨコナデ 粗いハケ目	外面黒斑
Fig47	255	土器 部品	裏	14.9 10.1 - 10.4	良質、微細～細砂 粒と雲母微細を少 量含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ	指頭押圧ナデ	胴部外面黒斑

Tab.25 出土遺物(土器)一覧表24

Fig	No.	土器 部品	器種	サイズ (器高・口 径・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig47	256	土 部品	小型丸 底盤	7.8	石英細～小砂粒を 多く含む。雲母微 細と赤褐色を含む	良好	くすんだ淡黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	
				7.4				押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig47	257	土 部品	小型丸 底盤	8.6	微細～粗砂粒を多 く含む。雲母微細 を含む	良好	(外)淡黄褐色 (内)暗黄茶褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	口縁～胴部外面 黒斑
				7.8～8				ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig47	258	土 部品	小型丸 底盤	8.5	良質、微細～石英 小砂粒を多く含む。 雲母微細を含む	良好	(口縁部～胴上半)暗 赤褐色 (胴下半)赤茶～茶灰 褐色	ヨコナデ	ヨコナデ、ハケ目	
				8.0				ハケ目、ナデ	ハラケズリ	
Fig47	259	土 部品	小型丸 底盤	8.8	微細～粗砂粒と雲 母微細を比較的多 く含む。石英小砂 粒を僅かに含む。	良好	くすんだ淡黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	外面黒斑
				7.5				ハケ目	指頭押圧ナデ	
Fig47	260	土 部品	小型丸 底盤	9.4	良質、微細～小砂 粒を少量含む。雲 母微細を少量含む	良好	(外)淡明橙色～淡黃 褐色 (内)くすんだ淡黃～ 淡橙色	ハケ目後ヨコナデ	ハケ目後ヨコナデ	
				8.3				やや細かいハケ目	指頭押圧ナデ	
Fig47	261	土 部品	小型丸 底盤	8.5	微細～粗砂粒を比 較的多く含む。雲 母微細を僅かに含 む	良好	ややくすんだ淡黄橙 色	ヨコナデ後ハケ目	ヨコナデ後ハケ目	胴部外面黒斑
				6.8				やや細かいハケ目	指頭押圧ナデ	
Fig47	262	土 部品	小型丸 底盤	9.0	良質、微細～細砂 粒と雲母微細を含 む	良好	(外)くすんだ淡黄褐 色 (内)くすんだ黃灰色	ヨコナデ	ヨコナデ	
				7.8				ハラ状工具による粗いナデ上げ	指頭押圧ナデ	
Fig47	263	土 部品	小型丸 底盤	11.0	細～石英中砂粒と 雲母微細を比較的 多く含む	良好	暗文状の粗いハケ目	ヨコナデ	ヨコナデ	外面に黒斑状 の淡黒～黒茶色 部有
				9.6				粗いハケ目	ハラ状工具による粗いナデ上げ	
Fig47	264	土 部品	小型丸 底盤	14	細～石英小砂粒を 多く含む。雲母微 細を含む	良好	淡黄橙色	ヨコナデ	ハラ状工具によるヨコナデ	頭部外面被熱に による変色、胴部 黒斑、頭部内面 粘土層日
				12.4				ナデ後ハケ目	ハラケズリ	
Fig47	265	土 部品	小型丸 底盤	8.0	良質、微細～細砂 粒と雲母微細を比 較的多く含む	良好	淡橙色 (外)胴下半、淡黃灰 色	ヨコナデ	ヨコナデ	底部外面に黒斑、 スス状の黒色物
				6.9～7.1				ナデ	ハラ状工具による粗いナデ上げ	
Fig47	266	土 部品	小型丸 底盤	8.6	やや粗い、微細～ 石英中砂粒を多く 含む。雲母微細を 僅かに含む	良好	ややくすんだ淡明黃 橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	頭部内面に淡い 黒斑
				8.2				ハケ目	押圧ナデ	
Fig47	267	土 部品	小型丸 底盤	10.3	良質、微細～石英 小砂粒と雲母微細 を含む	良好	淡明橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	
				9.3				ナデ後ハケ目	指頭押圧ナデ	
Fig48	268	土 部品	小型丸 底盤	10	良質、細～石英中 砂粒と雲母微細を 比較的多く含む。石 英粗砂粒を比較的 多く含む	良好	(外)淡黄灰褐色 (内)淡灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	外面淡い黒斑
				8.2				ナデ	タタキ痕	
Fig48	269	土 部品	小型丸 底盤	13.1	微細～石英小砂粒 を比較的含む。雲 母微細と赤褐色を 少量含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	口縁～胴部外面 2次被熱による 赤変、胴部一部 に小さな黒斑
				9.4				粗いハケ目	指頭押圧ナデ	
Fig48	270	土 部品	小型丸 底盤	13.9	細～小砂粒を比較 的多く含む	良好	淡明黃褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	外面黒斑
				11.2				細かいハケ目	指頭押圧ナデ	
Fig48	271	土 部品	小型丸 底盤	14.7	良質、微細～小砂 粒を多く含む。雲 母微細と赤褐色を 少少含む	良好	(外)淡明赤橙色 (内)淡明赤橙色～ 淡黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	胴部に黒斑 底部にスス状付 着物 内面に炭化物付着
				10.4				ナデ	指頭押圧ナデ	

Tab.26 出土遺物(土器)一覧表25

Fig	No.	土器 部類	器種	サイズ (器高・口径 ・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig48	272	土器 部類	小型丸 底窓	13.5	良質、微細～石英 小砂粒を比較的多く含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	脚部外面黒斑、 底部粘土を凸状に貼付
				10.4				ハケ目後ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig48	273	土器 部類	小型丸 底窓	11.8	良質、微細砂と雲母微細を含む	良好	淡黄白～黃褐色	ハケ目後ヨコナデ	ヨコナデ	黒斑
				8.9				細かいハケ目	指頭押圧ナデ	
Fig48	274	土器 部類	小型丸 底窓	14.1	良質、微細～細砂粒と雲母微細を含む	良好	ややくすんだ淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	底部外面淡いスジ状黒斑
				9.9				細かいタテハケメ目	指頭押圧ナデ	
Fig48	275	土器 部類	小型丸 底窓	13.5	微細～石英小砂粒と雲母微細を比較的多くの含む。赤褐色を窓に含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	
				9.5				やや粗いハケ目後ケズリ状ナデ	ヘラ状工具によるケズリ状ナデ	
								指頭押圧ナデ		
Fig48	276	土器 部類	小型丸 底窓	8.9	微細～細砂粒と雲母を含む	良好	くすんだ黃褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	底部外面黒斑
				6.5				押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig48	277	土器 部類	小型丸 底窓	10.3	微細～小砂粒を含む	良好	淡黄茶褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	
				8.5				ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig48	278	土器 部類	小型丸 底窓	9.5	良質、微細砂粒と雲母微細を少量含む	良好	くすんだ灰黄色 全体に黒色～淡灰色	ヨコナデ、タテハケ目	ヘラ状工具によるヨコナデ	
				9.0				やや粗いハケ目		
								平底状		
Fig48	279	土器 部類	小型丸 底窓	15.3	良質、微細～細砂粒を含む。雲母微細を含む	良好	(外) 淡黄灰色 (内) ややくすんだ淡黄灰色	ヨコナデ	ヨコナデ	内部粘土輪積痕
				9.4				やや細かいハケメ	ナタメ指頭押圧ナデ	
								ケズリ		
Fig48	280	土器 部類	小型丸 底窓	10.1	良質、微細～石英小砂粒と雲母微細を多く含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	外外面に淡い黒斑、炭化物様の黒色物
				79 - 82				粗いハケ目後ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig48	281	土器 部類	小型丸 底窓	11.7	良質、微細～細砂粒と雲母微細を含む	良好	ややくすんだ淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	外外面に淡く熱によるスス付着による黒斑
				10.4				細かいハケ目	指頭押圧ナデ	
Fig48	282	土器 部類	小型丸 底窓	11.3	粗い、微細～石英中砂粒を多く含む。雲母微細を少量含む	良好	(外) 淡黄～淡黄橙色 (内) 明赤橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	脚部外面黒斑
				8.8				粗いハケ目	指頭押圧ナデ	
Fig48	283	土器 部類	小型丸 底窓	11.9	微細～小砂粒と雲母微細を比較的多く含む。赤褐色を少量含む	良好	(外) 淡明橙色 (内) 淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	
				9.4				やや粗いタテハケ目	指頭押圧ナデ	
Fig48	284	土器 部類	小型丸 底窓	16.7	良質、微細～石英中砂粒と雲母微細と赤褐色を少量含む	良好	明淡黄褐色	ヨコナデ	指頭押圧ナデ	底部外面に黒斑
				11.6						
Fig48	285	土器 部類	小型丸 底窓	16.9	精良、微細～石英小砂粒を比較的多く含む。赤褐色と石英中砂粒を少量含む	良好	淡黄白色	ヨコナデ	ハケ目	脚部外面スス付着による黒斑、 内面被熱による赤変
				12				粗いハケ目	指頭押圧ナデ	
Fig49	286	土器 部類	小型丸 底窓	7.9	微細～石英小砂粒を比較的多く含む。雲母微細を少量含む	良好	淡黄灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	
				6.3				指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig49	287	土器 部類	小型丸 底窓	9.9	微細～石英小砂粒を多く含む。雲母微細を少量含む	良好	暗橙灰色	ヨコナデ	ヨコナデ	底部外面黒斑
				7.0				ナデ		
								細かいハケ目		

Tab.27 出土遺物(土器)一覧表 26

Fig	No.	土器 部類	器種	サイズ (器高・口径・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig49	288	土器 部類	小型丸 底垂	8.8	良質、微細～石英 小砂粒を多く含む、 雲母微細を少 量含む	良好	(口縁～頭部)淡黒色 (胴部)淡明黄褐色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	口縁～頭部に被 熱による黒変
				7.4～7.8						
Fig49	289	土器 部類	小型丸 底垂	9.9	微細～小砂粒を比 較的多く含む、雲 母微細を少量含む	良好	(外)淡黄褐色 (内)淡明黄褐色	ヨコナデ	浅いヘコミ 指頭押圧ナデ	外面黒斑
				8.4						
Fig49	290	土器 部類	小型丸 底垂	7.7	良質、微細～細砂 粒を比較的多く含 む、雲母微細含む	良好	ややくすんだ淡灰黃 色	ヨコナデ ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	内面は粘土織ぎ 目の凹凸が顕著
				6.2						
Fig49	291	土器 部類	小型丸 底垂	10.0	微細～石英小砂粒 と雲母微細を多く 含む	良好	淡明橙色	ハケ目後ヨコナデ ナデ	ヘラ状工具によるヨコナデ 指頭押圧ナデ	胴部外面に被熱 による赤変と剥 離有
				8.6						
Fig49	292	土器 部類	小型丸 底垂	10.5	微細～石英小砂粒 を比較的多く含 む、雲母微細を含 む	良好	(外)くすんだ淡赤褐色 ～黄茶色 (内)明赤橙色～淡黃 褐色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	スヌ様の黒色物 付着
				9.3						
Fig49	293	土器 部類	小型丸 底垂	13.0	良質、石英細～小 砂粒を多く含む	良好	淡明赤橙色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	口縁部外面赤橙 色の化粧土塗布
				10.3				ヘラケズリ		
Fig49	294	土器 部類	小型丸 底垂	9.9	良質、微細～小砂 粒を含む雲母微細 を含む	良好	ややくすんだ淡黄褐色 (底内面)淡黄褐色 (胴～口縁部)黒斑狀 の淡灰黒色	ヨコナデ 粗いハケ目後ヨコナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	底部外面、口縁 内面に黒斑
				9.3				丁寧な押圧ナデ	ヘラ状工具によるヨコナデ	
Fig49	295	土器 部類	小型丸 底垂	9.5+ α	精良、微細と雲 母微細を含む、赤 褐色を僅かに含 む	良好	明赤橙色 (胴内面)淡明黄褐色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 指頭押圧痕	
				8.6						
Fig49	296	土器 部類	小型丸 底垂	11.7	良質、微細～細砂 粒と雲母微細を含 む	良好	ややくすんだ淡黄褐色	ハケ目後ヨコナデ 細かいハケ目	ヘラ状工具によるヨコナデ 指頭押圧ナデ	外面2次被熱に よるスヌ付着、 淡い黒斑
				10.4						
Fig49	297	土器 部類	小型丸 底垂	10.0	良質、微細～細砂 粒と雲母微細を比 較的多く含む	良好	淡黄褐色 若干灰乳色を帯びる	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	頭部に粘土織目 痕有
				8.0				粗いハケ目		
Fig49	298	土器 部類	小型丸 底垂	10.8	良質、微細～石英小 砂粒と雲母微細を比 較的多く含む、石英 小砂粒を僅かに含む	良好	ややくすんだ 灰黄褐色	ヨコナデ 細かいハケ目後ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	外面に大きな黒 斑
				7.6						
Fig49	299	土器 部類	小型丸 底垂	10.2	良質、細～石英中 砂粒を比較的多く 含む、雲母微細含 む	良好	(外)淡明黄褐色 (内)淡明灰褐色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
				7.6				ケズリ状の粗いナデ		
Fig49	300	土器 部類	小型丸 底垂	10.1+ α	良質、微細～石英 小砂粒を雲母微細 と赤褐色を僅かに 含む	良好	淡明黄褐色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
								細かいハケ目		
Fig49	301	土器 部類	小型丸 底垂	12.1+ α	良質、微細～細砂 粒と雲母微細、粒 を多く含む	良好	暗黄灰色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	胴部外面黒斑、 スヌ付着
								細かいハケ目		
Fig49	302	土器 部類	小型丸 底垂	9.4+ α	微細～石英小砂 粒を比較的多く 含む、雲母微細含 む	良好	淡明黄褐色 (白色)淡赤橙色	ヨコナデ ハケ目後ナデ	ヨコナデ 指頭押圧痕	
				4.8						
Fig49	303	土器 部類	小型丸 底垂	8.8+ α	良質、微細～小砂 粒を含む、雲母微 細を多く含む	良好	ややくすんだ淡黄灰 褐色 (表面)暗赤橙色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 指頭押圧痕	胴部外面黒斑、 内面押圧痕
				4.8						

Tab.28 出土遺物(土器)一覧表27

Fig	No.	土器 部類	器種	サイズ (器高・口径 ・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig50	304	土器 部類	小型丸 底垂	7.9+ α	微細～細砂粒と雲母微細を少量含む	良好	黑色	ヨコナデ	ヨコナデ	胴部内外黒色物
								ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig50	305	土器 部類	小型丸 底垂	6.8+ α	微細粒～細砂粒と石英小砂粒を比較的多く含む。雲母微細を少量含む	良好	くすんだ淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	焼成前に穿孔有、胴部外面黒斑
								ナデ	指頭押圧ナデ	
								ハケメ		
Fig50	306	土器 部類	小型丸 底垂	7.2	微細～中砂粒を比較的多く含む。雲母微細を僅かに含む	良好	淡黄灰色	ヨコナデ	ヨコナデ	胴部外面黒斑
				6.4				ナデ	指頭押圧ナデ	
				4.6						
Fig50	307	土器 部類	小型丸 底垂	8.5	微細～中砂粒を比較的多く含む。雲母微細含む	良好	くすんだ灰黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	外面粘土繊維目痕、黒斑
				6.8				押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
				32 - 38						
Fig50	308	土器 部類	手捏 小型 平底垂	6.8 + α	良質、微細～石英小砂粒と雲母微細を含む	良好	淡灰白褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	
				6.0				ナデ	ナナメの指頭押圧ナデ	
Fig50	309	土器 部類	手捏 小型 平底垂	6.8	良質、微細～小砂粒と雲母微細を含む	良好	淡明黃褐色と黒～灰黒色	粗いハケ目	粗いハケ目	底部外面黒斑
				7.5				押圧ナデ、ハケ目	押圧ナデ、ハケ目	
								指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig50	310	土器 部類	小型丸 底垂	8.1	良質、細～石英小砂粒を比較的小く含む。雲母微細を少量含む	良好	(外) 淡灰黄色～淡灰黒色 (内) 淡黒灰色	ハケ目	ヨコナデ後ハケ目	外面にスヌ様黒色物付着
				8.9				ナデ	指頭押圧ナデ	
				4.9				ナデ		
Fig50	311	土器 部類	小型丸 底垂	6.3	良質、微細と雲母砂粒を含む	良好	くすんだ褐色	ヨコナデ	ヘラナデ	内外面淡い黒斑
				8.1				ナデ後ハケ目	指頭押圧ナデ	
								ナデ		
Fig50	312	土器 部類	小型丸 底垂	7.0	小～粗砂粒を少量含む	良好	橙色	ナデ	ナデ	
				6.5				ハケ目	ケズリ	
Fig50	313	土器 部類	小型丸 底垂	6.7	良質、微細～細砂粒を比較的多く含む。雲母微細を僅かに含む	良好	ややくすんだ淡黄褐色	ハケ目後ヨコナデ	粗いハケ目	
				78 - 86				粗いナデ	指頭押圧ナデ	
Fig50	314	土器 部類	小型丸 底垂	7.5	精良、微細～小砂粒を比較的多く含む。雲母微細を含む	良好	淡黄灰色	ナデ	指頭押圧ナデ	
				9.9				ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig50	315	土器 部類	小型丸 底垂	7.8	良質、微細～石英小砂粒を比較的多く含む。雲母微細を少量含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	外側2次被熱による雲母微細を少量含む
				8.2				ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig50	316	土器 部類	小型丸 底垂	6.0	良質、細～小砂粒を僅かに含む	良好	淡橙色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
				6.2				ナデ		
Fig50	317	土器 部類	小型丸 底垂	7.8	やや粗い、微細～石英粗砂粒を多く含む。若干量の雲母微細を含む	良好	ややくすんだ暗灰白色	ヨコナデ	ヨコナデ	胴部外面黒斑
				6.0				指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig50	318	土器 部類	小型丸 底垂	6.8	精良、微細～小砂粒を含む	良好		指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
				6.6						
Fig50	319	土器 部類	小型丸 底垂	7.9	微細～細砂粒と石英小砂粒を多く含む。雲母微細を含む	良好	(外) 明赤橙色 (内) 淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	
				77 - 79				ヘラ状工具によるナデ	押圧ナデ	
								ハケ目		

Tab.29 出土遺物(土器)一覧表28

Fig	No.	土器 部品	器種	サイズ (器高・口径・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig50	320	土器 部品	小型丸 底盤	9.9	微細～小砂粒を比較的多く含む、雲母微細を含む	良好	暗茶灰色	ヨコナデ	ヨコナデ	外面被熱による ヌ様褐色物付 着胴部内面粘土 極有
				9.3～10				指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig50	321	土器 部品	小型丸 底盤	7.5	良質、小砂粒を少量含む	良好	黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	
				6.5				ハケ目	ナデ	
Fig50	322	土器 部品	小型丸 底盤	7.2	精良、小～中砂粒 赤褐色物を含む	良好	棕色	ナデ	ナデ	
				6.8				ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig50	323	土器 部品	小型丸 底盤	10.2	良質、微細～石英 小砂粒と雲母微細 を比較的多く含む	良好	淡赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	底部黒斑
				10.2				ナデ		
Fig50	324	土器 部品	小型丸 底盤	7.9+ α	微細～石英小砂粒 と雲母微細を含む	良好	(外) 淡黄褐色 (内) 黑色	ヨコナデ	ヨコナデ	外面に黒斑、内 面2次被熱
				8.7				ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig50	325	土器 部品	小型丸 底盤	11.9	やや粗い、細～石英 小砂粒を多く含む、 雲母微細を含む	良好	(外) 淡黄褐色 (内) ややくすんだ 淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	胴部外面被熱に よる赤変
				9.5～9.7				ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig50	326	土器 部品	小型丸 底盤	8.0	微細～細砂粒を比 較的多く含む、雲 母微細を少量含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ	指頭押圧ナデ	底部内面黒斑
				8.5～9.1				ナデ		
Fig50	327	土器 部品	小型丸 底盤	8.9	良質、微細～小砂 粒を比較的多く含 む、雲母微細含む	良好	くすんだ淡黄褐色～ 淡灰黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	
				10.6				ハケ目後ナデ	指頭押圧ナデ	
								搔き上げナデ		
Fig50	328	土器 部品	要	12.7	細～石英中砂粒 を比較的多く含む、 雲母微細、粒を含む	良好	灰茶色	ヨコナデ	ヨコナデ	胴部外面黒斑、 胴内面被熱によ る墨茶色
				15.8				やや粗いハケ目	粗いハラケズリ	
Fig50	329	土器 部品	要	12.9	細～石英中砂粒 を多く含む	良好	(外) くすんだ灰黄色 (内) 淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	底部内面ヘラ工 具の刺突痕
				12.6				ケズリ	指頭押圧ナデ	
Fig50	330	土器 部品	小型丸 底盤	13.8	良質、微細～石英 中砂粒を比較的多 く含む	良好	(外) 淡黄褐色 (内) 淡黑色	ヨコナデ	ヨコナデ	
				15.6				ナデ	押圧ナデ	
Fig50	331	土器 部品	要	14.3	微細～石英小砂粒 雲母微細、粒を多 く含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	胴部内面粘土積 墨目痕
				15.4				ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig51	332	土器 部品	小型丸 底盤	8.9	良質、微細～石英 小砂粒と雲母微 細を多く含む、石英粗 砂粒を少量含む	良好	黑色	ヨコナデ	ヨコナデ	
				7.1				指頭後丁寧なナデ	丁寧な指頭押圧ナデ	
Fig51	333	土器 部品	台付蓋	9.5+ α	微細～小砂粒と雲 母微細を比較的多 く含む	良好	ややくすんだ 淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	
				8.9～9.1				ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig51	334	土器 部品	小型丸 底盤	9.6	やや粗い、微細～ 石英中砂粒と雲母 微細を多く含む	良好	(外) 黄褐色～淡灰黑色 (内) 淡黄灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	外面洗い、黒斑
				7.4～7.7				ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig51	335	土器 部品	小型丸 底盤	9.2	微細～粗砂粒を比 較的多く含む、雲母 微細含む、石英小砂 粒を僅に含む	良好	ハケ目	ヨコナデ	粗いヨコハケ目	
				6.3～7.1				ナデ	指頭押圧ナデ	

Tab.30 出土遺物(土器)一覧表29

Fig	No.	土器 部類	器種	サイズ (器高・口径・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig51	336	土器 部類	小型丸 底垂	7.8+ α 11.2	微細～細砂粒と、 雲母微細含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ ハケメ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	外面2次被熱によるスス付着
Fig46	337	土器 部類	小型丸 底垂	8.6+ α 7.7	微細～石英小砂粒を比較的多く含む、 雲母微細を少量含む	良好	明赤橙色	ヨコナデ ナデ 押圧ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	外面全体、口縁部内面炭化物様の黒色物付着
				9.5+ α 8.9~9.1				ヨコナデ 押圧ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig51	338	土器 部類	台付壺	8.4+ α	微細～小砂粒と雲母微細を比較的多く含む	良好	ややくすんだ淡黄褐色	ハケ目	ナデ	
								ナデ	脚頭押圧ナデ	
Fig51	339	土器 部類	小型丸 底垂	11.6+ α 15.0	粗～石英小砂粒を比較的多く含む、雲母微細と赤褐色粒を僅かに含む	良好	淡明赤橙色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ ヘラケズリ	外面黒斑、スス付着
Fig51	341	土器 部類	小型丸 底垂	6.8+ α	精良、微細と雲母微細を含む	良好	淡黄～黄灰色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	外面に黒斑
Fig51	342	土器 部類	小型丸 底垂	7.7+ α	精良、微細～細砂粒と赤褐色粒を僅かに含む	良好	(外) 淡黄褐色 (内) 淡褐褐色 ～淡灰黑色	ヨコナデ 粗いハケ目 ハケ目後ケズリ状のナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig51	343	土器 部類	小型丸 底垂	7.4+ α	良質、小～粗砂粒を含む	良好	にぶい橙色	ナデ	ナデ	
									ケズリ	
Fig51	344	土器 部類	小型丸 底垂	6.7+ α	微細～石英小砂粒を比較的多く含む、雲母微細を僅かに含む	良好	淡黄褐色～淡黄灰色	ヨコナデ 押圧ナデ 粗いハケ目	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig51	345	土器 部類	小型丸 底垂	7.5+ α	精良、微細と雲母微細を少量含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 押圧ナデ	側部外面黒斑
									ヘラ状工具によるナデアゲ	
Fig51	346	土器 部類	小型丸 底垂	6.5+ α	良質で微細～石英小砂粒と少量含む、雲母微細を比較的多く含む	良好	(外) 淡黄褐色 (内) 黒色	ヨコナデ ナデ、一部ハケ目 ヘラ状工具による強きナデ上げ	ヨコナデ	
Fig51	347	土器 部類	小型丸 底垂	5.8+ α	良質、小～中砂粒を少量含む	良好	灰褐色			穿孔有
Fig51	348	土器 部類	小型丸 底垂	6.7+ α	良質、微細～細砂粒と雲母微細を含む、赤褐色粒を僅かに含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig51	349	土器 部類	小型丸 底垂	6.2+ α	小～中砂粒を少量含む	良好	褐色	ナデ ハケ目後ナデ	ナデ ナデ	
Fig51	350	土器 部類	小型丸 底垂	8.2+ α	良質、微細～細砂粒と雲母微細を少量含む	良好	(外) 淡明黄褐色 (内) 淡灰黃～淡黄褐色	ハケメ	指頭押圧ナデ	側部外面黒斑
Fig51	351	土器 部類	小型丸 底垂	8.3+ α 6.8	微細～石英小砂粒を多く含む	良好	(外) 淡黄灰色 (内) くすんだ黄灰色	ヨコナデ やや細かいハケ目	押圧ナデ	

Tab.31 出土遺物(土器)一覧表30

Fig	No.	土器 部類	器種	サイズ (器高・口径・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig51	352	土器 部類	小型丸 底垂	8.3+ α 6.0	微細～粗砂粒を多 く含む。石英中～ 粗砂粒を少量含む。 雲母微細含む。	良好	(外)淡黄灰色 (内)ややくすんだ淡 灰色		指頭押圧ナデ	
Fig51	353	土器 部類	小型丸 底垂	7.9+ α	精良、微細～粗砂 粒を含む。雲母微 細を含む	良好	淡明橙色	やや細かいハケ目		
Fig51	354	土器 部類	小型丸 底垂	7.4+ α	良質、小～中砂粒 を少量含む	良好	灰褐色	粗いケズリ		
Fig51	355	土器 部類	小型丸 底垂	7.2+ α	良質、小～粗砂粒 を僅かに含む	良好	灰褐色	ナデ	ナデ	
Fig51	356	土器 部類	小型丸 底垂	7.8+ α	精良、微細～細砂 粒を少量含む	良好	棕褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	
Fig51	357	土器 部類	小型丸 底垂	6.7+ α 60～65	細～石英中砂粒を 多く含む。雲母微 細含む	良好	(外)淡黄橙色 (内)淡黄色	ハケメ	指頭押圧ナデ	
Fig51	358	土器 部類	小型丸 底垂	10.6+ α	細～石英中砂粒を 比較的多く含む。 赤褐色を少量含む	良好	淡明黃白色	ヨコナデ ハケメ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig51	359	土器 部類	小型丸 底垂	10.3+ α	無い。石英細～粗 砂粒を多く含む。雲 母微細を少量、赤 褐色を僅少含む	良好	(外)淡黄～暗赤橙色 (内)暗黃橙色	ヘラケズリ ハケ目後ヨコナデ ナデ ヘラケズリ状の粗いナデ	指頭押圧ナデ 指頭押圧ナデ	
Fig51	360	土器 部類	小型丸 底垂	12.4+ α 82～84	良質、微細～小砂 粒を多く含む。雲 母微細を含む	良好	ややくすんだ淡黃 褐色	ヨコナデ やや粗いナナメ～ヨコハケ目	ヨコナデ ヨコ方向の押圧ナデ	
Fig51	361	土器 部類	小型丸 底垂	11.8+ α	良質、微細～細砂 粒を含む。石英小～ 中砂粒と雲母微 細を少量含む	良好	淡明黃褐色	ナデ ハケメ	指頭押圧ナデ ハケメ	底部内外面黒斑
Fig52	362	土器 部類	高环	3.9 4.3	良質、細砂粒を少 し含む	良好	黄灰褐色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig52	363	土器 部類	高环	14.5 17.1 11.5	良質、微細～細砂 粒と雲母微細を含 む	良好	淡明橙色	ヨコナデ、ヘラ状工具によるナデ ヨコナデ ヨコナデ、ナデ ヨコナデ	ヨコナデ	
Fig52	364	土器 部類	高环	12.5 17.6 10.2	やや粗い。細砂～ 石英中砂粒を多く 含む。雲母微細を 少量含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ ナデ、ヨコナデ ヨコナデ	ヨコナデ ナデ 絞り後や粗いヘラケズリ	
Fig52	365	土器 部類	高环	13.0+ α 22.7	細～石英中砂粒を 多く含む。雲母微 細と赤褐色を含む	良好	明赤褐色	ヨコナデ、ナデ ヨコナデ ナデ	ヨコナデ、ナデ ナデ 絞り後押圧ナデ	
Fig52	366	土器 部類	高环	11.5 16.4 10.9	微細～石英中砂粒 を多く含む。赤褐 色を僅かに含む	良好	(外、环内)淡黄白褐 色(脚内)くすんだ淡赤 褐色	ヨコナデ ナデ ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ ナデ ヨコナデ、ナデ	黒斑、黒色物付 着
Fig52	367	土器 部類	高环	12.2～13 17.5 11.9	細～石英中砂粒と 雲母微細を多く含 む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ、ナデ ナデ ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ナデ 指頭押圧ナデ ヘラケズリ	

Tab.32 出土遺物(土器)一覧表31

Fig	No.	土器 部類	器種	サイズ (器高・口径・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig52	368	土器 部類	高环	7.9+ α 21.4	微細～石英中砂粒を多く含む。雲母微細と赤褐色粒を少量含む	良好	淡黄白褐色	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	内面に赤褐色の 堆布痕
									押圧ナデ	
Fig52	369	土器 部類	高环	6.5+ α 16.5	繊～石英中砂粒を比較的多く含む	良好	(外)若干くすんだ淡 黄白褐色 (内)淡黄橙色	ヨコナデ、ハケ目後ヨコナデ ヘラ状工具によるナデ	押圧後ヨコナデ	
Fig52	370	土器 部類	高环	4.7+ α 14.4	良質、微細～石英小砂粒を含む。雲母微細を含む	良好	淡明黃白色	ヨコナデ	ヨコナデ、押圧痕	口縁部に被熱に よる黒茶色
									押圧後ヨコハケ目	
Fig52	371	土器 部類	高环	5.2+ α 19.3	微細～石英小砂粒を比較的多く含む。雲母微細を少量含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ、押圧後ハケ目	
								ハケ目後ヨコナデ、押圧ナデ		
Fig52	372	土器 部類	高环	5.2+ α 18.6	精良、微細紗と雲母微細を少量含む。赤褐色粒を確かに含む	良好	淡褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	
								ハケアクリ、板状工具によるナデ	ナデ	
Fig52	373	土器 部類	高环	4.9+ α 17.0 ~ 17.4	良質、微細紗粒と雲母微細を少量含む	良好	(外)淡黄褐色 (内)淡黄橙色	ヨコナデ、ナデ	ハケ目後ヨコハケ目	
Fig52	374	土器 部類	高环	6.2+ α 19.0	微細～小砂粒を比較的多く含む。雲母微細を含む	良好	(外)淡赤橙～ くすんだ黄灰褐色 (内)暗黄茶色	ハケ目後ヨコナデ ハケ目後ナデ	ヨコナデ ナデ	
Fig52	375	土器 部類	高环	5.0+ α 19.0	良質で微細～小砂粒と雲母微細を含む	良好	淡黄～淡明橙色	ハケメ後ヨコナデ ヘラ状工具によるナデ後ヨコナデ	ヘラ状工具によるヨコナデ 押圧ナデ	
								ヘラ状工具によるナデ後ヨコナデ		
Fig52	376	土器 部類	高环	5.9+ α 17.0	繊～石英小砂粒を多く含む。雲母微細を含む	良好	くすんだ淡黄白褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	内部剥離による 凹凸著しい
									ナデ	
Fig52	377	土器 部類	高环	5.6+ α 19.7	良質、微細～石英小砂粒を多く含む。雲母微細と赤褐色粒を少量含む	良好	ややくすんだ赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	
								ハケ目後ナデ	ナデ	
Fig52	378	土器 部類	高环	8.0+ α 18.4	微細～石英小砂粒と雲母微細を含む。赤褐色粒を含む	良好	淡明褐色	斜めのハケ目後ヨコナデ ヨコ方向のナデ	ヨコナデ ナデ	環内面に炭化物 様の黒色物
Fig52	379	土器 部類	高环	4.9+ α 16.9	良質、微細～小砂粒を比較的多く含む。雲母微細を含む	良好	淡黄褐色 若干黄茶色ぎみ	ヨコナデ	ヨコナデ、押圧ナデ	
Fig52	380	土器 部類	高环	7.0+ α 18.3	繊～石英中砂粒を多く含む。雲母微細と赤褐色粒を少量含む	良好	赤褐色	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 指頭押圧ナデ	
Fig52	381	土器 部類	高环	4.6+ α 16.6	微細～石英中砂粒を多く含む。雲母微細と赤褐色粒を僅に含む	良好	淡明黃褐色	ヨコナデ	ヨコハケ目	
Fig52	382	土器 部類	高环	4.3+ α 16.1	良質、微細～雲母微細を含む	良好	(外)くすんだ淡黄褐色 (内)淡明灰色、やや白色	ナナメハケ目後ヨコナデ 板状工具による放射状のナデ		
									ナデ	
Fig52	383	土器 部類	高环	4.4+ α 16.3	繊～石英中砂粒を多く含む。雲母微細と赤褐色粒を少量含む	良好	(外)淡黄赤褐色 (内)淡明橙色	ヨコナデ ナデ		

Tab.33 出土遺物(土器)一覧表32

Fig	No.	土器 部類	器種	サイズ (器高・口径・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig52	384	土器 部類	高环	49+ α	微細～小砂粒を少 量含む。雲母微細 と赤褐色を僅かに含む	良好	淡黄褐色	ハケ目	ヨコハケ目	環底部に被熱に よるスス状の黒 色物
				17.9				ナデ	ナデ	
				7.3 + α				ナデ	ヨコナデ	
Fig53	385	土器 部類	高环	18.1	細～小砂粒を多く 含む。雲母微細合 む	良好	くすんだ淡黄灰褐色	ヘラケズリ	粗いハケ目	環底部に被熱に よるスス状の黒 色物
				7.3	粗いハケ目後ヨコナデ			粗いハケ目後ヨコナデ		
				18.1	良質、微細～細砂 粒と雲母微細赤褐色 を多く含む			粗いハケ目後ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ	
Fig53	386	土器 部類	高环	5.5 + α	細～石英粗砂粒を 多く含む。赤褐色 を少量含む	良好	淡明赤橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	外面に被熱に よる赤変
				15.4 - 15.8						
				9.2+ α	微細～石英小砂粒 を含む。雲母微細 を少量含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	
Fig53	388	土器 部類	高环	32.4 - 33.3				ヘラ状工具による粗い磨き	ヨコナデ	焼成前穿孔
				11.7 + α				押圧ナデ	放射状磨き	
				11.7	やや粗い。細～石 英粗砂粒を多く含 む。雲母微細を比 較的多く含む	良好	ややくすんだ淡黄色			
Fig53	389	土器 部類	高环	8.5 + α	微細～石英小砂粒 と雲母微細を比較 的多く含む	良好	ややくすんだ淡黄色	浅い段丘を呈す。丁寧なナデ		黑斑
				12.0				押圧ナデ、ハケ目後ナデ		
				8.6 + α	良質、微細～石英 小砂粒を多く含 む。雲母微細を僅 かに含む	良好	赤褐色～赤褐色	押圧ナデ、ナデ、ヨコナデ	右回転ヘラケズリ、ヨコナデ	
Fig53	391	土器 部類	高环	13.8	摩滅著しく不祥			押圧痕	被熱による赤変 有	
				7.5 + α	微細～石英中砂粒 を比較的多く含 む。雲母微細、赤褐 色を僅かに含む	良好	淡明黄褐色			
				12.0				ナデ		指面押圧ナデ
Fig53	392	土器 部類	高环	7.6 + α	微細～小砂粒を 多く含む。雲母微 細を少量含む	良好	ややくすんだ 淡黄褐色			淡い黒色付着 物？
				12.6				ナデ、ヨコナデ	ヘラケズリ、ヨコナデ	
				7.8 + α						
Fig53	394	土器 部類	高环	12.2	細～小砂粒を比較 的多く含む。雲母 僅かに含む	良好	淡黄褐色			黑斑
				8.8 + α	良質、微細～小砂 粒を少量含む。雲 母微細を含む	良好	淡黄褐色			
				12.5				下地にハケメ、ヨコナデ	押圧ナデ、右回りヘラケズリ	
Fig53	396	土器 部類	高环	8.5 + α	微細～石英小砂粒 を含む	良好	淡黄褐色			被熱による黒色 付着
				11.9				ナデ、ヨコナデ	押圧ナデ、ヘラケズリ、ヨコナデ	
				7.2 + α				ハケメ後押圧ナデ、ヨコナデ		
Fig53	397	土器 部類	高环	13.2	微細～小砂粒と雲 母微細含む	良好	暗灰黃色			2次被熱による 黒変
				7.7 + α						
				11.1				ナデ、ヨコナデ	押圧ナデ、ヘラケズリ、ヘラクコナデ	
Fig53	398	土器 部類	高环	9.2 + α	微細～石英小砂粒 と雲母微細を比較 的多く含む	良好	くすんだ暗黄褐色			炭化物様の付着 物。环接合時の 貼付粘土有。
				11.9				ナデ、ヨコナデ	押圧ナデ、右回りヘラケズリ、ヨコナデ	
				11.9				丁寧なヨコナデ	横方向ヘラケズリ、ヨコナデ	

Tab.34 出土遺物(土器)一覧表 33

Fig	No.	土器 部類	器種	サイズ (器高・口径・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig53	400	土器 部類	高环	8.6 + α	良質、微細～細砂粒と雲母微纖維を比較的多く含む	良好	くすんだ暗黄褐色			被熱による黒色物付着、くびれ部外縁に凹穂状の盛りナデ、環接合部に突出部の亂
				11.8				ヨコナデ	右回りハラケズリ、ヨコナデ	
Fig53	401	土器 部類	高环	8.5+ α	微細～石英小砂粒を多く含む、雲母微纖維を僅かに含む	良好	明赤褐色			
				11.9				ナデ、ヨコナデ	最高圧打テハタケズリ、ヨコナデ	
Fig53	402	土器 部類	高环	9.0+ α	良質、微細～石英小砂粒を比較的少量化含む	良好	(外) 淡明赤褐色 (内) 淡黄褐色			
				11.7				ヨコナデ	ヨコナデ、右回りハラケズリ	
Fig53	403	土器 部類	高环	7.3+ α	微細～砂粒と雲母を比較的多く含む	良好	黑色	粗いハケ目	ハラケ目による右斜面のハラナデ	
				8.6				ヨコナデ	ヨコナデ	
Fig53	404	土器 部類	高环	8.9+ α	微細～石英中砂粒を多く含む、雲母微纖維含む	良好	ややくすんだ 淡黄褐色			被熱による黒色物付着
				17.2				ナデ、粗いハケメ	押圧ナデ、ハラケズリ、粗いハケ	
Fig53	405	土器 部類	高环	7.5+ α	石英細～中砂粒を多く含む、雲母微纖維を少量含む	良好	淡明褐色			3孔一对の焼成前穿孔有
				11.0 - 11.8				ナデ、ヨコナデ	最高圧打テハタケズリ、ヨコナデ	
Fig53	406	土器 部類	高环	8.4+ α	良質、微細～小砂粒と雲母微纖維を含む	良好	ややくすんだ 淡黄褐色			
				12.8				ナデ	押圧ナデ、ハラケズリ	
Fig53	407	土器 部類	高环	8.0+ α	細～石英中砂粒を比較的多く含む、雲母微纖維含む	良好	(外) 黄灰褐色 (内) 黑色、黒斑？			黒色物付着
				11.4				押圧ナデ、ヨコナデ	最高圧打テハタケズリ、ヨコナデ	
Fig53	408	土器 部類	高环	7.2+ α	微細～石英中砂粒を多く含む、雲母微纖維含む	良好	淡黄～淡橙色			
				12.1				ナデ、ヨコナデ	押圧ナデ、ハラケズリ	
Fig53	409	土器 部類	高环	7.6+ α	微細～細砂粒を比較的多く含む、雲母微纖維含む	良好	ややくすんだ 淡黄褐色			粗面による粗い押圧ナデ
				11.4				ナデ	押圧ナデ	
Fig53	410	土器 部類	高环	7.9+ α	良質、微細～細砂粒と雲母微纖維を比較的多く含む、赤褐色含む	良好	(外) 淡明橙色 (内) 淡黄桃橙色			
				11.5				ナデ、丁寧なヨコナデ？	押圧ナデ、ハラケズリ、ヨコナデ	
Fig53	411	土器 部類	高环	8.2+ α	細～小砂粒を比較的多く含む、雲母微纖維と赤褐色を僅かに含む	良好	淡黄褐色			
				11.8				押圧ナデ後ハケメ、ヨコナデ	押圧ナデ、ケズリ	
Fig53	412	土器 部類	高环	8.0+ α	細～石英中砂粒を多く含む、雲母微纖維と赤褐色を含む	良好	淡明褐色			
				14.7				ヨコナデ？	押圧ナデ？ハラケズリ？ヨコナデ？	
Fig53	413	土器 部類	高环	8.6+ α	細～石英中砂粒を比較的赤褐色を含む	良好	淡明褐色	摩減		2次被熱による赤変、黒色物
				12.3					押圧ナデ	
Fig53	414	土器 部類	高环		微細～小砂粒と雲母微纖維を比較的多く含む	良好	(外) 淡黄褐色～明褐色 (内) 淡黄褐色	押圧後ナデ、ヨコナデ	押圧ナデ後右斜面ハラケズリ	脚部黒斑
				12.0						
Fig54	415	土器 部類	高环	10.3+ α	細～石英粗砂粒を多く含む、雲母微纖維と赤褐色を含む	良好	淡明黃褐色	ナデ？タテナデ？ヨコナデ？	ナデ？押圧後ハラケズリ？	
				12.4						

Tab.35 出土遺物(土器)一覧表34

Fig	No.	土器 部類	器種	サイズ (器高・口径・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig54	416	土器 部類	高环	10.4+ α	良質、微細砂粒と 雲母微細を含む	良好	やや白っぽい淡黄褐色			ヘラ状工具によるナデ、ヨコナデ 良好、ヘラケタリ、押圧感のいきり
				14.2						
Fig54	417	土器 部類	高环	15.7+ α	精良、微細～細砂粒と 雲母微細を含む。雲母 微細と赤褐色を僅かに含む	良好	明赤褐色	ハケ目後ナデ		ナデ？、ヨコナデ？ ヘラ？、ヨコナデ？
				10.0 + α						
Fig54	418	土器 部類	高环	細～石英中砂粒と 雲母微細を多く含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ、ナデ			押圧ナデ、ヘラケタリ、ヨコナデ
				10.8						
				7.6 + α	微細～小砂粒を比 較的多く含む。雲 母微細を含む	良好	淡黄灰褐色			粗いハケメ、ナデ、ヨコナデ 押圧ナデ、ヘラケタリ、ヨコナデ
				13.0						
Fig54	420	土器 部類	高环	8.8 + α	微細～小砂粒を比 較的多く含む。雲 母微細を僅かに含 む	良好	(外) 淡黄桃色 (内) くすんだ淡赤褐色			2次被熱による 深い黒変
				11.4				ヨコナデ、ハケナデ、重ねた強烈なナデ	後ろ後ヘラケタリ、ヨコナデ	
Fig54	421	土器 部類	高环	8.2 + α	細～石英小砂粒を 多く含む。雲母微 細を僅かに含む	良好	(外) 赤褐色 (内) くすんだ淡黄褐色			ヨコナデ、ナデ、ヘラケタリ、ヨコナデ
				14.3				ヨコナデ、ナデ	押圧ナデ、ヘラケタリ、ヨコナデ	
Fig54	422	土器 部類	高环	9.5 + α	良質、微細砂粒と 雲母微細を比較的 多く含む	良好	くすんだ淡黄褐色			粗い状態、ヘラケタリ、ヨコナデ
				15.4				ナデ、ヨコナデ	後ろ状態、ヘラケタリ、ヨコナデ	
				9.2+ α	良質、細～小砂粒と 雲母微細を少量 含む	良好	淡黄褐色	ナデ		脚部外面に小さ な淡黒斑
								ハケ目後ナデ	ヘラ状工具による右回りのナデ	
				12.1				ヨコナデ	ヨコナデ	
Fig54	424	土器 部類	高环	7.7 + α	微細～雲母微細 含む	良好	ややくすんだ黄褐色			ヨコナデ、ナデ、ヘラケタリ、ナデ
				11.0				ヨコナデ、ナデ	押圧ナデ、右回りヘラケタリ、ナデ	
Fig54	425	土器 部類	高环	7.1+ α	微細～小砂粒を含 む。雲母微細含む	良好	淡黄灰色			押圧ナデ、ヨコナデ ヨコナデ、ナデ
				11.8				押圧ナデ、ヨコナデ	押圧ナデ、ヘラケタリ、ヨコナデ	
Fig54	426	土器 部類	高环	9.3+ α	精良、微細～石英 小砂粒を多く含む。	良好	淡黄褐色			ナデ
				12.0				ナデ、ヨコナデ	押圧ナデ、ヨコナデ	
Fig54	427	土器 部類	高环	8.1+ α	細～石英中砂粒を 多く含む。雲母微 細を僅かに含む	良好	ややくすんだ橙褐色			ヨコナデ、ナデ
				12.9				ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、ナデ	
Fig54	428	土器 部類	高环	7.6 + α	良質、微細～細砂 粒と雲母微細を比 較的多く含む	良好	淡明褐色			ナデ、ヨコナデ
				13.0				ナデ、ヨコナデ	1～2段のヘラケタリ、ヨコナデ	
Fig54	429	土器 部類	高环	7.4+ α	良質、微細～小砂 粒と雲母微細を少 量含む	良好	淡黄褐色			ナデ、ヨコナデ
				12.8				ナデ、ヨコナデ	押圧ナデ、右回りヘラケタリ、ヨコナデ	
Fig54	430	土器 部類	高环	6.1+ α	良質、微細～石英 小砂粒を含む。雲 母砂粒と赤褐色を 僅かに含む	良好	淡黄褐色			ヨコナデ
				10.6				ヨコナデ	右回りヘラケタリ、ヨコナデ	
Fig54	431	土器 部類	高环	8.0+ α	良質、微細～石英 中砂粒を含む。雲 母微細を少量含む	良好	淡黄褐色、一部赤褐 色を含む			ナデ、ヨコナデ、細かいハケメ
				11.6						

Tab.36 出土遺物(土器)一覧表35

Fig	No.	土器 部類	器種	サイズ (高・口径・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig54	432	土器 部類	高环	7.4+ α	微細～細砂粒と雲母微細を含む	良好	淡褐色	丁寧なナデ、ヨコナデ	ヘラケズリ	环との接合部には突起状の栓が付く。
				13.0						
				7.4+ α						
Fig54	433	土器 部類	高环	11.6	微細～石英中砂粒を多く含む。赤褐色を僅かに含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	
				7.6+ α				不明瞭	不明瞭	
				12.2 - 12.6						
Fig54	435	土器 部類	高环	7.6+ α	細～石英中砂粒を多く含む。雲母微細～粒を含む	良好	赤褐色(剥離が見られる)	ヨコナデ	吉田耕任ナデ、細かいヨコハケ目	
				12.0						
				7.3 + α				ヨコナデ、丁寧なナデ	削正跡ハサツ目、横型ハサツ目	
Fig54	436	土器 部類	高环	13.7	微細～小砂粒と雲母微細を比較的多く含む	良好	黒茶色(灰黒色ぎみにくすみ有)			
				7.3 + α						
				10.3				押圧ナデ、ヨコナデ	後ろ削正ヘラケズリ、ヨコナデ	
Fig54	437	土器 部類	高环	5.7 + α	微細～石英小砂粒を比較的多く含む。雲母微細を僅かに含む	良好	(外)ややくすんだ淡黄褐色(内)くすんだ淡黄褐色			
				10.9				押圧ナデ、ヨコナデ	後ろ削正ヘラケズリ、ヨコナデ	
				7.2 + α						
Fig54	439	土器 部類	高环	12.7	微細～石英小砂粒を多く含む。雲母微細含む	良好	くすんだ黄褐色	押圧ナデ、タテハケメ復ヨコナデ	削正跡ハサツ目、横型ハサツ目	
				11.6+ α				ヨコナデ、ナデ後縦扫一ハケ目	ヨコナデ	
				13.7				ヨコナデ、ナデ後縦扫一ハケ目	ヨコナデ	
Fig55	440	弥生	器台	14.4+ α	微細～石英中砂粒を多く含む。雲母微細比較多く含む	良好	くすんだ淡明橙色	ヨコナデ	ヨコナデ、押圧ナデ	
				13.0				ヨコナデ、粗いタテハケメ		
				10.3+ α				ナデ後粗いハケ目	ナデ後ハケ目、北面押圧ナデ	
Fig55	442	弥生	器台	15.8	微細～小砂粒と雲母粒を比較的多く含む	良好	淡黄褐色			2次被熱による黒色物付着
				15.3				ヨコナデ、粗いタテハケ目	ヨコナデ	
				14.0				指頭押圧ナデ		
Fig55	443	弥生	器台	14.4						
				15.6+ α	粗い、細～石英中砂粒を多く含む。雲母微細粒を比較的多く含む	良好	(外)明橙色(内)淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	被熱による変色有
				15.4				タテ方向の細かいハケ目	押圧ナデ後縦かいハケ目	
Fig55	444	弥生	器台	17.9	やや粗い、細～石英粗砂粒を多く含む。雲母微細を含む	良好	くすんだ黄褐色	ヘラ先による斜行する削目	押圧ナデ	
				12.2				ハケ目		
				16.6						
Fig55	446	弥生	器台	15.9+ α	比較的の質實、微細～細砂粒と雲母微細を少量含む。雲母微細を含む	良好	(外)淡明赤橙色(内)くすんだ淡黄褐色	ヨコナデ		外画2次被熱によるスズ様黒色物粘土経状に粘土の重ね塗り
				13.2				タテハケ目	指頭押圧ナデ	
				9.9				ヘラ状工具による浅い凹線	押圧後ハケ目	
Fig55	447	弥生	器台	10.7+ α	微細～細砂粒と雲母微細を含む	良好	(外)淡黄褐色(内)淡黄橙色	押圧後ヨコナデ	押圧後ヨコナデ	
								押圧ナデ後細かいハケ目		

Tab.37 出土遺物(土器)一覧表 36

Fig	No.	土器 等	器種	サイズ (高・口径・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig55	448	赤生	器台	12.5+ α	微細～小砂粒と雲母微細、粒を含む	良好	(外)くすんだ淡黄褐色 (内)淡黄橙色	押圧後ヨコナデ	押圧後ヨコナデ	
				10				やや細かいハケ目	押圧後粗いタテハケ目	
Fig55	449	赤生	器台	20.9	良質、微細～小砂粒を比較的多く含む。石英小砂粒と赤褐色を僅かに含む	良好	淡黄橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	
				10.4				タテハケ目	指頭押圧ナデ	
				16.1				回転状ハケ目		
Fig55	450	土器 等	器台	14.8+ α	微細～小砂粒と雲母粒を比較的多く含む	良好	(外)淡黄褐色 (内)やや黄褐色	やや細かいハケ目	やや細かいハケ目	炭化物の淡い黒色付着
				16.8				ヨコナデ	ヨコナデ	
				13.9+ α				粗いハケ目、ヨコナデ	押圧後ハケ目、ヨコナデ	
Fig55	451	土器 等	器台	10.2	細～石英中砂粒を多く含む。雲母微細を含む。赤褐色を含む	良好	赤褐色			
				68～74				ナデ	指頭押圧ナデ	
				10.8				ナデ	ナデ後ハケ目	
Fig55	452	土器 等	器台	7.9～9.0	細～石英中砂粒を多く含む。雲母微細と赤褐色を僅かに含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ		外面巾1cmのタテ帶状の淡い黒斑
				52～63				貼付状押圧ナデ	押圧ナデ	
				10.6				指頭押圧ナデ	粗いハケ目	
Fig55	453	土器 等	支脚	14.1+ α	細～石英小砂粒を比較的多く含む。雲母粒と赤褐色を少し含む	良好	淡黄褐色 (外)赤褐色部分有	ハケ目上単位に12本位の繊維	押圧ナデ	受部中央に穿孔、外面被熱による赤変、内面黒変
				16.6～17.0					押圧ナデ後粗いハケ目	
				13.1					外面淡い黒斑、内面炭化物状の黒色付着	
Fig55	455	土器 等	器台	9～9.6	微細～小砂粒と雲母微細を含む	良好	(外)淡黄褐色 (内)淡灰～淡灰黑色			受部穿孔、外面2次被熱によるスヌ様黒色物
				12.5						
				11.3～13.3+ α						
Fig55	456	土器 等	支脚	95～10.8	微細～石英中砂粒を多く含む。雲母微細を含む	良好	(外)淡赤褐色 (内)淡黄褐色	天井部に径3mmの円孔有、押圧ナデ		被熱による赤変有
				13.6				押圧ナデ後ハケ目		
				3.7+ α					指頭押圧後粗いハケ目	
Fig55	457	土器 等	器台	12.8	良質、細～小砂粒を少量含む。雲母微細、粒を僅かに含む	良好	ややくすんだ淡黄褐色			脚部粘土紐
				11.9				ヨコナデ	ヨコナデ	
				13.4～13.7				ヨコナデ	ヨコナデ	
Fig55	458	土器 等	要	8.2	精良、微細～小砂粒と雲母微細を含む	良好	淡黄灰褐色	斜格子目叩き	押圧ナデ	
				8.7+ α				指頭によるヨコナデ		
				11.2～11.4						
Fig55	459	土器 等	台付要	10.4+ α	細～石英中砂粒と雲母微細を比較的多く含む	良好	(外)淡黄白色 (内)淡黄褐色	押圧後縦き上げ状粗いナデ	押圧後粗いナナメハケ目	
				11.2～11.4				指頭押圧ハケ目	ナデ	
				8.5						
Fig55	460	土器 等	台付要	12.2	良質、微細～小砂粒を含む。雲母微細を少	良好	淡黄褐色	ヨコナデ、粗いハケ目	指頭押圧ナデ、ヨコナデ	
				8.5						
				13.7						
Fig55	461	土器 等	台付鉢	9.3	細～石英中砂粒を多く含む。雲母微細を少	良好	淡明黃白褐色	細かいハケ目	細かいハケ目	
				8.5						
				12.2						
Fig55	462	土器 等	台付鉢	8.5	やや粗い、細～石英中砂粒を多く含む。雲母微細を少	良好	(鉢内)淡黒色 (外)淡黄白色	押圧ナデ後ヨコナデ	押圧ナデ	
				12.5				押圧ナデ		
				8.5						
Fig55	463	土器 等	高环	9.3	細～石英中砂粒を少	良好	淡黄橙色	押圧ナデ	押圧ナデ	
				13.7						
				8.4						

Tab.38 出土遺物(土器)一覧表表37

Fig	No.	土器 部類	器種	サイズ (器高・口径・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig57	464	土器 部類	高环	8	細～石英中砂粒を多く含む。雲母微細を含む	良好	淡黄色～黄茶色	ヨコナデ	ヨコナデ	
				10.4				ナデ	細かいハケ目	
				9					押圧ナデ	
Fig57	465	土器 部類	台付鉢	6.1+ α	微細～石英粗砂粒を比較的多く含む。雲母微細～粒を含む	良好	(外)淡橙色 (内)くすんだ淡黄褐色	ナデ、ヨコナデ	押圧ナデ	黒斑有
				5.8						
				6.7+ α				ナデ	ナデ	
Fig57	466	土器 部類	台付鉢	良質、微細～細砂粒と雲母微細を少量含む	良好	淡黄褐色	指頭押圧ナデ後細いハケ目 指頭押圧ナデ後粗いハケ目			
				13.4						
				4.8						
Fig57	467	土器 部類	浅鉢	12.2	良質、微細～細砂粒含む。赤褐色粒を比較的多く含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	
								粗いハケ目	指頭押圧ナデ	
Fig57	468	土器 部類	浅鉢	4.3	良質、微細～細砂粒を比較的多く含む。雲母微細と赤褐色粒を僅かに含む	良好	(外)淡明橙色 (内)淡黄白色	ヨコナデ	ヨコナデ	内外口縁部～胴部黒斑
				13.5				ナデ	ナデ	
									指頭押圧ナデ	
Fig57	469	土器 部類	浅鉢	7.4	良質、微細～細砂粒と雲母微細を比較的多く含む	良好	(外)淡黄褐色 (内)黒色	ヨコナデ後タテハケ目	ナデ	内面、底部外面黒斑
				10.5				タキ	ヘラ状工具によるナデ	
Fig57	470	土器 部類	鉢	6.7	良質、微細～石英と雲母を比較的多く含む	良好	暗赤褐色	押圧後ヨコナデ	押圧後ヨコナデ	胴部外縁円形黒斑、外底面本の紫ジジ状の線刻
				10.0 - 11.2				ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig57	471	土器 部類	鉢	8.5	良質、微細砂と雲母微細を比較的多く含む	良好	(外)明赤橙色 (内)くすんだ淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	外表面炭化物付着、底部被熱による黒変
				13.3				ナデ	指頭押圧ナデ	
				4.2				24-27cmの範囲毎のスタンプ後の痕有		
Fig57	472	土器 部類	鉢	8.0	微細～石英小砂粒を多く含む。雲母微細を僅かに含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	内面炭化物層の黒色物、脇部外縁にスス状黒色物付着、2次火候による赤変
				14.7				ヘラ状工具によるナデ	ヘラケズリ	
				6.0 - 6.4					押圧ナデ	
Fig57	473	土器 部類	浅鉢	4.4	精良、微細～細砂粒と雲母粒を少量含む	良好	淡黄白色	ヨコナデ	ヨコナデ	底部外面黒斑
				12.2				ケズリ状のヘラナデ	指頭押圧ナデ	
Fig57	474	土器 部類	浅鉢	4.5	精良、微細～細砂粒と雲母微細を少量含む	良好	淡明黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部内面スス様の黒色物
				13				粗いタテハケ目		
								ナデ		
Fig57	475	土器 部類	鉢	5	精良、微細～細砂粒を多く含む。雲母微細と赤褐色粒を少量含む	良好	淡明赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	
				11.4				ナデ	押圧ナデ	
Fig57	476	土器 部類	浅鉢	6.6	良質、細～小砂粒と雲母微細を比較的多く含む	良好	淡明黄灰色	ヨコナデ	指頭押圧ナデ	外側黒斑
				13.6				ヨコハケ目		
Fig57	477	土器 部類	浅鉢	7.0	細～石英小砂粒を多く含む。雲母と赤褐色粒を僅かに含む	良好	(外)淡橙～淡黄灰色 (内)淡橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	外側赤色物(丹後の可能性有 or 化粧土?)
				12.4				ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig58	478	土器 部類	ミニチュア 土器	6.0	良質、雲母微細を少量含む	良好	茶褐色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
				4.4				ナデ	指頭ナデアゲ	
				1.0						
Fig58	479	土器 部類	ミニ チュア 土器	4.5+ α	良質、小砂粒と雲母微細を含む	良好	茶褐色	ハケ目後ヨコナデ	ハケ目、ナデ	
				2.8				指頭押圧ナデ	ナデ	

Tab.39 出土遺物(土器)一覧表 38

Fig	No.	土器 部類	器種	サイズ (器高・口径 ・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig58	480	土器 部類	ミニ チュア 土器	3.4	良質、小～中砂粒 と雲母微細を含む	良好	純い褐色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
				3.8						
Fig58	481	土器 部類	ミニ チュア 土器	3.8	良質、小砂粒を少 量含む	良好	灰褐色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
				3.7						
Fig58	482	土器 部類	ミニ チュア 土器	4.0	良質、小砂粒を含 む	良好	黄灰褐色	フマミ上げ	フマミ上げ	
				4.4				指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig58	483	土器 部類	ミニ チュア 土器	3.9	良質、雲母微細を 含む	良好	黄灰褐色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
				3.8						
Fig58	484	土器 部類	ミニ チュア 土器	9.9+ α	やや粗い、薄～石英小～粗 砂粒を多く含む、雲母微細 と赤褐色を含む黒褐色と 青褐色を帯びに含む	良好	明赤褐色		ヨコナデ、押圧ヨコナデ	
								タテ方向の丁寧なナデ	絞り、ナデ	
Fig58	485	土器 部類	ミニ チュア 土器	4.1	良質、小砂粒を僅 かに含む	良好	純い黄褐色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
				3.6						
Fig58	486	土器 部類	ミニ チュア 土器	4.7	良質、雲母微細を 含む	良好	にぶい橙褐色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
				4.5						
Fig58	487	土器 部類	ミニ チュア 土器	4.8	良質、小～中砂粒 と雲母微細を含む	良好	橙色～黒色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
				4.6						
Fig58	488	土器 部類	ミニ チュア 土器	4.3+ α	精良、雲母微細含 む	良好	橙色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig58	489	土器 部類	ミニ チュア 土器	4.3+ α	良質、小砂粒を少 量含む	良好	灰白色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
				4.0						
Fig58	490	土器 部類	ミニ チュア 土器	4.6+ α	良質、小砂粒を少 量含む	良好	灰色～暗灰色	ナデ	ナデ	
				2.4				ヘラ状工具によるナデ	指頭押圧ナデ	
Fig58	491	土器 部類	ミニ チュア 土器	4.8	良質、微細～小砂 粒少量含む	良好	灰褐色	指頭押圧ナデ	ナデアゲ	
				4.4						
Fig58	492	土器 部類	ミニ チュア 土器	4.8+ α	良質、小砂粒を少 量含む	良好	黄灰褐色	フマミ上げ	指頭押圧ナデ	
				4.0				指頭押圧ナデ		
Fig58	493	土器 部類	ミニ チュア 土器	4.6	良質、雲母微細を 含む	良好	純い橙褐色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
				4.6						
Fig58	494	土器 部類	ミニ チュア 土器	2.5	良質、小～中砂粒 を含む	良好	灰褐色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
				3.5						
Fig58	495	土器 部類	ミニ チュア 土器	4	良質、小～中砂粒 を含む	良好	橙褐色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
				5						

Tab.40 出土遺物(土器)一覧表 39

Fig	No.	土器 部類	器種	サイズ (器高・口径・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig58	496	土器 部類	ミニ チュア 土器	5.7	良質、小砂粒を含む	良好	黄灰褐色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
				5.7						
Fig58	497	土器 部類	ミニ チュア 土器	5.7	良質、小～中砂粒を含む、雲母微細含む	良好	淡橙褐色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
				5.8						
Fig58	498	土器 部類	ミニ チュア 土器	5.6	良質、小砂粒と雲母微細を含む	良好	黄灰褐色～暗灰色	指頭押圧ナデ	ハケメナデ	
				6.6				指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
				3.6				ナデ		
Fig58	499	土器 部類	ミニ チュア 土器	4.0	良質、小砂粒を含む	良好	純い橙色	ナデ	指頭押圧ナデ	
				4.8						
Fig58	500	土器 部類	ミニ チュア 土器	2.8	良質、小砂粒を僅かに含む、雲母微細を少量含む	良好	灰褐色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
				3.8						
Fig58	501	土器 部類	ミニ チュア 土器	2.8	良質、雲母微細を少量含む	良好	にぶい橙色～黒褐色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
				4.1						
Fig58	502	土器 部類	ミニ チュア 土器	3.6	良質、小砂粒を少量含む	良好	灰色～淡黄褐色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
				4.6						
Fig58	503	土器 部類	ミニ チュア 土器	3.8	良質、小～中砂粒と石英片を含む	良好	橙色	ヨコナデ	指頭押圧ナデ	
				7.8				ナデ		
								指頭押圧ナデ		
Fig58	504	土器 部類	ミニ チュア 土器	3.5	良質、小～中砂粒と角閃石を含む	良好	灰黄色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
				6.5						
Fig58	505	土器 部類	ミニ チュア 土器	5.0	良質、小砂粒、角閃石を含む	良好	橙色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
				6.8						
Fig58	506	土器 部類	ミニ チュア 土器	2.6+ α	良質、小砂粒を少量含む	良好	橙色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
				2.8				ナデ		
Fig58	507	土器 部類	ミニ チュア 土器	2.8+ α	良質、小砂粒を僅かに含む	良好	黄灰褐色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
				3.5						
Fig58	508	土器 部類	ミニ チュア 土器	4.4	良質、小～粗砂粒を少量含む	良好	黄灰褐色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
				3.6						
				4.1						
Fig58	509	土器 部類	ミニ チュア 土器	3.6	良質、小砂粒を含む	良好	灰白色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
				2.7						
Fig58	510	土器 部類	ミニ チュア 土器	5.0	良質、小砂粒を含む	良好	灰褐色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
				6.0						
Fig58	511	土器 部類	ミニ チュア 土器	4.7	良質、雲母微細を含む	良好	灰褐色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
				4.6						
				3.9						

Tab.41 出土遺物(土器)一覧表 40

Fig	No.	土器 部類	器種	サイズ (器高・口径・底径)	胎土	焼成	色調	調整(外)	調整(内)	その他
Fig58	512	土器 部類	ミニ チュア 土器	3.4+ α	良質、雲母微細を含む	良好	灰褐色	指頭押圧ナデ	ナデ	
				3.9						
				4.7				指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
Fig58	513	土器 部類	ミニ チュア 土器	5.1	良質、小砂粒を少量含む、雲母微細を含む	良好	淡黃褐色			
				3.6					ナデ	
				3.8				指頭押圧ナデ	ナデ、工具痕	
Fig58	514	土器 部類	ミニ チュア 土器	3.2	良質、小砂粒を含む	良好	灰褐色			
				3.4						
				2.5+ α				ナデ	ナデ	
Fig58	515	土器 部類	ミニ チュア 土器	3.0+ α	良質、小砂粒を少量含む	良好	黄灰褐色	指頭押圧ナデ		
				4.8						
				1.7				ナデ	ナデ	
Fig58	517	土器 部類	ミニ チュア 土器	2.6	やや良質、小砂粒を含む	良好	黄褐色			
				2.6				指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
				3.5						
Fig58	519	土器 部類	ミニ チュア 土器	3.1	良質、小砂粒を少量含む	良好	黄灰褐色	ナデ	ナデ	
				3.2						
				3.4				ナデ	ナデ	
Fig58	520	土器 部類	ミニ チュア 土器	2.8	良質、小砂粒を少量含む	良好	純い黄褐色	ナデ	ナデ	
				3.6						
				3.6						
Fig58	521	土器 部類	ミニ チュア 土器	3.1+ α	良質、小～粗砂粒を少量含む	良好	灰白色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
				3.0						
				4.0+ α				指頭押圧ナデ	ナデ	
Fig58	522	土器 部類	ミニ チュア 土器	4+ α	良質、小砂粒を僅かに含む	良好	棕～棕褐色	指頭押圧ナデ	ナデ	
				2+ α						
				2.2+ α				ナデ	ナデ	
Fig58	523	土器 部類	ミニ チュア 土器	3.2+ α	良質、雲母微細を少量含む	良好	灰褐色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
				3.6						
				3.6				指頭押圧ナデ	ナデ	
Fig58	524	土器 部類	ミニ チュア 土器	3.2+ α	良質、小砂粒を少量含む	良好	灰白色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
				3.6						
				3.6				指頭押圧ナデ	ナデ	
Fig58	525	土器 部類	ミニ チュア 土器	3.2+ α	良質、雲母微細を少量含む	良好	灰褐色	指頭押圧ナデ		
				3.6					ナデ	

526から536は農具である。535はカシの板目材、その他はカシの柾目材を用いる。526から529は方形孔の二又鋸で、526は小型で孔の下方に浅い溝状の凹みがある。片方の歯を欠損する。527は中型で歯の先端を欠損する。孔の形から、柄との角度は銳角である。528・529は大型でいずれも半分しか残存しないが、孔の観察から柄との角度は銳角である。529はやや反っている。530は方形孔の三叉鋸で、左右の歯を欠損する。孔の形から、柄との角度は銳角である。531はナスピ形平鋸で柄を緊縛した痕跡が残る。かなり磨耗しており。全体の半分ほどを欠損する。532は一本長柄多又鋸で、歯は5~6本あったと考えられる。全体に丁寧な加工である。533は方形孔の鋸の頭で、柄との角度は銳角である。534は農具の柄のグリップエンド。535は鋸の柄で、先端部を欠損する。加工は丁寧である。536は鎌の柄で鉄鎌を差し込むための加工がある。

537・538は横柾でヤブツバキの芯持材を用いる。537は擣部に加工痕が残る為、擣部は未使用である。538は欠損が激しく全体の半分ほどが残る。柄の端部にはグリップエンドがつく。

539は堅杵の転用品で、広葉樹の芯持材を用いる。堅杵を作業台に転用後、横柾に再加工の途中で廃棄している。横柾に再加工のため切斷しようとした部分より上側には、作業台として使用した際についたと思われる金属刃物の背による敲打痕が残り、面全体がへこむ。

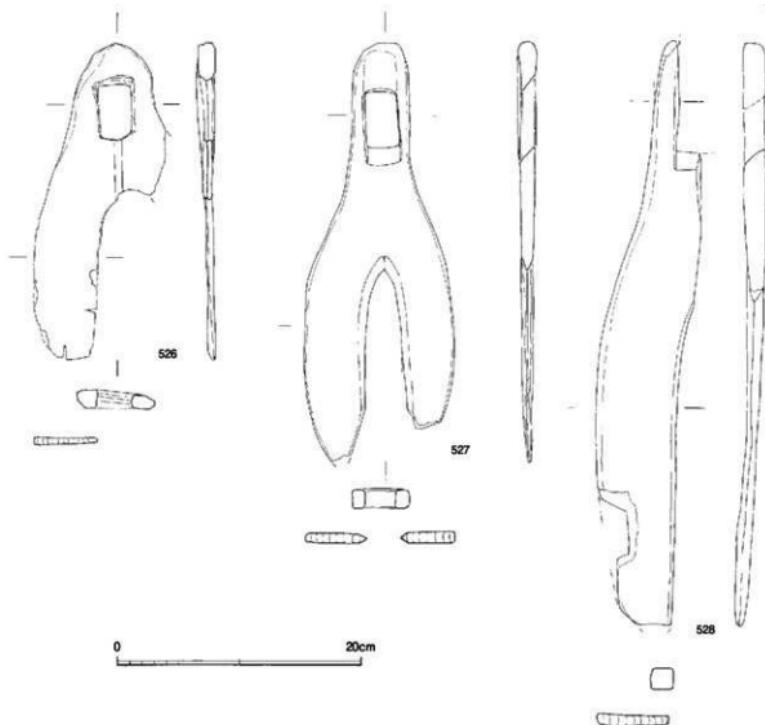


Fig.59 10号河川出土遺物実測図 20 (1/4)

540は作業台で、樹皮付きのアワブキ属の芯持材を用いる。建物の横架材を転用したものである。表面には金属刃物による敲打痕が残る。一方の端部に極短い把手が付く。

541・542は槽である。541は小口部分のみが残存する。542は把手付きで、小口側の半分ほどが残る。543はスギの柵目板を用い、奴鳳状に左右対称になるように成形している。上方の端部には2カ所穿孔がある。544は容器の蓋で、スギのナナメ材を用いて半月状に成形している。紐通しの孔が左右4カ所ずつ開けられている。縁はナナメに切り落としている。545は大足の枠で両端を欠損している。546は加工板材で曲げ物の底板の可能性がある。547・548は容器などの枠材である。

549は組物の端材で、組仕口があるが、細い方の端部側に穿孔があり、もう一方の端部は切断されている。木目がややすく減っており、ハケメ調整具などとして再利用されたものか。550は先端の瘤状に加工された部分に枝が折れた痕跡があり、自在カギとしたが、構材や建築部材であった可能性もある。551・552はタクリ（紡輪連作未製品）の台と軸である。台に軸がささった状態で出土した。台には差込む孔とスリット状の溝があり、スリットと軸の孔が組み合うらしい。553は糸巻きの軸である。554から562は編錘である。いずれも長さ13.5～15cm、幅6～8cm、厚さ5～6cmほどで、広葉樹の芯持材を用いている。

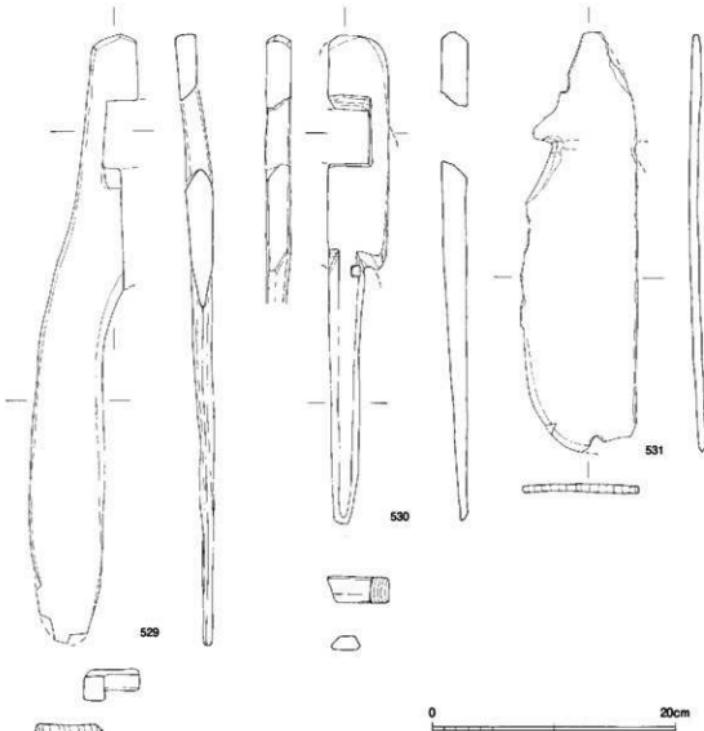


Fig.60 10号河川出土遺物実測図 21 (1/4)

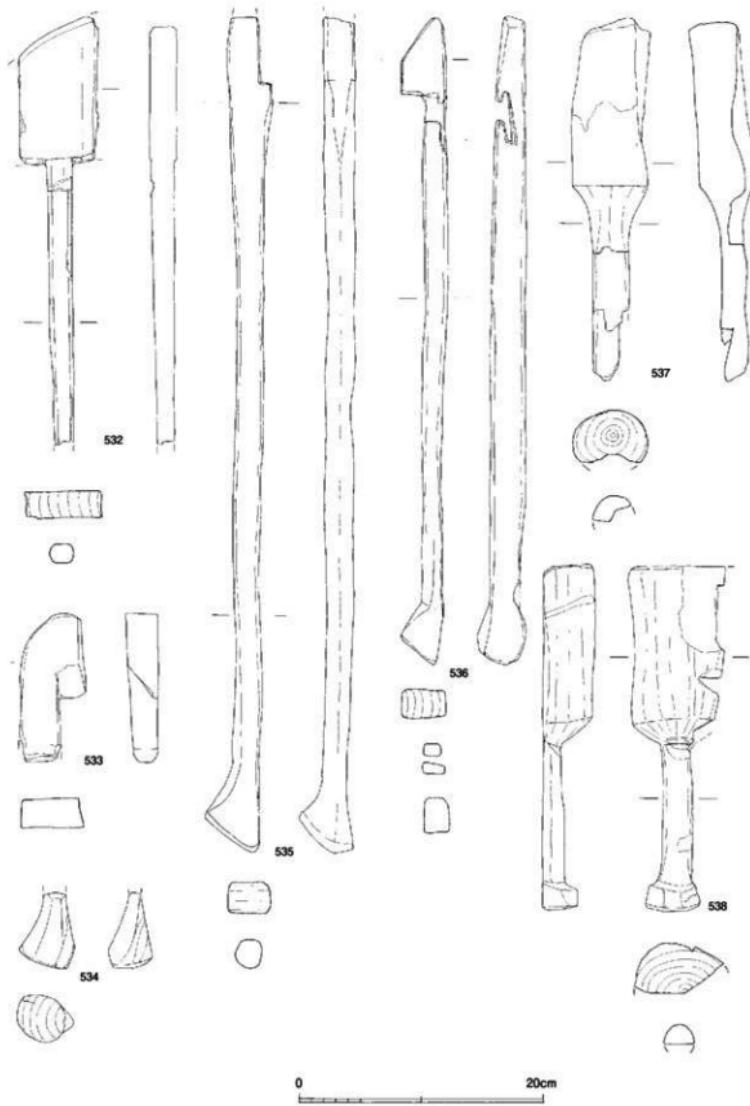


Fig.61 10号河川出土遺物実測図 22 (1/4)

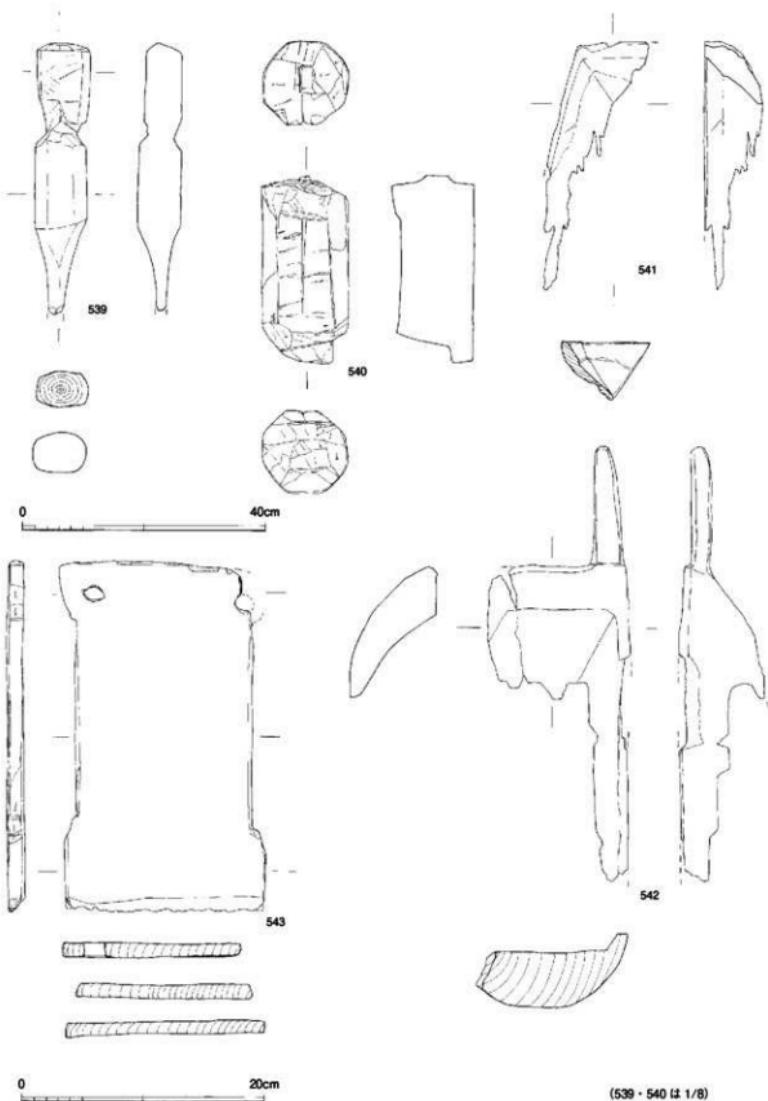


Fig.62 10号河川出土遺物実測図 23 (1/4・1/8)

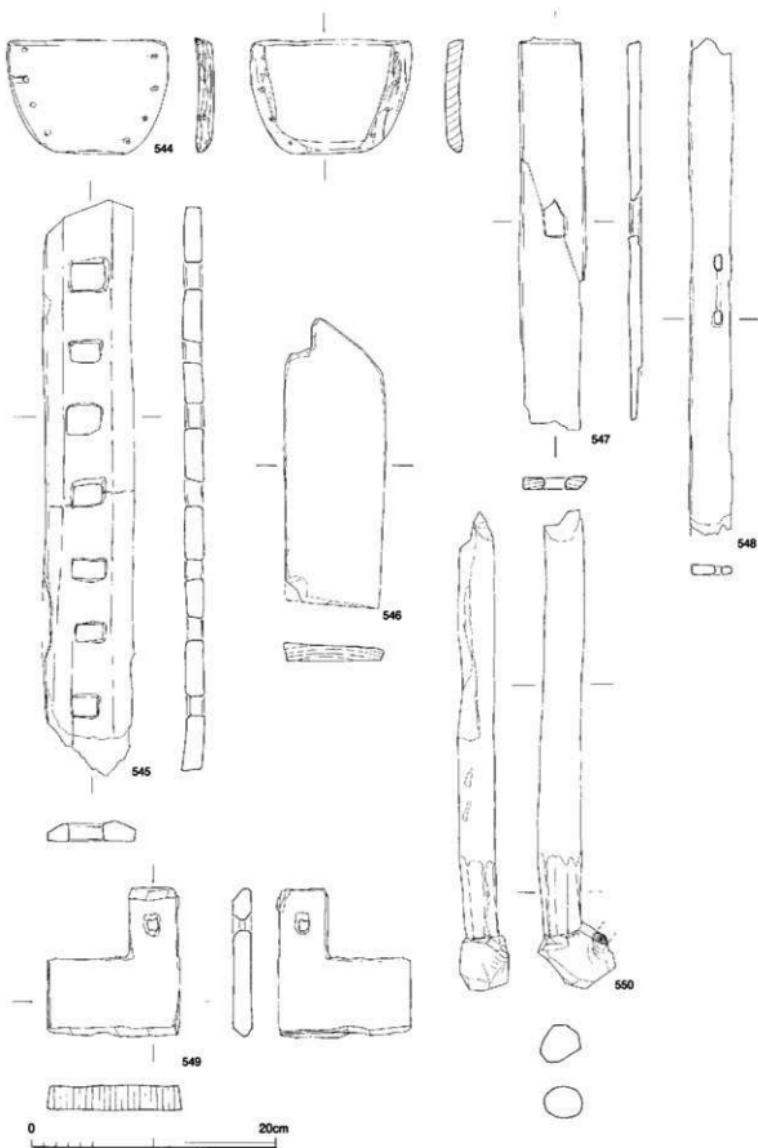


Fig.63 10号河川出土遺物実測図 24 (1/4)

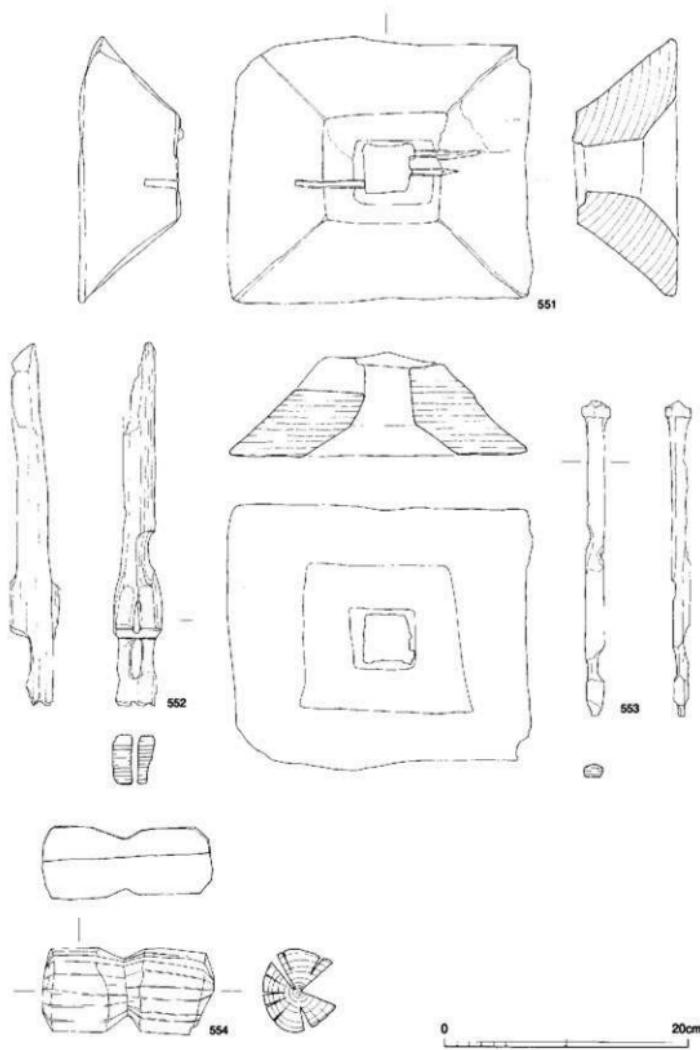
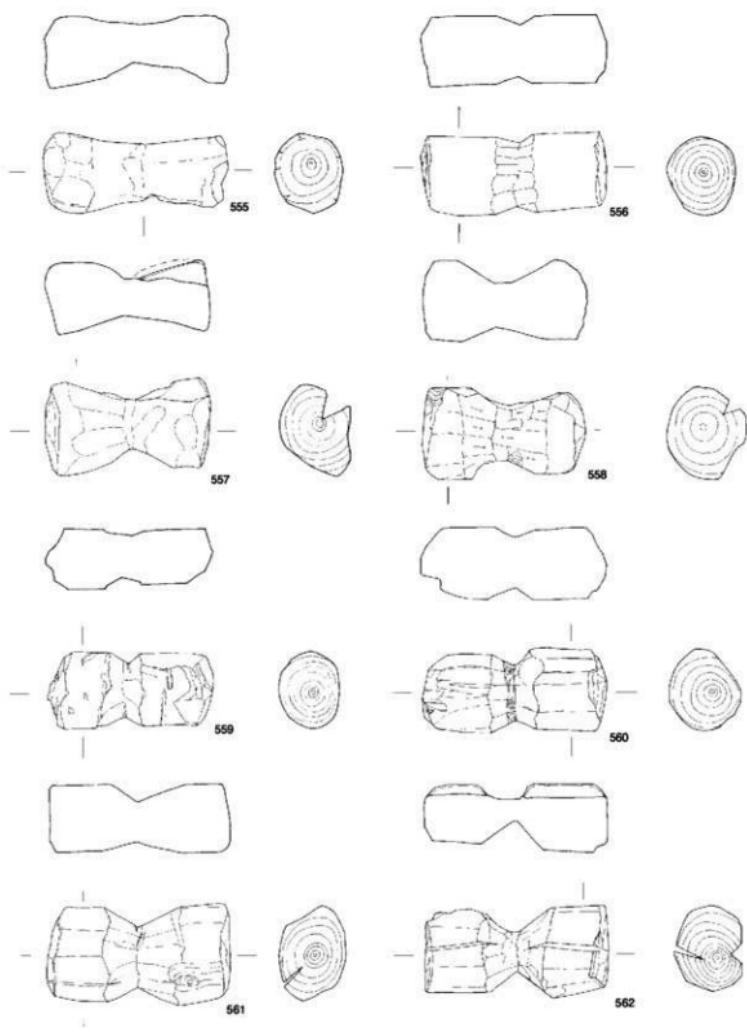


Fig.64 10号河川出土遺物実測図 25 (1/4)



0 20cm

Fig.65 10号河川出土遺物実測図 26 (1/4)

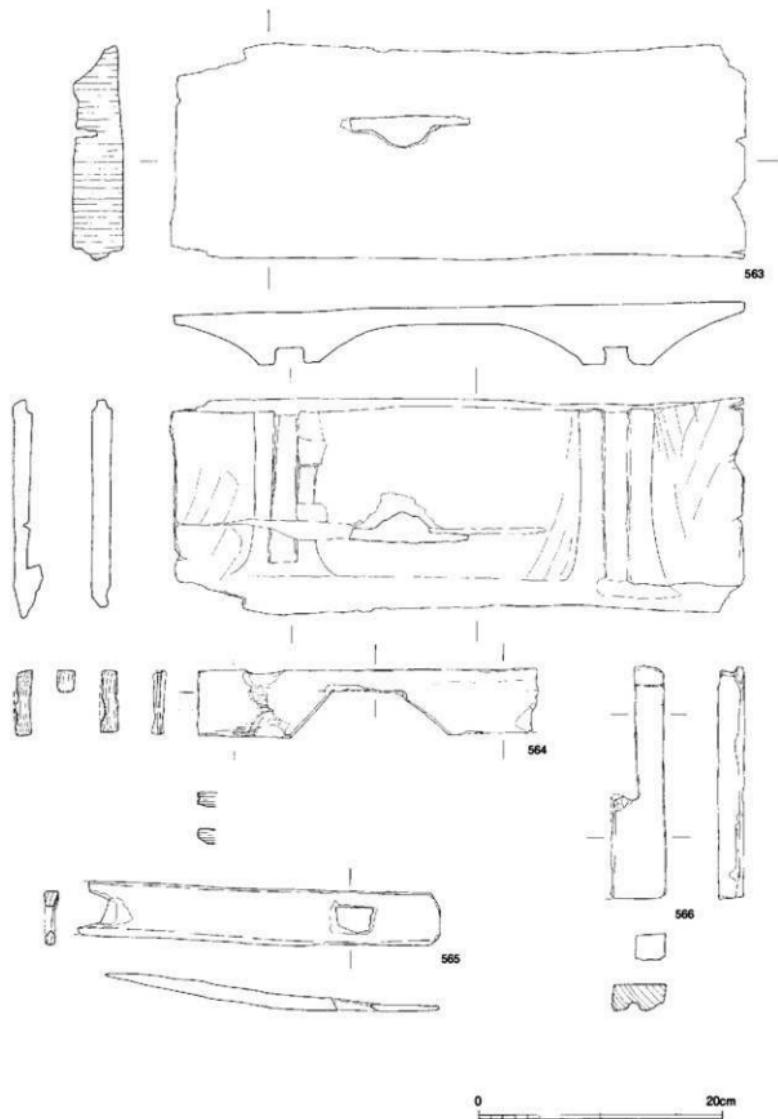
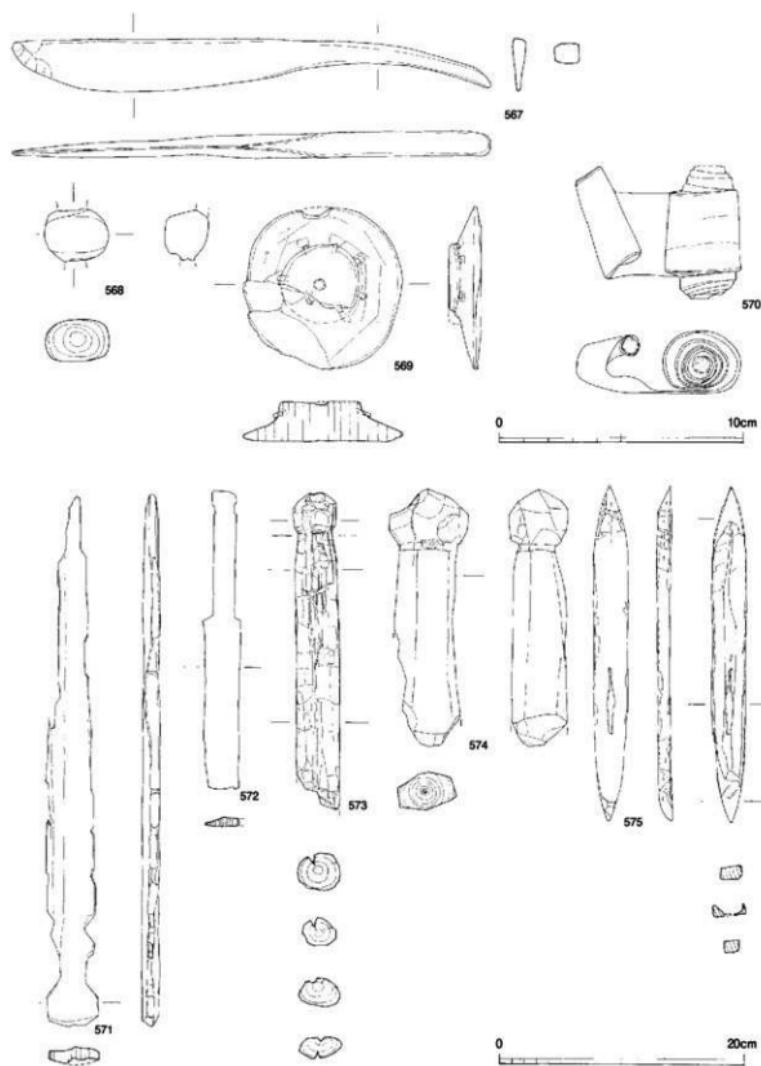


Fig.66 10号河川出土遺物実測図 27 (1/4)



(567~570 は 1/2)

Fig.67 10号河川出土遺物実測図 28 (1/2・1/4)

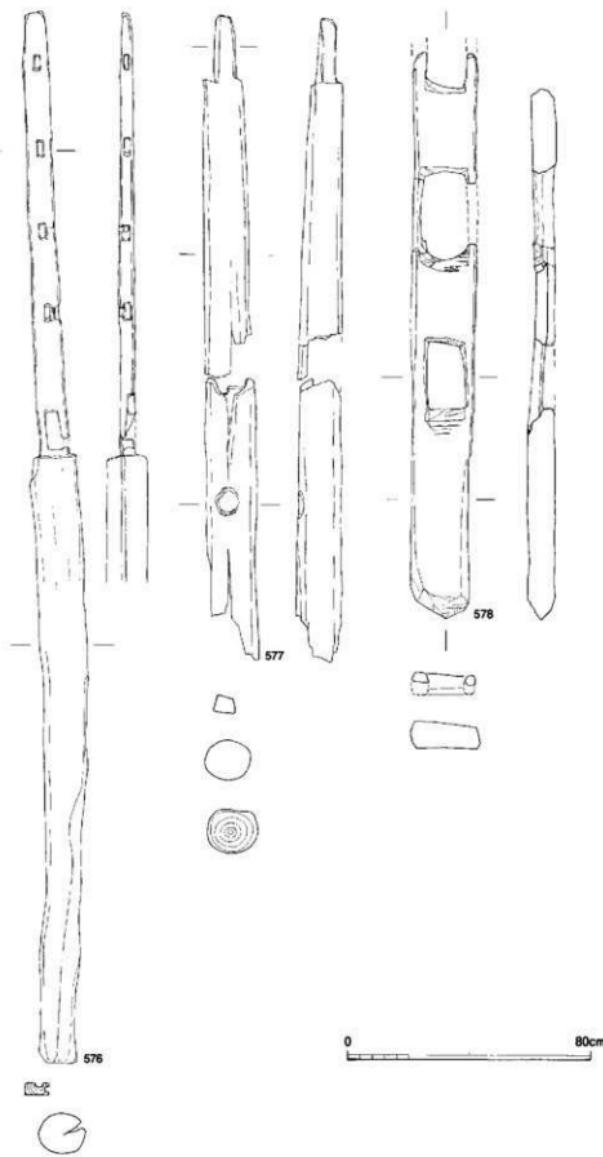


Fig.68 10号河川出土遺物実測図 29 (1/16)

563はスギの柾目材を用いた机の天板で、裏面に蟻じゃくりの溝がある。表面は磨耗している。564は加工板材で、指物の案の脚の可能性があるが、左端に別材を組み合わせるための溝がある。一部火を受けている。565は加工板材で四角の孔があり、机の部品の可能性がある。566は椅子か机の脚と考えられ、細い方の端部に差し込み用の浅い段が作られている。

567はイスノキ製の刀子形儀器としながら、ペーパーナイフなどとしての実用にも耐える。先端部に加工痕が残る。568は芯持材を用いており、球形で上下端部が折れているが、上端部は少し再加工する。串団子状のものが折れたと考えられる。569は蓋の傘軸轆である。本体はカエデ材、傘骨は散孔材である。7本骨である。570はサクラの樹皮を巻いてストックしたもので、両端部に木製の軸が付く。571はスギの柾目材を用いた直串か剣形の形代である。572はスギの柾目材で刀形の形代である。573・574は有頭棒である。573は人形とするには長く、櫛材や建築部材であった可能性もある。575はスギの柾目材を用いた舟形の形代である。両端部と側面に加工痕が残る。

576から587は建築部材である。576はタブノキの芯持材を用いた長ホゾ付きの柱で、長ホゾ部分

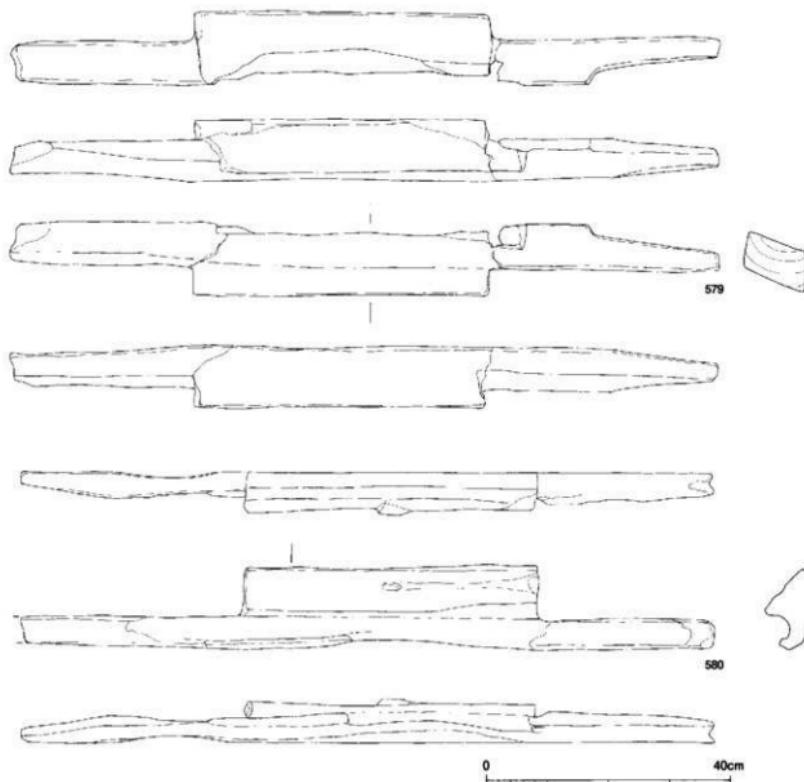


Fig.69 10号河川出土遺物実測図 30 (1/8)

の長さは約146cm、柱部との境に約12cm×48cmの貫孔を設け、長ホゾ部分には直交するホゾ孔を平面側に4個、側面側に5個設ける。ホゾ孔のサイズは約4.8～5.6cm×2.5cm×1.5cmである。形状から隅柱と思われる。577もクスノキの芯持材を用いた長ホゾ付きの柱で、柱の基部側に9.5cm×8cm×1～3mmの円形の二重丸状の凹みがある。二重丸の凹みは均等ではなく、上下側がよく凹んでいる。他の建築部材と組み合わせる為の合印か。長ホゾ部分は欠損しており残りが悪い。578はツブライジの板目材を用いた大引で、一方の端部を三角形に加工している。貫孔の加工痕が明瞭である。

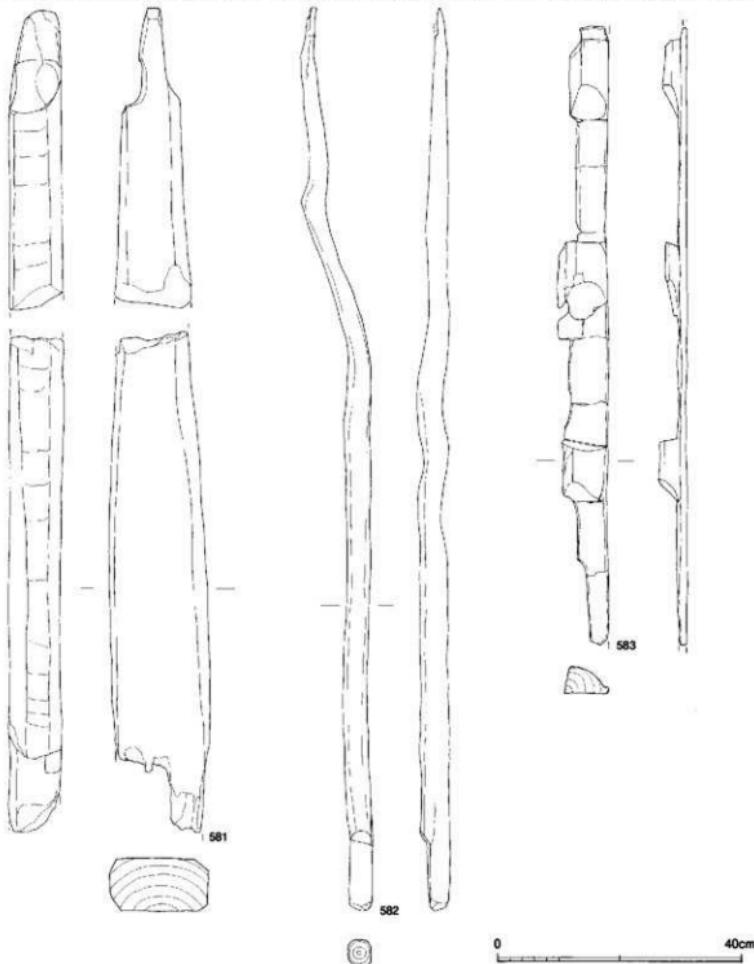


Fig.70 10号河川出土遺物実測図31 (1/8)

579と580は出入り口か窓の周辺部材で、579が楣側、580が蹴放し側である。開口部の幅は、48cm前後である。579には天井側の軸受け部の加工が施される。580は扉の受け部がつく。581は五平の横架材で、カシの板目板を用いる。他の建築部材と組み合わせるために先端に加工が施されている。全体の加工は丁寧である。582はタブノキの芯持材を用いた垂木で、端部に他の建築部材と組み合わせる仕口を設ける。もう一方の端部は欠損している。583は梯子で広葉樹の半割材を用いる。脚をかける部分の奥行きは3cm前後である。584はスギの柾目板を用いた壁材で、縦長の孔が2ヶ所ある。585は針葉樹の柾目板を用いた屋根材か壁材である端部付近に方形の穿孔が、大小二つあり、大きい方は一部欠損している。586は広葉樹の柾目板を用いた屋根材で、端部には粗い切断痕が残る。側面付近に小さな穿孔がある。全体に磨耗している。587はスギの柾目板を用いた箱物か屋根材である。端部は斜めに加工され、付近に方形の穿孔がある。(谷直子)

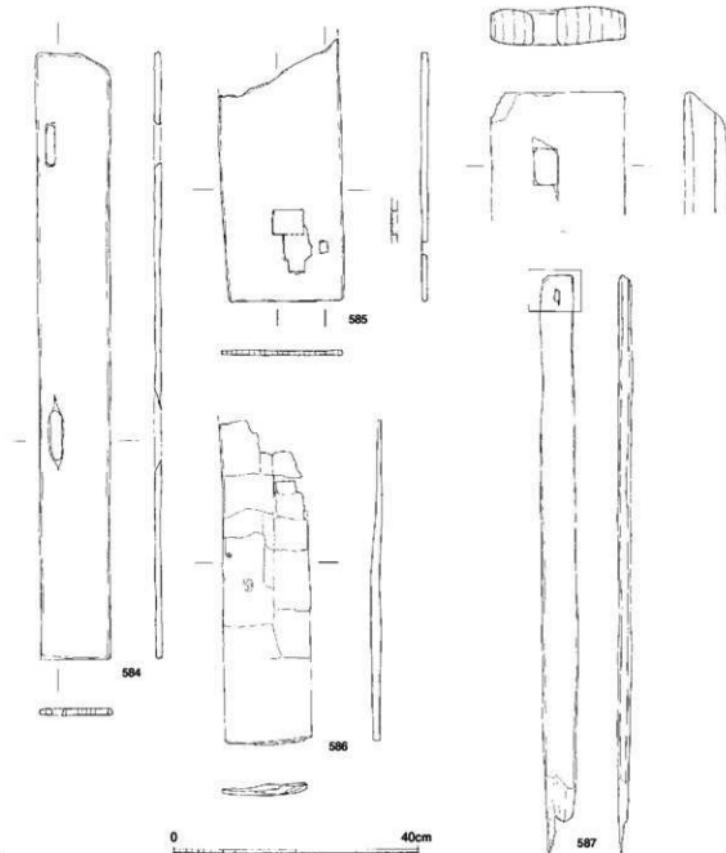
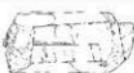
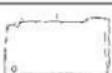
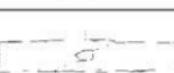
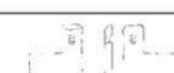
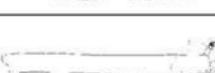


Fig.71 10号河川出土遺物実測図 32 (1/8)

Tab.42 出土遺物(木製品)一覧表 41

遺物	形状	器種	材質	本取り	法量	備考
Fig-59 526		方形孔の二又鋸	カシ	板目	25.8	方形孔の下側はミゾ状に薄くなっている
					8.7	
					1.6	
Fig-59 527		方形孔の二又鋸	カシ	板目	34.2	柄と刃の角度は急丁寧な加工
					12.3	
					1.5	
Fig-59 528		方形孔の二又鋸	カシ	板目	47.8	約1/2を欠損するが裏面に方形孔の痕跡が残る
					12.3	
					1.5	
Fig-60 529		方形孔の二又鋸	コナラ属 アカガシ 栗属	板目	50	柄側から刃部にかけてやや反っている 約1/2を欠損
					6+ α	
					22	
Fig-60 530		方形孔の三又鋸	カシ	板目	39.4	角度のついた方形孔の三又鋸である
					5	
					2.1	
Fig-60 531		ナスピ形平鋸	コナラ属 アカガシ 栗属	板目	34.3	頭部近くに緊縛痕が残る
					9.5	
					7.5	
Fig-61 532		5~6本歯の多又鋸	コナラ属 アカガシ 栗属	板目	35	全体に丁寧な加工
					6.5	
					2.3	
Fig-61 533		方形孔の鋸の頭	カシ	板目	12.2	柄の頭部分のみ丁寧な加工
					5.3	
					2.6	
Fig-61 534		鍔か頭の柄のグリップエンド	カシ?	板目	6.1	丁寧な加工
					4.5	
					3.6	
Fig-61 535		鍔の柄 泥よけ無	カシ	板目	68.2	先端を欠損する 丁寧な加工
					35	
					2.5	
Fig-61 536		鍔の柄	カシ	板目	53	鍔の刃の差込口がつくってある 丁寧な加工
					3.6	
					3	
Fig-61 537		横槌	ヤブツバキ	芯持材	29.5	鶴部に加工痕が残る為 先端は未使用
					6.2	
					4	
Fig-61 538		横槌の半裁品	ヤブツバキ	芯持材	28	欠損が激しい 柄の端部にグリップがつく
					8	
					4.2	

Tab.43 出土遺物(木製品)一覧表 42

遺物	形状	器種	材質	本取り	法量	備考
Fig-62 539		堅材を作業台に転用後横樋に再加工の途中廃棄	広葉樹	芯持材	44.5	敲打された面には金槌刃物の背による敲打痕が残り、面全体がへこむ
					8.7	
					6.5	
Fig-62 540		樹皮付の建物の横架材を作業台に転用	アワブキ属	芯持材	30.5	一方の端部に小さい把手がついており、表面には刃物による敲打痕有
					12	
					13.5	
Fig-62 541		槽	スキ	半削材	40.2	槽の小口側だけが残る
					11.5	
					5.5	
Fig-62 542		把手付槽	コナラ属 アカガシ 栗属	半削材	71.5	把手から小口側が残る欠損が激しい
					23.5	
					0.7 ~ 4.5	
Fig-62 543		曲物	スキ	板目	28.8	奴鳳状に左右対称になるよう成形している、中間の細狭な部分に枠を巻き込んだと考えられる
					16.85 + α	
					1.3	
Fig-63 544		蓋	スキ	ナナメ	9.35	伸縮自在の籠及び袋状容器の蓋容器の組合せのため縁は内側に向かって斜めに加工
					13.25	
					1.2	
Fig-63 545		盛付容器の枠材か大足	ツブラジイ	板目	47	孔の両側は長軸方向に斜めに面取り加工している両端は欠損
					7.2	
					1.5	
Fig-63 546		曲物の床板か大足の枠の可能性	広葉樹	板目	23.7	端部に仕口の加工痕のようなもの有一方の端部を斜めに加工している
					8.3	
					1.5	
Fig-63 547		容器の側板?	広葉樹	板目	32	方形の孔を持つ板材である一方の端部は欠損
					5.3	
					1	
Fig-63 548		容器などの枠材	広葉樹	板目	37	欠損が激しい
					40.6	
					0.8	
Fig-63 549		組物の端材	広葉樹	板目	12.2	組仕口有、穿孔は両面からで下端は切削痕有、ハケ目調整具などとして再利用の可能性有
					10.8	
					2	
Fig-63 550		自在カギ	サカキ	芯持材	39.3	自然木の枝分かれした部分を加工してくぎをつくり出している
					5.5	
					4	
Fig-64 551		タクリの台	スキ	板目	24.5	台形に差し孔とスリットが彫り込まれている27と組み合わせて使用
					21.7	
					8	

Tab.44 出土遺物(木製品)一覧表 43

遺物	形状	器種	材質	本取り	法量	備考
Fig-64 552		タクリの軸	スギ	板目	29.6	26にタケ方向に差込んで使用する
					38	
					4	
Fig-64 553		糸巻き、かせの軸? 儀器としての武器形?	スギ	板目	25.7	先端を面取りして加工。 一方の端部は欠損
					23	
					13	
Fig-64 554		編鍤	シキミ	芯持材	14	ヒビ割れがひどく加工痕は明瞭でないがくびれ部や上下端部は丁寧に加工されたらしい
					7	
					6	
Fig-65 555		編鍤	ティミン タチバナ	芯持材	15.1	全体に磨滅しており 端部にのみ加工痕が残る
					6.7	
					5.6	
Fig-65 556		編鍤	ヤツツバキ	芯持材	15.1	樹皮のない自然木をくびれ部と端部のみ加工している
					6.3	
					5.5	
Fig-65 557		編鍤	ヤツツバキ	芯持材	13.5	土圧で変形している くびれ部と上下端部は加工痕がよく残る
					7.8	
					5.8	
Fig-65 558		編鍤	広葉樹	芯持材	13.2	くびれ部と上下端部は加工痕がよく残る
					7.6	
					6.5	
Fig-65 559		編鍤	サカキ	芯持材	13.5	樹皮付きの芯持材のくびれ部と上下端部は粗く加工している
					6.3	
					4.9	
Fig-65 560		編鍤	サカキ	芯持材	14.8	端部とくびれ部の一部が焼けて黒化している。くびれ部と上下端部は加工痕がよく残り側面も面取り
					6.7	
					5.8	
Fig-65 561		編鍤	ネジキ	芯持材	15	跡と割れが目立つ くびれの加工痕は明瞭 側面を多角形に面取り
					8	
					5.5	
Fig-65 562		編鍤	サカキ	芯持材	15	割れが目立つ 側面を多角形に面取りし 加工痕は明瞭
					7.3	
					5.6	
Fig-66 563		机の天板	スギ	板目	46.5	枝の裏面に縦ミゾを入れて脚を互い違いに差込む 裏面に加工痕が良く残る
					17.5	
					5	
Fig-66 564		加工材	ヒノキ	板目	56.5+ α	指物の案の脚の可能性がある
					27.9+ α	
					1.45	

Tab.45 出土遺物(木製品)一覧表 44

遺物	形状	器種	材質	本取り	法量	備考
Fig - 66 565		板作りの 枠材か 机部品の 可能性	スギ?	板目	29.5	一方の端部が欠損しているが 孔がもうひとつあった可能性が有 変形している
Fig - 66 566		椅子の脚 (机の脚?)			4.5	
					1.2	
Fig - 67 567		刀子形の 儀器?	イスノキ	板目	19	細い方の端部に差込用の段が つくってあり孔に差込んで 組み立てる机の脚と考えられる
Fig - 67 568		球形の儀器			45+ α	
		庄葉樹?			2	
Fig - 67 569		衣笠のろくろ	カエデ属 散孔材	板目	1.97	ベーバーナイフ形の刀子で 非常に丁寧なつくり
					2.1	先端部に加工痕が残る
					1	
Fig - 67 570		樹皮の ストック	サクランボ	樹皮	2.1	球状加工されている
					1.8	串団子状のものが折れたものか?
					1.8	
Fig - 67 571		柵串か劍形の 形代	スギ	板目	6.6	7本骨の衣笠のろくろ部 やや指円形で骨はろくろの軸に むかって差込まれている
Fig - 67 572		刀形の形代			6.4	
					1.6	
Fig - 67 573		有頭棒	フブラジ	芯持材	43.4	
Fig - 67 574		有頭棒			4	欠損が激しい
					1.3	細かく削り込みをいれている
Fig - 67 575		舟形の形代	スギ	板目	24.4	
Fig - 68 576		高床倉庫の 長ホゾ柱			3.1	くびれ部に加工を施す
					0.7	
Fig - 67 577		高床倉庫の 長ホゾ柱	イスノキ	芯持材	25.25	人形とするには長いので 軌状を為すと考えられる
					3.6	下半部は欠損
					3.15	
Fig - 67 578		舟形の形代	タブノキ	板目	20.9	先端部と棒の部分の境には段が 施される
Fig - 68 579		高床倉庫の 長ホゾ柱			6.5	
					4.5	
Fig - 68 580		高床倉庫の 長ホゾ柱	クスノキ	芯持材	27.5	両端部に丁寧な加工が有、船形を つくり出す
Fig - 68 581		高床倉庫の 長ホゾ柱			1.1	
					3	
Fig - 68 582		高床倉庫の 長ホゾ柱	タブノキ	芯持材	34.7	長ホゾの部分と柱の基部側の間に 貫孔有
Fig - 68 583		高床倉庫の 長ホゾ柱			13 ~ 15	ホゾの状態から隅柱と思われる
					16	
Fig - 68 584		高床倉庫の 長ホゾ柱	クスノキ	芯持材	21.9	柱の基部側に円形の二重丸状の ヘコミ有
Fig - 68 585		高床倉庫の 長ホゾ柱			15 ~ 16.5	
					14	

Tab.46 出土遺物(木製品)一覧表 45

遺物	形状	器種	材質	木取り	法量	備考
Fig-68 578		高床倉庫の大引	ツブライ	板目	186	端部を三角形に加工している 孔をあける時の加工痕が明瞭
					18 ~ 20.5	
					7.5	
Fig-69 579		扉か窓など 出入口の 上下相接	広葉樹	ミカン 剝材	116	55と組み合う
					10	
					10	
Fig-69 580		扉か窓など 出入口の 上下取付し鎖	広葉樹	ミカン 剝材	114	54と組み合う
					13.5	
					7	
Fig-70 581		五平の 横架材	コナラ属 アカガシ 栗属	板目	47	他の材木と組み合わせる為に 先端に加工が施されている
					12.5	
					7.5	
Fig-70 582		垂木転用の 杭	タブノキ	芯持材	148 ~ 150	自然木の端部に他の部材と 組み合わせる為の仕口
					45 ~ 5	
					4	
Fig-70 583		梯子	広葉樹	半剥材	101	中央部にスリットが あったかもしない
					82	
					45	
Fig-71 584		壁材	スキ	板目	98 ~ 99	たて長の孔が2ヶ所有
					11.5 ~ 12	
					1	
Fig-71 585		壁材か屋根材	針葉樹	板目	30	四角に穿孔した所が2ヶ所有
					4	
					1	
Fig-71 586		屋根材	広葉樹	板目	53	切断痕有、側面付近に穿孔有
					14.5	
					15	
Fig-71 587		箱材か屋根材	スキ	板目	95.5	穿孔有 端部は斜めに切断されている
					55 ~ 6	
					1 ~ 2	

Tab.47 出土遺物(木製品)一覧表 46

遺物	形状	器種	材質	木取り	法量	備考
2001		板材	広葉樹?	板目	95	加工痕有
					9	
					35	
2003		曲物の底?		板目	40	ホゾ孔、加工痕有
					13	
					2	
2005		棒状材		板目?	85	
					3	
					1	
2006		杭		ミカン 割材	66	一方の先端に杭用の加工有
					7	
					4	
2007		鍔の柄	カシ	板目	76.3	丁寧な加工のある柄
					4	
					18	
2009		棒状材		板目	27	
					4	
					2	
2014		破材 柱材片?			15	
					8	
					4	
2015		緊縛固定の 二又綱（反り 綱）	コナラ属 アカガシ 栗属	板目		
2015		グリップエン ド	カシ?		7	
					5	
					2	
2016		植架材の 断欠品	芯持材		40	
					15	
					8	
2018		杉板片				
2019		檜			5	
					5	
2020		檜の小口		半削材	7	加工有
					12	
					13	
2025 ①		破片 加工材			14	
					7	
					0.6	
2025 ②		破片 加工材			12	
					7	
					0.5	

Tab.48 出土遺物(木製品)一覧表 47

遺物	形状	器種	材質	木取り	法量	備考
2026		柱などの横の受け部の断欠品	サカキ	板付き 芯持材	41.7	
					16	もとは又柱など
					16	
2028		板材 歛			8	幅8cm位
2029		歛の一部か?	カシ	板目	35	
					7	加工有
					0.5	
2030		板材	スギ	板目	12.5	
					4	切断痕有
					1	
2031		破片	スギ	板目板	13	
					4	
					1.5	
2035		板材			26	
					9	
					2	
2037		板材片		板目板	40	
					11	焼けている
					1	
2040 ①		火災住居の 横架材			107	
					7.5	焼跡有
					5.5	
2042		粗段の有る 板目板		板目板	53	
					15	
					3	
2043		鍼の柄				
2044		柱端材		芯持材	47	
					12	土圧で曲がる
					8	
2046		丸木船か槽の 断欠品		角材片	13	
					8	
					3	
2047		柱端材		半削材	54	
					10	
					5	
2048		杭	広葉樹	ミカン 割材	108	
					7	杭用の加工有
					3.5	
2049		垂木を転用し た可能性のある 杭		芯持材	119	
					45~8	杭の頭部に斜めの加工有
					45~8	

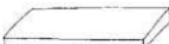
Tab.49 出土遺物(木製品)一覧表 48

遺物	形状	器種	材質	木取り	法量	備考
2054		垂木を転用した杭	広葉樹	芯持材	150	杭の頭側に垂木用の加工痕有
					5~7	
					5~7	
2055		垂木を転用した杭	広葉樹	芯持材	145	樹皮付き自然木 垂木用の仕口加工有
					5~6	
					5~6	
2058		柄				自然木を利用した柄か
2059		杭		芯持材	229	自然木 目立つ加工なし
					6~8.5	
					6~8.5	
2060		杭?			50	
					2	
					2	
2062		形代				
2067		ホゾ孔付の柱材	アワブキ属	芯持材	154	3cm × 2cm × 15cm位の ホゾ孔が少なくとも 2ヶ所以上有
					75~10	
2068		棒状材		ミカン 削材	180 + α	目立つ加工無
					4	
					2	
2068 ①		棒状材			109.5	
					4.5	
					4	
2069		杭		芯持材	87	一方の先端杭用に 加工後焼け 意図的?
					8	
					4.5	
2070		板材? 棒状材	広葉樹	半削材	160+ α	目立つ加工痕なし
					8	
					3.5	
2072 ①~⑤		柱材		芯持材	177	目立つ加工なし
					16	
					14	
2073		杭?		芯持材	200	又柱の再加工?
					7	
					5	
2079		板材片		板目	11	小片である
					3	
					0.6	
2080		火災住居の柱 か 構架材を杭に 転用	広葉樹	板目	90.5	火災住居の構架材転用
					7.5	
					3	

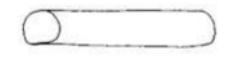
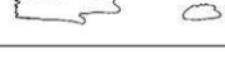
Tab.50 出土遺物(木製品)一覧表 49

遺物	形状	器種	材質	木取り	法量	備考
2082		杭	広葉樹	芯持材	320	
					5~9.5	焼けた自然木 目立つ加工なし
					5~9.5	
2084		杭		ミカン 削材	55	
					5	杭加工有
					5	
2085		杭	広葉樹	芯持材	100	
					11	目立つ加工なし
					3	
2085		板材		半削材	60	
					8	目立つ加工なし
					4	
2086		角材片		半削材	6	
					6	
					3	
2088			乗木を転用し た可能性のあ る杭	芯持材	192	
					45~6.5	樹皮付き自然木の先端に杭用の 加工有、杭加工部の近くに杭加工 によるヘコミ有
					4.5~6.5	
2093		杭		芯持材	48	
					5	杭用の加工有 樹皮付き
					5	
2094		棒状材	針葉樹		30	
					3	加工有
					1.5	
2095			柄のグリップ エンド		3	
					3	
2096		板材	広葉樹	板目板	33	
					6	加工されて丸みを持つ
					0.8	
2099		板材	スキ	板目	37	
					12	加工した孔有
					1.5	
2108		棒状材		ミカン 削材	77	
					5	
					2.5	
2109		杭		芯持材	56	
					3	
					3	
2110			何かを転用し て杭に加工	芯持材	79	
					5.5~8	杭用の加工有 杭の頭部分が焼けている
					5.5~8	
2111-①			構架材を 転用した杭		185	
					8	
					4	

Tab.51 出土遺物(木製品)一覧表 50

遺物	形状	器種	材質	木取り	法量	備考
2111 -②		横架材を転用した杭			67 8 3	
2112		使用された構造部材		追極目	30 13 3	床板の可能性有
2114		桁か梁				火災住居の桁か梁 組仕口有
2116 ①		製材のみの構造部材		板目	50 3 7	
2116 ②		製材のみの構造部材		板目	53 3 7	
2117		柱状材		芯持材	10 12 12	再加工後切断
2118		建築用板材	シイ?	板目	20	
2120		板端片		芯持材	35 10 10	柄部分を少し欠損
2122 -①		端材	針葉樹?	ミカン 剝材	18 7 2	面取り
2122 -②		床材?			50 20 5	大引の可能性有
2123		板材	広葉樹	板目	105 9 1	ホゾ孔有 層根材?
2123		板片		板目	5 12 12	
2124		杭?		芯持材	122 3 3	自然木
2125		板材	広葉樹		20 8 4	加工不明
2126		柱 垂木等の端部		芯持材	13 7 5	

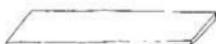
Tab.52 出土遺物(木製品)一覧表 51

遺物	形状	器種	材質	木取り	法量	備考
2127		板片		芯持材	43	板加工有
					5	
					5	
2129		板片		板目	10	加工不明
					5	
					2	
2132		構造部材の 断欠材		板目	41	面加工有
					12	
					5	
2137		板材	広葉樹	ミカン 削材	53	
					11 + α	
					5	
2138		板材	広葉樹	板目	137	加工不明
					4.5	
					0.8	
2139		棒状材	スギ	板目	55 + α	
					6	
					3	
2140		板?		芯持材	20	
					8	
					7	
2142		板材	広葉樹	ミカン 削材	50	
					4	
					1.5	
2145		板材片		板目板	45	
					3	
					0.5	
2146		板材	広葉樹	板目	54.5	手斧痕有
					14.5	
					3.5	
2148		構造部材の端 材(棒材)	ツブライズ	芯持材	28	梁か柵状のもの
					10	
					6	
2151		柱材の転用?	広葉樹	半削材	62	磨滅が激しい
					13	
					7	
2152		板	芯持材		100 + α	火災住居の垂木転用
					7	
					7	
2155		分割製材に出 来なかった端 材		枝材	38	
					28	
					15	
2156		横架材か 垂木を杭に転 用	広葉樹	芯持材	324	削材をのせた為加圧による ヘコミ有
					4.5 ~ 6.5	
					4.5 ~ 6.5	

Tab.53 出土遺物(木製品)一覧表 52

遺物	形状	器種	材質	木取り	法量	備考
2158		杭?	広葉樹	芯持材	86	樹皮付きの自然木 磨滅が激しい
					6~7	
					6~7	
2160		横槌破片	広葉樹?	芯持材	17	加工痕有
					8	
					5	
2161		板材	スギ	板目	23	加工不明
					35	
					0.5	
2162		構造部材の再加工		芯持材	15	再加工後切断
					12	
					12	
2167		板材 端材			48	
					13	
					12	
2169		カセの横木	スギ	板目	21	上下方向である
					3	
					1	
2176		曲げ物、 側板 板材			4	
2180		曲物底板?		板目		加工有
2181		杭		芯持材	70+ α	磨滅していて加工痕不明
					8	
					5	
2181 ①		不明		芯持材	165	橋架材転用
					6~8	
					6~8	
2182		板材		板目		測定不能
2183		杭		芯持材	168	一方の先端に杭用の加工有
					7.5	
					5.5	
2185		屋根板か 壁板	広葉樹	板目	173	平な板材 磨滅が激しい
					12	
					15	
2186		不明		板目	12	
					15~35	
					0.3	
2187		不明		板目	91	
					10.5	
					6	

Tab.54 出土遺物(木製品)一覧表 53

遺物	形状	器種	材質	木取り	法量	備考
2188		火災住居の垂木転用杭		芯持材	64	焼けている。 垂木の仕口の加工有
					4	
					3	
2190		板状材		板目板	28	
					5	
					1	
2192		スキ			15.5	
					3.5	
					1.5	
2193		棒状材	針葉樹	板目	60	
					4	
					2	
2194		火災住居柱を転用した板材		半削材	64	一部が焼けている
					11	
					6	
2196		高床の棟		芯持材	98.5	中央部にへこみがある
					5.3	
					2.3	
2197		長方形の槽の側面	スキ	板目	60	
					13	
					2	
2201		鶴居か敷居の構架材	コナラ属 アカガシ 垂属	板目	82	一方の端部に仕口加工有
					12 ~ 17	
					7	
2202		杭		芯持材	126	一方の先端に杭用加工有
					7 ~ 9	
2203		柱材の転用と思われる杭		芯持材	71	一方の先端に杭用加工有
					11 ~ 12.5	
					11 ~ 12.5	
Ⅱ区 北側		構造部材の一部				炭化材再利用
Ⅲ区 中層		梢円形の大きな槽の小口部分				測定不能
Ⅲ区 中層②		構架材の端部		芯持材	35	
					18	
					15	
Ⅲ区 中層③		棒状材		ミカン 剤材	110+ α	
					7	
					8	
Ⅲ区 中層④				芯持材	30	
					25	
					25	

Tab.55 出土遺物(未製品)一覧表 54

遺物	形状	器種	材質	本取り	法量	備考
Ⅲ区 粘土層		柾		半削材	8	幅4cm長さ8cm位の板状柾の小口部分
					4	
Ⅳ区 中層		柾木の一部		芯持材	6	幅6cmの板状
Ⅴ区 中層		柄のグリップ エンド				
Ⅵ区 中層		一本作りの柄 の柄				
Ⅶ区 中層		容器の側枝 (組加工)				組仕口の加工有
Ⅷ区 中層		工具柄 袋状鉄斧の柄		枝材	4	
SD-10 2-①		多又歫の 端部			8	4本歫の多又歫の歫のみ
					2	
					2	
ラベル なし		板材 白の欠損		板目	30	
					38	
					12	
x 18.19		柾		芯持材	50	丁寧な杭用の加工有 もとは柱材の一部?
					11	
					7	
u-16		柾		ミカン 削材	43	棒材を再加工
					5	
					2	

588は、直径が4.9mm、厚さが2.8～29mm、孔径が1.5～1.7mmの滑石製白玉である。589～592は、2孔を穿つ滑石製のボタン状有孔円盤である。589は直径が19～21cm、厚さは2mm。590は直径が2.4～2.5cm、厚さが2.9mm。591は、直径が3.3cm、厚さは2～2.8mm。孔径は1～1.5mmである。592は未製品で、研磨加工後に中途で穿孔を止めている。593～597は、石包丁である。593は、半月形をした立岩産の輝緑凝灰岩で、刃部は丁寧な研ぎを加えている。594は安山岩。595は、凝灰岩。596は、粘板岩製石包丁の剥離片である。597は、粘板岩製石包丁の未製品で、一部に研磨痕がある。598は、今山産玄武岩の磨製石斧で、厚さは4.1cmある。599は、頁岩製の扁平片刃石斧である。幅は3.5cm、厚さは0.96～1.22cm。600は、安山岩製の丸石で、磨石か。601～603は砥石である。601は砂岩の仕上げ砥で、砥面は、上下と表裏面の4面にある。602は、砂岩の仕上げ砥で、長さが15.9cm、幅が11.1cm、厚さは2.9～4cm。研ぎ方向は、厚い上縁からで中央が凹面になっている。603は砂岩の中砥で、表裏面は良く研ぎ込まれている。(小林義彦)



Fig.72 10号河川出土遺物実測図 33 (1/1・1/2・1/3)

4 古代の調査

古代の遺構は、溝3条と井戸3基のほかに道路遺構を検出したが、分布的には西端と東南部および北部の3ヶ所に分かれて散漫に分布している。このうち道路遺構は、いわゆる官道と称されるもので調査区西端の削平された丘陵の真ん中にあり、丘陵を切り通して北西方へ一直線に延びている。この官道は、その機能廃絶後に狭地の水田として昭和10年代まで可耕されていた。そのため可耕地の確保と水路の掘削により東側の法面は削って拡げられており、緩やかに蛇行していく原状は留めていな。溝は、調査区東南部の遺構が濃密に重複して残る丘陵の東縁に2条と弥生時代の河川の護岸に沿って蛇行する1条がある。このうち丘陵の南東部にある1号溝はおおむね磁北に沿って延びる深い溝で、北端は137号河川の上面を北流する136号溝に接する感があるが、近世の水田化による開削で段差があり確たることは云い難い。この溝はなかほどに陸橋があり、西側の丘陵内と丘陵裾に沿って北流する136号溝の東側に拡がる沖積地上の水田城とを画するかのような感がある。また、丘陵端を北流する137号河川の西岸に沿って蛇行する溝は、中程で二又に分流している。この溝からは古墳時代の壺や甕、高环に混じって平瓦や丸瓦、鬼瓦片のほかに須恵器坏、陶器など多種多様な遺物が出土している。一方、3基の井戸は、調査区中央部の北壁際に並んで2基、南西隅の丘陵縁に1基の2グループに分かれて分布している。このうち北部にある2基の井戸(SE-133・134)は、簡便な素掘りの井戸である。これに対して南東部にある井戸(SE-09)は木枠組の頑丈な井戸で、井戸底には刳り貫きの桶が置かれ、裏込めには平瓦や丸瓦、埠が埋め込まれていた。また、井戸内からは鬼瓦片や平瓦、櫛、曲物、土師器鉢などと皇朝十二銭のひとつである「神功開寶」が出土した。

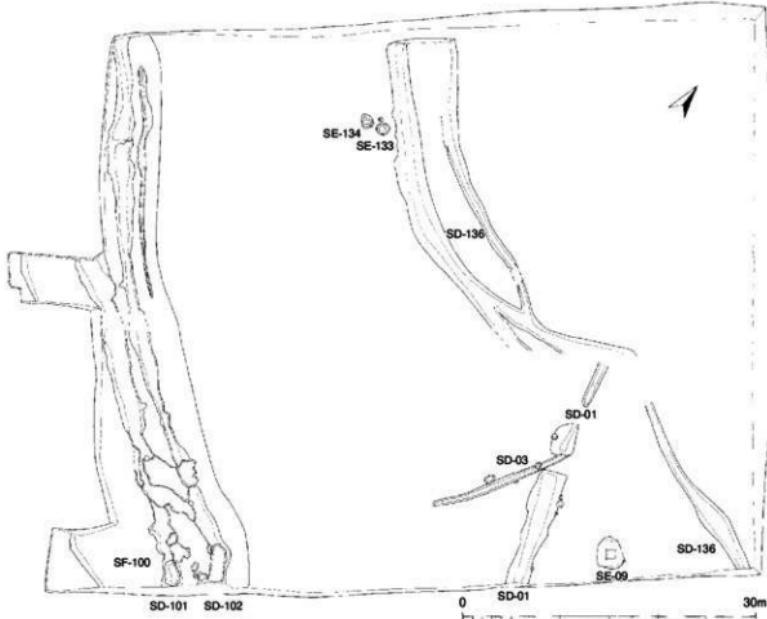


Fig.73 古代の遺構配置図(1/500)

1) 井 戸 (SE)

井戸は3基を検出した。立地的には調査区北部の136号溝に面した丘陵の裾部に並んだ2基(SE-133・134)と南東部の丘陵縁にある1基(SE-09)に分かれて最小単位で分布しているが、旧河道に近いと云う占地的条件には類似性がある。構造的には北部に位置する2基の井戸が簡便な素掘りの井戸であるのに対して南東部にある井戸は木組の井戸である。この井戸(SE-09)は、厚手の木枠を組み合わせた堅牢な木組の井戸で、井戸底の水溜りには刎り貫きの桶を井筒とし、その周りには瓦塼などが裏込めされていた。また、井戸内からは瓦塼や鬼瓦、土師器鉢・壺、櫛、曲物などのほかに皇朝十二銭のひとつである「神功開寶」1枚が出土していることを勘案すると、高畠跡内に存在が推定されている寺域跡との関連性が想起される。

9号井戸 SE-09 (Fig. 74 卷頭PL.4・5 PL.56~58)

9号井戸は、調査区の南東隅にあり、2~35m西には86号土壤や8号木棺墓が位置している。平面形は、東西が275cm、南北が310cmの隅丸方形プランを呈する。壁面は検出面から北壁が125cm、南壁が190cmの深さまで垂直に掘り込んで緩やかなステップを作っている。南壁は、ステップから更に90cmほど緩やかに掘り込んで小さな井戸底に至る。この段違いなステップは掘削時の踏台的な機能を有していたと推考される。井戸側の構築は、はじめにこの小さな井戸底に井筒桶を設置することから始まる。井筒は、クスノキの丸太を刎り貫いた桶の転用品で桶底は粗く削って抜き落としている。桶は直径が51.5cm×57.5cmの楕円形で、上縁には幅が10cm、高さが3cmの把手が付き、その下には4~5cmの方形孔を穿っている。桶高は48cmで、木目に沿ってヒビが入り、それを楔で補修している。楔は消失しているが金属品である。この井筒桶の裏込めには平瓦や丸瓦、塼、転石を詰め込んで桶の安定を図っている。井戸側の木枠は、この井筒桶の上縁から組上げられている。木枠の最下段には、長さが81.4cm、幅が24.5cm、厚さが7.5cmの板材を立て、その上の長さが74.7cm、幅が29.3cm、厚さが6.3cmの板材を積み重ねている。この2枚の板材は、3cm×5.5cmの方形孔を3cmほど抉り込み、そこに楔板を打ち込んで繋いでいる。この井側枠の内法は、北壁が67cm、西壁が62cm、南壁が65cm、東壁が60cmで南北がやや長い台形状をなしている。次に、両端を側縁から削り込んでT字状に仕上げた長さが112~120cm、幅が21~23cm、厚さが5~6cmほどの板材を4枚積み重ねて井戸枠としている。井戸枠は、このT字状の刎り込みを東西壁と南北壁交互に嵌め込んで組み合わせている。T字状の刎り込みを交互に嵌め込むことによって井戸枠は堅牢に組み上がっている。しかし、この木枠の上下段の板材は、片面を平坦に仕上げている。最下層の木枠材は桶上の板材に接し、最上面の枠材は井戸枠の始まりで共に木枠材を組み合わせる必要性が無いからである。この木枠の外側には、幅が12~20cm、長さが75~95cm、厚さが1.5cmほどの薄い板材を10~20枚ほど縦に打ち込んで裏込めをしている。木枠の保護や安定と流入する水の遮過を図ったものとも考えられる。一方、井筒桶の南東側には瓦塼などの裏込めがほとんどないために連結した下の枠材は20cmほど桶底側に沈み込んでおり、井戸側壁の南壁は東壁側に歪みながら沈み込んでいる。この現象は、井戸枠の構築時に既に生じていたようで、枠材の裏には角材や板材を幾重にも横架し、さらに裏込めの立板材を増やすことに因って木枠組全体の安定を図っている。現状では、この木枠組の上部施設は検出されていない。木枠の上端から井戸の検出までは約90cmあり、本来は裏込め土の混入を防ぐ何らかの施設があったものと考えられる。井戸側内からは平瓦や丸瓦、塼などの瓦塼のほかに櫛や土師器鉢、土師器壺などの遺物が出土している。底を貫いた井筒桶の下からは鬼瓦や土師器壺、曲物が出土した。このうち鬼瓦は、上面から出土した鬼瓦片と接合した。また、東壁の最上面の井側枠の上には天平神護元(765)年初鋲の「神功開寶」が1枚棚の上に置くようにして置かれていた。(小林義彦)

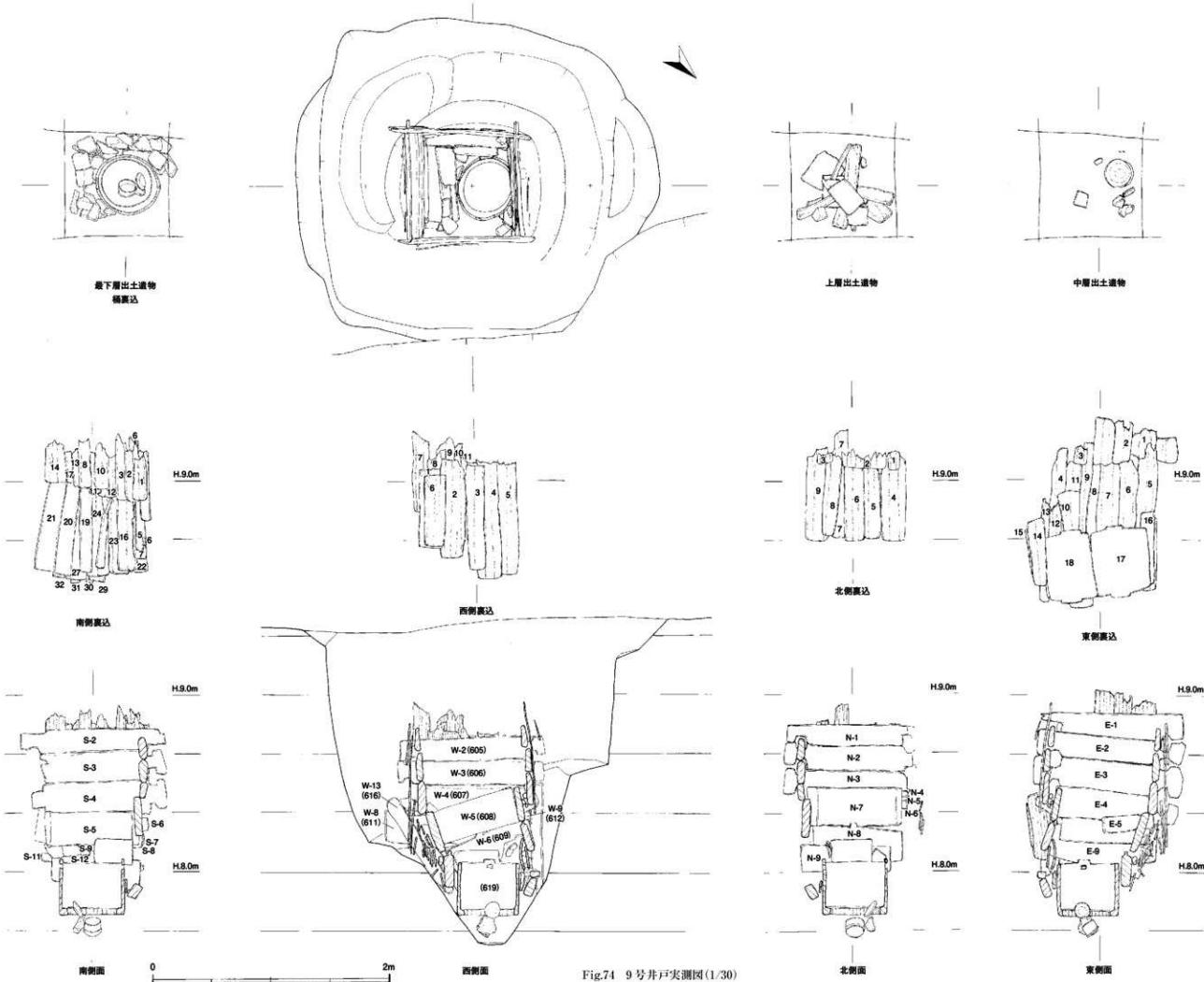


Fig.74 9号井実測図(1/30)

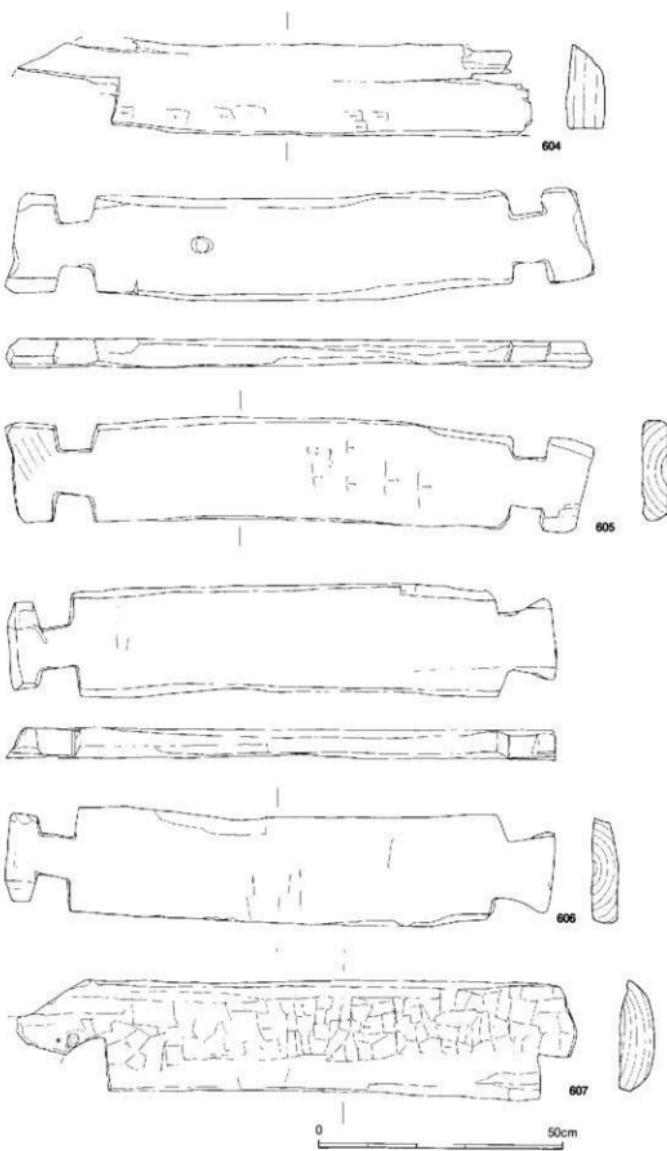


Fig.75 9号井戸出土遺物実測図 1 (1/10)

出土遺物

(Fig. 75 ~ 106 PL. 56 ~ 58)

井戸は、最下面に底を抜いた桶を設置し、その上に板を組み上げて方形の井戸枠を構築している。井戸枠を固定するために裏込板が差し込まれている。以下に井戸枠に用いられた板材と裏込に使用された板材について説明する。

604 ~ 618 は西側井戸枠である。発掘時に上から順に W - 1 ~ W - 15 と番号をつけて取り上げた。604 は広葉樹の板目板で欠損が激しいが、607 と同様の加工をして南北の枠材と組み合うようにしていたと考えられる。表面には少し加工痕が残る。縦 19cm、横 154cm 以上、厚さ 4.1cm である。605・606 はクスギの板目板で、両端部を左右から削り取って、T 字形に加工して南北の枠材と組み合うようにしている。T 字部分は左右対称ではなく、一方が大きくもう一方が小さい。側面は全体に丸みをもって面取りしており、なめらかに仕上げている。表面の加工は丁寧であるが、一部にヤリガンナの加工痕が残る。厚みも 5.2 ~ 5.3cm ほどで加工も丁寧なので、床材などの建築部材を転用した可能性がある。605 は T 字部分に鋭利な刃物痕が残る。表面にはヤリガンナ痕の他に幅 1.5cm くらいの工具痕が見られる。縦 20.8cm、横 12.1cm、厚さ 5.3cm である。606 は一方の T 字部分の張り出しが弱く、逆三角形を呈する。縦 23.8cm、横 11.26cm、厚さ 5.2cm である。607 は広葉樹の板目板で、端部の一部をナメに切り落とし

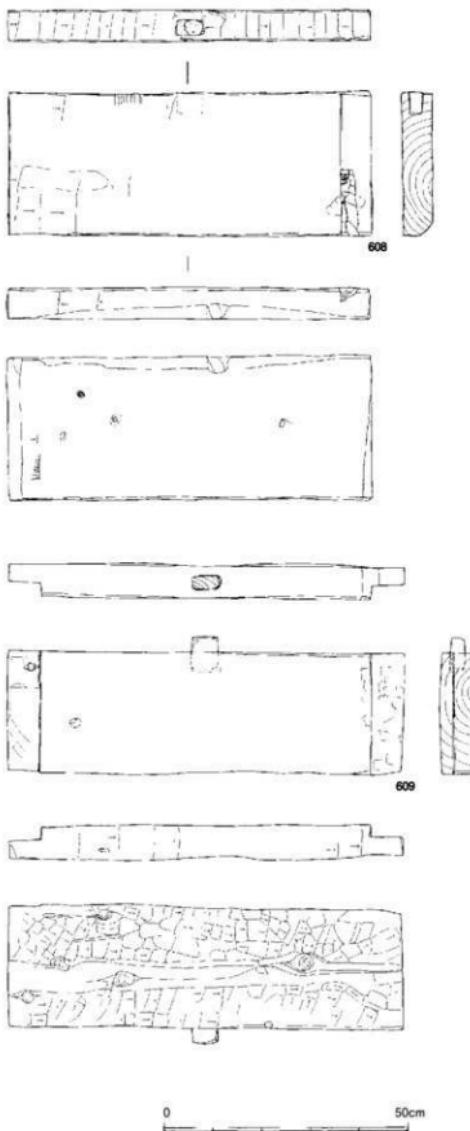


Fig.76 9 号井戸出土遺物実測図 2 (1/10)

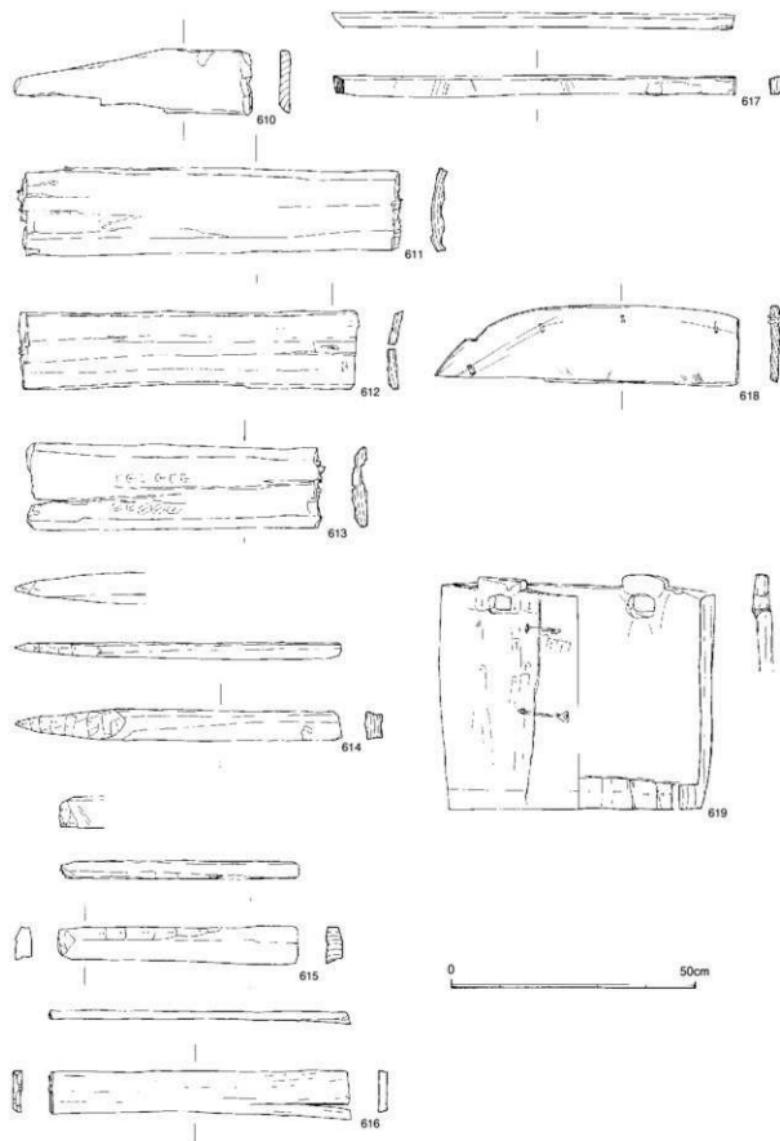
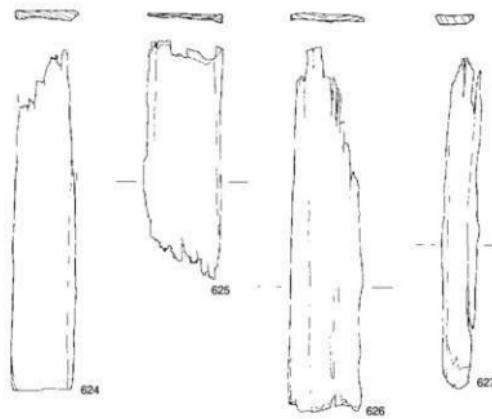
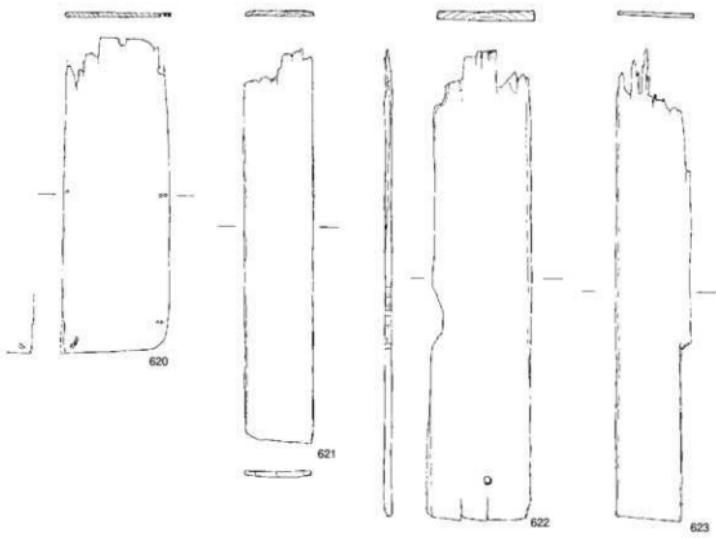


Fig.77 9号井出土遺物実測図3 (1/10)



0 50cm

Fig.78 9号井戸出土遺物実測図4(1/10)

先端部はもう少し長くのびる。反対側から抉込みを入れている。抉込みの加工は粗雑である。もう一方の端部は欠損している。南北の枠材と組み合うようにしている。表面に手斧やヤリガンナの加工痕が明瞭に残る。裏面はやや丸く、平坦ではない。縦が23.8cm、横が114.5cm以上、厚さは7cmである。608・609はスギの板目板で、608の側面に凹部、609の側面に凸部をつくり、組み合うようになっている。608の端部には、計画線の浅い彫り込みと、途中まで削り取ろうとした痕跡があり、609のような断面形にしようとしたが、変更されたものと思われる。全体に丁寧に加工しており、もとは床材などの建築部材を転用したものであろう。側面には加工痕が観察できる。側面の凹部は本体を割り貫いて作り出している。凹部のサイズは長さ6.0cm、幅3.2cm、奥行き4.6cmである。裏面には他の板材と組み合わせた際に付いたと思われる圧痕が残る。全体のサイズは縦が29.3cm、横が74.7cm、厚さは6.3cmである。609は608より長く、両端部をそれぞれ幅7~8cmほど削り取って段を作り出しており、ここに南北の枠材がはまるものと考えられる。段の低くなった部分は加工痕が残る。表面は比較的丁寧に加工しており、もとは床材などの建築部材を転用したものであろう。裏面は手斧やヤリガンナの加工痕が明瞭に残る。裏面の中央部は少しくぼんでおり節が見られる。側面の凸部は本体を割り貫いて、そこに別材を嵌め込んでいる。別材は長さが5.2cm、幅が3.0cm、奥行きは3.4cm以上で、長さ、幅とも4~5mmほど大きい割り貫き孔に嵌め込んでいる。全体のサイズは縦25cm、横81.4cm、厚さ7.5cmである。610は不定形の針葉樹の柵目板で、一方の側面は粗く二次加工されているが、もう一方の側面は欠損している。端部は粗く切削した痕跡が残る。縦が15cm、横が48.8cm、厚さは2.1cmである。611は広葉樹の板目板と思われ、両端に粗い切削痕が残る。屋根材の転用である。縦が18cm、横が79.2cm以上、厚さは2.4cmである。612は針葉樹の板目板で、端部付近に長さ8mm、幅8mmほどの穿孔があり、その近くに金具で留めた圧痕が残る。屋根材を転用しており、両端部を切断して井戸枠にあう長さにしている。縦が16cm、横が70cm以上、厚さは19cmである。613は針葉樹の板目板で、611と同様に両端に粗く、折り取ったような切断痕が残る。屋根材の転用である。表面中央部にヤリガンナ痕が残り、板材にするために表面を削り取った痕跡がよく分かる。縦が17.7cm、横が61.2cm以上、厚さは3cmである。614は針葉樹の板目材を用いた断面四角形の杭の転用材で、先端部に杭の加工痕がよく残る。縦が6.4cm、横が66.8cm、厚さは3.4cmである。615は針葉樹の板目材を用いた不定形の棒状材で、ヤリガンナ痕が少し残る。一方の端部には加工痕がよく残る。縦が7.7cm、横が49cm、厚さは3.5cmである。616は針葉樹の板目材を用いている。屋根材の転用と考えられ、両端部を切断して井戸枠にあう長さにしている。本来は横幅も広かったと思われる。端部の切削痕がよく残る。縦が10cm、横が62cm、厚さは1.7cmである。617は針葉樹の板目材を用いており、一方の端部をナメに加工した棒状材で、もとは箱物などの枠材であった可能性がある。縦が4.3cm、横が82.7cm、厚さは2.9cmである。

618はスギのナナメ材を用いた曲物の底板を利用しておらず、直径6mmほどの2つの孔が4カ所あ

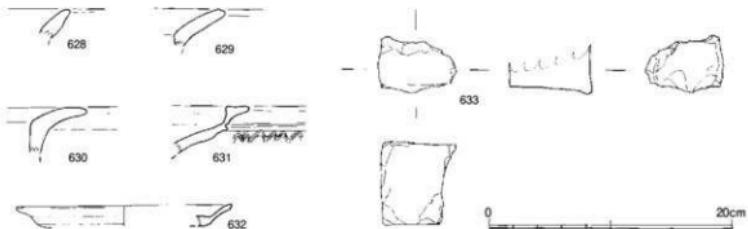


Fig.79 9号井戸出土遺物実測図5(1/4)

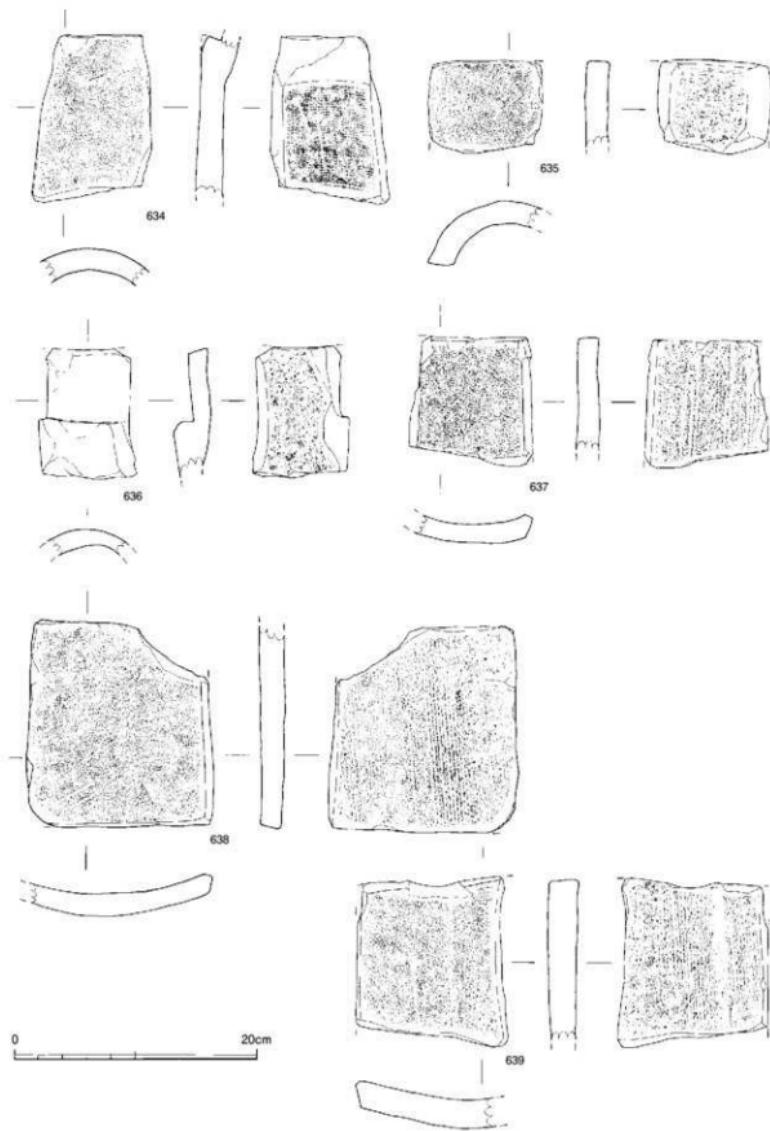


Fig.80 9号井戸出土遺物実測図 6 (1/4)

り、孔に巻かれた桜の樹皮紐が残る。曲物製作時の計画線と思われる刃キズが見られる。一方の端部は直線的に切断されており、井戸枠にあう長さに再加工している。先端側のカーブした側面に、少し段があり、加工されたものであるが、本来の曲物の底板としての加工か、二次的なものかは不明である。縦が16cm、横が62.2cm、厚さは1.8cmである。

619は井戸桶である。クスノキの柾目材を使用している。短径が51.5cm、長径が57.5cmの楕円形で、最大高は48.3cmである。厚さは側面で2.6cm、底部で6.6cm。口縁部付近に縦・横とも4~5cmの隅丸方形の孔があり、その上部に2~3cmのミミが付き、把手状となる。縦方向のヒビには2カ所の補修痕があり、貫通しない穿孔と横方向の圧痕が残る。金具で留めていた痕跡である。底部は井戸桶として使用する際に削り貫かれており、その際の加工痕がよく残る。削り貫きの加工は粗雑である。表面にも加工痕が残る。

620~627は西側井戸枠の裏込板である。いずれも長辺が縦方向になるように差し込まれていた。発掘時の状況もあり、いずれも一方の端部の劣化が激しい。620はスギの柾目材を用いた曲物の底板を利用している。直径5mmほどの2つの孔が4カ所あり、一部に孔に巻かれた桜の樹皮紐が残る。加工は丁寧である。621は針葉樹の板目板で、端部を切断した跡が明瞭に残る。622は広葉樹の板目板と思われ、端部付近に長さ1.4cm、幅1.4cmほどの穿孔があり、屋根材などを転用したものである。側面に12cmほどにわたって削り込んだ加工痕があるが、屋根材としての利用時のものか、二次的なものか不明である。623・624は針葉樹の板目板を用いた加工板材である。いずれも端部に丁寧な切削痕がある。625から627は板材であるが摩滅が激しい。625は針葉樹の板目板と思われる。626・627は広葉樹の板目板と思われる。

東側井戸枠は発掘時に上から順にE-1~E-9と番号をつけて取り上げた。

E-1~E-3は604から606と同様に、両端部を左右から削り取ってT字形に加工し、南北の枠材と組み合うようにしている。側面も面取りしてやや丸く仕上げる。E-1は広葉樹の板目板で、縦23.0cm、横122cm以上、厚さ6cmである。一方の端部は欠損している。E-2は広葉樹の板目板で、縦22cm、横115cm、厚さ4cmである。E-3はツブラジイの板目板で、縦が26cm、横が112cm、厚さは5cmである。E-4は607と同様の形状で、端部のナナメに切り落とした部分は、加工が粗い。側面は丁寧な加工で面取りしている。全体の半分を欠損していると考えられ、一方の端部も欠損している。ツブラジイのナナメ材を用いており、縦が13cm、横が113.5cm以上、厚さは4.2cmである。

E-5は針葉樹のナナメ材を用いた転用材で、断面台形になるよう平坦面を作り出した部分の加工は粗く手斧痕やヤリガニナ痕が残る。縦が14.5cm、横が37.3cm、厚さは3.5cmである。E-6・E-7は箱物か屋根材の転用と思われる角材で、加工痕が明瞭である。E-6は針葉樹の板目材を用いており、一方の端部をナナメに切り落とす。縦が5.5cm、横は80cm、厚さは3.5cmである。E-7は針葉樹の柾目材で、617と同様に一

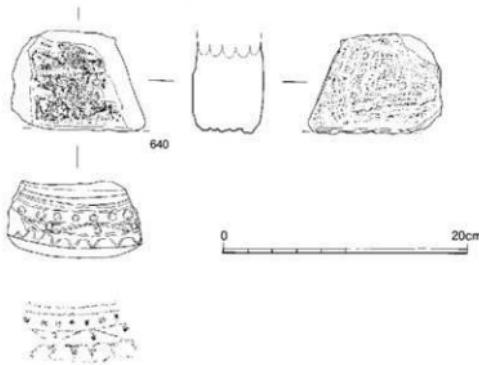


Fig.81 9号井戸出土遺物実測図7(1/4)

方の端部をナナメに切り落とし、もう一方の端部に向かって細くなるように側面を削っている。縦が6.5cm、横が82cm、厚さは7.2cmである。E-8・E-9は608・609などと同様の加工をしている。E-8は針葉樹の板目板を用いており、側面の凹部は本体を削り貫いて作り出している。凹部のサイズは長さが7cm、幅が3.5cm、奥行きは4cmである。裏面の加工痕は明瞭である。全体のサイズは縦が28.7cm、横が74cm、厚さは6.5cmである。E-9は針葉樹の板目板を用いており、両端部をそれぞれ幅6.5cmほど削り取って段を作り出しており、ここに南北の枠材がはまるものと考えられる。表面は比較的丁寧に加工してある。裏面は手斧やヤリガンナの加工痕が残る。裏面の中央部は芯に近いため少しくぼんでいる。側面の凸部は本体を削り貫いて、そこに別材を嵌め込んでいる。別材は長さ5cm、幅2.3cm、奥行きは3.5cm以上で、長さ、幅ともやや大きい削り貫き孔に嵌め込んでいる。全体のサイズは縦が25cm、横が81cm、厚さは6.7cmである。

東側井戸枠の裏込板はNo.1～19まである。ほとんどが針葉樹の板目材で、穿孔があるものや途中から摩耗の度合いが異なっているものがあり、屋根材を転用したものであると考えられる。一部に自然木や角材も利用している。

No.1・No.2・No.4・No.5・No.8・No.9・No.12・No.14・No.15・No.19は針葉樹の板目板の加工板材である。残存状況は悪い。No.4は端部を折り取っているが、付近にノコ状のものでナナメ方向に付けた計

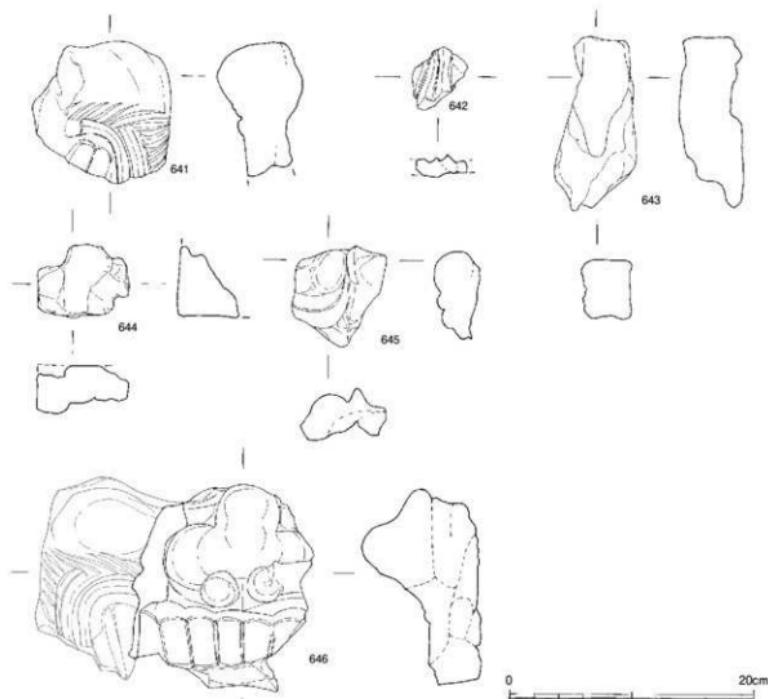


Fig.82 9号井戸出土遺物実測図8(1/4)

画線と思われる痕跡が残る。No.5・No.14は端部に切断痕が残る。No.3は芯持材で欠損が激しい。No.6・No.7・No.11・No.13は穿孔のある板材で、屋根材の転用と思われる。No.6は針葉樹の板目板で、穿孔部のサイズは長さが9mm、幅が8mmで円形である。No.7は針葉樹の柾目板で、穿孔部のサイズは長さが9mm、幅8mmで円形である。No.11は針葉樹の板目板を用いており、穿孔部のサイズは長さが9mm、幅9mmの方形である。端部には切断痕が細かく残る。No.13は針葉樹の板目板を用いており、穿孔部のサイズは長さ2.5cm、幅1.5cmと縦長である。No.10は針葉樹の柾目板を用いており、表裏とも加工痕が明瞭に残る。両端部は欠損している。No.16は針葉樹の板目材を用いた角材か厚い板材の一部である。No.17・No.18は針葉樹の板目材で奴鳳状の形をしており、手斧痕やヤリガンナ痕が明瞭に残る。転用材と考えられるが、そのまま裏込板に利用しており、再加工の痕跡は見られない。

南側井戸枠は発掘時に上から順にS-1～S-12と番号を付けて取り上げた。

S-1は針葉樹のナナメ材を用いたあまり加工痕の見られない不定形の板材で、瘤や節もそのまま残る。縦15cm以上、横53cm以上、厚さは4.3cm以上である。S-2からS-4は広葉樹の板目板で、605・606などと同様に両端部を左右から削り取ってT字形に加工し、東西の枠材と組み合うようしている。側面も面取りしてやや丸く仕上げる。S-2には一方の端部付近に不自然な加工痕が残る。全体の半分弱を欠損している。縦20cm以上、横122cm、厚さは4cmである。S-3は一方の端部が欠損している。T字部分は左右対称ではない。縦は26.5cm、横は101.5cm以上、厚さは4.5cmである。S-4は縦29.5cm、横111.5cm、厚さ5.7cmである。S-5とS-12はいずれも針葉樹の板目材で、608・609などと同様の加工をしているが、S-12の短くて平坦な板材に凸部を、S-5の長く段差のある方に凹部を作り出しており、西側と組み合わせるため凹凸が逆になっている。S-5は両端部をそれぞれ幅6.5cmほど削り取って段を作り出しており、ここに東西の枠材がはまるものと考えられる。側面の凹部は本体を割り貫いて作り出している。凹部のサイズは長さが5.5cm、幅が約3cm、奥行きは5cmである。

裏面の加工痕は明瞭である。全体のサイズは縦が30cm、横が80cm、厚さは6.5cmである。S-12は針葉樹の板目板を用いており、表面は比較的丁寧に加工してある。裏面は加工痕が少し残る。裏面の中央部は芯に近いため少しくぼんで節がある。側面の凸部は本体を割り貫いて、そこに別材を嵌めて、そこに別材を嵌め

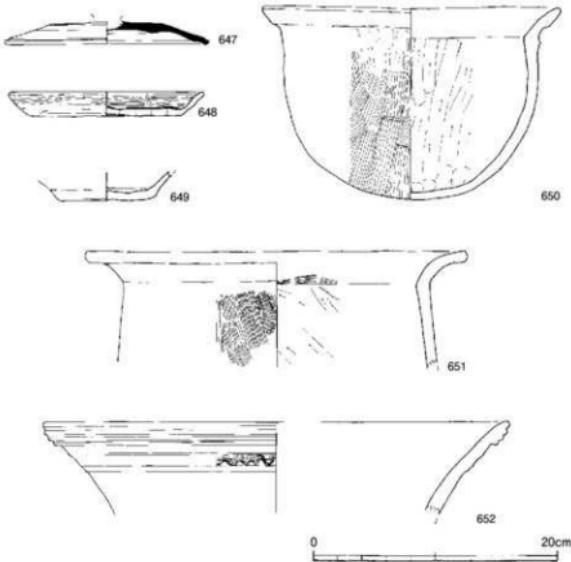


Fig.83 9号井戸出土遺物実測図9(1/4)

込んでいる。別材は長さ55cm、幅2.2cm、奥行きは4.5cm以上で、長さ、幅ともやや大きい割り貫き孔に嵌め込んでいる。全体のサイズは縦が24.3cm、横が74cm、厚さは6.7cmである。S-6からS-9は幅12~14cmほどの加工板材でS-6・S-7は摩耗が激しい。S-6は針葉樹の板目板で、縦が12cm以上、横80cm以上、厚さは3cmである。S-7は針葉樹の板目板で、縦14cm、横82cm以上、厚さ2cmである。S-8・S-9は針葉樹の板目板で、加工痕が明瞭である。S-8は端部に粗い切断痕が残る。縦12cm、横62cm以上、厚さは2.8cmである。S-9は端部に粗い切断痕が残る。一方の端部は欠損している。縦13.8cm、横50.2cm以上、厚さ3cmである。S-10は針葉樹の板目板で、縦が1.1cm、横が1cmの小さな穿孔のある板材で、611と同様に屋根材の転用の可能性が高い。一方の端部と側面は欠損する。縦9.5cm以上、横68cm以上、厚さは1.8cmである。S-11は箱物か屋根材の転用と思われる角材で、617と同様に針葉樹の板目材を用いている。一方の端部はナナメに削り、もう一方は先端が細くなるように削っている。加工痕が明瞭である。縦7.5cm、横87.5cm、厚さは6cmである。

南側井戸枠の裏込板はNo.1から49まであり、そのなかで一部計測ができなかったものがある。他の面の裏込板と比べて南側だけが枚数が極端に多い。ほとんどが針葉樹の板目板で、穿孔があるものや途中から摩耗の度合いが異なっているものがあり、それらは屋根材を転用したものであると考えられる。それ以外でも加工された板材がほとんどであり、建築部材などの転用材である。

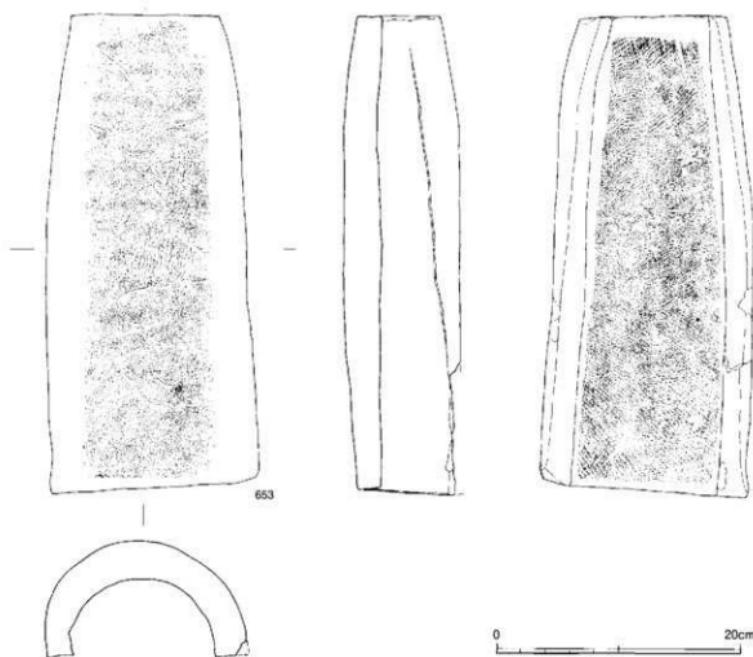


Fig.84 9号井戸出土遺物実測図 10 (1/4)

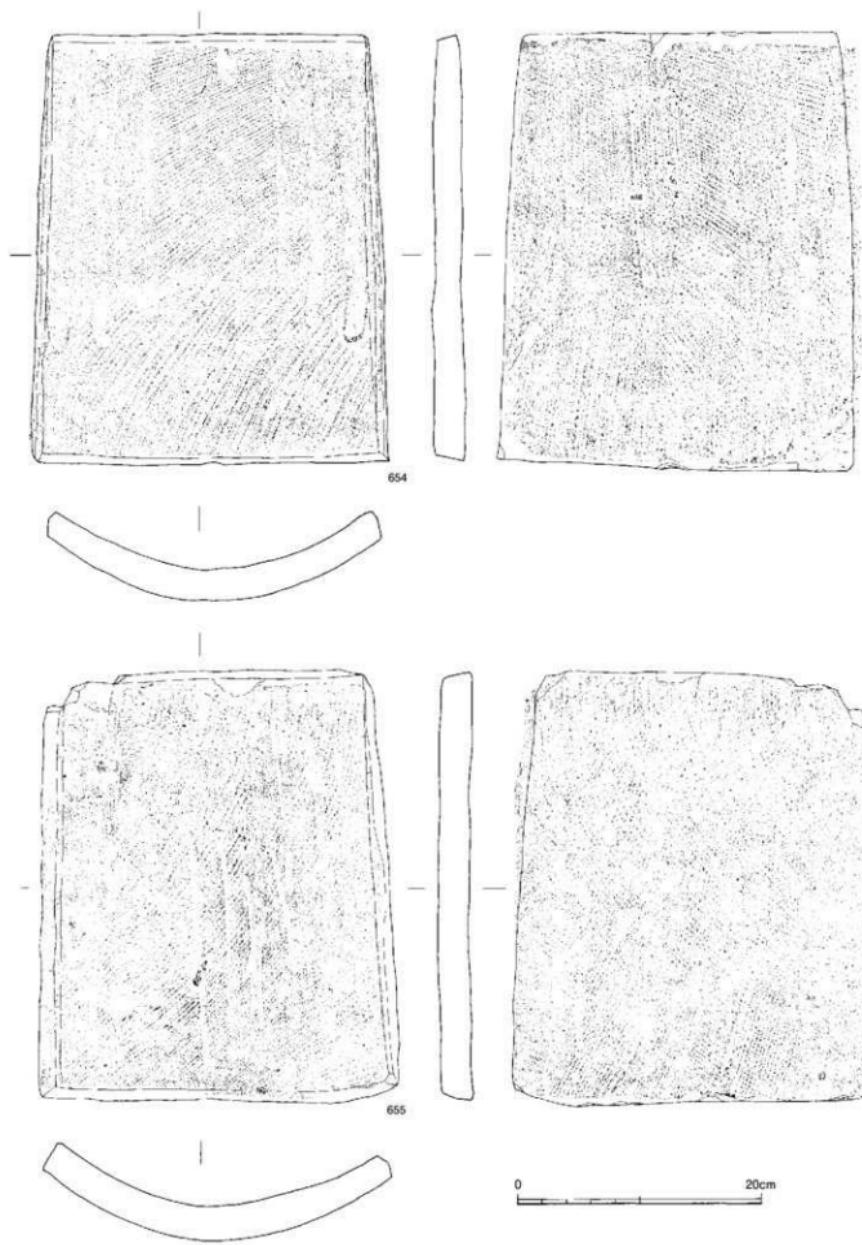


Fig.85 9号井戸出土遺物実測図 11 (1/4)

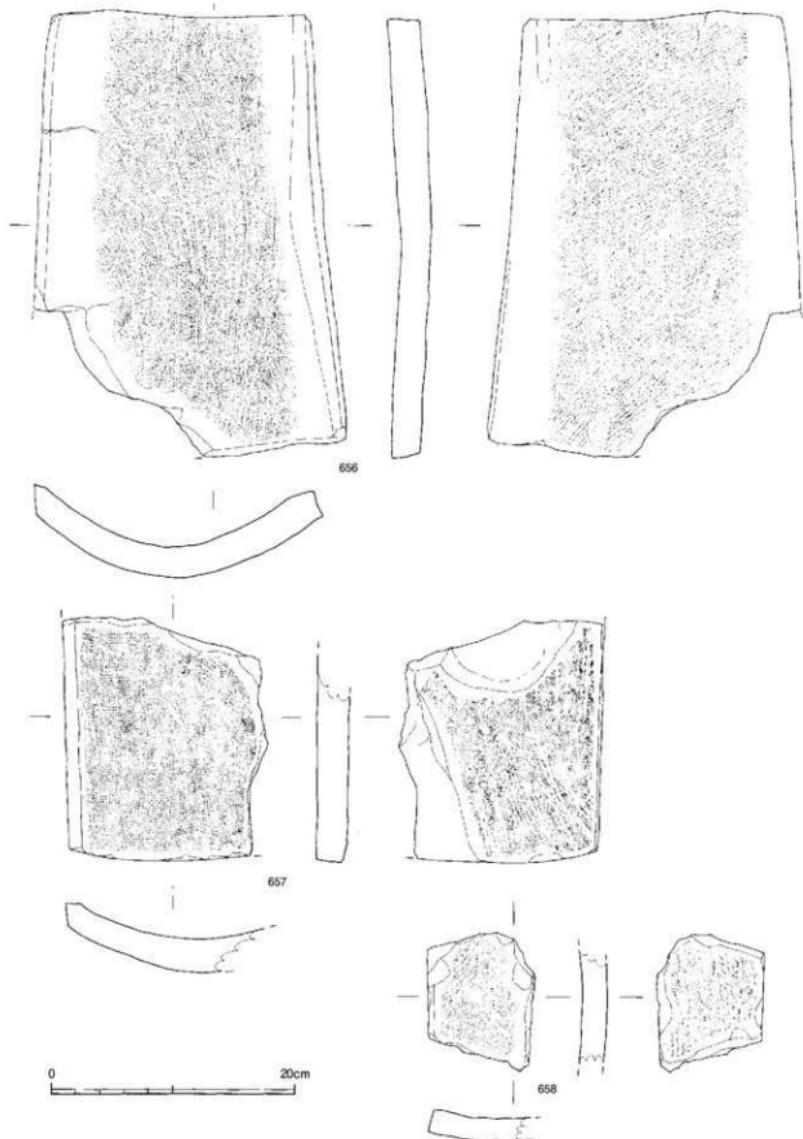


Fig.86 9号井戸出土遺物実測図 12 (1/4)

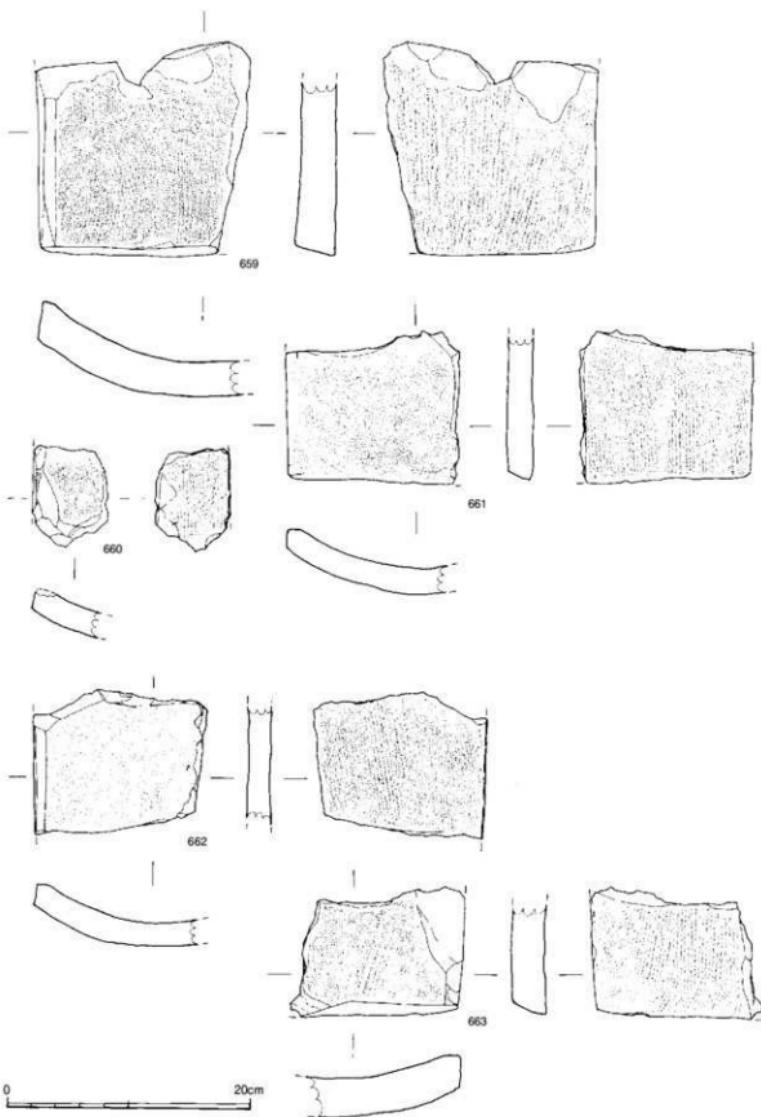


Fig.87 9号井戸出土遺物実測図 13 (1/4)

No.1・No.2・No.3・No.8・No.20・No.21・No.22・No.24・No.26・No.27・No.29・No.33・No.43・No.46は針葉樹の板目板を用いた加工板材で、端部に切断痕が残る。

No.4・No.5・No.25・No.28・No.45は広葉樹の板目板を用いた加工板材で、端部に切断痕が残る。No.7・No.9・No.14・No.23は針葉樹の板目板を用いた屋根材の転用品で、端部付近に穿孔がある。No.7は穿孔部のサイズが、長さ1.3cm、幅1.8cmである。端部を面取りする。No.9は穿孔部のサイズが、長さ1.5cm、幅8mm以上である。端部は粗い加工である。No.14は穿孔部のサイズが、長さ1cm、幅1cmである。No.23は穿孔部のサイズが、長さ1.3cm、幅1cmである。端部を面取りする。No.10・No.19・No.30・No.31・No.32・No.35・No.40は広葉樹の板目板を用いた加工板材で、残存状況が悪い。No.11・No.12・No.13・No.15・No.17・No.18・No.38・No.41は針葉樹の板目板を用いた加工板材で、残存状況が悪い。No.16・No.37・No.39・No.48・No.49は針葉樹の板目板で端部に切断痕が残る。一部表面に加工痕が残る。No.42は針葉樹の柾目板で、端部に丁寧な加工痕が残る。端部付近の側面寄りに直径5mmほどの小孔がある。No.47は針葉樹のナメ材を用いた加工板材で、端部に切断痕が残る。端部とその付近の側面寄りに直径5mmほどの小孔が2つある。屋根板や壁板の転用品と思われる。

北側井戸枠は発掘時に上から順にN-1～N-9と番号をつけて取り上げた。

N-1～N-3は605・606などと同様に両端部を左右から削り取ってT字形に加工し、東西の枠材と組み合うようにしている。側面も面取りしてやや丸く仕上げる。いずれも広葉樹の板目板と思われる。N-1は全体の約半分と先端部分を欠損している。縦が20cm以上、横が102cm以上、厚さは5cm以上である。N-2は一方の先端部を欠損する。縦が24cm、横が106cm以上、厚さは5cmである。N-3は加工痕がよく残る。一方の先端部を欠損する。縦は31cm、横は108cm以上、厚さは6.5cmである。N-4は針葉樹の柾目材を用いた棒状材で刃物痕が残る。縦が7.5cm、横が89cm以上、厚さは4cmである。N-5は板材であるが残存状況が悪い。縦が81cm

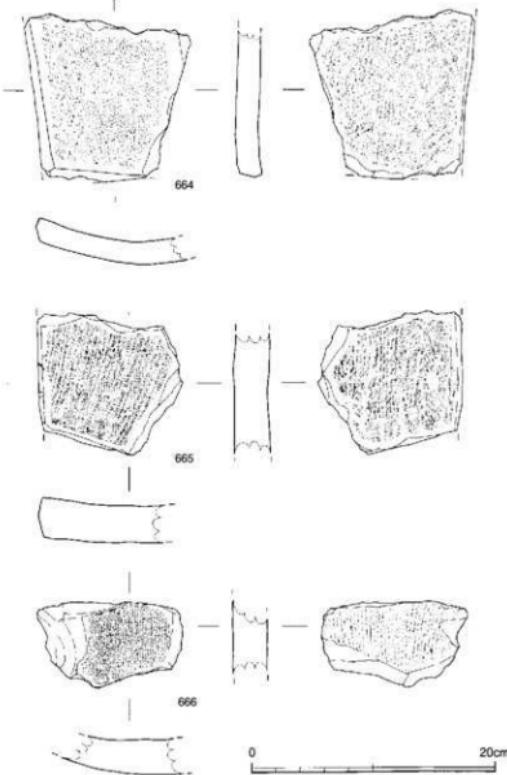


Fig.88 9号井戸出土遺物実測図 14 (1/4)

以上、横が82.5cm以上、厚さは1.5cmである。N-6は針葉樹の柾目材を用いており、一方の端部をナメに加工した棒状材で、もとは箱物などの枠材を転用したものかもしれない。縦が31cm、横が82.5cm、厚さは16cmである。N-7・N-8はいずれも針葉樹の板目材で、608・609などと同様の加工をしているが、N-8の短くて平坦な板材に凸部を、N-7の長く段差のある方に凹部を作り出しており、西側と組み合わせるため凹凸が逆になっている。N-7は両端部をそれぞれ幅6.5cmほど削り取って段を作り出しており、ここに東西の枠材が嵌るものと考えられる。側面の凹部は本体を割り貫いて作り出している。凹部のサイズは長さ6.5cm、幅2.5cm、奥行きは4.2cmである。裏面の加工痕は明瞭である。全体のサイズは縦が30.1cm、横が81cm、厚さは5.5cmである。N-8は針葉樹の板目板を用いており、表面は比較的丁寧に加工してある。裏面は加工痕が少し残る。裏面の中央部は芯に近いため少しづばんでいる。側面の凸部は本体を割り貫いて、そこに別材を嵌め込んでいる。別材は長さ5.2cm、幅1.8cm、奥行き4cm以上で、長さ、幅ともやや大きい割り貫き孔に嵌め込んでいる。全体のサイズは縦が24.7cm、横が74cm、厚さは7cmである。N-9は針葉樹の板目板で、611などと同様で屋根材の転用の可能性がある。縦21.2cm、横71.5cm、厚さは2.5cmである。

北側井戸枠の裏込板はN-1～9まである。ほとんどが針葉樹の板目板で、穿孔があるものが多く、それらは屋根材を転用したものであると考えられる。

N-1・N-2は針葉樹の柾目板を用いており、残存状況が悪い。N-3からN-5は針葉樹の板目板を用いている。穿孔があり屋根材を転用したと考えられる。N-3は端部の加工は丁寧である。穿孔部のサイズは長さ1.1cm、幅1cmである。N-4は端部の加工が少し粗い。穿孔部のサイズは長さ1cm、幅1cmである。N-5は全体に加工は丁寧で、穿孔部は直径1.2cmほどの円形である。N-7・N-8は針葉樹の板目板を用いた加工板材で、端部は粗く切断されている。穿孔はないが、屋根材の転用の可能性がある。N-9は針葉樹の柾目材で、穿孔があり屋根材の転用と考えられるが、端部の半分が丸く加工

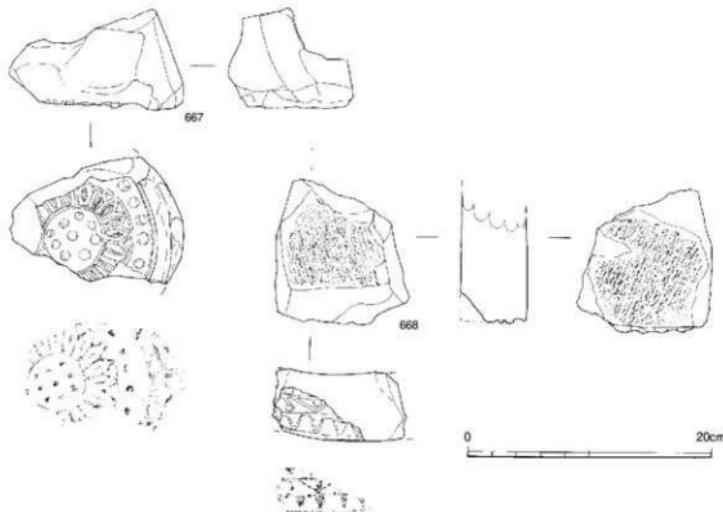


Fig.89 9号井戸出土遺物実測図 15 (1/4)

されている。残りは円形部分より 1cm ほど縦にのび、直線に切断されている。切断痕は明瞭である。井戸の裏込には必要ない加工であるが、用途は分からぬ。穿孔部は長さ 8mm、幅 7mm である。

628 ~ 646 は上層出土遺物である。

628 ~ 630 は土師器の甕口縁である。いずれも残りが悪く、口径復原はできなかった。628・629 は内外面ともナデ調整。630 は外面がナデ、内面はケズリのちナデ調整である。631 は須恵器の甕口縁である。口縁部外面に波状文を施す。口径復原はできなかった。632 は土師皿である。内外面ともナデ調整である。633 は無文博である。板状工具によるナデ、ヘラで面取りする。634 から 636 は丸瓦である。いずれも表面(凸面)はナデ調整、裏面(凹面)は布目が残る。側面はヘラで削り取って面取りする。636 はハケ目・ナデ調整である。637 から 639 は平瓦である。いずれも表面(凹面)に布目圧痕がのこり、裏面(凸面)は繩目タタキで、側面はヘラで削り取って面取りする。638 は表面に糸切り痕が残る。640 は軒平瓦で、表面(凹面)に布目圧痕がのこり、裏面(凸面)は繩目タタキで、側面はヘラで削り取って面取りする。瓦当は、細い周縁を持ち、外区は上帯に連珠文、下帯は面違い鋸歯文が変化したと思われる文様で、内区は扁行唐草文が直線的に変化した文様である。641 ~ 646 は鬼瓦である。大宰府式の鬼面文鬼瓦と思われる。641・642・645・646 は接合しなかったが、同一個体の可能性が高い。641 は鬼瓦の左頬から歯の部分で、表面は型押し、裏面は本体から剥落しており、調整は不明である。642 は髭部分で、表面は型押し、裏面は鬼瓦本体から剥落したと思われる。643 は右上隅部分と思われ、全体に磨滅している。644 は下隅部分で、表面と側面はナデ調整。裏面は粘土離目から剥落している。645 は眉間部分で、表面は型押し、裏面はナデ調整。646 は鼻から口の部分で、井側内出土の 669 と接合する。表面は型押しで、裏面は欠損している。下部の半円形の削り込み部分はヘラケズリである。断面観察から粘土離目が見られる。

647 ~ 675 は井側内出土遺物である。

647 ~ 651 は土師器である。647 の壺蓋は浅く、端部を丸く仕上げる。つまみが取れています。外面はケズリ・ナデ、内面はナデ調整である。648 の皿は内外面ともミガキ調整である。ミガキはヨコ方向であるが、やや粗い。650 の鉢は口縁内面がやや屈曲してのび、端部を丸く仕上げる。頸部付近の外面を強くナデ仕上げ。胴部は半円形で、底部は丸底である。外面を縦方向のハケ目、内面を縦方向のケズリで仕上げる。651 の甕は口縁内面がやや屈曲して外反しながらのび、端部を丸く玉縁状に仕上げる。胴部は直線的である。外面を縦方向のハケ目、内面を縦方向のケズリで仕上げる。652 は須恵器の大甕の口縁部である。口縁部外面に波状文を施す。内・外面ともナデ調整。653 はほぼ完形の丸瓦で、表面(凸面)はナデ調整、

裏面(凹面)は糸切り痕と布目が残る。長さ 39.2cm、幅 16.5cm、厚さは最大で 3.2cm である。654 から 666 は平瓦で、いずれも表面(凹面)に布目が残り、裏面(凸面)は繩目タタキで、側面はヘラで削り取って面取りする。654・655・664 は表・裏面とも糸切り痕が残る。656・661・662・665 は表面にのみ糸切り痕が残る。667 は軒丸瓦で、

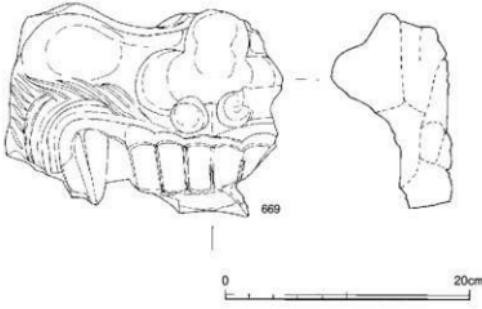


Fig.90 9号井戸出土遺物実測図 16 (1/4)

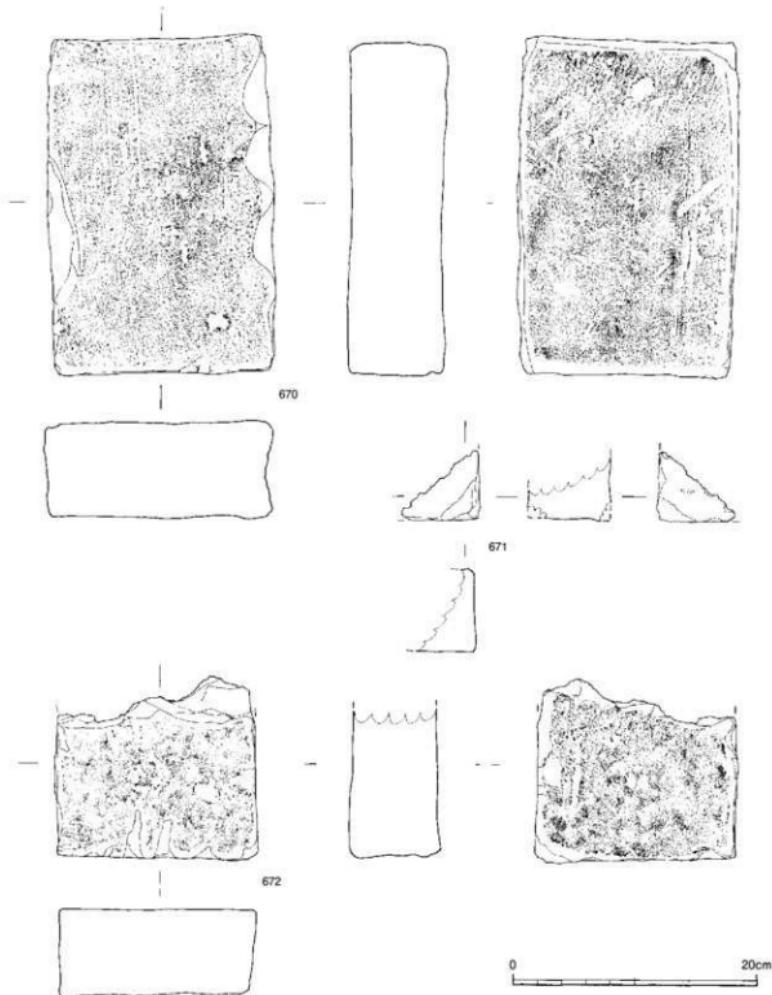


Fig.91 9号井戸出土遺物実測図 17 (1/4)

周縁はやや広い直立縁で素文、外区に連珠文があり、花弁は複弁蓮華文が直線的な表現に変化しており、弁端は尖形である。中房は平形で園線が付く。蓮子は小さい半球形で9個である。668は軒平瓦で、640と同様に表面（凹面）に布目压痕がのこり、裏面（凸面）は繩目タタキで、側面はヘラで削り取って面取りする。瓦当は、外区下帯は面違い鋸歯文が変化したと思われる文様で、内区は扁行唐草文が直線的に変化した文様である。669は鬼瓦の鼻から口の部分で646と接合する。670から675は無文壇である。いずれも板状工具によるナデ、ヘラで面取りする。サイズはおおよそ、完形のものは長さが27.8、幅が16～18cmほど、厚みが7～8cmほどである。表面のみが摩滅しており、壇として

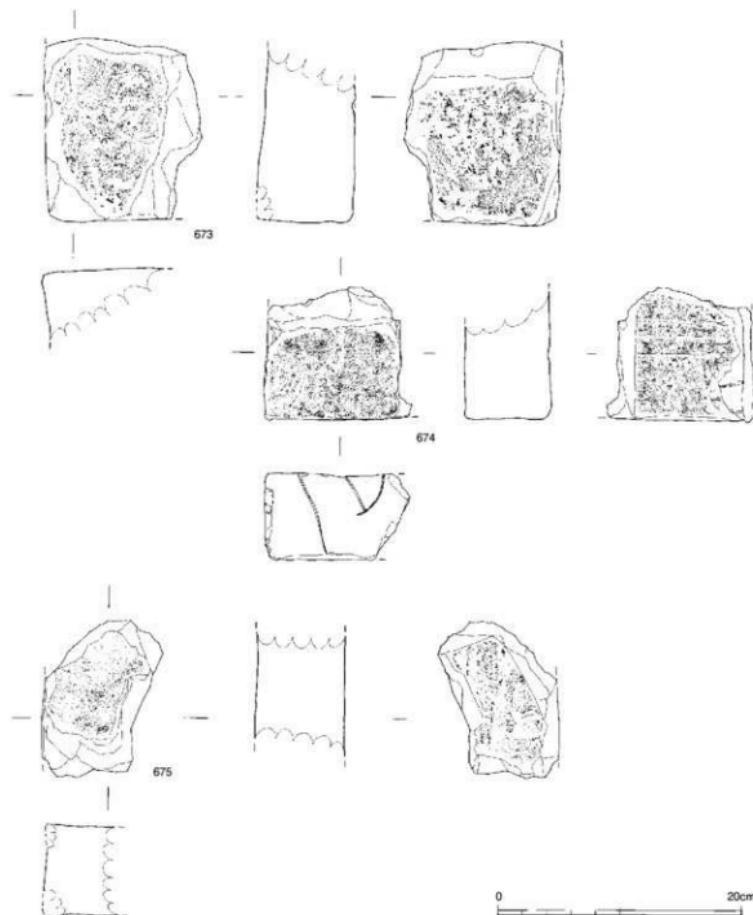


Fig.92 9号井戸出土遺物実測図 18 (1/4)

実際に使用された際のすり減りと考えられる。

676～677は桶下層出土遺物で井側の中でも下層の桶部分から出土したものである。

676は丸瓦で、表面（凸面）は繩目タタキ・ナデ調整、裏面（凹面）は布目が残る。側面はヘラで削り取って面取りする。677は平瓦で表面（凹面）に布目が残り、裏面（凸面）は繩目タタキで、側面はヘラで削り取って面取りする。

678～686は東側裏込出土遺物である。井戸枠の東側裏込に使用されていた。

678・679は丸瓦で、表面（凸面）はナデ調整、裏面（凹面）は布目が残る。側面はヘラで削り取って面取りする。680から684は平瓦で、表面（凹面）に布目がのこり、裏面（凸面）は繩目タタキで、側面はヘラで削り取って面取りする。683は表面に糸切り痕が残る。厚みはいずれも2～2.5cmである。685・686は無文壇である。いずれもヘラ状の工具で面取りして仕上げているが、板状の工具ナデかもしれない。表面の欠損が激しい。

687～710は桶裏込出土遺物である。井戸桶の裏込に使用されていた。そのため完形や大きな破片が多い。

687～695は平瓦で、いずれも表面（凹面）に布目が残り、裏面（凸面）は繩目タタキで、側面はヘラで削り取って面取りする。687・688・690・691・695は表面に糸切り痕が残る。693・694は表・裏面とも糸切り痕が残る。厚みは他の瓦が2.2～2.9cmであるのに対し688は4.5cmと厚い。696から710は無文壇である。いずれも板状工具によるナデ、ヘラで面取りする。

完形の壇が3点出土しており、また幅や厚さが分かるものも多いが、いずれも長さが26～30cmほど、幅が15～18cmほど、厚みが6.5～8cmほどである。表面のみが摩滅しており、壇として実際に使用された際のすり減りと考えられる。

711は上層出土の輝緑凝灰岩製石包丁である。約半分を欠損している。半月形外湾刃で両刃である。孔は双孔で、両側から穿孔している。孔径は4mmほどである。

712は井側内出土の滑石製白玉である。直径3.7mmで、厚さ1.4mmである。孔径は1.2mmほどである。丁寧に加工されている。

713は神功開寶である。東側井戸枠E-1の南側隅に、枠板に載せたかたちで出土した。鋳出しが悪く、「開」の文字はつぶれている。神功開寶の初鋳は天平神護元（765）年である。

714～719は井側内から出土したイスノキ製の挽歯式横櫛である。これらは破片が多く、同一個体か分からぬるものもあるが、形態から3個体はあったと考えられる。いずれも長方形を呈する。歯の数はいずれも3cmあたり36本ほどである。歯との境目に計画的に引いた溝がある。

720は西側裏込部分から出土したスギの柾目板を用いた下駄である。鼻緒孔はやや偏っている。鼻

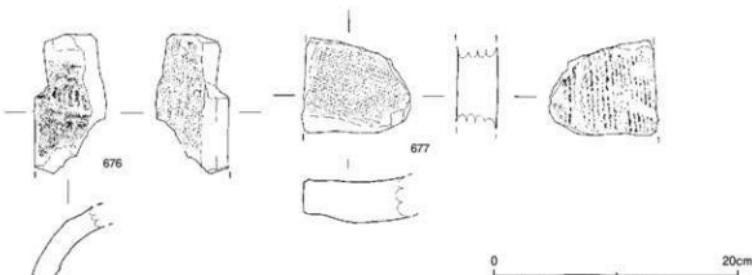


Fig.93 9号井戸出土遺物実測図 19 (1/4)

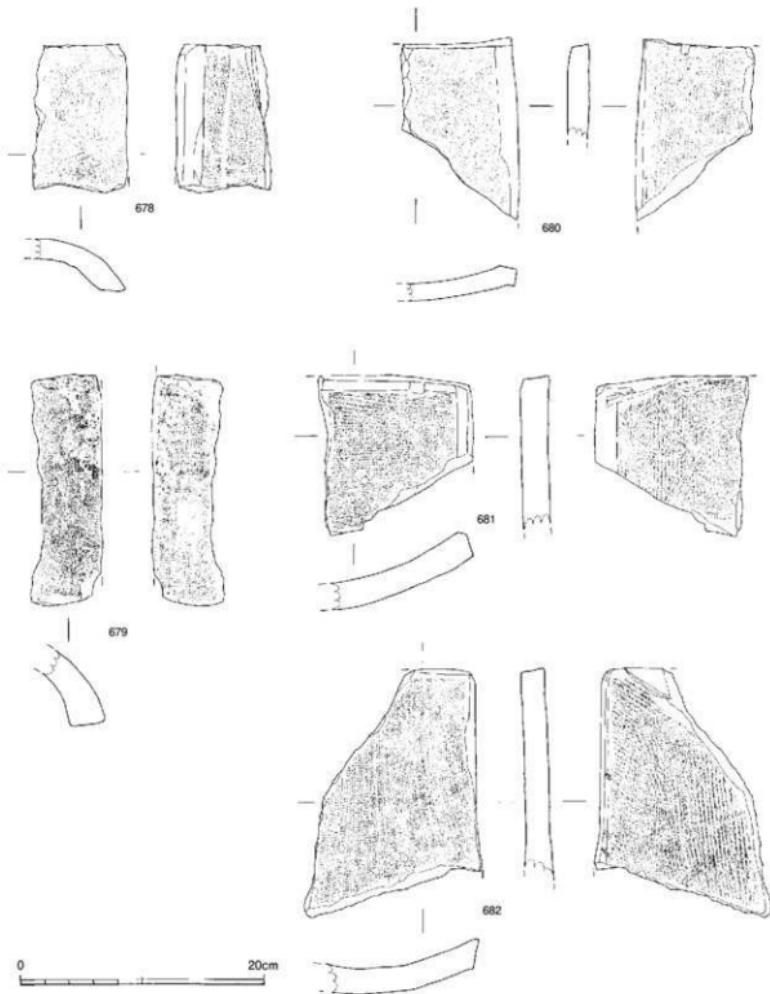


Fig.94 9号井戸出土遺物実測図 20 (1/4)

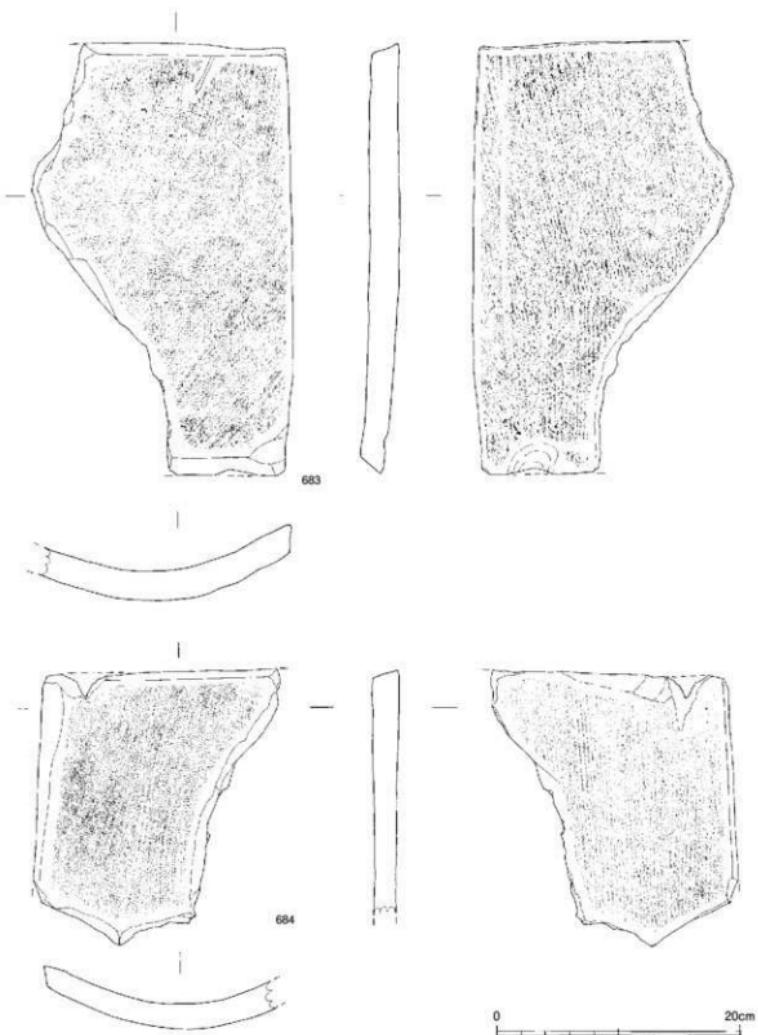


Fig.95 9号井戸出土遺物実測図 21 (1/4)

縦孔と後縦孔の間に2カ所、左右から抉ったようなキズがあり、歯の痕跡であるかもしれない。

721は掘方部分から出土した机の脚である。蟻じゃくりの溝にさしむタイプと考えられる。接地面側がかなり厚い。

722は井戸内から出土した曲物の桶である。針葉樹を用いており、タガ付きの釘結合曲物で、樹皮継ぎで継じており、継じ方は1列内5段継ぎである。底板に4カ所目釘を打ち込んでいる。

723は西側裏込部分から出土した曲物の桶の底板である。針葉樹の柾目板を用いた円形の曲物の底板で、桜の樹皮継ぎで継じていた。(谷 直子)

133号井戸 SE-133 (Fig. 107 PL. 30)

133号井戸は、調査区北東部の段丘端に位置する素掘りの井戸で、すぐ西には134号井戸が並置している。また、井戸の東には、旧河川(SD-137)の護岸に沿った埋土上を136号溝が北流している。平面形は、短辺が120cm、長辺が147cmの楕円形プランを呈する。壁面は、一旦緩やかな傾斜をもつて掘り込み、その後に検出面より-25~30cmのところで大きく屈曲して井戸底へむかって直線的に窄まる。井戸底は、浅い凹レンズ状をなし、標高は8.13mである。検出面よりの深さは137cmであるが、検出面が水田の開削によって1m余り削平されていることを勘案すると少なくとも250cmは掘り込まれていたものと考えられる。湧水点は、屈曲部より15cmほど下の標高9m付近に鳥柄ローム層と八女粘土層の境があり、ここから水が湧き出していた。遺物は少ないが、井戸底より30cmほど上層から土師器坏や甕、曲物の側板が出土した。

出土遺物 (Fig. 107)

724~726は、土師器坏である。724は、口径が13cm、底径が7.5cm、器高は3.4cm。体部は、ストレートに外反し、丸く納めた端部は小さく外方に摘み出す。体部はヨコナデ、内底面は指頭押圧ナデ、外底面はヘラ切り。胎土は良質で、少量の小砂粒と多量の雲母を含む。色調はにぶい橙褐色。725・726の体部が内擣ぎみに立ち上がり、口縁端部を小さく摘み出す坏である。725は口径が12.4cm、底径が6.2cm、器高は3cmである。胎土は少量の微細~小砂粒のほかシャモット様の赤褐色粒を含む。調整は、体部がヨコナデ、内底はナデ、外底はヘラ切り~ナデ。726は口径が12.8cm、底径が7.5cm、器高は3cm。体部はヨコナデ、内底はナデ、外底はヘラ切り後

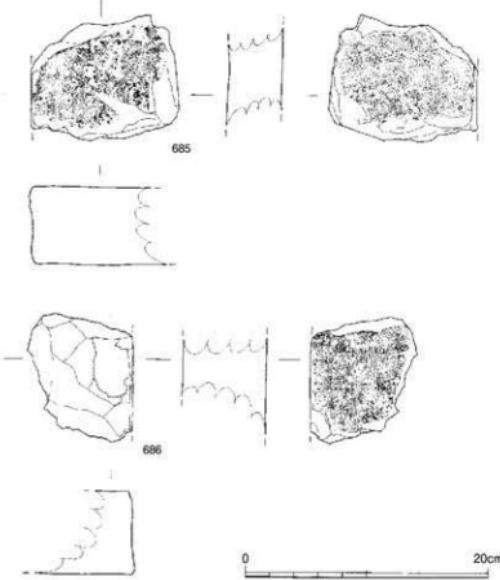


Fig.96 9号井戸出土遺物実測図 22 (1/4)

にナデ調整。胎土には細～小砂粒と雲母微細のほかシャモット様の赤褐色粒を含む。色調は橙色。

727は、口径が27cmの土師器甕である。口縁部は大きく「く」字状に外反する。調整は、口縁部がヨコナデで内面には細かいハケ目状のナデ痕が残る。胎土はやや粗く小～粗砂粒と雲母を含む。色調は橙褐色。

134号井戸 SE-134 (Fig. 107 PL. 30)

134号井戸は、調査区北東部の水田化によって開削された段丘端に133号井戸と並んで位置する素掘りの井戸である。平面形は、130～140cmの不整な椭円形プランを呈し、井戸底までの深さは140cmである。壁面は、緩やかに傾斜して掘り込んだ後に緩やかに屈曲して井戸底にむかって直線的に窄まっている。井戸底の標高は8.16mで、東に並んで掘り込まれている133号井戸と差がなく、湧水点も同じである。遺物は土師器小片がわずかに出土した。

出土遺物

(Fig. 107)

728は、器高15.4cmの支脚である。器底面は、11.4cm角の安定した方形で、器受は大きく角状に外反し、器受け面には2次被熱による赤変がある。胎土は良質で、少量の小砂粒を含み、焼成は良好。調整押圧ナデ。色調は橙色。729は、移動式竈の底～焚き口部の鉄である。鉄は、3.5cmほどが前面に張り出している。調整は手捏状の横圧ナデ。胎土には良質で、少量の小砂粒と赤褐色粒を含む。色調は橙色。

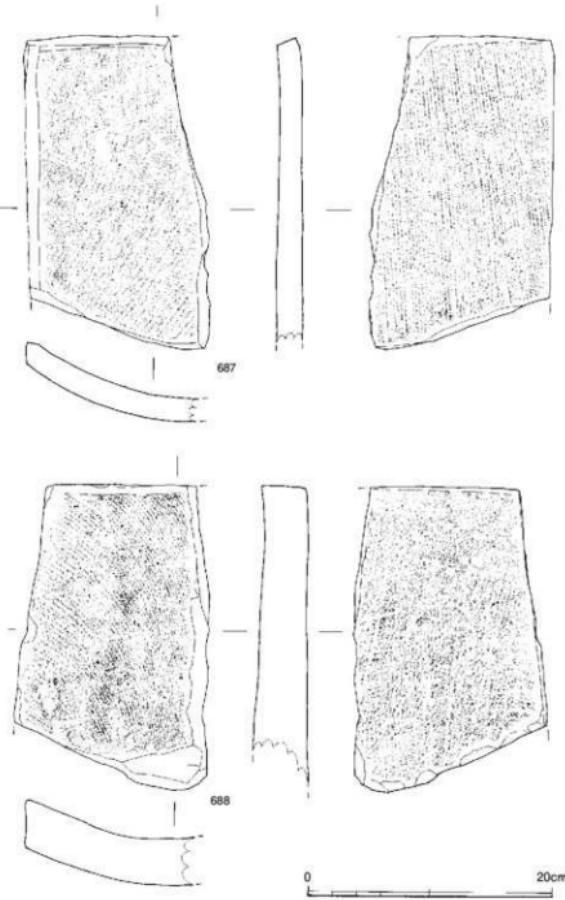


Fig.97 9号井戸出土遺物実測図 23 (1/4)

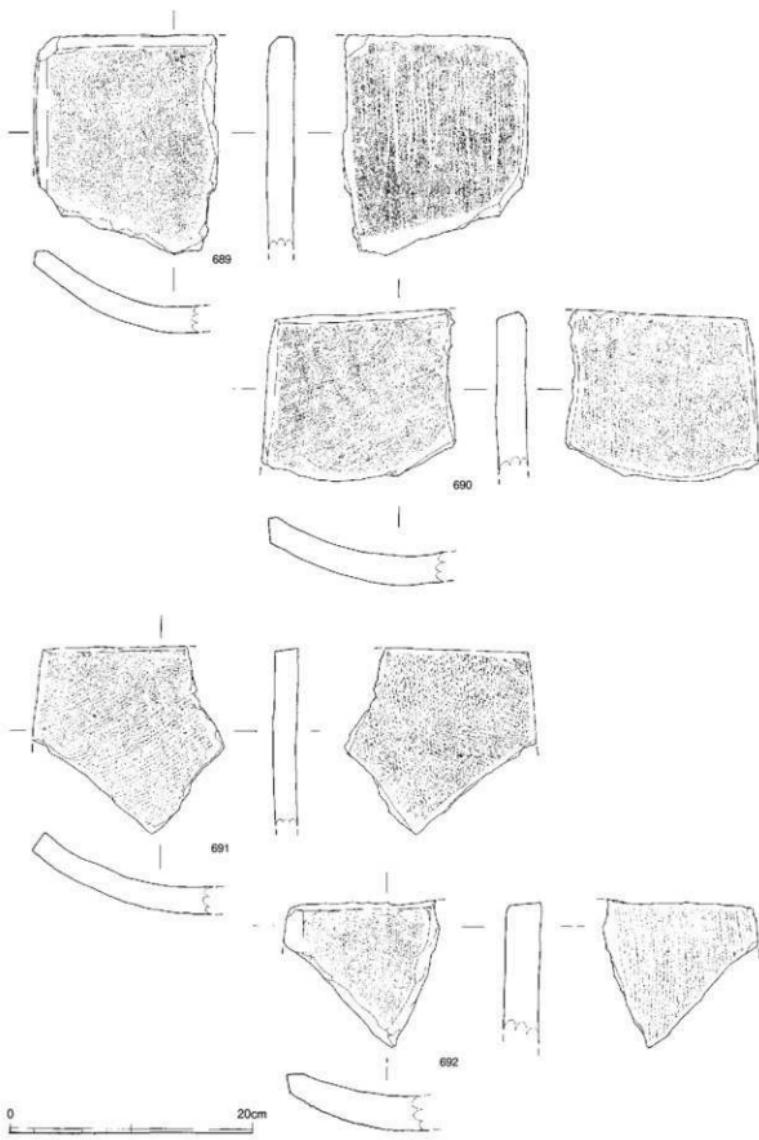


Fig.98. 9号井戸出土遺物実測図 24 (1/4)

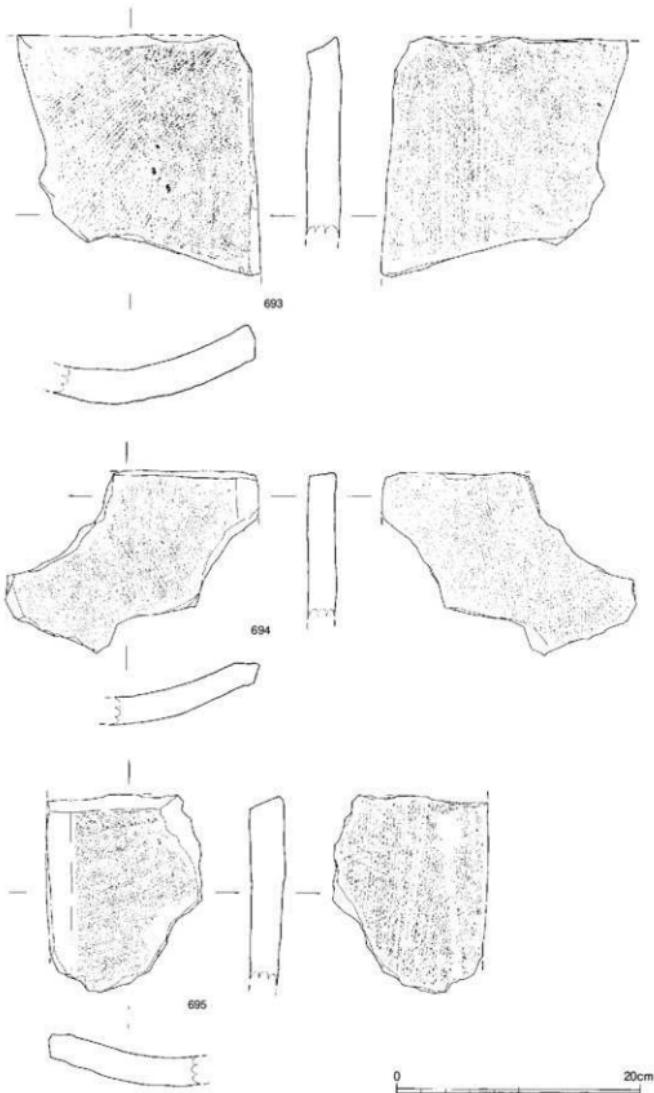


Fig.99 9号井戸出土遺物実測図 25 (1/4)

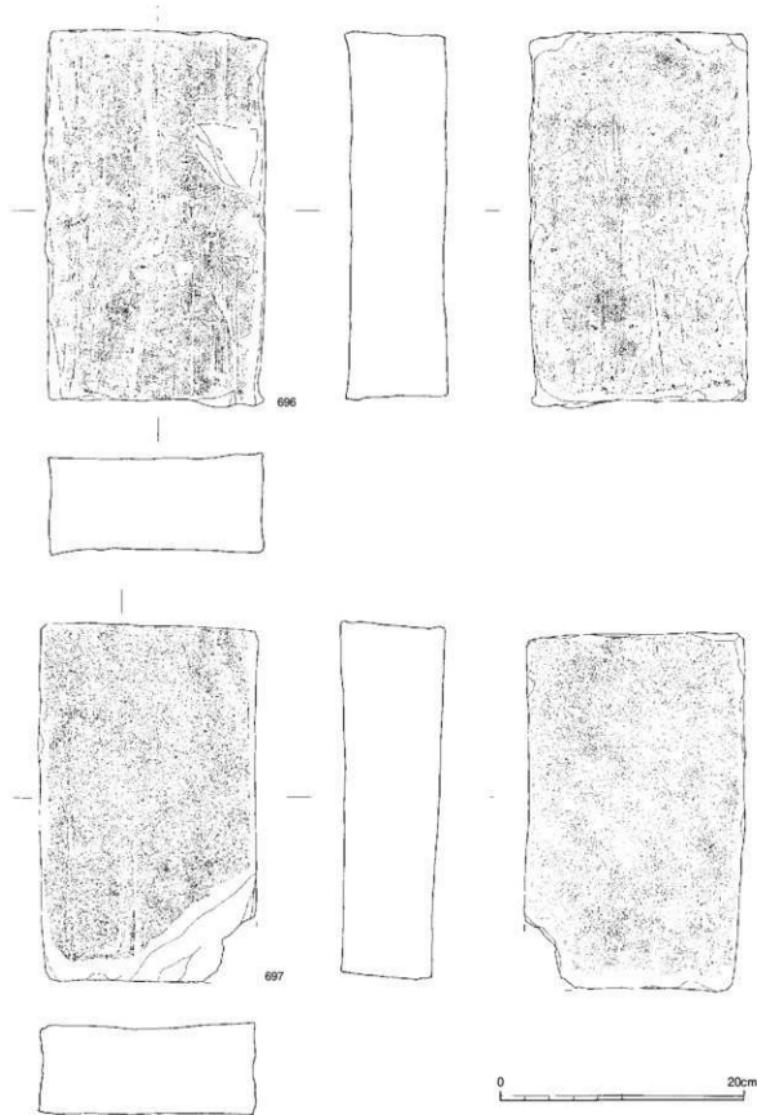


Fig.100 9号井戸出土遺物実測図 26 (1/4)

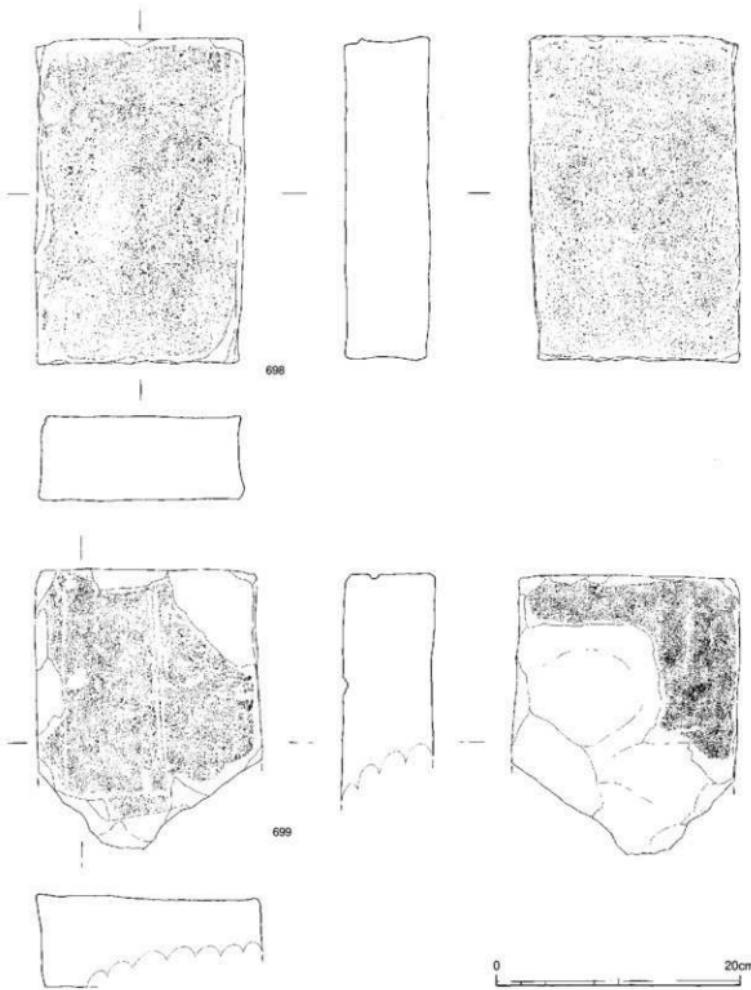


Fig.101 9号井戸出土遺物実測図 27 (1/4)

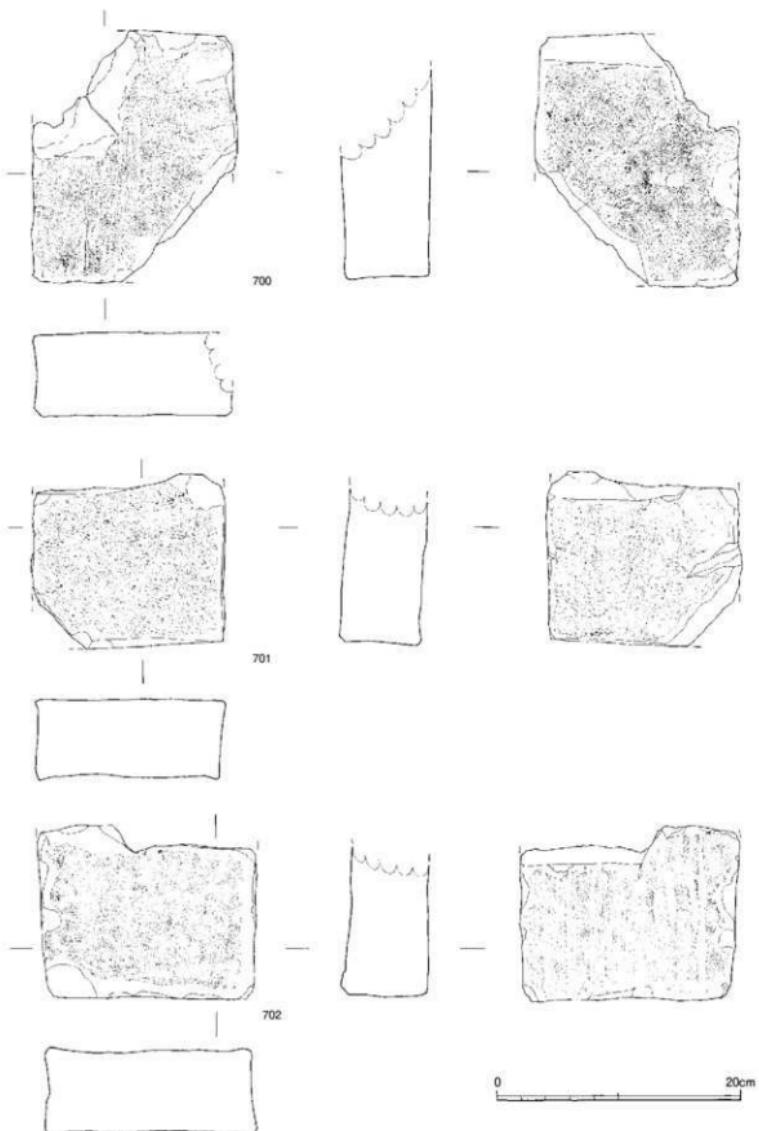


Fig.102 9号井戸出土遺物実測図 28 (1/4)

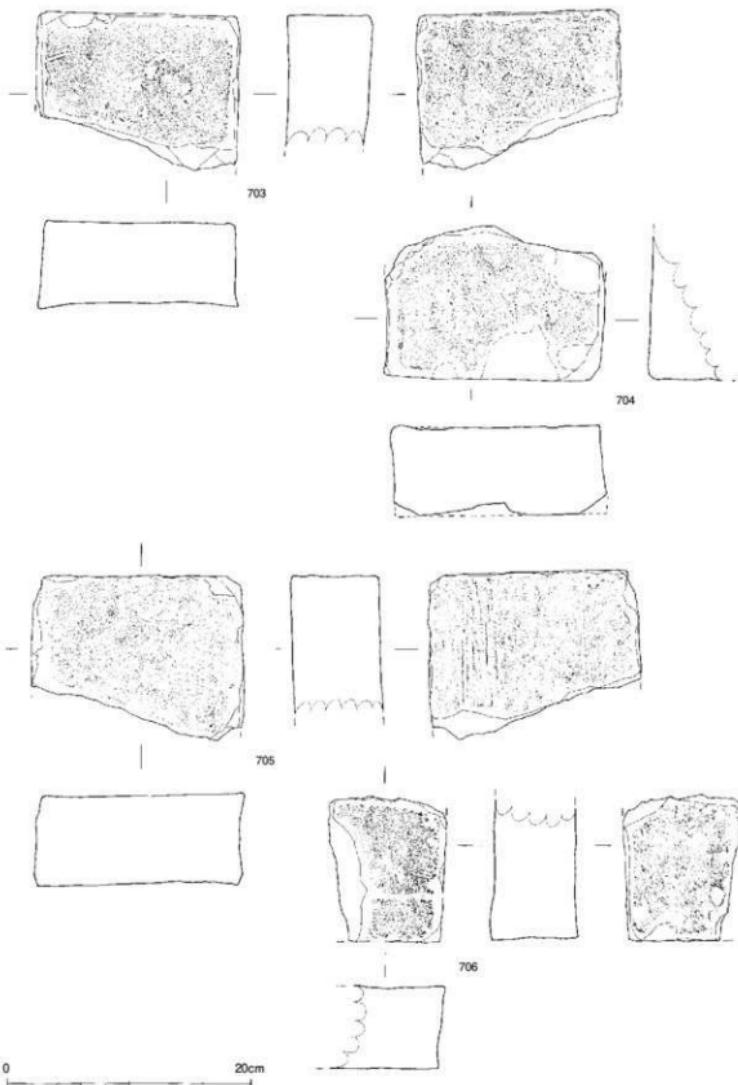


Fig.103 9号井戸出土遺物実測図 29 (1/4)

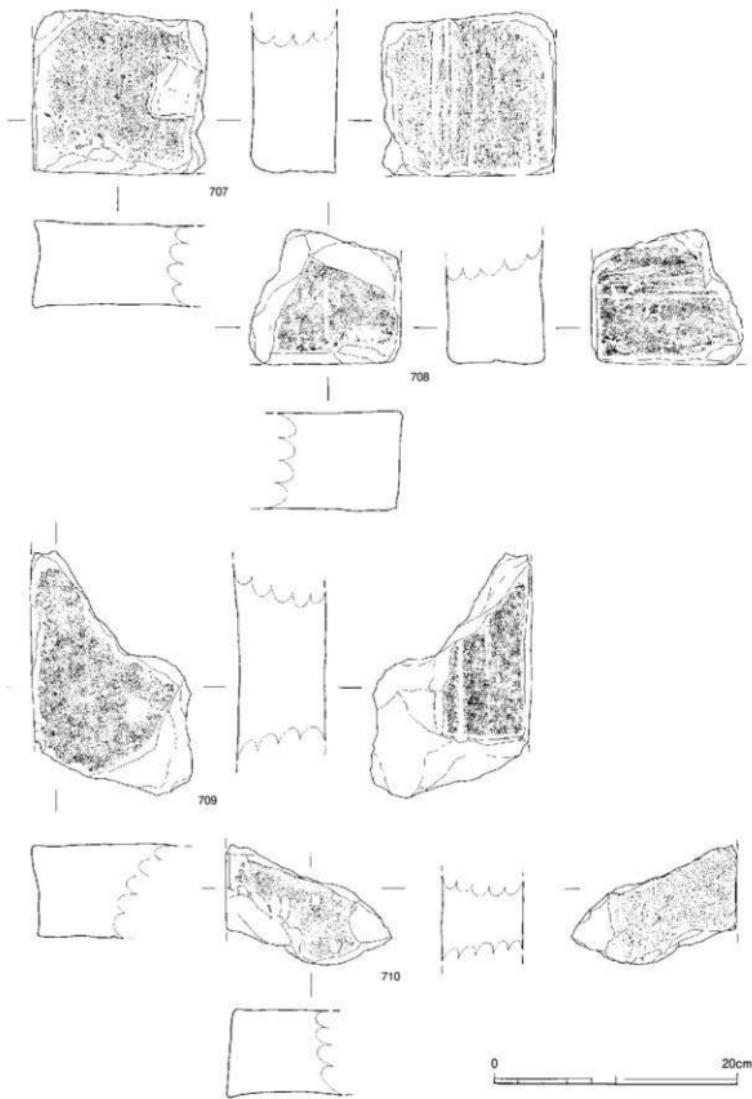


Fig.104 9号井戸出土遺物実測図 30 (1/4)

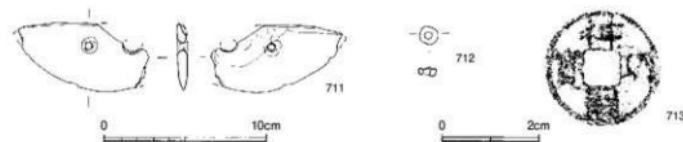


Fig.105 9号井戸出土遺物実測図 31 (1/1・1/3)

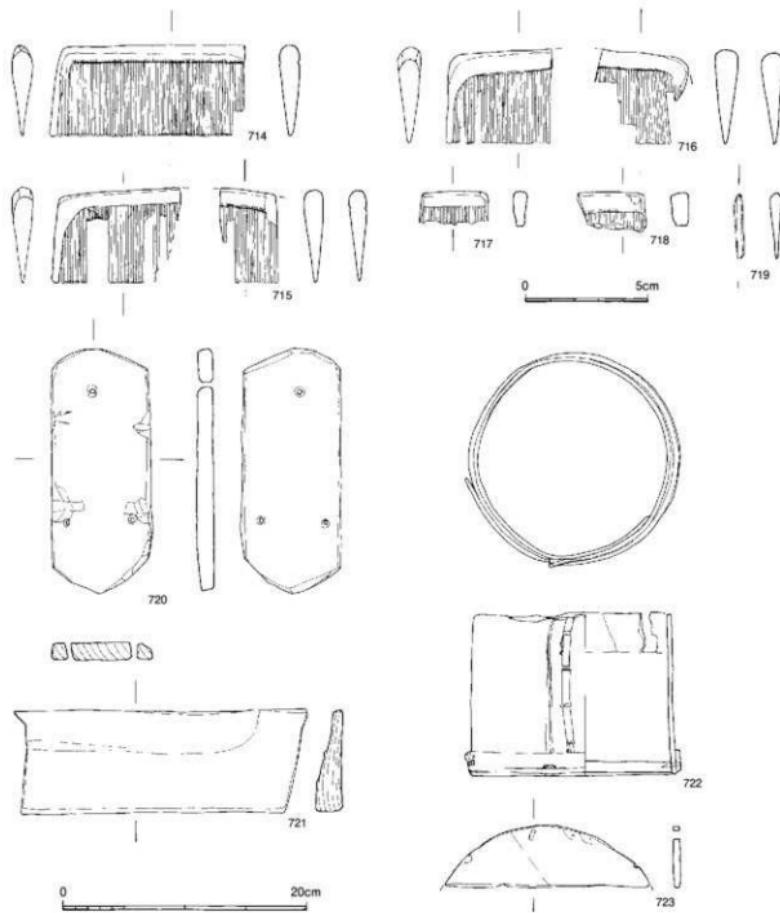


Fig.106 9号井戸出土遺物実測図 32 (1/2・1/4)

Tab.56 出土遺物(木製品)一覧表 55
西側井戸枠

No	形状	材質	木取り	法量(cm)	備考
W-1 604		広葉樹	板目	19	
				154+ α	板材を利用 欠損や磨滅が激しい
				4.1	
W-2 605		クヌギ	板目	20.8	厚みから建築材(床材) 転用の可能性有
				121	井戸枠用組合せ加工有
				5.3	工具痕有
W-3 606		クヌギ	板目	23.8	直径30~40cm位の木を割り板に加工
				112.6	井戸枠用組合せ加工有
				5.2	工具痕有
W-4 607		広葉樹	板目	23.8	
				114.5+ α	井戸枠用組合せ加工有 加工痕が明顯に残る
				7	
W-5 608		スギ	板目	29.3	床材の良い物を再利用
				74.7	井戸枠用組合せ加工有
				6.3	w-6と組み合う
W-6 609		スギ	板目	25	丁寧に加工w-5と組み合う、突部は別材
				81.4	井戸枠用組合せ加工有
				7.5	片面のみ加工痕が明瞭
W-7 610		針葉樹	板目	15	
				48.8	全体に加工が粗い 板材を切断している
				2.1	
W-8 611		広葉樹?	板目	18	
				79.2+ α	屋根材の転用? 両端を切断している
				2.4	
W-9 612		針葉樹	板目	16	
				70.0+ α	屋根材の転用 穿孔部に金具の圧痕有
				1.9	
W-10 613		針葉樹	板目	17.7	
				61.2+ α	屋根材の転用? 両端を切断している
				3	
W-11 614		針葉樹	板目	6.4	
				66.8	板状の加工有 転用材
				3.4	
W-12 615		針葉樹	板目	7.7	
				49	一方の端部を粗く加工する 不定形の棒状材
				3.5	
W-13 616		針葉樹	板目	10	
				62	屋根材の転用? 両端を切断している
				1.7	
W-14 617		針葉樹	板目	4.3	
				82.7	一方の端部を斜めに切断している 転用材
				2.9	

Tab.57 出土遺物(木製品)一覧表 56

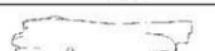
西側井戸枠

No	形状	材質	木取り	法量(cm)	備考
W-15 618		スギ	ナナメ	16	曲物の底板を再加工している 樹皮縁が残る
				62.2	
				1.8	

東側井戸枠

No	形状	材質	木取り	法量(cm)	備考
E-1		広葉樹	板目	23.0 + α	井戸枠用組合せ加工有 磨滅の為加工痕不明瞭
				122.0 + α	
				6.0	
E-2		広葉樹	板目	22.0	井戸枠用組合せ加工有 表面は丁寧な加工
				115.0	
				4.0	
E-3		ツブライ	板目	26.0	井戸枠用組合せ加工有 磨滅の為加工痕不明瞭
				112.0	
				5.0	
E-4		ツブライ	ナナメ	13.0 + α	井戸枠用組合せ加工有 端部の斜めの所は粗い加工
				113.5 + α	
				4.2	
E-5		針葉樹	ナナメ	14.5	転用材 加工痕やヤリガンナの痕跡が明瞭
				37.3	
				3.5	
E-6		針葉樹	板目	5.5	(箱物か) 屋根材の転用 ヤリガンナの痕跡が明瞭
				80.0	
				3.5	
E-7		針葉樹	板目	6.5	(箱物か) 屋根材の転用 ヤリガンナの痕跡が明瞭
				82.0	
				7.2	
E-8		針葉樹	板目	28.7	E-9と組み合う 井戸枠用組合せ加工有 片面のみ加工痕明瞭
				74.0	
				6.5	
E-9		針葉樹	板目	25.0+4.0	E-8と組み合う 井戸枠用組合せ加工有 片面のみ加工痕明瞭、尖部は別材
				81.0	
				6.7	

南側井戸枠

No	形状	材質	木取り	法量(cm)	備考
S-1		針葉樹	ナナメ	15.0 + α	ほとんど加工していない 片面のみ加工有
				53.0 + α	
				4.3 + α	

Tab.58 出土遺物(木製品)一覧表 57

南側井戸枠

No	形状	材質	木取り	法量(cm)	備考
S-2		広葉樹?	板目	20.0+α	井戸枠用組合せ加工有 端部に加工痕がみられる
				122.0	
				4.0	
S-3		広葉樹?	板目	26.5	井戸枠用組合せ加工有 丁寧な加工
				101.5+α	
				4.5	
S-4		広葉樹	板目	29.5	井戸枠用組合せ加工有 丁寧な加工
				111.5	
				5.7	
S-5		針葉樹	板目	30.0	井戸枠用組合せ加工有 S-12と組み合うように加工された 片面のみ加工痕が明瞭
				80.0	
				6.5	
S-6		針葉樹	板目	12.0+α	加工痕は不明瞭
				80.0+α	
				3.0	
S-7		針葉樹	板目	14.0	屋根板転用? 磨耗が激しい
				82.0+α	
				2.0	
S-8		針葉樹	板目	12.0	端部に面取り時の加工痕が残る
				62.0+α	
				2.8	
S-9		針葉樹	板目	13.8	端部ナカ状の工具による加工痕が残る
				50.2+α	
				3.0	
S-10		針葉樹	板目	9.5+α	屋根板転用? ホゾ孔有 孔のサイズ (1.0 × 1.3cm)
				68.0+α	
				1.8	
S-11		針葉樹	板目	7.5	加工痕がよく残る角材
				87.5	
				6.0	
S-12		針葉樹	板目	24.3+4.5	井戸枠用組合せ加工あり S-5と組み合う、突部は別材
				74.0	
				6.7	

北側井戸枠

No	形状	材質	木取り	法量(cm)	備考
N-1		広葉樹?	板目	20.0+α	井戸枠用組合せ加工有 丁寧な加工
				102+α	
				50+α	
N-2		広葉樹?	板目	24.0	井戸枠用組合せ加工有 丁寧な加工
				106+α	
				5.0	

Tab.59 出土遺物(木製品)一覧表 58
北側井戸枠

No	形状	材質	木取り	法量(cm)	備考
N-3		広葉樹?	板目?	31.0	井戸枠用組合せ加工有 加工痕明瞭
				108+ α	
				6.5	
N-4		針葉樹	柾目	7.5	
				89+ α	加工痕のある角材
				4.0	
N-5		針葉樹	板目	8.1+ α	
				82.5+ α	加工痕のある板材
				1.5	
N-6		針葉樹	柾目	3.1	屋根材の転用か? 加工痕のある角材
				82.5	
				1.6	
N-7		針葉樹	板目	30.1	
				81	N-8と組み合う 井戸枠用組合せ加工有
				5.5	
N-8		針葉樹	板目	24.7+4	N-7と組み合う
				74	井戸枠用組合せ加工有
				7.0	突部は別材
N-9		針葉樹	板目	21.2	
				71.5	加工痕のある板材
				2.5	

Tab.60 出土遺物(木製品)一覧表 59

西側裏込め板

No	本取り	法量			材質	備考
		ヨコ(cm)	タテ(cm)	厚さ(cm)		
620	柾目	22	54+ α	1.2	針葉樹	曲物を利用
621	板目	14.0	79.5+ α	1.2	針葉樹	端部を加工
622	板目	21.0	97+ α	2.0	広葉樹?	屋根材転用、穿孔削り込み有
623	板目	16.0	97+ α	0.7	針葉樹	加工した板材
624	板目	12.8	69.8+ α	1.7	針葉樹	丁寧な加工のある板材
625	板目	15.0+ α	48+ α	2.0	針葉樹?	磨減が激しい
626	板目	15.0	74.5+ α	1.3	広葉樹?	磨減が激しい
627	板目	7.8+ α	68+ α	2.0+ α	広葉樹?	磨減が激しい

東側裏込め板

No	本取り	法量			材質	備考
		ヨコ(cm)	タテ(cm)	厚さ(cm)		
No. 1	板目?	20.5+ α	44+ α	0.8	針葉樹	磨減が激しい
No. 2	板目	29.5	44+ α	3.0	針葉樹	磨減が激しい
No. 3	芯持材	7.0+ α	43+ α	6.0	針葉樹	自然木
No. 4	板目	12.5	82.2+ α	1.6	針葉樹?	屋根材の転用か
No. 5	板目	13.8	96+ α	1.8	針葉樹	屋根材の転用か
No. 6	板目	13.5	75+ α	0.5 ~ 0.7	針葉樹?	屋根材の転用、穿孔有
No. 7	柾目	16.8	81+ α	0.8	スギ	屋根材の転用、穿孔有
No. 8	板目	8.8	86+ α	1.3	針葉樹	屋根材の転用か
No. 9	板目	8.5+ α	87+ α	1.0	スギ	磨減が激しい、加工のある板材
No. 10	柾目	18.2	97.5+ α	4.0	針葉樹	加工痕明瞭
No. 11	板目	17.2	56.7+ α	0.7	針葉樹?	屋根材の転用、穿孔有
No. 12	板目	9.8	55.3+ α	1.1	針葉樹	屋根材の転用か
No. 13	板目	8.5+ α	71+ α	2.5+ α	針葉樹	屋根材の転用、穿孔有
No. 14	板目	18+ α	55+ α	2.3	広葉樹?	加工のある板材
No. 15	板目	13.0+ α	49+ α	4.0	広葉樹?	磨減が激しい
No. 16	板目	3.0+ α	16.5+ α	2.0+ α	針葉樹	角片材
No. 17	板目	44.0	57.0	2.7	スギ	転用材、加工痕の明瞭な板材
No. 18	板目	43.0	58.0	3.0	針葉樹	転用材、加工痕の明瞭な板材
No. 19	板目	15.0	57+ α	2.0	針葉樹?	加工痕のある板材

南側裏込め板

No	本取り	法量			材質	備考
		ヨコ(cm)	タテ(cm)	厚さ(cm)		
No. 1	板目	10	44+ α	1	針葉樹	加工痕のある板材、屋根材の転用か
No. 2	板目	10+ α	56+ α	1	針葉樹	加工痕のある板材、屋根材の転用か
No. 2	柾目	3+ α	47+ α	1	針葉樹	加工痕のある板材、屋根材の転用か
No. 3	板目	6+ α	57.5+ α	2	針葉樹	加工のある板材
No. 4	板目	7.0+ α	60+ α	1	広葉樹	加工のある板材
No. 5	板目(ナナメ)	7.5	78.7+ α	2	広葉樹	加工のある板材
No. 7	板目	12.8	104.8+ α	1.5	針葉樹	屋根材の転用か、穿孔有
No. 8	板目	10.5	35.5+ α	0.8	針葉樹	屋根材の転用か
No. 9	板目(ナナメ)	8.7+ α	43.3+ α	1.2	針葉樹	屋根材の転用、穿孔有
No. 10	板目	13.0+ α	42.0+ α	1.5	広葉樹	加工のある板材
No. 11	板目	5.0+ α	26.0+ α	1.5+ α	針葉樹	加工のある板材
No. 12	板目	6.0+ α	36.0+ α	0.5	針葉樹	加工のある板材
No. 13	板目	6.7+ α	31.0+ α	0.7	針葉樹	加工のある板材
No. 14	板目	18.5	38.0+ α	2	針葉樹	屋根材の転用か、穿孔有
No. 15	板目	4.5+ α	31.0+ α	1.0+ α	針葉樹	磨減が激しい
No. 16	柾目	16.6	106.6+ α	1.7	針葉樹	加工のある板材
No. 17	板目	5.5+ α	17.0+ α	0.7+ α	針葉樹	磨減が激しい
No. 18	板目	6.0+ α	22.0+ α	0.7+ α	針葉樹	磨減が激しい
No. 19	板目	11.7	99.5+ α	3.6	広葉樹	加工のある板材

Tab.61 出土遺物(木製品)一覧表 60

No	本取り	法量			材質	備考
		ヨコ(cm)	タテ(cm)	厚さ(cm)		
No. 20	板目	7.3	70.5+ α	2.2	針葉樹	加工のある板材
No. 21	板目	19.9	101.4+ α	1.5	針葉樹	加工のある屋根材?
No. 22	板目	17.8	80.4+ α	1.5	針葉樹	加工のある屋根材?
No. 23	板目	16.0+ α	93.0+ α	1.5	針葉樹	屋根材の転用、穿孔有
No. 24	板目	15	96.8+ α		針葉樹	屋根材?
No. 25	板目	13.5	94.5+ α	2.5	広葉樹	屋根材?
No. 26	板目	14	97+ α	0.8	針葉樹	屋根材?
No. 27	板目	18	102+ α	2.2	針葉樹	屋根材?
No. 28	板目	23.2	93.5+ α	2.2	広葉樹	屋根材?
No. 29	板目	13.2	48.8+ α	3.1	針葉樹	加工のある板材
No. 30	板目	9.0+ α	49.0+ α		広葉樹	加工のある板材
No. 31	板目	7.8+ α	49.0+ α	1.8 ~ 2.0	広葉樹	加工のある板材
No. 32	板目	15	48.5+ α	1.5	広葉樹	加工のある板材
No. 33	板目	13.4	56.8+ α	2.7	針葉樹	丁寧な加工のある板材
No. 35	板目	6.5+ α	34.5+ α	1.8	広葉樹	磨滅している
No. 37	柾目	14.5	47+ α	1.7	針葉樹	加工のある板材
No. 38	板目	12.0+ α	62+ α	2.2	針葉樹?	磨滅している
No. 39	柾目	14.6	55.3+ α	2.1	針葉樹	加工のある板材
No. 40	板目	13.6	47.5+ α	1.6	広葉樹	加工のある板材
No. 41	板目	7.0+ α	35+ α	1.3	針葉樹	加工のある板材
No. 42	柾目	15	50+ α	1.7	針葉樹	加工のある板材
No. 43	板目	18.7	44+ α	1.6	針葉樹?	加工のある板材
No. 45	板目	11.5	74.8	3.2	広葉樹	加工のある板材
No. 46	板目	19	58.3+ α	2.3	針葉樹?	加工のある板材
No. 47	板目(ナナメ)	12	53.2+ α	1.7	針葉樹	屋根材の転用、穿孔有
No. 48	柾目	35	35	2.3	針葉樹	加工のある板材
No. 49	柾目	16	63.5+ α	1.5	針葉樹	加工のある板材

北側裏込め板

No	本取り	法量			材質	備考
		ヨコ(cm)	タテ(cm)	厚さ(cm)		
No. 1	柾目	14.0+ α	13.0+ α	1.8	針葉樹	磨滅が激しい
No. 2	柾目	13.0+ α	34.0+ α	2.8+ α	針葉樹	磨滅が激しい
No. 3	板目	5.7	29.5+ α	1.3	針葉樹?	屋根材の転用、穿孔有
No. 4	板目	18.7	68.8+ α		針葉樹	屋根材の転用、穿孔有
No. 5	板目	18	72.0+ α	1.5	針葉樹	屋根材の転用、穿孔有
No. 7	板目	14.5	77.4+ α	1.2	針葉樹?	加工のある板材
No. 8	板目	12.8	76+ α	1.7	針葉樹?	加工のある板材
No. 9	柾目	16.6	82.6+ α	1.3	針葉樹	屋根材の転用、穿孔有

Tab.62 出土遺物一覧表 61

Fig	番号	出土位置	器種	長・器高 幅・口径 厚・底径		胎土	焼成	色調	調整 (表・外面)	調整 (裏・内面)	調整側面
				23+ α	やや緻密・小~粗の砂粒を含む						
Fig-79	628	SE-09 上層	土師器	甕	31+ α	緻密・小砂粒を含む。赤褐色を含む	良好	淡橙	ナデ	ナデ	
Fig-79	629	SE-09 上層	土師器	甕	38+ α	緻密・中砂粒を含む。雲母片を含む	良好	橙	ナデ	ナデ	
Fig-79	630	SE-09 上層	土師器	甕	48+ α	緻密・小砂粒をわずかに含む	良好	灰	ナデ・波状文あり	ナデ	
Fig-79	631	SE-09 上層	埴輪器	甕	18+ α 178	緻密・小砂粒をわずかに含む	良好	橙	ナデ	ナデ	
Fig-79	632	SE-09 上層	土師器	甕	46+ α 64+ α 68	緻密・小砂粒を含む	良好	灰	板ナデ	板ナデ	ハラ工具で面取り
Fig-79	633	SE-09 上層	埴輪	無文	138+ α 98+ α 30	緻密・小~中砂粒を含む	良好	灰~黒灰	ナデ	布目	
Fig-80	634	SE-09 上層	丸瓦		86+ α 92+ α 18	緻密・小砂粒を含む	良好	橙	ナデ	布目	ハラ工具で面取り
Fig-80	635	SE-09 上層	丸瓦		108+ α 88+ α 30	緻密・小~中砂粒を含む	良好	橙	ナデ	ハケメ・ナデ	ハラ工具で面取り
Fig-80	636	SE-09 上層	丸瓦		104+ α 101+ α 18	緻密・中砂粒をわずかに含む	良好	灰	布目	繩目タタキ	ハラ工具で面取り
Fig-80	637	SE-09 上層	平瓦		155+ α 180+ α 19	緻密・小~中砂粒を含む。赤褐色を含む	良好	淡橙	糸切り痕・布目	繩目タタキ	ハラ工具で面取り
Fig-80	638	SE-09 上層	平瓦		14+ α 124+ α 23	やや緻密・小~中砂粒を含む	良好	灰	布目	繩目タタキ	ハラ工具で面取り
Fig-81	640	SE-09 上層	軒平瓦		82+ α 11+ α 63	緻密・小~粗砂粒を含む	良好	淡黄橙	布目	繩目タタキ	
Fig-82	641	SE-09 上層	鬼瓦	頬~面	116+ α 114+ α 71+ α	緻密・中砂粒をわずかに含む	良好	淡黄橙	型押し		
Fig-82	642	SE-09 上層	鬼瓦	頬	52+ α 45+ α 15+ α	緻密・小~中砂粒を含む	良好	淡黄橙	型押し		
Fig-82	643	SE-09 上層	鬼瓦	右上隅	142+ α 68+ α 51+ α	緻密・小~中砂粒を少し含む	良好	黄灰白	磨減	磨減	
Fig-82	644	SE-09 上層	鬼瓦	下隅	59+ α 74+ α 51+ α	緻密・小砂粒を含む	良好	灰白	ナデ		ナデ
Fig-82	645	SE-09 上層	鬼瓦	眉間	82+ α 77+ α 37	緻密・中砂粒を含む	やや良好	淡橙	型押し	ナデ	
Fig-82	646	SE-09 上層	鬼瓦	鼻~口		緻密・小~中砂粒を含む	良好	淡黄橙	型押し	欠損	ハラケズリ
Fig-83	647	SE-09 井筒内	土師器	壺蓋	18+ α 168	緻密・小砂粒をわずかに含む。雲母片を含む	良好	淡橙	ケズリ・ナデ	ナデ	
Fig-83	648	SE-09 井筒内	土師器	甕	2 15.6 12	緻密・小砂粒を含む。赤褐色を含む	良好	淡黄褐	ミガキ・ケズリ・ヘラ切り	ナデ・ミガキ	
Fig-83	649	SE-09 井筒内	土師器	壺	23+ α 8	やや緻密・小~中砂粒を含む。赤褐色を含む	良好	淡橙	ナデ・ヘラ切り	ナデ	
Fig-83	650	SE-09 井筒内	土師器	鉢	15.8 26.6	緻密・小~中砂粒を含む。赤褐色を含む	良好	淡灰褐	タテハケ・ナデ	ケズリ・ナデ	
Fig-83	651	SE-09 井筒内	土師器	甕	96+ α 31.4	緻密・小砂粒を含む	良好	暗赤褐色	タテハケ・ケズリ・ナデ	ヨコハケ・ケズリ・ナデ	

Tab.63 出土遺物一覧表 62

Fig	番号	出土位置	器種		長・器高 幅・口径 厚・底径	胎土	焼成	色調	調整		調整側面
									(表・外面)	(裏・内面)	
Fig-83	652	SE-09 井筒内	須恵器	大甕	78+ α 36.2	やや緻密・中～粗砂粒を含む	良好	暗灰～黄灰	ナデ・波状文あり	ナデ	
Fig-84	653	SE-09 井筒内			39.2 16.5 3.2						
Fig-85	654	SE-09 井筒内	平瓦		34.9 29.2 2.5	緻密・小～中砂粒を少し含む	良好	淡黄橙	糸切り痕・布目	糸切り痕・布目	ヘラ工具で面取り
Fig-85	655	SE-09 井筒内			35.1 29.3 2.5						
Fig-86	656	SE-09 井筒内	平瓦		35.8 23.5 2.5	やや緻密・小～粗砂粒を含む	良好	灰	糸切り痕・布目	糸切り痕・布目	ヘラ工具で面取り
Fig-86	657	SE-09 井筒内			19.8+ α 17.5+ α 2.8						
Fig-86	658	SE-09 井筒内	平瓦		11.3+ α 8.7+ α 2	緻密・小～中砂粒を少し含む	良好	灰褐	布目	糸目タタキ	ヘラ工具で面取り
Fig-87	659	SE-09 井筒内			17.5+ α 17.5+ α 3.3						
Fig-87	660	SE-09 井筒内	平瓦		8.2+ α 6.2+ α 2.2	やや緻密・中～粗砂粒を含む	良好	灰白	布目	糸目タタキ	ヘラ工具で面取り
Fig-87	661	SE-09 井筒内			11.7+ α 13.2+ α 2.1						
Fig-87	662	SE-09 井筒内	平瓦		11.8+ α 13.5+ α 2	緻密・小～中砂粒を含む。 赤褐色鉄を含む	良好	灰白	糸切り痕・布目	糸目タタキ	ヘラ工具で面取り
Fig-87	663	SE-09 井筒内			10.5+ α 14.1+ α 3.3						
Fig-88	664	SE-09 井筒内	平瓦		14.0+ α 17.3+ α 2	やや緻密・中～粗砂粒を含む	良好	灰	糸切り痕・布目	糸目タタキ	ヘラ工具で面取り
Fig-88	665	SE-09 井筒内			11.5+ α 11.8+ α 3						
Fig-88	666	SE-09 井筒内	平瓦		7.0+ α 11.9+ α 3	緻密・小～中砂粒を少し含む	良好	灰白	糸切り痕・布目	糸目タタキ	
Fig-89	667	SE-09 井筒内	軒丸瓦		8.2+ α 14.8+ α	緻密・小～中砂粒を含む	良好	暗灰	ナデ	ナデ	
Fig-89	668	SE-09 井筒内			10.8+ α 10.8+ α 5.5						
Fig-90	669	SE-09 井筒内	鬼瓦	幕～口		緻密・小～中砂粒を含む	良好	淡黄橙	型押し	欠損	ヘラケズリ
Fig-91	670	SE-09 井筒内			27.8 18.6 8.1						
Fig-91	671	SE-09 井筒内	埠	無文	5.7+ α 6.4+ α 6.8	緻密・小～中砂粒を多く含む	良好	灰褐～黒	ヘラケズリ・板ナデ	ヘラケズリ・板ナデ	ヘラ工具で面取り
Fig-91	672	SE-09 井筒内			12.1+ α 16.4 8.3						
Fig-92	673	SE-09 井筒内	埠	無文	14.8+ α 12.4+ α 7.9	緻密・小～中砂粒を少し含む	良好	灰	磨減	磨減	磨減
Fig-92	674	SE-09 井筒内			10.8+ α 12.1+ α 7.1						
Fig-92	675	SE-09 井筒内	埠	無文	12.8+ α 9.9+ α 7.3	緻密・小～中砂粒を含む	良好	灰	板ナデ	板ナデ	ヘラ工具で面取り

Tab.64 出土遺物一覧表 63

Fig	番号	出土位置	器種	長・器高	胎土	焼成	色調	調整 (表・外面)	調整 (裏・内面)	調整側面
				幅・口径 厚・底径						
Fig - 93	676	SE-09 桶下層	丸瓦	11.4+ α 58+ α 18	緻密・小砂粒をわずかに含む	良好	灰白	繩目タタキ ・ナデ	布目	ヘラ工具で 面取り
				7.8+ α 8.7+ α 33						
				12.1+ α 7.6+ α 15						
Fig - 94	678	SE-09 東側裏込	丸瓦	15+ α 9.6 18	緻密・小～中砂粒を多く含む	良好	灰白	布目	繩目タタキ	ヘラ工具で 面取り
				19+ α 51+ α 28						
				12.5+ α 11.8+ α 24						
Fig - 94	681	SE-09 東側裏込	平瓦	17.4+ α 12.5+ α 22	やや緻密・小～中砂粒を含む	良好	灰	布目	繩目タタキ	ヘラ工具で 面取り
				35.5 20.7+ α 25						
				20+ α 20.4+ α 22						
Fig - 95	684	SE-09 東側裏込	平瓦	10.5+ α 12.0+ α 65	やや緻密・中～粗砂粒を少しあしむ	良好	灰	布目	繩目タタキ	ヘラ工具で 面取り
				10.5+ α 8.2+ α 69						
				26.1+ α 14.8+ α 22						
Fig - 97	687	SE-09 桶裏込	平瓦	25.3+ α 15.6+ α 45	緻密・中砂粒を含む	良好	灰	糸切り痕、 布目	繩目タタキ	ヘラ工具で 面取り
				17.2+ α 14.1+ α 22						
				14.1+ α 14.7+ α 24						
Fig - 98	690	SE-09 桶裏込	平瓦	15.4+ α 15.8+ α 23	やや緻密・中～粗砂粒を含む	良好	灰	糸切り痕、 布目	繩目タタキ	ヘラ工具で 面取り
				12.2+ α 11.8+ α 29						
				19.6+ α 14.8+ α 28						
Fig - 99	694	SE-09 桶裏込	平瓦	14.8+ α 10.8+ α 23	やや緻密・中～粗砂粒を多く含む	良好	灰	糸切り痕、 布目	糸切り痕、 繩目タタキ	ヘラ工具で 面取り
				15.6+ α 12.6+ α 28						
				30.2 17.5 8.3						
Fig - 100	696	SE-09 桶裏込	埠 無文	29.1 17.8 8.3	やや緻密・小～中砂粒を含む	良好	灰	板ナデ、 やや磨滅	板ナデ	ヘラ工具で 面取り
				26.4 17.1 6.9						
				22.8+ α 18.3 7.5						

Tab.65 出土遺物一覧表 64

Fig	番号	出土位置	器種		長・器高 幅・口径 厚・底径	胎土	焼成	色調	調整 (表・外面)		調整 (裏・内面)	調整側面
									板ナデ	板ナデ		
Fig-102	700	SE-09 桶裏込	埴	無文	207+ α 163 71	緻密・小砂粒を少し含む。	良好	灰白～橙	板ナデ	板ナデ	ヘラ工具で 面取り	
Fig-102	701	SE-09 桶裏込	埴	無文	138+ α 152 65	緻密・小～粗砂粒を含む。	良好	灰	板ナデ・ 磨減	板ナデ	ヘラ工具で 面取り	
Fig-102	702	SE-09 桶裏込	埴	無文	123+ α 172 7	緻密・小砂粒を少し含む	良好	灰	板ナデ・ やや磨減	板ナデ	ヘラ工具で 面取り	
Fig-103	703	SE-09 桶裏込	埴	無文	127+ α 172 72	緻密・小～中砂粒を少し含 む。	良好	灰	板ナデ・ やや磨減	板ナデ	ヘラ工具で 面取り	
Fig-103	704	SE-09 桶裏込	埴	無文	127+ α 175 72	緻密・小～中砂粒を含む。	良好	灰白	ナデ	ナデ	ヘラ工具で 面取り	
Fig-103	705	SE-09 桶裏込	埴	無文	135+ α 171 75	緻密・小～粗砂粒を含む。	良好	灰～ 灰白	板ナデ・ やや磨減	板ナデ	ヘラ工具で 面取り	
Fig-103	706	SE-09 桶裏込	埴	無文	115+ α 97+ α 67	緻密・小～中砂粒を少し含 む。	良好	灰白	板ナデ・ やや磨減	板ナデ	ヘラ工具で 面取り	
Fig-104	707	SE-09 桶裏込	埴	無文	143+ α 135+ α 71	緻密・小砂粒を少し含む。	良好	灰～ 灰白	板ナデ・ やや磨減	板ナデ	ヘラ工具で 面取り	
Fig-104	708	SE-09 桶裏込	埴	無文	109+ α 125+ α 81	緻密・小砂粒を少し含む。	良好	黄橙	板ナデ・ やや磨減	板ナデ	ヘラ工具で 面取り	
Fig-104	709	SE-09 桶裏込	埴	無文	201+ α 121+ α 77	やや緻密・中～粗砂粒を含 む。	良好	灰	板ナデ・ やや磨減	板ナデ	ヘラ工具で 面取り	
Fig-104	710	SE-09 桶裏込	埴	無文	98+ α 126+ α 72	緻密・小～中砂粒を少し含 む。	良好	灰	ナデ	板ナデ	ヘラ工具で 面取り	
Fig-105	711	SE-09 上層	輝緑凝 灰岩製 石瓶丁		42 80+ α 0.6							
Fig-105	712	SE-09 井樋内	滑石製 白玉		0.37 0.37 0.14							
Fig-105	713	SE-09	神功開 寶									
Fig-106	714	SE-09 井樋内	イスノ キ製櫛		3.7 8+ α 0.8							
Fig-106	715	SE-09 井樋内	イスノ キ製櫛		3.8 5.3 0.8							
Fig-106	716	SE-09 井樋内	イスノ キ製櫛		3.8 43+ α 0.8							
Fig-106	717	SE-09 井樋内	イスノ キ製櫛		1.3 29+ α 0.5							
Fig-106	718	SE-09 井樋内	イスノ キ製櫛		1.6 29+ α 0.8							
Fig-106	719	SE-09 井樋内	イスノ キ製櫛		2.7 0.4 0.5							
Fig-106	720	SE-09 西側裏 面	下鉢		20.1 8.3 1.4						スギ粧目	
Fig-106	721	SE09- 掘方	机		8.4 24.2 2.2							
Fig-106	722	SE-09 井樋内	柵		13.4 16.5 16.8							脚皮紐付き
Fig-106	723	SE-09 西側裏 面	桶底板		5.2 16.8 0.7							脚皮紐付き

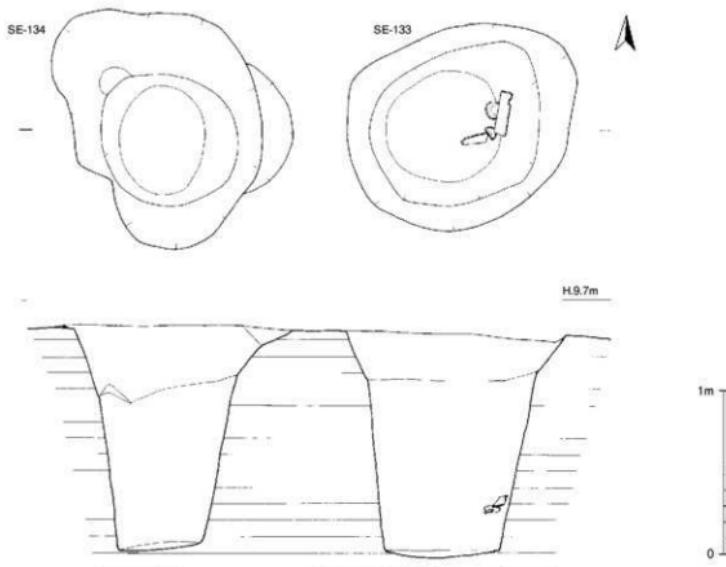


Fig.107 133・134号井戸実測図(1/30)

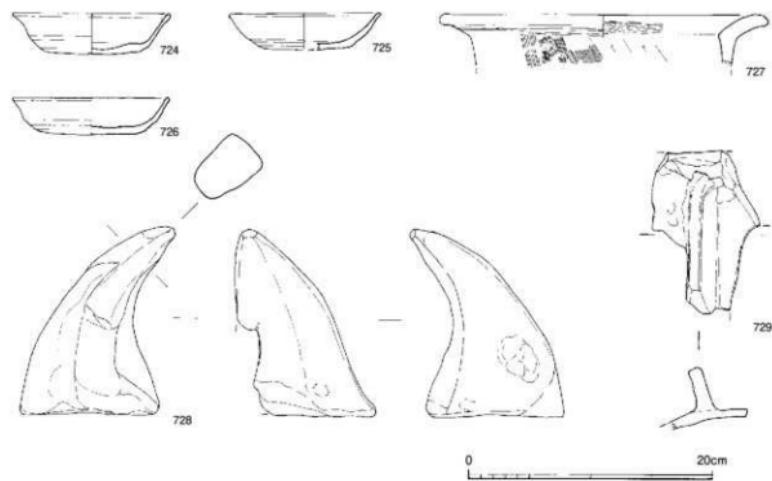


Fig.108 133・134号井戸出土遺物実測図(1/4)

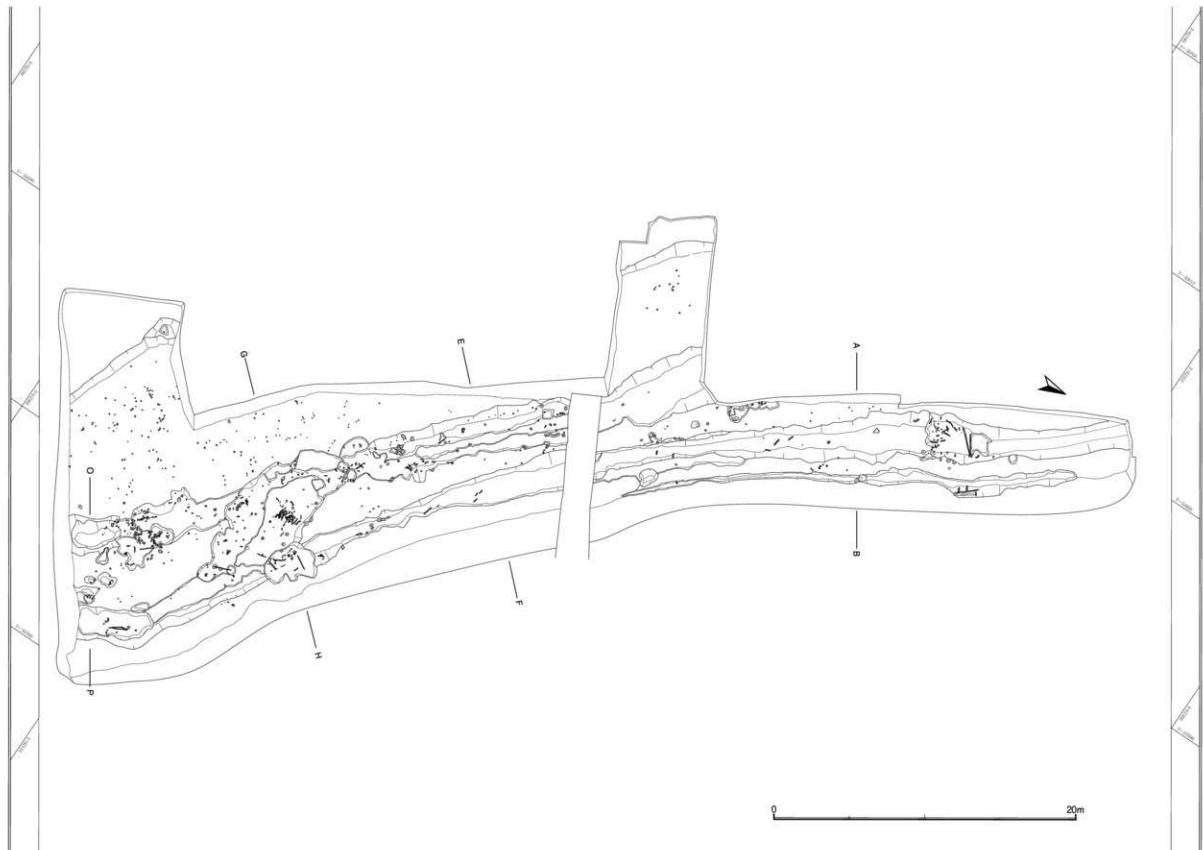


Fig.109 100号道路遭構实测图(1/200)

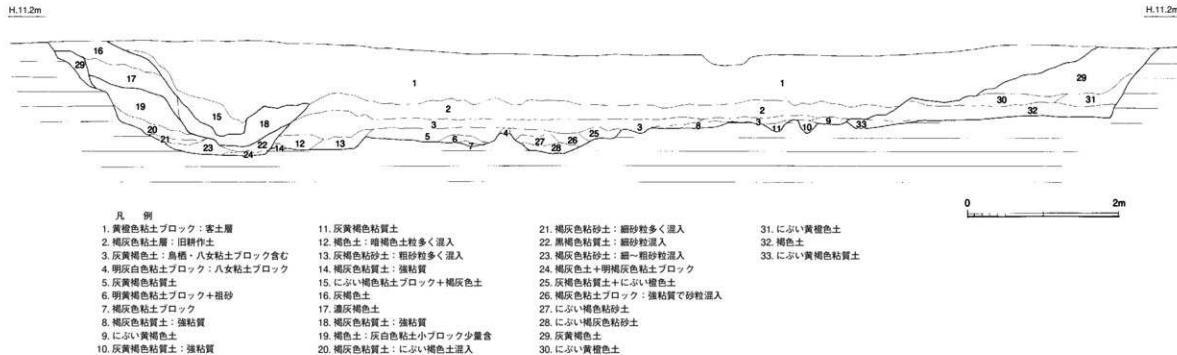


Fig.110 100号道路道構上層断面実測図(1/50)

2) 道路遺構 (SF)

道路遺構は、調査区の西端部で南東方から北西方へ延びる道路遺構を検出した。この道路遺構は、古代の駅路いわゆる官道で、高畠丘陵の頂を切通して南東縁にある第18次調査区I区で検出された道路遺構 SF-002 に繋がり、丘陵上を縦断している。本調査区と第18次調査区の道路はひとつに南は水城の東門を経て大宰府政府へ、北は板付を経て博多へと一直線に繋がっている。道路遺構は、初め緩傾斜する東側の法面と道路面を検出したが、西側の法面を検出すべく調査区を西へ拡張して西側の法面を確認した。また、中央部では渡廊下の建設に先立って東西の法面を確認した。

100号道路遺構 SF-100 (Fig. 109・110 卷頭 PL. 6 PL. 31・32)

100号道路遺構は、調査区の西部にあり、南東方から北西方へむかって直線的に延びている。昭和10年代に開削されて今は消失しているが、原状はここに標高が15mほどの丘陵が南北に延びており、道路遺構はこの丘陵の東寄りの斜面を大きく切通して開削している。切通しの法面は、東側では中世以降の水田化で切り開かれ、法下には水路が開かれて原状は余り留めていない。また、西側の法面は比較的良く原状を留めていた。一方、道路面は現地山面より-1mで確認された。西側法面の現状と昭和初期の地形図から復原すると、切通しの比高は3~4m、幅員は9mほどに復原される。道路面の標高は9.7~9.8mで、路面上には直径が10cmほどの牛の足跡が検出されたが、第18次調査区の調査で指摘された波板状遺構は検出されなかった。遺物は、路面上から瓦や壇のほかに弥生土器片や土師器片、青磁片などが出土したが、量的には少なく、該期に伴う遺構はなんら検出されなかった。今、道路面の中央部の西寄りと緩斜面下に2条の溝が流れているが、中央よりの101号溝は官道廃絶後の水田化に伴う水路である。また、緩斜面下の102号溝は水田の拡幅に伴って開削された溝である。

出土遺物 (Fig. 111 PL. 37)

730は、高環の脚部である。731は、龍泉窯の青磁碗で、内底面に「菱」の文字を描いている。高台径は4.2cm、高さは7.1cm。732は、底径が13cmの摺鉢で、内面に5本1単位の摺目が刻まれている。胎土は小~中砂粒を含み、色調は淡褐色。733は平瓦片である。

3) 溝遺構 (SD)

古代の溝は、3条を検出した。このうち2条 (SD-01・03) は調査区南東部の丘陵の縁辺部に位置する直線的な溝である。これに対して丘陵の東縁部を流れる1条の溝は (SD-136) は、弥生時代の旧河川 (SD-137) の西岸に沿って蛇行しながら北流している。

1号溝 SD-01 (Fig. 112 PL. 33)

1号溝は、調査区南東部の丘陵縁にある直線的な溝で、西壁は2号住居や127号建物を切っている。また、東へ7mの距離には9号井戸がある。溝幅は300~320cm、溝底幅は150cm、深さは75~80cmで、

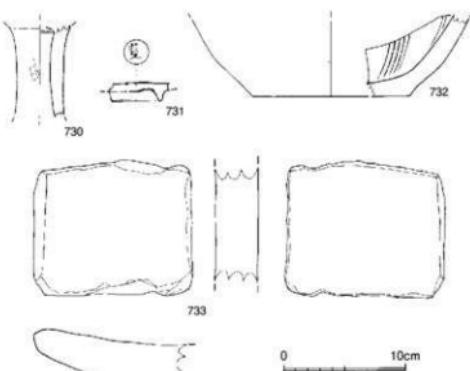


Fig. 111 100号道路遺構出土遺物実測図(1/4)

断面形は逆台形をなし、壁面は緩やかに立ち上がる。溝は南の調査区外に延びているが、調査区南端から12m地点で一旦取束し、2mの間をおいて再び10mほど直線的に延びて弥生期の河川へと流入する。この直線的な溝は、東側の沖積地と西側の丘陵部とを画するように延びており、溝の途切れた陸橋部は出入口の感がある。遺物は、弥生土器片や土製品、石器と埠、鉄釘が出土した。

出土遺物 (Fig. 113 PL. 60)

734は、口径が8.6cm、底径が5.2cm、器高が13cmの小型壺である。口縁部は、内傾する頸部から如意状に小さく外反して立ち上がる。胴部は肩の張った偏球形をなす。胎土は精良で小砂粒と雲母を含み、焼成は良好。赤橙色。735は、底径が5.2cmの壺の底部である。736・737は、壺の底部である。底径は、736が6.8cm、737は9.8cm。738は、口径が21.2cmの甕である。口縁部直下に小さな刻み目突帯を巡らし、胴部はストレートに窄まる。調整は、内外面ともにナデ。胎土には微細～中砂粒と雲母を含み、色調は淡黄橙色。739は、長さが24.7cm、幅が8.8～10.5cm、厚さが7～7.3cm

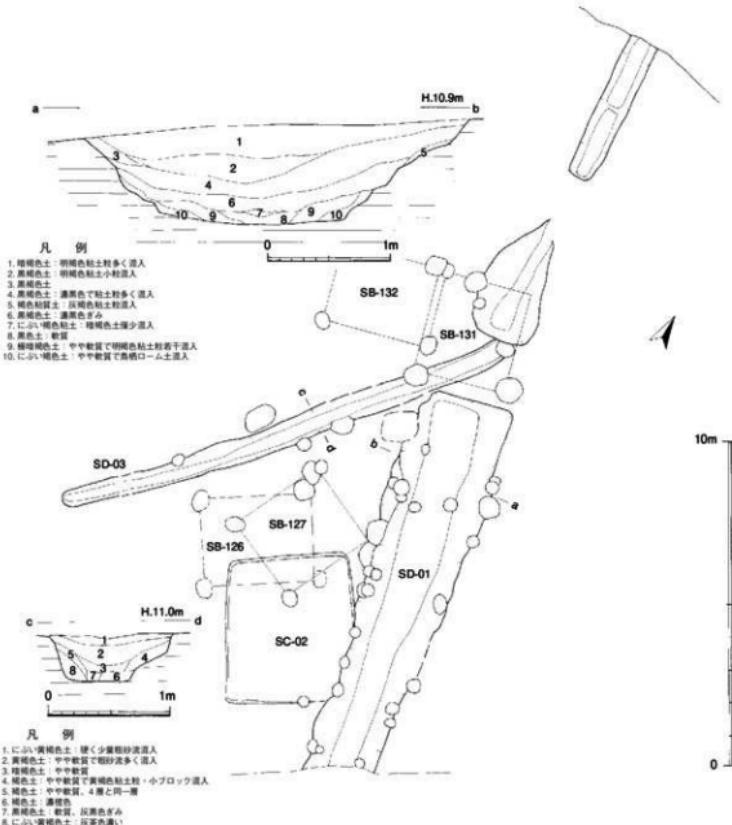


Fig.112 1・3号溝実測図(1/40・1/150)

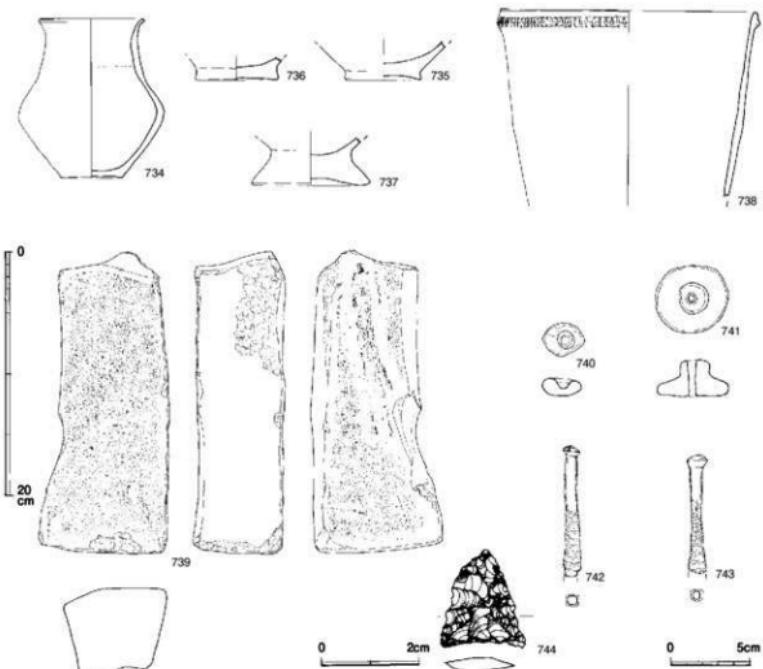


Fig.113 1号溝出土遺物実測図(1/1・1/3・1/4)

の埠である。焼成は堅緻で煉瓦状を呈し、一部に叩き痕と布目痕が残る。側縁には壁土状の粘土塊が付着し、鉛状の焼痕がある。740は、2.1～2.5cm径、厚さが1.03～1.13cmの不整円形の手捏土製品である。中央部には棒状工具による刺突で、凹みを付けている。胎土は精良。741は、摘み状の突起をもつ紡錘車である。直径は4.1cmで、摘み部径は1.8～2cm、高さは0.9～1cm。円孔は下から上へ穿孔している。胎土には、微細～石英小砂粒を多く含む。742・743は、先端の欠けた鉄釘である。身幅は0.7～0.8cmで、木質が锈着している。744は、長さが2cm、基部幅が1.7cm、最大厚が0.3cmの黒曜石製打製石器である。表裏面共に丁寧な押圧剥離加工を施している。断面形は菱形。

3号溝 SD-03 (Fig. 112)

3号溝は、調査区南東部を東西に延びる細長い溝で、東端部は1号溝に切られている。溝幅は100cm、溝底幅は50～55cmで、断面形は逆台形をなす。深さは35cmで壁面は緩やかに立ち上がる。

136号溝 SD-136 (Fig. 114 PL. 33)

136号溝は、調査区の東縁を北流する弥生期の河川(SD-137)の西岸に沿って蛇行しながら北流する溝である。溝は、南東隅では137号河川の河段上を流れているが、15mほど北で137号河川の砂層上を左へ緩やかな弧を描くように西へ流れいく。次に溝は、調査区の中央で西流してきた10号河川の埋土である黒色粘質土層に合流し、緩やかに北西方へと流れを変える。溝は、この合流点で

Tab.66 出土遺物(土器)一覧表 65

Fig	番号	出土位置	器種		長・器高 幅・口径 厚・底径	胎土	焼成	色調	調整		備考	
									(表)	(裏・外面)		
Fig - 108	724	SE - 133	土師器	壺	3.4	緻密・小砂粒を少し含む。 雲母片を多く含む	良好	淡橙褐色	ナデ・ ヘラ切り	ナデ		
					1.3							
					7.5							
Fig - 108	725	SE - 133	土師器	壺	3	緻密・小砂粒を少し含む。 赤褐色を含む	良好	橙	ナデ・ ヘラ切り	ナデ		
					12.4							
					6.2							
Fig - 108	726	SE - 133	土師器	壺	3	緻密・小～中砂粒を含む。 赤褐色を含む。雲母片を含む	良好	橙	ナデ・ ヘラ切り	ナデ		
					12.8							
					7.5							
Fig - 108	727	SE - 133	土師器	甕	43+ α	やや粗い・小～粗砂粒を含む	良好	橙褐色	ハケメ・ ケズリ・ ナデ			
					27							
Fig - 108	728	SE - 134	土師器	支脚	15.4	緻密・小砂粒を少し含む	良好	橙	ナデ・ 指頭押圧	ナデ・ 指頭押圧		
					11.4							
					11.4							
Fig - 108	729	SE - 134	土師器	移動式 カマド	13.4+ α	緻密・小砂粒をわずかに含む。 赤褐色を含む	良好	橙	ナデ	ヘラケ ズリ		
					8.9+ α							
Fig - 111	730	SF - 100	弥生土 器	高壺	7.1	緻密・小砂粒を含む	良好	橙	タテハケ ・ナデ	ナデ	側面にヘラ 書き？	
					4.2							
Fig - 111	731	SF - 100	龍泉窯 青磁	碗	7.1	緻密	良好	淡青	ナデ	ナデ	見込みに 「菱」の字	
					4.2							
Fig - 111	732	SF - 100	中世土 器	擂鉢	6.4+ α	緻密・小～中砂粒を含む。 赤褐色を含む	良好	淡褐	ケズリ・ ナデ	ナデ・ 粗い脚 目		
					13							
Fig - 111	733	SF - 100	平瓦		11.2+ α	やや緻密・小～粗砂粒を含 む	良好	灰	磨滅	縦目タ キ	ヘラ工 具で削 取り	
					12.5+ α							
Fig - 113	734	SD - 01	弥生土 器	壺	3.5	緻密・小砂粒を含む。雲母 片を含む	良好	赤橙	ナデ	ナデ	糊圧痕あり	
					5.2							
Fig - 113	735	SD - 01	弥生土 器	壺	3.2+ α	緻密・小砂粒を含む。雲母 片を含む	良好	暗茶褐色	ナデ	ナデ		
					5.2							
Fig - 113	736	SD - 01	弥生土 器	甕	1.8+ α	緻密・小～中砂粒を含む。 赤褐色を含む	良好	淡橙	ナデ	ナデ		
					6.8							
Fig - 113	737	SD - 01	弥生土 器	甕	4+ α	緻密・小砂粒を含む。雲母 片を含む	良好	淡黄橙	ナデ	ナデ		
					9.8							
Fig - 113	738	SD - 01	弥生土 器	甕	15.2+ α	やや緻密・微細～中砂粒を 含む。雲母片を含む	良好	淡黄橙	ナデ	ナデ	黒斑あり	
					21.2							
Fig - 113	739	SD - 01	壺	無文	24.7	やや緻密・小～粗砂粒を含 む	良好	赤褐	板ナデ	板ナデ	タタキ	アメ状の焼 け
					10.5							
Fig - 113	740	SD - 01	土製品		2.5	緻密	良好	淡黄白				
					21							
Fig - 113	741	SD - 01	土製紡 錘車		4.1	緻密・微細～石英小砂粒を 含む。雲母片を含む	良好	赤橙				
					4.1							
Fig - 113	742	SD - 01	鉄釘		2.2						本質が吸る	
					8.0+ α							
Fig - 113	743	SD - 01	鉄釘		0.8+ α						本質が残る	
					0.8+ α							
Fig - 113	744	SD - 01	黒曜石 製石器		2							
					1.7							
Fig - 113	744	SD - 01	黒曜石 製石器		0.3							

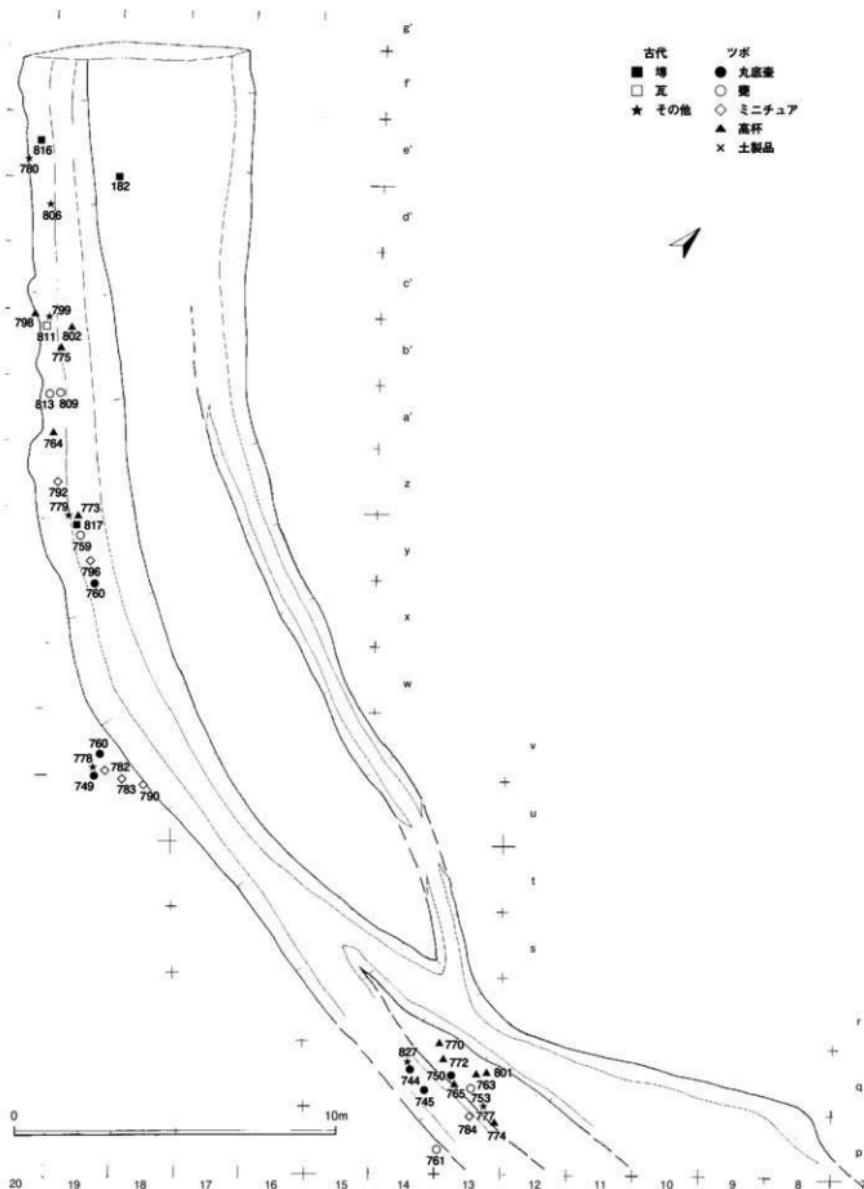


Fig.114 136号溝遺物出土状況実測図(1/150)

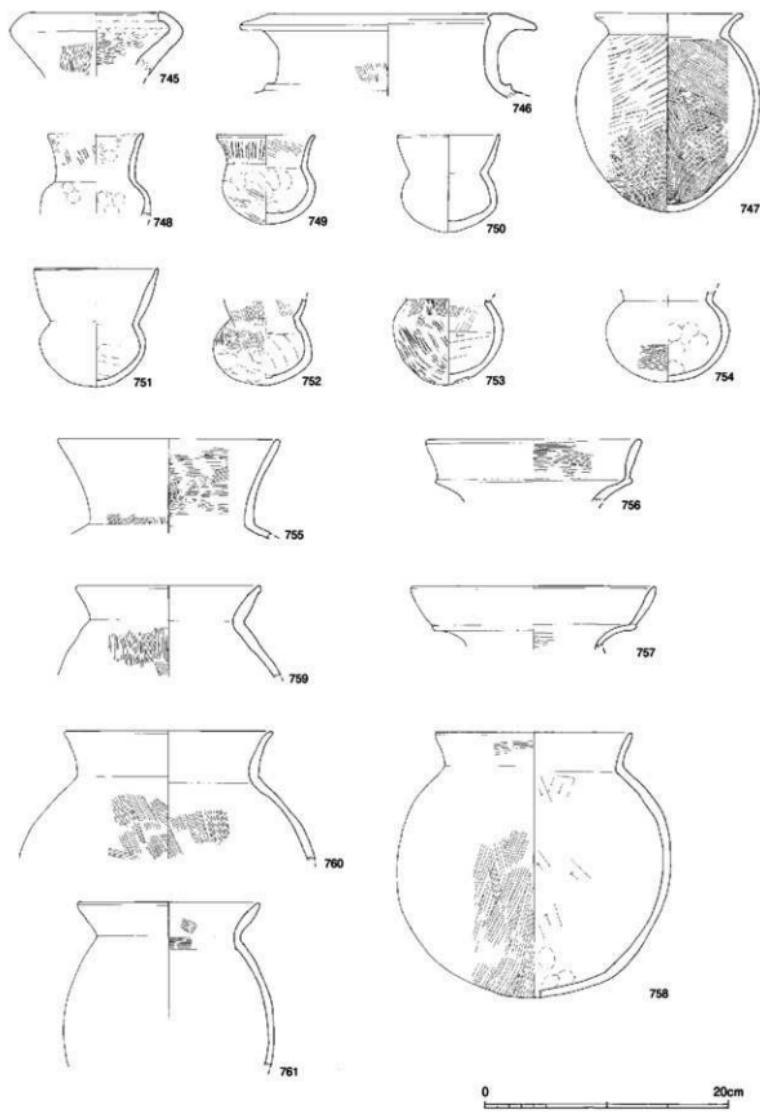


Fig.115 136号溝出土遺物実測図1(1/4)

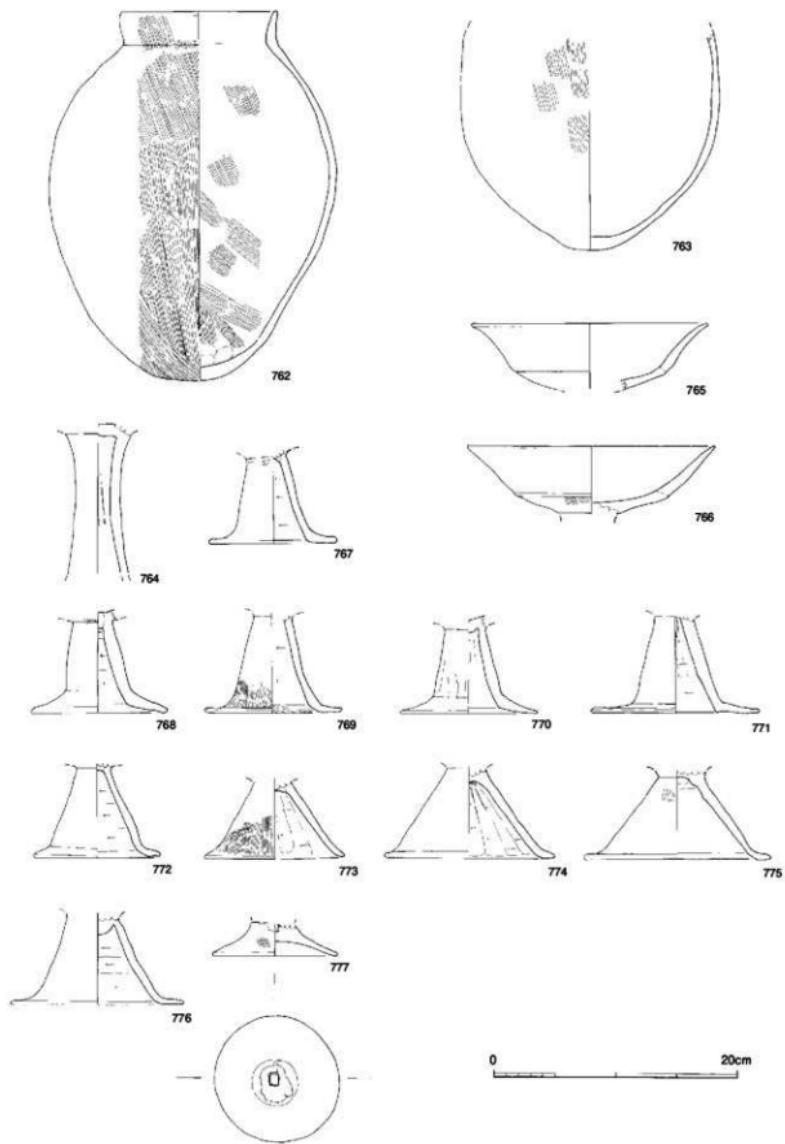


Fig.116 136号溝出土遺物実測図2(1/4)

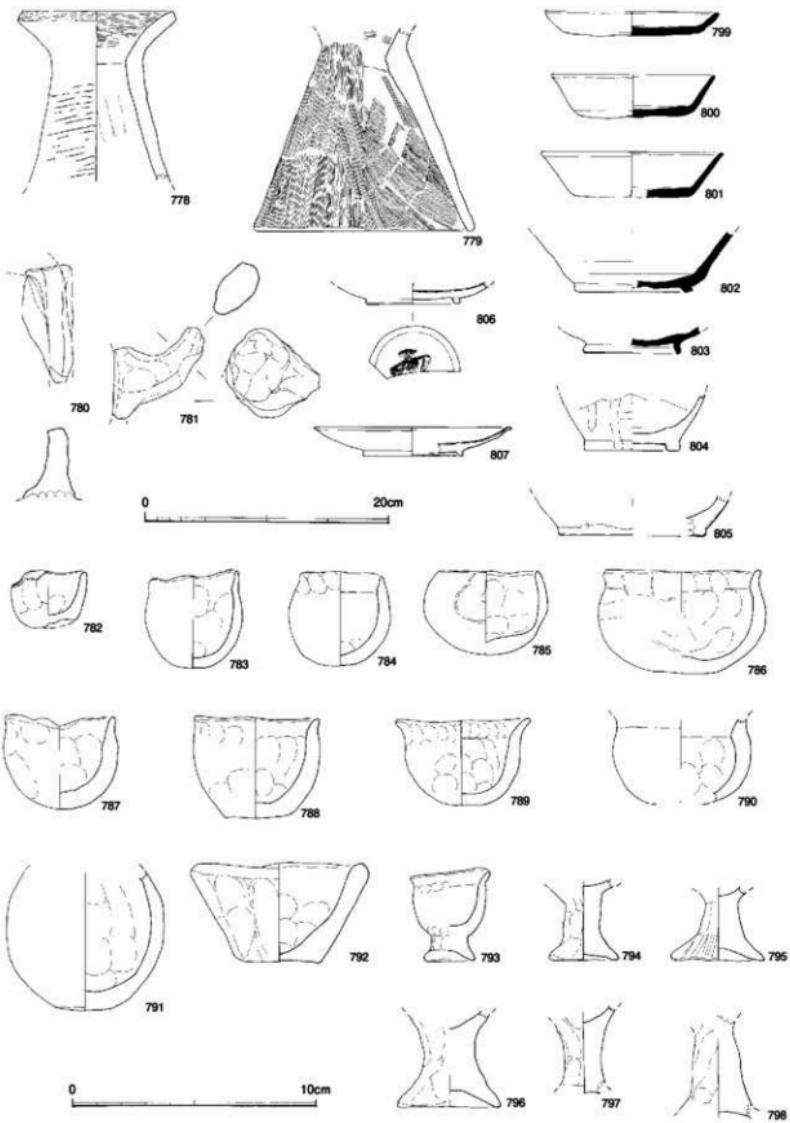


Fig.117 136号溝出土遺物実測図3 (1/2・1/4)

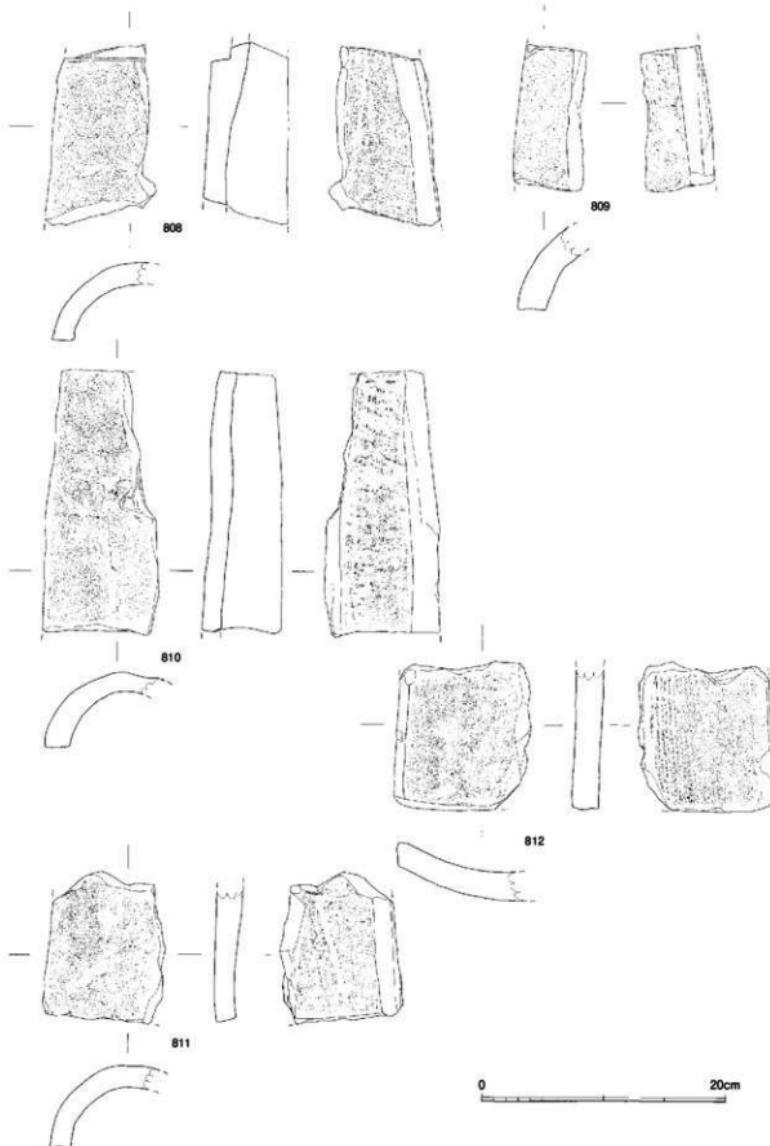


Fig.118 136号溝出土遺物実測図4(1/4)

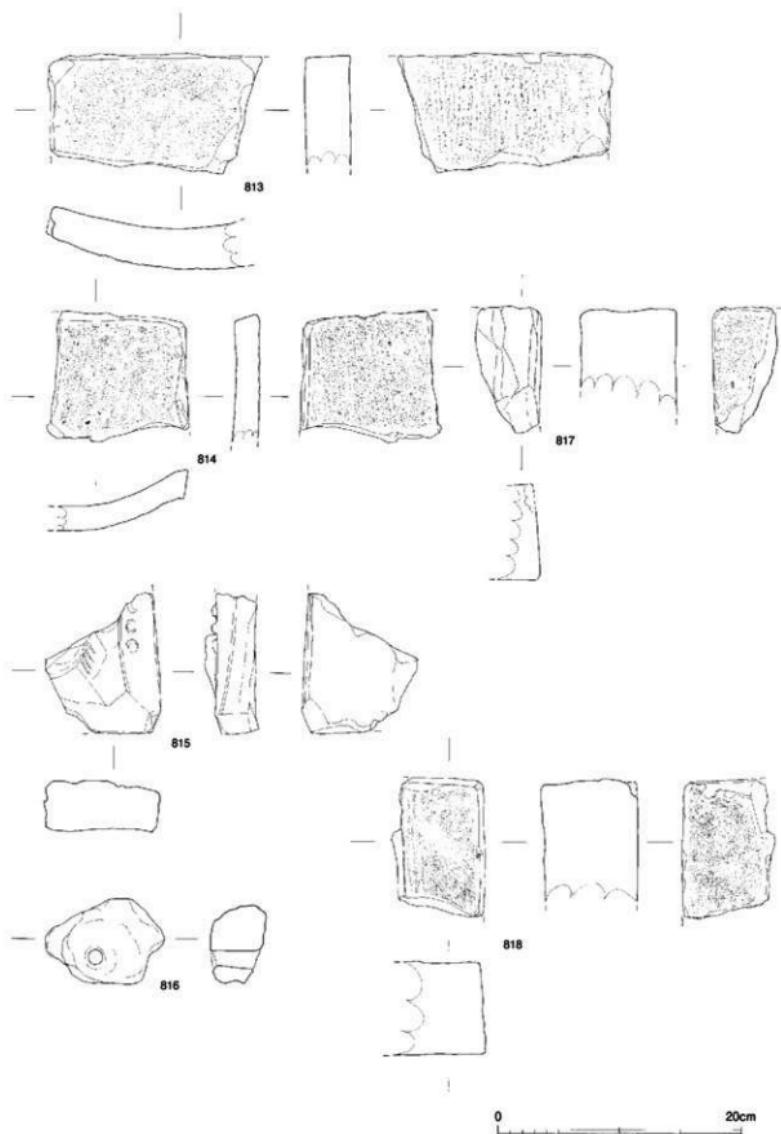


Fig.119 136号溝出土遺物実測図5(1/4)

2筋に分流する。分流した東西の溝は、2.5mの間を置いて10号河川の東西両岸に沿って流れる。溝幅は西側の溝が100~250cm、深さは70~80cm、東側の溝は90~125cm、深さは45cmとやや浅い。いずれも壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は溝底が円レンズ状に浅く窪む逆台形状をなす。河岸を共にする137・10号河川の西岸に沿って北流する西側の溝には土師器の壺や甕、高坏、ミニチュア土器のはかに須恵器、瓦塼、灰釉陶器などが出土した。(小林義彦)

出土遺物 (Fig. 115~120 PL. 59・60)

745は袋状口縁壺の口縁部である。内外面ともハケ目のちナデ調整である。口縁の屈曲部内面には指圧痕が連続して見られる。口縁端部はやや四角に仕上げる。746は鋤先口縁の広口壺の口縁から頸部である。鋤先口縁は外側にのび、やや垂れ下がる。内面には小さく張り出す。頸部には断面三角形の突帯が一条めぐる。外面はハケ目のちナデ調整、内面はナデ調整である。外面に赤色顔料が付着している。748~754は小型丸底壺である。748・749は口径より胴部径の方が大きく、内外面ともハケ目後にナデ調整で、一部に工具痕が残る。750・751は口径より胴部径が小さく、内外面ともナデ調整である。752から754は胴部から底部のみ残存しており、内外面ともハケ目のちナデ調整で、一部に工具痕が残る。755・758は素口縁壺である。755はやや外反する長い口縁を持つ。頸部の屈曲は強い。内外面ともハケ目後にナデ調整である。758は短い口縁部に球形の胴部が付く頸部の屈曲は弱い。外面はハケ目のちナデ調整、内面は継方向のケズリのちナデ調整である。756・757は二重口縁壺の口縁部である。いずれも外面はナデ調整で、内面に横方向のハケ目が見られる。口縁部は直線的に立ち上がる。

747・759~763は甕である。747は「く」字に屈曲してやや外反ぎみにのびる口縁に、球形の胴部が付き、丸底の底部である。外面上半にタタキを施し、外面底部と内面はハケ目調整である。759~763はいずれも、ゆるい「く」字口縁の長胴の甕である。

764は弥生土器の高坏脚部である。内面に絞り痕が残る。765・766は土師器の高坏部である。765は坏部がやや屈曲し、口縁にむけて外反する。766は屈曲がゆるく、口縁部にむけてそれほど外反しない。767~777は高杯脚部である。767~776はいずれも内面を削りで仕上げている。外面はハケ目のちナデ調整とナデ調整とがある。767~772は脚の軸がしまり、裾が屈曲するものである。773~776は脚がラッパ状に広がる。777は組み合わせ式の木製高坏のように、脚の軸と裾を別に作り、組み合わせた高坏の裾部である。中央部に四角いホゾ穴があるが、貫通していない。裾部の底は上げ底状である。

778・779は器台である。778は裾部外面にタタキがみられる。受け部には横方向のハケ目が見られる。779は内外面ともハケ目調整である。

780は移動式カマドの底の側面部分である。781は把手である。指頭押圧痕が明瞭に残る。

782~798は手捏のミニチュア土器である。いずれも指頭押圧とナデで整形されている。782~792は鉢形で、胴部が丸みを帯びるものや直線的なものなどバリエーションがある。793は台付き鉢形で、口縁はやや外反し、胴部はやや丸みを持つ。底部は上げ底である。794から798は脚部である。いずれも脚底部は上げ底である。

799は須恵器の皿である。800・801は須恵器の坏である。802・803は須恵器の高台付き坏である。804・805は灰釉陶器の壺底部である。806は灰釉皿の皿底部である。底部外面に墨書があり、ウカンムリか雨カンムリのようである。807は磁器の皿である。色調はオリーブ色を呈す。

808~811は丸瓦である。いずれも表面(凸面)はナデ調整、裏面(凹面)は布目が残る。側面はヘラで削り取って面取りする。811は表面に横方向の沈線が見られる。812~814は平瓦である。い

ずれも表面(凹面)に布目が残り、裏面(凸面)は縄目タタキで、側面はヘラで削り取って面取りする。814の表面には布目のほかに糸切り痕が残る。815・816は鬼瓦である。815は右下隅の部分で、周縁に珠文が3個観察でき、髪の表現も見られる。表面は型押しし、裏面は縄目タタキが見られる。SE-09出土の鬼瓦の隅部分が厚さ5cm以上と考えられるのに対し、この鬼瓦は厚さ4.2cmと薄く小型である。816は鬼瓦の釘留め部分である。全体に摩滅している。817・818は無文壇である。いずれも残りはよくなないが、表裏面は板ナデ、側面を面取りして仕上げたと思われる。厚さは7.8cmと、SE-09出土の壇と同様の計測値を示す。(谷直子)

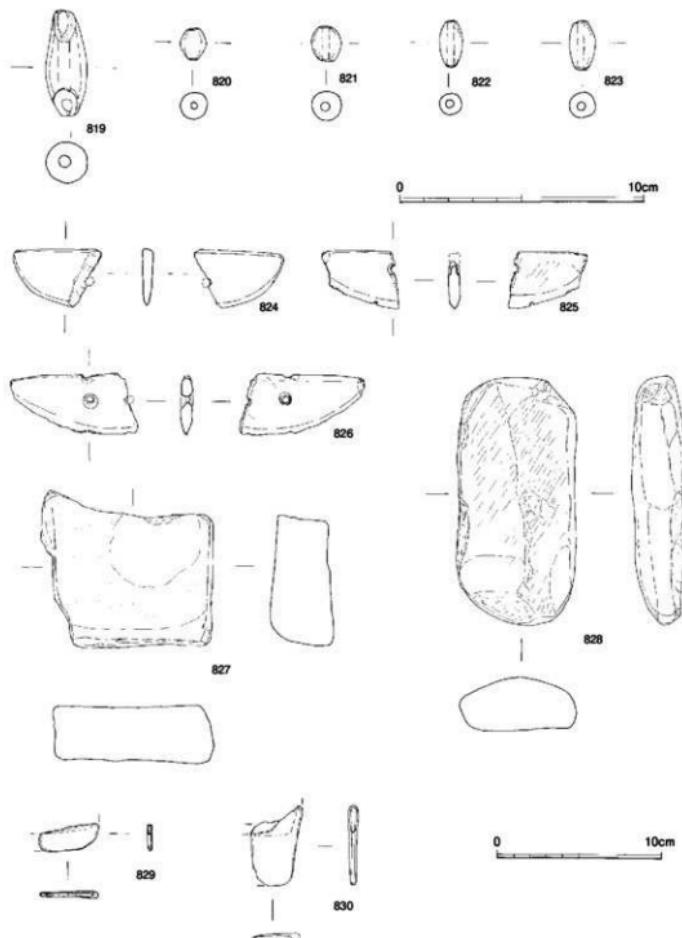


Fig.120 136号溝出土遺物実測図 6 (1/2 + 1/3)

Tab.67 出土遺物(土器)一覧表 66

Fig	番号	器種	長・器高	胎土	焼成	色調	調整 (表・外面)	調整 (裏・内面)	備考	
			幅・口径 厚・底径				(表・外面)	(裏・内面)		
Fig-115	745	弥生土器	袋狀口 縁壺	52+ α 10.4	緻密・小砂粒を含む。 角閃石を含む。	良好	淡橙	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	
Fig-115	746	弥生土器	磨先口 縁壺	68+ α 24.2	緻密・小～中砂粒を含む。 雲母片を含む。	良好	灰褐	ハケメ・ナデ	ナデ	外面に赤色顔料付着
Fig-115	747	土師器	甕	16.3 12.2	やや粗い・小～粗砂粒を多く含む	良好	橙	ハケメ・タタキ・ナデ	ハケメ・ナデ	
Fig-115	748	土師器	小型丸底壺	6.7+ α 7.8	緻密・小砂粒を少し含む。	良好	灰褐	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	
Fig-115	749	土師器	小型丸底壺	7.3 8	緻密・小～中砂粒を含む。 雲母・角閃石を含む。	良好	灰	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	
Fig-115	750	土師器	小型丸底壺	8 8.4	緻密・小砂粒を含む	良好	橙	ナデ・磨滅	ナデ・工具痕あり	
Fig-115	751	土師器	小型丸底壺	9.7 10.2	粗い・小～粗砂粒を多く含む	良好	赤橙	ナデ・磨滅	ナデ・指頭押圧	
Fig-115	752	土師器	小型丸底壺	9.2+ α	緻密・小～粗砂粒を少し含む	良好	灰白	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	
Fig-115	753	土師器	小型丸底壺	7.1+ α	緻密・小砂粒を含む	良好	灰褐	ハケメ・ナデ	ハケメ・ケズリ・ナデ	
Fig-115	754	土師器	小型丸底壺	7.5+ α	緻密・中砂粒を含む。 雲母片を含む	良好	橙褐	ハケメ・ナデ	ナデ・指頭押圧	
Fig-115	755	土師器	甕	8.1+ α 18.4	やや緻密・小砂粒を多く含む	良好	灰白	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	
Fig-115	756	土師器	二重口 縁壺	7.1+ α 17.7	粗い・小～粗砂粒を多く含む	良好	灰褐	ナデ	ハケメ・ナデ	
Fig-115	757	土師器	二重口 縁壺	5.2+ α 20.2	やや緻密・小～粗砂粒を含む	良好	灰褐	ナデ	ハケメ・ナデ	
Fig-115	758	土師器	甕	21.8 16.2	緻密・小～中砂粒を少し含む	良好	灰褐	ハケメ・ナデ	ケズリ・ナデ	
Fig-115	759	土師器	甕	7.6+ α 15.2	やや粗い・小～粗砂粒を多く含む	良好	灰褐	ハケメ・ナデ	ケズリ・ナデ	スス付着
Fig-115	760	土師器	甕	10.5+ α 17	やや粗い・小～中砂粒を多く含む	良好	橙	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	
Fig-115	761	土師器	甕	13.4+ α 15	粗い・小～粗砂粒を多く含む	良好	灰黄	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	
Fig-116	762	土師器	甕	30.2 12.8	緻密・小～中砂粒を含む。 角閃石を含む。	良好	黄褐	タテハケ	ハケメ・ナデ・磨滅	黒斑あり
Fig-116	763	土師器	甕	18.4+ α	やや粗い・小～粗砂粒を多く含む	良好	橙	ハケメ・ナデ	ナデ・磨滅	スス付着
Fig-116	764	弥生土器	高环	11.3+ α	緻密・小砂粒を含む。 赤褐色粒を含む。 雲母片を含む	良好	橙	ナデ	ナデ・紋り痕	
Fig-116	765	土師器	高环	5.5+ α 19.4	緻密・小～中砂粒を少し含む	良好	橙	ナデ・磨滅	ナデ・磨滅	二次被熱
Fig-116	766	土師器	高环	5.7+ α 20.4	緻密・小～中砂粒を少し含む	良好	橙	ハケメ・ナデ・磨滅	ナデ・磨滅	

Tab.68 出土遺物(土器)一覧表 67

Fig.	番号	器種	長・若高 幅・上径 厚・底径	胎土	焼成	色調	調整 (表・外面)	調整 (裏・内面)	調整側面	備考
Fig-116	767	土師器	高环 82+ α 10.6	やや緻密・小～中砂粒を多く含む	良好	橙	ナデ・磨滅	ケズリ・ナデ		
Fig-116	768	土師器	高环 85+ α 11.2	緻密・小砂粒を含む。赤褐色を含む。雲母片を含む	良好	淡橙	ハケメ・ナデ	ケズリ・ナデ		
Fig-116	769	土師器	高环 82+ α 11.2	やや緻密・小～粗砂粒を少し含む	良好	灰	ハケメ・ナデ	ハケメ・ケズリ・ナデ		
Fig-116	770	土師器	高环 81+ α 11.2	緻密・小砂粒をわずかに含む	良好	淡橙	ナデ	ケズリ・ナデ		
Fig-116	771	土師器	高环 8.7+ α 13.8	緻密・小砂粒をわずかに含む	良好	淡黄橙	ナデ	ケズリ・ナデ・絞り痕あり		669と接合
Fig-116	772	土師器	高环 7.9+ α 10.5	緻密・小～中砂粒を含む	良好	灰黄	ナデ	ケズリ・ナデ		646と接合
Fig-116	773	土師器	高环 6.7+ α 11.4	やや緻密・中～粗砂粒を含む	良好	橙	ハケメ・ナデ	ケズリ・ナデ		
Fig-116	774	土師器	高环 7.5+ α 14	緻密・小～中砂粒を含む	良好	橙	ナデ	ケズリ・ナデ		
Fig-116	775	土師器	高环 7.3+ α 15.2	やや緻密・中～粗砂粒を含む	良好	橙	ハケメ・ナデ・磨滅	ケズリ・ナデ・磨滅		
Fig-116	776	土師器	高环 7.6+ α 14.2	粗い・小～粗砂粒を多く含む	良好	橙	ナデ・磨滅	ケズリ・ナデ		
Fig-116	777	土師器	高环 28+ α 10.2	緻密・小～粗砂粒を少し含む	良好	淡橙	ハケメ・ナデ	ナデ		組み合わせの高脚脚部
Fig-117	778	土師器	器台 14.1+ α 12.4	やや粗い・小～中砂粒を多く含む	良好	橙	ハケメ・タタキ・ナデ	ハケメ・ナデ		
Fig-117	779	土師器	器台 16.7+ α 18	緻密・小～粗砂粒をわずかに含む	良好	淡黄褐	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ		
Fig-117	780	土師器	移動式 カマド 9.7+ α 41+ α	緻密・小砂粒を少し含む。	良好	淡黄橙	ナデ	ナデ		
Fig-117	781	土師器	把手	緻密・小～中砂粒を含む	良好	黄橙	ナデ・指頭押圧	ナデ・指頭押圧		
Fig-117	782	ミニ チュア 土器	鉢形 22 32	緻密・小砂粒をわずかに含む	良好	橙	ナデ・指頭押圧	ナデ・指頭押圧		
Fig-117	783	ミニ チュア 土器	鉢形 4 5.4	緻密・小砂粒を含む	良好	灰白	ナデ・指頭押圧	ナデ・指頭押圧		
Fig-117	784	ミニ チュア 土器	鉢形 3.9 3.4	緻密・小砂粒を少し含む	良好	橙	ナデ・指頭押圧	ナデ・指頭押圧		
Fig-117	785	ミニ チュア 土器	鉢形 3.4 4.1	緻密・小砂粒を少し含む	良好	橙	ナデ	ナデ・指頭押圧		
Fig-117	786	ミニ チュア 土器	鉢形 4.1 6.4	緻密・雲母片を少し含む	良好	黑褐	ナデ・指頭押圧・ミガキ	ナデ・指頭押圧		
Fig-117	787	ミニ チュア 土器	鉢形 3.8 4.4	緻密・小～中砂粒を含む	良好	茶褐	ナデ・指頭押圧	ナデ・指頭押圧		
Fig-117	788	ミニ チュア 土器	鉢形 4.2 5.2 2.7	緻密・小～中砂粒を含む。雲母片を含む	良好	淡橙褐	ナデ・指頭押圧	ナデ・指頭押圧		

Tab.69 出土遺物(土器)一覧表 68

Fig	番号	器種	長・器高	胎土	焼成	色調	調整(表・外側)	調整(裏・内面)	備考
			幅・口径 厚・底径						
Fig-117	789	ミニチュア土器	35 65 む	緻密・雲母片を少し含む	良好	灰褐	ナデ・指頭押圧	ナデ・指頭押圧	
Fig-117	790	ミニチュア土器	35+ α	緻密・小砂粒をわずかに含む	良好	灰褐	ナデ	ナデ・指頭押圧	
Fig-117	791	ミニチュア土器	5.7+ α	緻密・小~中砂粒を含む	良好	黄橙	ナデ・磨滅	ナデ・指頭押圧	スス付着
Fig-117	792	ミニチュア土器	4 7 36	緻密・小~中砂粒を含む。角閃石を含む	良好	明灰褐	ナデ・指頭押圧	ナデ・指頭押圧	
Fig-117	793	ミニチュア土器	37 32 11	緻密・小砂粒を含む	良好	橙	ナデ・指頭押圧	ナデ・指頭押圧	
Fig-117	794	ミニチュア土器	32+ α 29	緻密・小~粗砂粒をわずかに含む	良好	淡橙	ナデ・指頭押圧	ナデ	
Fig-117	795	ミニチュア土器	31+ α 38	緻密・雲母片を少し含む	良好	灰褐	ナデ・指頭押圧・ハケメ	ナデ	
Fig-117	796	ミニチュア土器	3.9+ α 42	やや緻密・小~粗砂粒を含む	良好	黄灰褐	ナデ・指頭押圧	ナデ	
Fig-117	797	ミニチュア土器	3.6+ α	緻密・小砂粒を含む	良好	橙	ナデ・指頭押圧	ナデ・指頭押圧	
Fig-117	798	ミニチュア土器	42+ α	緻密・小~中砂粒を含む	良好	灰	ナデ・指頭押圧	ナデ	
Fig-117	799	須恵器	21 14.2 11.2	緻密・小砂粒を含む	良好	灰	ナデ・ヘラケズリ	ナデ	
Fig-117	800	須恵器	35 13.4 8.9	緻密・小砂粒をわずかに含む	良好	淡黄橙	ナデ・ヘラケズリ	ナデ	
Fig-117	801	須恵器	5 15 10	緻密・小砂粒を含む	良好	灰	ナデ・ヘラケズリ	ナデ	
Fig-117	802	須恵器	50+ α 9.7	やや粗い・小~粗砂粒を多く含む	良好	灰	ナデ	ナデ	
Fig-117	803	須恵器	22+ α 8	緻密・小~中砂粒を含む。赤褐色を含む	良好	橙	ナデ	ナデ	赤焼
Fig-117	804	灰釉陶器	4.7+ α 7.7	緻密	良好	淡綠	ナデ	ナデ	
Fig-117	805	灰釉陶器	33+ α 12	緻密	良好	淡綠	ナデ	ナデ	
Fig-117	806	灰釉	18+ α 7.5	緻密	良好	灰白	ナデ	ナデ	墨書きあり
Fig-117	807	磁器	23 16.2 8	緻密	良好	オリーブ	ナデ・ケズリ	ナデ	
Fig-118	808	丸瓦	14.9+ α 9.2+ α 2.9	やや緻密・中砂粒を含む	良好	灰白	ナデ	布目	ヘラ工具で面取り
Fig-118	809	丸瓦	12.1+ α 5.7+ α 2.2	緻密・小~粗砂粒を含む	良好	灰黄	ナデ	布目	ヘラ工具で面取り
Fig-118	810	丸瓦	21.5+ α 9.8+ α 1.8	緻密・小~中砂粒を含む	良好	灰白	ナデ	布目	ヘラ工具で面取り

Tab.70 出土遺物(土器)一覧表 69

Fig	番号	器種	長・器高	胎土	焼成	色調	調整 (表・外側)	調整 (裏・内側)	備考
			幅・口径				厚・底径		
Fig-118	811	丸瓦	12.6+α	粗い・粗砂粒を少し含む	良好	灰黄	ナデ・横位の沈線	布目	ヘラ工具で面取り
			9.7+α						
			2.1						
Fig-118	812	平瓦	12.2+α	緻密・小～中砂粒を少し含む	良好	灰白	布目	縄目タタキ	ヘラ工具で面取り
			11.1+α						
			2.3						
Fig-119	813	平瓦	9.7+α	緻密・小～中砂粒を少し含む	良好	灰白	布目	縄目タタキ	ヘラ工具で面取り
			17.6+α						
			3.7						
Fig-119	814	平瓦	10.8+α	緻密・小～粗砂粒を含む	良好	灰	糸切り痕・布目	縄目タタキ	ヘラ工具で面取り
			11.6+α						
			2.1						
Fig-119	815	鬼瓦	11.6+α	緻密・小～粗砂粒をわずかに含む	良好	灰白	型押し	縄目タタキ	ナデ
			9.6+α						
			4.2						
Fig-119	816	鬼瓦	7.1+α	やや緻密・小砂粒を多く含む	良好	黄白	磨滅	磨滅	
			9.6+α						
			4.5+α						
Fig-119	817	埴	10.3+α	緻密・小～中砂粒を含む	良好	淡橙褐	磨滅	磨滅	
			5.4+α						
			7.8						
Fig-119	818	埴	11.3+α	やや緻密・中～粗砂粒を含む	良好	灰黄	板ナデ・やや磨滅	板ナデ	ヘラ工具で面取り
			7.7+α						
			7.8						
Fig-120	819	土鍤	4.4	緻密	良好	淡灰黄			
			1.7						
			1.7						
Fig-120	820	土製玉	1.35	緻密・赤褐色粒を含む	良好	淡明橙			
			1.07						
			1.07						
Fig-120	821	土製玉	1.46	緻密・赤褐色粒を含む	良好	淡明橙			下方から上方へ穿孔
			1.26						
			1.26						
Fig-120	822	土鍤	1.9	緻密・赤褐色粒を含む	良好	淡明橙			棒状工具による押圧
			0.9						
			0.9						
Fig-120	823	土鍤	2	緻密・赤褐色粒を含む	良好	淡明橙			
			1.1						
			1.1						
Fig-120	824	粘板岩 製石窓 丁	35+α						
			54+α						
			0.7						
Fig-120	825	片岩製 石窓丁	35+α						
			48+α						
			0.6						
Fig-120	826	輝緑岩 灰岩製 石窓丁	38						
			7.7+α						
			0.7						
Fig-120	827	砂岩製 石窓	9.8+α						
			10.6+α						
			36						
Fig-120	828	敲石?	15.2						
			7.3						
			33						
Fig-120	829	銅製 鋤先	1.7+α						
			3.7+α						
			0.3						
Fig-120	830	銅製 鋤先	49+α						
			32+α						
			0.6						

819は、両端部を欠いた土錐である。現長は4.4cm、最大径は1.7cmで円孔は0.4cm。820・821は、数珠玉状の土製玉である。長さは、1.35～1.46cm、最大径は1.07～1.26cmで0.3cmの円孔を穿っている。胎土は良質で、シャモット様の赤褐色粒を含んでいる。822・823は小型の土錐である。長さは1.9～2cm、最大径は0.9～1.1cm。棒状工具で刺突した円孔径は0.3cmである。胎土は精良で微細砂のはかシャモット様の赤褐色粒を含む。

824～826は、石包丁である。824は、半月形の粘板岩質の石包丁で紐孔は中央に穿つ。825は、片岩製で紐孔は背近にあり、刃部は丁寧に研いでいる。826は、立岩産の輝緑凝灰岩製で刃部の研ぎ出しあはやや弱い。827は、砂岩質の砥石である。中砥石で、砥面は4面ある。828は、堆積岩質の未製品である。先端部に敲打痕が残るが、使途は不明である。

829・830は、青銅製鋸先の刃部片である。

4) 土 壤 (SK)

古代の土壤は、5基検出したが、水田の水路 (SD - 101・102) の周辺には瓦埠片の混入した不整形の浅い窪みがいくつか検出された。これらが明らかに土壤としては特定し難かったのでその範疇には加えなかった。いずれもこれらの土壤は、官道100号道路遺構の南隅部に比較的まとまって折がっている。分布的には、道路面と中世の水路とに挟まれた狭地に比較的まとまってあるが、詳細な時期や機能などは判然としない。

103号土壤 SK - 103 (Fig. 121 PL. 36)

103号土壤は、調査区の西端にある官道100号道路遺構の南端に102号溝と113号土壤の間に位置する南北軸の小土壤である。平面形は、長軸が102cm、短軸が45～50cmの不整な楕円形プランを呈する。深さが25cmの壁面は、緩やかに立ち上がる。底は浅い凹レンズ状をなす。

104号土壤 SK - 104 (Fig. 121)

104号土壤は、官道100号道路遺構の東端を北流する102号溝の西に接して位置する小土壤で北隅壁は102号溝に切られている。平面形は、長軸が98cm、短軸が42cmの長楕円形プランを呈する。壁面は緩やかに立ち上がり、壁高は20cm。

112号土壤 SK - 112 (Fig. 121)

112号土壤は、調査区南東隅の官道100号道路遺構の路面上にあり、101号溝の2mほど西に位置する。平面形は、長軸が150cm、短軸が60～76cmの小土壤で、側壁が瓢状に括れる不整な長楕円形プランをなしている。壁高は15cmで壁面は緩やかに立ち上がる。

113号土壤 SK - 113 (Fig. 121)

113号土壤は、官道100号道路遺構の南東隅にある小土壤で、103号土壤のすぐ西に位置している。平面形は、長軸が55cm、短軸が36cmの長方形プランを呈する。壁面は緩やかに立ち上がり、壁高は18cmと浅く断面形は逆台形をなす。

114号土壤 SK - 114 (Fig. 121)

114号土壤は、調査区南隅の101号溝と102号溝に挟まれた100号道路遺構の路面上にある南北軸の小土壤である。平面形は、長軸が96cm、短軸が65cmの不整な長方形プランを呈する。壁高は14cmと浅く、壁面は緩やかに立ち上がる。

出土遺物 (Fig. 122)

831・832・834は平瓦、833は埠である。831は105号土壤、832は112号土壤、833は114号土壤から出土した。

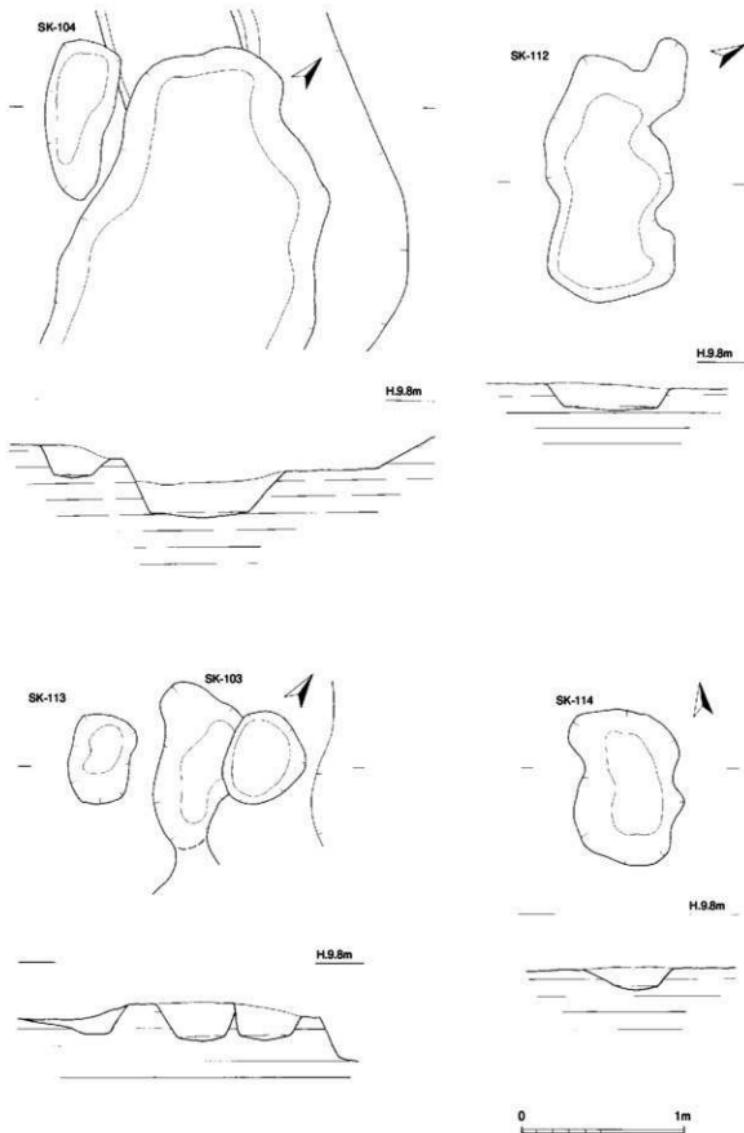


Fig.121 103·104·112~114号土壤実測図(1/30)

5 中近世の調査

中世～近世の遺構としては、100号道路遺構上の東に寄って2条の溝を検出した。これに加えて路面上には官道の廃絶後に可耕地化した水田の耕作土層が薄く堆積しており、該期の遺構と考えることが出来るが、田面の規模を示す畦畔などは検出できなかった。昭和初期の地形図に因れば、この水路は近世を経て昭和10年代まで機能しており、可耕地として営々と耕作されていた。また、調査区の南東隅～北半部の丘陵東北縁も近世期に開削されて水田化しているが、昭和10年代の丘陵全体の削平によって官道上をはじめ一帯はすべて水田として可耕地化した。

1) 溝遺構 (SD)

溝は、調査区の西部にある道路遺構（官道）の路面上で2条を検出した。いずれも官道廃絶後の12世紀後半以降の官道が水田化するに伴って開削されたもので、幾度かの掘り直しを繰り返しながら中近世を経て昭和10年代まで機能していた。溝は、官道の東側に寄って2条が蛇行しながら北流しており、はじめに西側の溝（SD-101）が開削される。この溝は、官道東側の法面下にあり法面を抜げることなく開削したもので、道路幅に沿ってほぼ直線的に流れている。次に東側の溝（SD-102）が開削される。この溝は、耕地の拡幅を図ったもので法面を切り抜けながら開削している。そのため溝は東に膨らみながら蛇行し流れ、官道本来の法面は失われている。

101号溝 SD-101 (Fig. 123 PL. 36)

101号溝は、調査区の西端にある100号道路遺構の路面上に掘られた水田に伴う溝で、官道の中央よりやや東に偏している。溝は、官道が廃絶した後に道路上を水田として可耕地化した時に開削されたものである。溝は、当時の官道の法面下に法面に沿って開削されており、ほぼ直線的に伸びている。溝幅は狭いところで90cm、広いところで200～220cmである。深さは30～40cmで、断面形は逆台形状をなしている。溝内からは、弥生土器のほか瓦壇、龍泉窯や同安窯の青磁碗、肥前磁器瓶などが出土した。

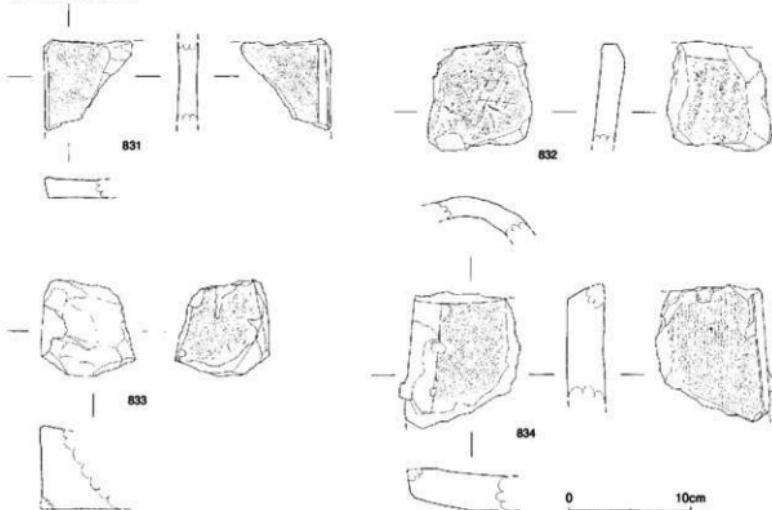


Fig.122 105・112・114号土壙・116号ピット出土物実測図(1/4)

出土遺物 (Fig. 124)

835は、袋状口縁をもつ弥生壺である。口径は8.4cm。836は、口径が9.6cm、底径が9.8cm、器高が3.2cmの土器器坏である。体部はヨコナデ、内底面はナデ、外底面は回転糸切り。837は、同安窯系青磁碗で、外面と見込みに櫛描きの施文がある。高台径は4.6cm、高台の高さは0.6cm。838は、龍泉窯系青磁碗で、内底面にはヘラで割花文を描いている。839は、口径が16.8cmの同安窯系青磁皿で、見込みには櫛描きで施文している。840は、中国陶器の四耳壺である。841・842は、IV類の白磁碗である。841は、口径が16.8cmの玉縁口縁の白磁碗である。842は青磁碗で、見込みに卍の施文がある。高台径は4.6cm。843は、肥前磁器の染付瓶である。体部には草花文を描き、豊付は釉剥ぎ。高台径は9.5cmで、18世紀前半の產。844は、軒丸瓦で667と同様に、周縁はやや広い直立縁で素文、外区に連珠文があり、弁舟は複弁蓮華文が直線的な表現に変化しており、弁端は尖形である。845は、平瓦で、表面(四面)に有目と糸切り痕が残り、裏面(凸面)は繩目タタキで、側面はヘラで削り取って面取りする。846は、無文壺である。表面は残りが悪いが板ナデ、裏面も板ナデ、側面を面取りして仕上げたと思われる。幅は16.5cm、厚さは7cmほどで、SE-09出土の壺と同様の計測値を示す。847は、凝灰岩質石包丁の半欠品で、刃部は丁寧に研ぎ出している。848は、長さが5.75cm、最大径が1.8cm、口径が0.35～0.4cmの土錐である。849は、煙管の雁首である。

102号溝 SD-102 (Fig. 123 PL. 36)

102号溝は、調査区の西端にある100号道路構の路面上に掘られた2条の溝のひとつで、東側の法下に掘り込まれており、101号溝とは1.3～2mの間を置いて北流している。この溝は、可耕地の拡幅に際して掘り直されたもので官道の法面は削られて原状は留めていない。東へ緩やかに弧を描きながら北流する溝は、調査区南端より9mの地点に水口が設けている。水口には溝に沿って杭が打ち込まれていた。溝幅は狭いところで50～60cm、広いところで180～240cmで深さは40～60cm。廃棄までに3回掘り直され

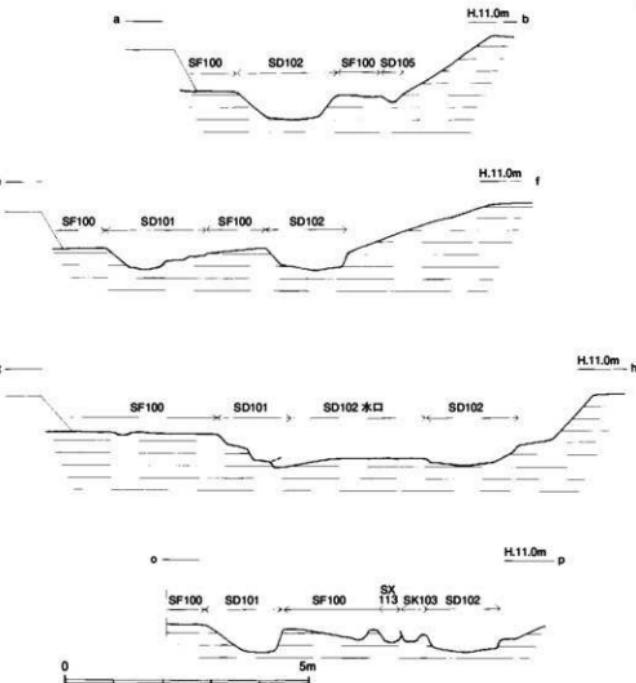


Fig.123 101・102号溝断面図(1/100)



Fig.124 101号溝出土遺物実測図(1/3・1/4)

ている。遺物は須恵器の大甕のほかに同安窯青磁碗や高麗青磁碗、肥前染付盃などが出土している。

出土遺物 (Fig. 125 PL. 60)

850は、口径が30cmの須恵器大甕である。口縁部は、「く」字状に大きく外反し、下端は小さく摘み上げている。851は、同安窯系青磁碗で、見込みに櫛描きの施文がある。高台径は5.2cm、高台高は0.9cm。852・853は、青磁碗である。852は、口径が13.4cm、灰ベージュの緻密な胎土に暗いペーパージュの釉薬を掛けている。853は、高台径が5.4cmで胎土には淡明褐色粒を含む。854は、胎土に明褐色粒を含み、高台径は4.8cm。855は、口径が54cmの陶器平鉢である。857は、高台径が3cmの磁器碗で、体部には青花文を描いている。豊付は釉剥ぎで、目砂が付着している。858は、口径が6.8cm、高台径が3cm、器高が4.3cmの染付磁器環で、体部には窓絵に松竹梅を描いている。19世紀の產。

859・860は泥岩質の砥石である。砥面が4面の仕上砥である。860は、長さが17.3cm、幅が4.8cm、厚さが4.9cmで小口面は未加工である。861は、片岩質の凹石で表裏、両面に24～29cm径の敲打痕がある。長さが11.9cm、最大幅が11.5cm、厚さが5.6cm。862・863は石包丁である。862は、粘板岩製の未製品である。863は、立岩産の輝緑凝灰岩製石包丁である。刃部は丁寧に研ぎ上げている。

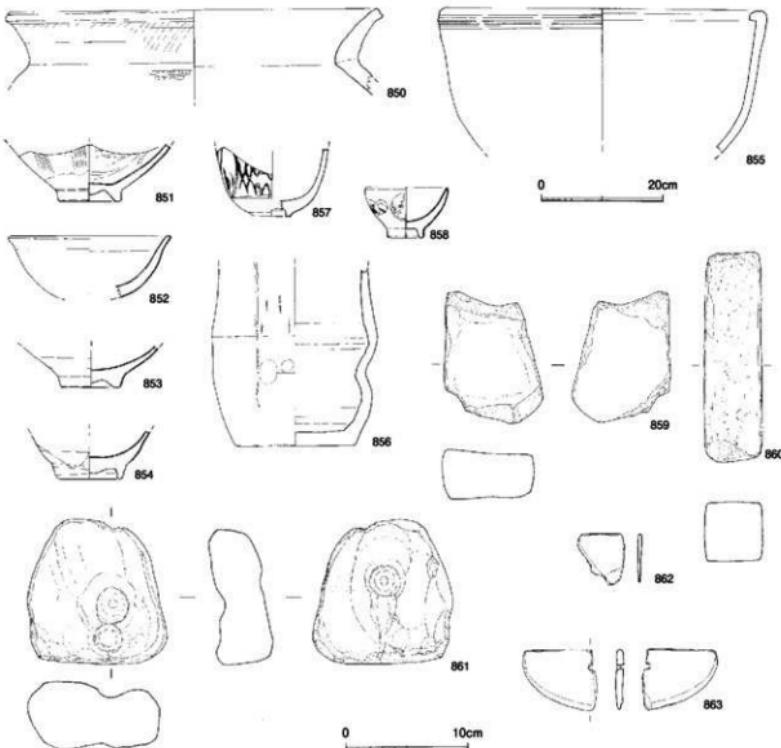


Fig.125 102号溝出土遺物実測図(1/4・1/8)

III. おわりに

高畠遺跡は、御笠川中流域左岸の洪積台地上とその裾野に拡がる弥生時代から古墳時代を経て古代、中世へと続く遺跡である。遺跡内ではこれまでに 19 地点で発掘調査が実施され、貴重な成果が報告されている。その最たるもののが「高畠廃寺」と云われる寺院跡と「官道」であろう。高畠廃寺の由来は、台地の周縁部で瓦塼が出土することに加えて「寺」と記された墨書き土器が出土していることによるが、一方で、徵税や郡名、郷名に関する木簡などの文字資料から「那珂郡衙」とする説もあり、未だ確たる結論は得ていない。いざれにしても瓦を葺き、塼を敷き詰めた重厚な建築物と官道とは密接な関わりを有しており、総合的な議論の展開が求められよう。

第 20 次調査での成果は、大きく以下の 5 点に要約される。

- ① 弥生時代中期後半～後期の集落域を検出した。
- ② 古墳時代中期の河川（大溝）から多量の土器や木製品が出土した。
- ③ 切通して開削された官道を検出した。
- ④ 井桁で堅牢に組上げられた古代の井戸と溝を検出した。
- ⑤ 井戸などから瓦塼と共に鬼瓦が出土した。

このうち、③～⑤は時期的な要素も含めて密接に関わるもので、個々には譲し難い。ここでは一部重複するが、これまでの調査で得た問題点に第 20 次調査の成果を重ねて今後の備えとしたい。また、特記すべき点には項を改めて記述する。

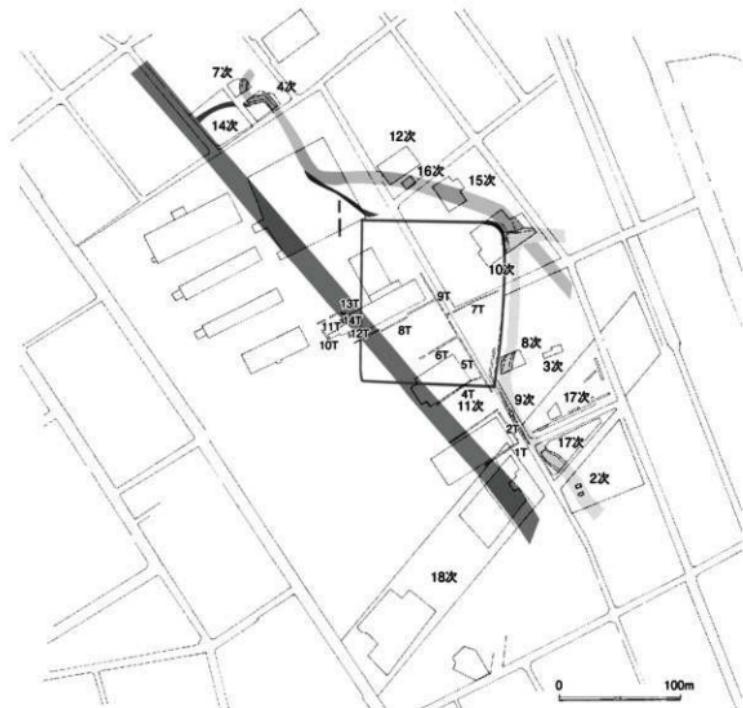
はじめに、弥生時代の遺構としては竪穴住居と掘立柱建物、井戸、木棺墓がある。高畠遺跡ではこれまでに丘陵東部の第 11 次調査区で前期の貯蔵穴と後期の竪穴住居や井戸跡が検出されている。また、南縁の第 18 次調査区では中～後期の竪穴住居と井戸が検出されている。本調査区では貯蔵穴（前期？）と中期の竪穴住居と掘立柱建物および後期初めの井戸が検出されている。丘陵のすべてを消失している今は往時を偲ぶことはできないが、比較的平坦な丘陵の裾野一帯には集落域が展開し、眼下の沖積地には水田城が拡がっていたことが想起される。一方で、墓域の報告例はなく、木棺墓の検出は注目に値する。8 号木棺墓は木蓋を粘土で目貼りしたもので、1 点ではあるが碧玉製管玉が出土している。丘陵縁や河川からは大型甕片が出土しており、搬入がない限り集落構成員の墓域をその周辺に想定することが自然であろう。想像を逞しくすれば、削平された丘陵上あるいはその緩斜面上に展開していた可能性を指摘しておきたい。さらに調査区の東部で砂層に覆われた河川敷が検出された。いわゆる氾濫原で、これまでに第 1・15・17 次調査区で報告されている。本調査区での検出でこの氾濫原は、さらに抉り込むようにして西へ湧入していたことが明らかになった。旧地形図を元に復原すると弥生期の河川は、丘陵東縁の 12m の等高線に沿って第 17 次調査区から第 10・15・12 次調査区を経て本調査区に湧入した後に東に流れを変えて第 1 次調査区に至り、その東側の広大な範囲が氾濫原と考えられる。それは本調査区の河川が、西岸から 25m を超えても厚い粗砂層の堆積であることからも窺がえる。昭和 40 年に改修されて流れが安定するまでの那珂古川の古き姿であろう。ここに井堰を築いて流れを規制し、生産活動への寄与を図ったのであろう。本来の井堰とは云えないまでも、137 号河川に架設された 138 号井堰状杭列はそのひとつと考えて差支えあるまい。

いわゆる古墳時代の大溝について

高畠丘陵の東縁には、4 世紀後半から 5 世紀代の溝が北流しており、これまでに大溝として報告されてきた。本調査区で検出した流路もこれにあたり、これまでの予見を確証付けるものであった。こ

の流路は、第10次調査区に発し、第15・16・12次調査区を経て本調査区へ繋がり、第4・7次調査区へと延びている。流れとしては、第10次調査区から北西へ緩やかな左カーブを描きながら第12次調査区を経て本調査区へ繋がり、そこで弥生時代の河川の西岸に突き当たった後に、その西岸に沿って流れを北へ変えて第4次調査区へと続く。そしてさらに第7次調査区でL字状に大きく屈曲して東方へ流れしていく。先述したように、この流路はこれまで大溝として報告されてきたが、溝はある意図をもった人工的な開削を意味するもの考える。その意味では前時代の河川の氾濫原たる砂層上に開削する人工物の意図に疑義が生じる。このことは第12次調査区でも砂層上にこの流路があると報告されている。この事実を踏まえて、ここでは敢えて氾濫原上に自然発生的に生じた流路として考えた。

さて、この河川（SD-10）からは多種多様な遺物が出土しているが、大きくは土師器と木製品に大別される。まず土師器には、壺や小型丸底壺、甕、鉢、高坏、ミニチュア土器などが出正在している。型式的な時期区分は細分が可能であるが、層位的には黒色～暗灰黑色の粘質土層から出土しており、明確な層位的区分はできなかった。しかし、器種的には、圧倒的に小型丸底壺が多い。しかも完形のものが多い。その反面、高坏は完形品が少なく、脚あるいは坏に分離破損したものが目立つ。この傾向は、この河川のもつひとつの特徴とも云えようか。また、ミニチュア土器が比較的多く



出土していることは、木製品の中に舟形模造品があることを勘案すると周辺流域において何らかの祭祀的儀礼が行なわれたと考えることもできよう。丘陵の南縁に位置する第18次調査区Ⅱ・Ⅲ区では、5世紀代の堅穴住居群が拡がっており、その中には滑石製白玉の製作工房跡の存在が報告されている。古墳時代中期のこの時期に、集落域の展開はひとつのピークを迎える。この住居群と河川は、時期的にはおおむね合致し、遺物の出土状況はこの間の消長を物語っているとも云えようか。土器の編年的分析は、諸般の事情で今回は見送った。今後改めて検討して報告することにする。また、ここから出土した遺物の中に特徴的なものがふたつある。ひとつは韓半島系の陶質土器がある。ふたつには脛形壺である。この壺は、一瞬須恵器かと見紛うような土器で、高畠遺跡第12次調査区2号溝、比恵遺跡第6次調査区1号墳周溝、那珂川町松木遺跡祭祀遺構など未だに出土例が少ないが、畿内地方では須恵器を模倣した土器があることが知られている。また、須恵器生産の初期段階においては土師器を模倣したと思われる須恵器もあり、須恵器と土師器の交錯が指摘されている。いずれにしても、この両者は韓半島や畿内地方との交流が盛んに行なわれていたことの証であり、人的、物的な交流とその出現の背景を検討する必要がある。

一方、木製品も農具、工具、容器、紡織具、儀器、建築材など多種にわたって出土している。目を転じると、第4・7次調査区では、農具、工具、紡織具、儀器、武器、什器と建築材が出土しているが、農工具が圧倒的に多い。第10次調査区では農具、工具、紡織具、柄が出土しているが、圧倒的に農具が多い。これに対して本調査区では、大型建物の構造部材が比較的まとまって出土している。このように各地点において、その出土する器種構成に若干の相違があることが判る。これが何に起因するかは明らかでないが、流路のうねりがひとつの要因として考えられようか。第12次調査区から延びた流れは、緩やかな左カーブを描きながら137号河川に突き当たり、大きくくし字状に反転して直線的に北流している。本調査区では、このうねりの中に大型建物の構造部材の堆積例が多く見られる。大きい構造部材は流れに押されてうねりの中に留まり、農具や紡織具などの小型品は押し流されて下流へといくようである。流水量に大きく左右はされるが、小型丸底壺をはじめとする土器も同じで、堆積物の多いところにまとまって留まり、流れの速いところほど疎らな在り様を示している。大型の構造部材については項を改めて記述したい。

構造部材について

第20次調査では、鍛錬類（柄も含む）タモ杵、編み錘、紡輪連作未成品、槽、杓子、掛矢、腰掛け、傘轆轤、形代、曲げ物容器、横櫛など多様な遺物があり、これまでにもすでに類例が幾つも報告されている。なかでも、紡輪の連作未成品は西北九州に発見例が多く、それが何に因るかの究明が今後の重要な検討課題と云える。

出土遺物の中で、特に注目されるのが古墳時代の高床建物の構造部材と考えられる一群である。これらの部材は、同一建築物の廃材とは考えられない規格のばらつきがあり、また、出土状態からも現地性は低く、複数の建物の部材が流されたり河川内で護岸や堰などの用材として再使用されたりしたものと考えられる。また、製材板の端材もあり、建築材として長さをそろえた時の残りが同じ流れの中に埋積していたことになる。質量の異なる材が同じ流路の中にあることなどから、それが本来機能していたところにそのままの残されたものではなく、それほど遠くないところで構築されたものが再利用され、移動したものと想定される。

576 (SD - 10) は、1つの抜き孔と90度の位置の2面に対になった4か所のホゾ穴を持つ長出ホゾ

付きの柱材である。広葉樹の芯持ち材で、約200cmの柱の下位90cmくらいの部分は、柱として埋められた時に劣化したと考えられる荒れが認められる。上位に135cmほどの長ホゾが作り出されている。長ホゾの最下位に、幅4cm、高さ12cmの抜き孔があり、ここに大引きを通し、床を渡したと考えられる。その上位に約22～23cmの間隔で、直交方向に棟を伸ばしたと考えられる4対のホゾ穴が開けられている。このことからこの柱は、①隅柱であること、②高床の高さは100cmほどであること、③大引きの端部は建物の外に突出していた可能性があること、④外壁の高さは少なくとも140cmほどであること、⑤壁面の棟が柱の軸上に開けられたホゾに納まることから、壁板は縦に連接された可能性が高いことなどが明らかになった。

それからすると、578は抜き孔に端部を差し込んで横架させ、床を貼る棟を通す貫孔群を持つ大引き材の欠損品と考えられる。576の貫孔と578の大引き材端部の大きさは、ほぼ対応するが、同一の建物とは断定しかねる。ただし、貫孔形状と大引き材の断面形状は類似しており、北部九州の高床建物のなかで、それほど大規模でない倉庫建物の軸組が、角材というよりも厚板で組まれ、垂直方向からの加重に対しての応力を考えたためか幅広の部位を上下にして柱に組み込んでいたことが窺える。大引きの貫孔は大きく収納物が重量のあるものを想定した高床建物であると考えられる。

年輪界に沿った割板の湾曲面の、木表側の中軸線付近を削り、木裏側の両側縁近くを削って平坦面を作った板や、放射線面で割り取った板の外側部分の厚味を除去して平坦面を作った板があり、厚いものは床板、薄いものは壁板と考えられた。中には片剥や綴じ孔を開けたものがあり、板の連接作業の工夫が認められるものもある。

583は半割り材を加工した梯子で、高床建物の出入り口にかけられたものと考えられる。

585・586は、面加工の少ない割り板で、幅を一定に整えた部材である。割り面を手斧整形せずに木理にそって割ったままにしてあり、585のように端部付近に方形の孔が付けられているところから、静岡県瀬名遺跡で想定された屋根板と考えられるものである。586は、留め孔はないが、類似加工で厚みの異なる部分があり、板重ねのような作業を考えたものとして、屋根板の可能性があると考えた。

有頭棒550・573は桿木の可能性もある横架材である。横架時に端部の瘤状に作り出して柱の受け部にかける桿木は広葉樹の芯持ち材を結び留めする際によく用いられる手法で、縄文時代、弥生時代を問わずに多用されていた。この材を高床倉庫の屋根に想定するにはやや抵抗があるが、しかし、広葉樹建築であること、独立した桿持ち柱で支える建築物が弥生時代にはみられることなどから、古墳時代であっても北部九州の用材法であれば別の建物の桿木として考えることは可能であろう。殊に550の端部加工が、瘤を一方向に偏らせているところは、柱上部の輪なぎこみ部への落とし込みや、又による受けのどちらの場合でも固定時の安定性を保つ工夫と考えられる。ただし径がないので、この構造部材が建物の部材かは断定できない。柵材などの可能性も考えておく必要があろう。

屋根組みに関連する部材として、582（自在鉤の可能性あり）がある。端部のえぐり加工は、垂木の可能性もあるが、発掘時の不手際から反対側の部位が屈曲している。

576のホゾに納まる棟材の可能性がある割り角材が10点程度確認された。棟材はしっかりとした面調整をせずに、端部に組みこむ際の簡単な面取り加工が見られるくらいのものなので、単独で検出される今回ののようなケースでは、部位同定は非常に困難である。ただし、模割り製材で作ったと考えられる小角材は、むしろ厚板と云えるような断面系が1:2以上の差のあるもののが多かった。この傾向は576のホゾの形態とは相関するものである。

古代の井戸戸材や構造部材にはスギ材が多く使用されていた。しかし、古墳時代の構造部材は、タブノキ・ツブラジイ・クスノキ・アワブキ属などであり576はタブノキである。北部九州のこうした用

材傾向は、スギ・モミなどの針葉樹材が全くない訳ではないが、特徴的なものと云える。こうした広葉樹材は、当時の楔割り製材での加工で、長軸材を得ようすると木理による捻じれ割れを起こしやすい。骨格材は、芯持ち材のまま使用することが一般的であり、家屋の規模にも影響をあたえる。

第20次調査では、大枠ながら高床建物の各部位を推定でき、その用材傾向と木取り方、規模を知ることができ、今後の発見例の増加を待ってさらに検討を加えることが重要である。(小林義彦)

138号井堰出土の木製品について

138号井堰状杭列は、137号河川のなかに構築されており、その時期は、137号河川及び138号井堰状杭列に伴う土器などから、おおむね弥生時代後期であると判断される。

今回出土した木製品のうち、138号井堰状杭列の出土品のはほとんどは、井堰状杭列を構築するため用いられたものであり一括性が高い。特に杭列1~44としてTab. 9~12に計測値を載せたものは、出土位置も明確である。また報告を載せたFig-28の88、Fig-29の91・93、Fig-30の98、Fig-31の99、Fig-32の100から105、Tab. 12~15の杭列102・104・106・109・110・112・114、201から204、501から529、901から909としたものも、138号井堰状杭列出土である。

これらの木製品はほとんどが杭として加工された物であるが、はじめから杭のために加工されたもの以外に、転用品や再加工品も多く見られることから、ここで若干の検討を加えることとする。

138号井堰状杭列の出土品の最終的に計測や観察ができたものの総数は103個体である。そのうち、農具などの製品が5個体(5%)、建築材が9個体(9%)、板材が9個体(9%)、加工棒材が4個体(3%)、杭としたものが67個体(65%)、不明が9個体(9%)である。ここで杭としたものは、先端に杭用の加工が施されたものと、杭用の加工は見られないが、検出時に縱方向に打ち込まれていたものを含む。

製品には、方形孔の三叉鋲、鋸造鉄斧の柄、横槌、团扇、タモ棒があり、これらはいずれも138号井堰状杭列に引っかかるかたちで出土している。個別の観察は本文中に述べたので、ここでは省略するが、農具・工具・儀器・漁具など、生活全般に関わるものである。137号河川を流されて、ひっかかるものであろう。

杭としたものうち先端に杭用の加工が見られるものは62個体で、杭全体の93%である。杭のうち転用品は24個体で36%である。多くは杭用の加工のみであり、加工痕が明瞭なものも多いため、井堰を構築する際に粗い加工を施して使用したことが分かる。しかし、転用品の割合も36%と決して低いわけではない。

転用品の内訳は横架材が9個体、柱材が2個体、垂木が8個体、サスが3個体、加工棒材が1個体、不明建築材が1個体である。ほとんどが建築材の転用であり、横架材や柱材は端部を半分切り取った仕口の加工やホゾ孔のあるものもあり、両端が細くなるような加工も見られる。垂木やサスにも、組み合わせるための仕口や加圧によるへこみ、紐かけの痕跡が見られるものが多い。高床式建物や堅穴住居の建築材を転用した物と考えられる。

また杭ではないとしたものも、それらの形状や加工痕を観察すると、建築材・板材・加工棒材であり、本来別の用途で使用されていた木材を再利用して、杭に対して横位にわたして井堰の横木したり、深く打ち込んで杭列の基礎としたりしたものが大半と考えられる。これらの建築材の中にも長ホゾ柱や端部の半分を切り取ったような仕口のある柱や横架材が含まれる。板材には、5mmほどの小孔をもつ曲物の底板や、建物の壁板に用いられたと思われるものもあり、これらは転用材と考えられる。そのほかは加工板材で、細かい用途は不明である。加工棒材も四角に面取りしただけではなく、先

端部をやや細く面取りしているものもあり、それは井堰構築用の木材加工というより、本来別の用途であったものの転用材であろう。

また、103 個体中 7 個体が火を受けており、杭、横架材、柱、加工棒材が含まれる。これらは火災住居の転用材の可能性が高い。杭用の加工しかみられないものも、長い垂木などの燃えた部分を切断して、再利用した可能性もある。

このように 138 号井堰状杭列には建築材の転用材が一定量見られ、その中には火災住居の焼け残った木材のうち利用できる部分を再利用した様相も看取される。こうした状況は弥生時代後期における木材の再利用の一端を示している。

次に木取りについて検討する。

全体では、芯持材が 72 個体（70%）、半割が 13 個体（12.5%）、板目が 8 個体（8%）、柾目が 5 個体（5%）、ミカン割が 2 個体（1.5%）、不明が 3 個体（3%）である。

多くが芯持材であり、次いで半割材が多い。板目材や柾目材も若干見られる。

杭加工ありとしたもののうち芯持材が 47 個体、柾目が 2 個体、ミカン割が 2 個体、半割が 9 個体、不明が 2 個体である。

このうち、転用材ではなく杭加工しか見られないものは 38 個体あり、芯持材が 32 個体、半割が 6 個体である。ほとんどが芯持材の自然木の先端のみを杭に加工したもので、樹皮が付いたままのものも多くある。杭は井堰を構築する際に多量に必要であり、川の中の構築物で表面の加工も必要なため、最小限の加工のみ施されている。

建築材には、杭に転用したもの、していないものを含めて、横架材 11 個体、柱材 9 個体、垂木 8 個体、サス 3 個体、壁板 1 個体がある。それぞれの建築材について木取りを見ていく。

横架材のうち、芯持材が 4 個体、半割が 2 個体、板目が 2 個体、ミカン割が 2 個体、柾目が 1 個体である。芯持材が多いが、さまざまな木取りがあり、特定の木取りというわけではない。

柱材は芯持材が 8 個体であり、柾目が 1 個体ある。木取りが芯持材に偏っており、ほとんど丸太材で、仕口やホゾ孔以外は表面を面取り加工するものほとんどない。樹皮の残るものもある。

垂木は芯持材が 7 個体であり、半割材が 1 個体である。芯持材に偏っており、仕口以外は表面を面取り加工するものはほとんどない。樹皮つきのものも多い。

サスは 3 個体すべて芯持材である。仕口以外は表面を面取り加工するものはほとんどない。樹皮つきのものも多い。

壁板は板目板である。残存状況があまりよくない。

このように、建築材の大半が芯持材であり、横架材や柱材などにおいてもほとんど自然木に仕口やホゾ孔の加工を施したものである。

弥生時代における建築材の特徴として、縄文時代の木の股や切込み、抉りを利用し、縄や紐で固定する方法とは異なり、貫孔や組孔、端部を半分切り取った組仕口が現れることと、丸木材が多く、面取りした柱材がほとんど見られないことが指摘されており（山田昌久 1986）、138 号井堰状杭列に見られる建築材の特徴も、こうした指摘と一致する。

樹種については、杭列 35 とした横架材の転用と思われる杭が、古環境研究所による樹種同定の結果、ツブライジと同定されている以外は、筆者の肉眼観察では判定が困難であった。

最後に 138 号井堰状杭列に使用された木製品の特徴について以下にまとめる。

- ①大半は杭用に加工されたものである。
- ②転用材も一定量あり、建築材の転用が中心である。

- ③転用材には火災住居のものもある。
- ④芯持材が主であり、建築材であっても、ほとんど自然木に加工を施したものである。
- ⑤弥生時代後期における木材の再利用の特徴の一端を示す。(谷 直子)

井戸について

井戸は、地下水を汲み上げる目的で掘った施設の総称で、構造的には、①汲み出す人の安全と污水の流入を防ぐ地上施設の「井桁」と②地中の井戸壁の崩壊を防ぎ、壁面を保護する「井戸側・井筒」、③湧き水を溜める底部「水溜り」からなる。一方で、形態的には、①素掘り、②木組、③石組、④土製品組に4区分される。このうち素掘りを除く井戸は、用材の形状によって、②木組井戸は丸太割り貫きと板組・曲物積上げ・桶積上げに、④土製品組は瓦・土器・土管・埠・漆喰などに細分される。

井戸の初現は、稻の栽培が定着した弥生時代に始まり、水稻耕作の先進地域である福岡平野では、中期後半に比恵那珂などの台地上に出現する。弥生時代に始まった素掘りの井戸は、壁面の崩落防止を目的として木組の井戸側が内部主体に導入される。時期的には、弥生～古墳時代は素掘りの井戸、古代には木組井戸、中世は石組井戸が主体となり、近世になって土製品組井戸が出現する。本調査区で検出した9号井戸は、特に木組の井戸が盛行する古代である。井戸側の形態としては、厚い加工材を積上げた木組で、井戸底には割り貫き桶の底を打貫いて筒状にして埋置して水溜りをしている。この上面に厚い加工材を井桁状に組んで積上げている。ここで注目すべきことは、①桶の裏込めに完形の平瓦や丸瓦・埠を詰めていること。このうち埠には、擦痕と2次被熱による煤が付着していた。②水溜りの桶底に鬼瓦片と曲物が投棄されていたこと。また、この鬼瓦片と井戸検出面から出土した鬼瓦片が接合したこと。③裏込めのない南東部では加工材を組み上げた時点で木組み枠の沈下が始まり、慌てて板材を横架して沈下を阻止していること。④木組みの加工材は厚い床板材の転用品であること。⑤木組みの最上段に「神功開寶」が置かれていたことの5点が挙げられる。一説に、井戸の型式や規模は、設置する施設の性格や機能・格式に反映される場合もあると云われている。例えば、平城宮では、幅が30cm、厚さが10cmの板材を2m以上の内法で井桁に組み上げている。しかも板材には、組む場所と順番をしていた例が報告されている。また、井戸内からは、専用に作った釣瓶や釣瓶の代用品と考えられる瓢箪や土器のほか鏡、石製品、櫛、斎申、錢貨が出土しており、井戸の開削、使用、廃棄に際して執り行なった水神や井神への祭祀を容易に想起させる。この事例は、「高畠廃寺」とされる施設を考える上できわめて重要なキーワードとなる。

古代官道について

本調査区の道路遺構は、標高14m余の丘陵を開削して切通した道路跡で、水城東門跡から博多遺跡群にむかって一直線に延びる、いわゆる「水城東門ルート」と呼称されている官道の一部である。この官道は、第18次調査区で報告されている官道の延長線上にあり、旧地形図から存在が予測されたものであった。路面は、長年に亘って耕作地として加耕されていた所以か軟弱で、幾つもの牛足痕は残っているが、第18次調査区で報告されている波板状遺構や道路幅を規制する側溝は検出されていない。側溝の不備は、道路幅員の減少を來たす側溝の開削を避け、雨水の排水は切通しの最高所から南北の低所へ自然排水したとも考えられる。この切通し道路は、南は第18次調査区を経て井相田C遺跡第1次調査区、第10次調査区、井相田E遺跡第・次調査区と統いて水城東門跡へと繋がる。この東門から更に南は、太宰府市国分尼寺第12次調査区から閑屋を経て大宰府政庁へと繋がる。一方、北へは板付第56次調査区から第38次調査区、第41次調査区、第6次調査区を経て那珂君体遺

跡第3次調査区へと1,300mほど直線的に延びている。この先は博多遺跡群に辿り着き、真北に主軸をとる8世紀後半頃の方形区画溝があり、その周辺からは老司式瓦や鴻臚館式瓦のほかに石帶や「長官」と墨書きされた土器が出土しており、「筑紫館」と云われる官衙の存在が示唆される。この道路遺構の路面上や加耕地化後の水路や土壤からは弥生時代から近世までの遺物が出土しており、直ちに切通し道路の開削期や廃絶期を明確に示すことはできないが、近接する第18次調査区の道路遺構から推察すると8世紀前半に開削されて9世紀初めまで機能していたが、それから11世紀中頃まで間は道路としての機能が一旦放棄されている。その後11世紀後半に再び道路としての機能を回復するが、12世紀前半で放棄されることはなく加耕地化する。

いわゆる高畠庵寺について

高畠庵跡周辺では、古代の溝などから瓦塼や「寺」と墨書きされた土器、木簡などの出土品のほか礎石らしき大石群があったとする古談から丘陵上に方1町余の寺域をもつ「高畠庵寺」の所在が推定されていた。これに対して、寺院遺跡では余り出土しない舟形、鳥形、畜申、陽物形木製品などの木製祭祀遺物や人面土器のほか「□石」や「□升」など穀物の数量を示す木簡や徵税、郡名、郷名に関する墨書き土器があり、8世紀中葉から10世紀にかけての「那珂郡衙」の移転推定地とする見解が示されているが、未だ結論を見るには至っていない。

本調査区に南接して推定復原されている「高畠庵寺」には二つの見解が示されている。しかし、いずれが正かは俄かには断じ難いが、出土品の中には幾つかのキーポイントがある。まず、高畠庵跡からは多くの瓦塼が出土している。本調査区では、9号井戸や136号溝から平瓦、丸瓦、大宰府式鬼面文鬼瓦が出土している。このうち厚い平瓦は技術的に8世紀前半まで遡るが、外区に連珠文と面違ひの鋸歯文、内区に直線的な偏行唐草文を配した瓦当は9世紀前半まで下るとと思われ、時間差が大きい。これを創建と廃絶の時差と考えることもできよう。8世紀中葉頃と思われる大宰府式鬼面文鬼瓦は、大小の2タイプがあり、大棟鬼瓦と隅鬼瓦の可能性がある。一方、素文塼は、表面に擦過痕が観られ2次被燃による煤が付着している。これは被災したことを意味し、井戸の開削時に裏込めとして転用されたものである。同じ那珂郡内にある井尻庵寺では塼は出土していない。また、井戸枠に使用された木枠材は、加工痕や木取りから厚い床板材の転用品と考えられる。井戸の型式や規模は、設置する施設の性格や機能・格式を反映する場合があり、併設する施設の機能や性格を考える一助となる。

古代に瓦を葺く建物は、公共性がきわめて高い国府や国分寺、国分尼寺などの寺院に限られ、郡衙では今のところその事例を見ていない。ただし、郡庁と郡寺、祭祀の施設とが一体となった郡衙では、郡寺に瓦を葺く事例がある。「高畠庵寺」は、地勢的に那珂郡と御笠郡の郡境に位置している。6世紀後半で比恵丘陵の北端に在った「那津官家」の後身的な官衙「那珂郡衙」が6世紀末～8世紀前半まで那珂丘陵上にあり、8世紀中葉以降に郡境の高畠庵に移ったとする説にはやや説得力を欠く。郡衙の大棟に鬼瓦を置き、塼を敷き詰めた瓦葺磧石建物を要す必然的条件を明らかにすることが求められる。一方、丘陵を縱断する官道も大きな意味をもつ。いわゆる官道は、古代の特定の官衙間を結ぶ幹線道路で「延喜式牧令」に駅路を往来する駅使らに駅馬、食料、宿泊所などの便宜を与えるために30里(16km)ごとに駅家を設置するとあり、その施設としては、門・倉・屋・築垣・櫓・駅館などがある。山陽道安芸駅家とされる広島県下岡田遺跡では、瓦葺磧石建物と掘立柱建物が、布勢駅家とされる兵庫県小丸遺跡は、80m四方の規模で瓦葺磧石建物に井戸などの付属施設があり、山陽道には「蕃客に備えて瓦葺き粉壁を備えていた」駅館が多い。これに倣えば、「高畠庵寺」は官道を上つ

て来た「蕃客」に対して莊厳さで威容を誇示する寺院跡もしくはそれに順ずる公的施設か、あるいは山陽道的な駅家の施設と考えるのが妥当なようである。

次に、旧地形図を参考にしてその所在地を復原すると、まず官道の西側に屹立する標高14mの丘陵頂部がある。官道を上って来た「蕃客」にはもっとも威圧的に映ろう。しかしながら東西が30m余、南北が100mと面的空間の確保にはやや不向きな感がある。次に、丘陵の南部には標高12mのラインに区画された東西幅120m、南北幅200mの広い空間があるが、中央部を横断した第18次調査区ではそれらしき遺構は検出されていない。一方、本調査区の南には官道から磁北方向に延びる切通しがあり、その南には東西幅が80m、南北が70～140mほどの空間が抜がっている。分布地図では、この空間に方1町余の寺域が復原されている。しかしながらこれでは、寺域が官道上を覆い、不都合が生じる。寺域規模を70～80m四方に縮小すれば十分に可能であり、切通しの北にある本調査区の9号井戸と陸橋部をもった1号溝も付属施設のひとつとして捉えることができ、これを含めれば寺域はさらに拡がりをもつ。これはひとつの案として示したもので、今後予定されている警察学校講堂および事務棟の建替え計画の進捗によって明らかにされよう。(小林義彦)

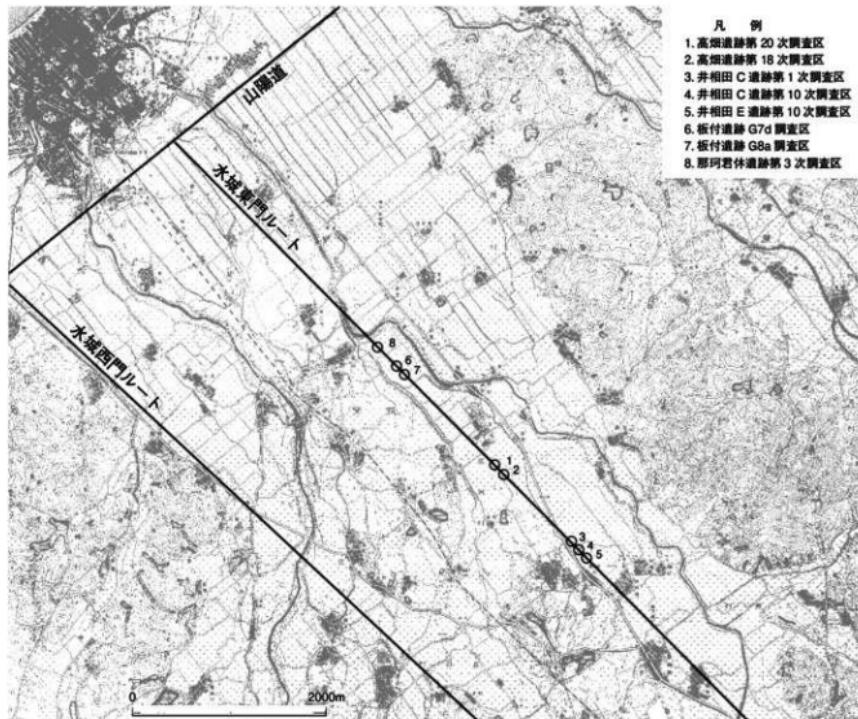


Fig.127 水城東門・西門ルート復原推定図(1/50,000)

Tab.71 古代官道(道路状遺構)一覧表 70

道路名	所在地	遺構名	長さ (m)	幅(m)	路面の状態	舗装 化	表面 材質	カラ ー	切出 し	盛上 し	時期	参考	文献
高麗道跡25次	福岡市中央区丁目1~5	SF-100	55	9				○			8c ~12c	木城東門ルート	
高麗道跡18次	福岡市中央区丁目東内	SF-002					○	○			8c ~12c	木城東門ルート	本報告
唐相田C道跡1次	福岡市中央区丁目12~6	遺跡遺構S-D292と293 の間	52	8(11)		○					9c 後~10c 前	木城東門ルート	古墳52集
唐相田C道跡10次	福岡市中央区丁目	S201		8		○						木城東門ルート	古墳79集 山村1903
唐相田E道跡1次	福岡市中央区丁目8~1	S2001-S2007の間	16	7		○					8c ~12c	木城東門ルート	
板付道跡群G74地区	福岡市中央区丁目11~14	道路状遺構S-F01	16	3~5		○?					8c	木城東門ルート	古墳115集 山村1903
板付道跡群G65地区	福岡市中央区丁目11~20	道路状遺構S-F01	34	13~27	砂質土	○?		○			8c	木城東門ルート	古墳35集 大庭2004
板付平塚跡3次	福岡市那珂1丁目	第1号溝	39			○					8c ~12c	木城東門ルート	古墳132集 山村1903
有田道跡群3次	早良区有田1丁目23~1	1号溝	63.6	9~		○					平安	肥前北都ルート	古墳158集 山村1903
有田道跡群40次	早良区小田原2丁目20~21	2~3号溝	5.3~7.8			○						肥前北都ルート	古墳101集 山村1903
有田道跡群124次	早良区有田1丁目24~4					○					平安	肥前北都ルート	古墳2 山村1903
有田道跡群164次	早良区小田原2丁目106	遺跡遺構S-D01	28	4.5~		○					10(9~9c 程)	肥前北都ルート	古墳308集 山村1903
有田道跡群169次	早良区有田1丁目25~1號	遺跡S-D015	18			○					平安初	肥前北都ルート	古墳159集
有田道跡群174次	早良区小田原2丁目194號					○?						肥前北都ルート?	年輪
通量道跡17次	中央区平和台駒場新地	大走り通路S-F1055									10(9~平安		古墳605集
		通路S-F1060											
通路10次	早良区夏5丁目1225~7號	大溝S-D06	約1~ 27.5	5.3~5.8		○					~12c以前	肥前北都ルート	古墳215集 山村1903
通路44次	早良区夏6丁目21~35	溝S-D07	18	5.1		○					8~9~12c	肥前北都ルート	古墳199集 山村1903
福田山遺跡	糸島市二丈大学道1255~1號	120	80		○	○					7c ~8c 程	古代遺跡	粗面石碑8年度 日野1999
石崎~黄り山遺跡5次	糸島市二丈大学石崎1丁目		6		○	○	○					西海道跡	粗面石碑11年度 日野1999
春日公園内遺跡	春日市春日町園内		200~	9	○	○					~9c 中	木城西門ルート	山川1993 春日市史
九十九里地区遺跡群	春日市春日町御所~1	溝SD-101	99			○					平安	通量道跡	九九第二番 山村1903
九十九里地区遺跡群	春日市春日町御所~1	既築状遺構S-X301		~30			○				~12c	木城西門ルート	
九九石造跡1次	春日市枕崎空堀跡群2号地内		10			○						通量道跡 木城西門ルート	山村1993 春日市史
九九石造跡2次	春日市枕崎空堀跡群2号地内					○						通量道跡 木城西門ルート	山村1993
通田遺跡	大野城市大字大野988~1號	地上状遺構	12~15	~34			○				8c 前	木城西門ルート	古墳11集
大野遺跡	大野城市大字大野1722~1	溝S-D01-01	58~13	9(30.5)		○					7c 後~12c 初	木城西門ルート	古墳11集
国分足利遺跡5次	太宰府市国分5丁目207~1	遺(落ちの可能性あり)				○?					10(9~平安	木城東門ルート?	粗面石碑2年度
国分国分寺跡12次	太宰府市国分428~2號	溝S-D005	4.2			○					~8c 代	木城東門ルート	古墳16集 山川1993
木城跡20次	太宰府市国分95	百トレンチ										木城東門ルートからの通路 の一部	九九1994
通田道跡1~3-55次	太宰府市向野町444~1號		157	9(11)		○					10(9~	木城西門ルート	山川1993 太宰府史
通田道跡10次	太宰府市向野町宇佐70B	溝10S-D001と100の間	K2~ 15.2			○					~9c	木城西門ルート	古墳41集
木城跡26次	太宰府市吉松宇佐1047~1號	溝S-D101と102の間	9.2~47	12		○					8c	木城西門ルート	粗面石碑2年度 九九1994
通口道跡2次	太宰府市向野町宇佐10	溝2S-D045と106の間	89	7		○					7c 後~8c 前	木城遺跡に残るる通路	筑波1993 山川1993
通里川通量道跡5次	太宰府市宇佐827D~1	溝SD-306~307~308				○?					11c 前~12c 初	通量道跡	粗面石碑2年度 太宰府史
通里川通量道跡5次	太宰府市宇佐827H~7	溝SD-402~403~404				○?					11c 前~12c 初	通量道跡	粗面石碑2年度 太宰府史
通里川通量道跡5次	太宰府市宇佐827H~7	溝SD-503~504~505				○?					11c 前~12c 初	通量道跡	粗面石碑2年度 太宰府史
通里川通量道跡5次	太宰府市太宰府宇佐827H~7	溝SD-600~609				○?					11c 前~12c 初	通量道跡	粗面石碑2年度 太宰府史
太宰府奈良館16次	太宰府市通吉賀108~1	溝16S-D067と200の間	10	3		○					~11c 後	通量道跡	古墳77集 太宰府史
太宰府奈良館16次	太宰府市通吉賀108~1	溝16S-D092	4.6			○					~11c 後	通量道跡	
太宰府奈良館34次	太宰府市通吉賀108~1	溝34S-D090と200の間	36	3		○					~10c	通量道跡	太宰府史

Tab.72 古代官道(道路状遺構)一覧表 71

遺跡名	所在地	遺構名	長さ (m)	幅(m)	路面の状態	被覆化	表面	カント	切妻	盛土	時期	備考	文献	
大宰府条痕跡34次	太宰府市通古賀1068-1	34S-D225と322の間	36	3.7		○					11c 前	条痕跡道路		
大宰府条痕跡44次	太宰府市通古賀1087	溝44S-D005と425の間	6	4		○					~11c 後	条痕跡道路	古墳2集 太宰府史	
大宰府条痕跡53次	太宰府市通古賀1071	溝53S-D045	4			○					~11c 後	条痕跡道路	太宰府史	
大宰府条痕跡58次	太宰府市通古賀42-1集					○					11c 後~12c 前	条痕跡道路	太宰府史	
大宰府条痕跡64次	太宰府市南287集	溝64S-D140	253	18.6		○					8c 前~後	朱雀大路西側溝	古墳2集 山田1993	
大宰府条痕跡64次	太宰府市南287集	64S-D110	185			○					9c 中~後	朱雀大路東側溝	山村1993	
大宰府条痕跡71次	太宰府市御所賀123	71S-X300A	23	23.7 [10.4]		○					11c 後~12c 前	条痕跡道路	太宰府史	
大宰府条痕跡75次	太宰府市通古賀42-1集	溝75S-D003と050の間				○					11c 後~12c 前	条痕跡道路	太宰府史	
大宰府条痕跡81次	太宰府市通古賀1068-3	溝81S-D245	5			○					~11c 後	条痕跡道路	太宰府史	
大宰府条痕跡87次	太宰府市通古賀1120-3集	溝87S-F100	22	25~3		○					10c 後~11c 前	条痕跡道路	古墳3集 太宰府史	
大宰府条痕跡87次	太宰府市通古賀1120-3集	溝87S-F150	2	2.7		○					10c 後~11c 前	条痕跡道路		
大宰府条痕跡90次	太宰府市2666-1	溝90S-D045	8			○					9c 後	条痕跡道路	太宰府史	
大宰府条痕跡90次	太宰府市2666-1	溝90S-D045	8			○					9c 後	条痕跡道路	太宰府史	
大宰府条痕跡90次	太宰府市2666-1	90S-D024と030の間	15	2		○					~11c 後	条痕跡道路		
大宰府条痕跡91次	太宰府市太宰府2566-7	溝90S	3.95			○					11c 後	朱雀大路東側溝	古墳2集 山田1993	
大宰府条痕跡92次	太宰府市太宰府2630-14	92S-D002と006の間	24	1.6		○					10c 後	条痕跡道路	太宰府史	
大宰府条痕跡92次	太宰府市太宰府2630-14	92S-D006と5.009の間	24	9		○					11c 後	条痕跡道路		
大宰府条痕跡93次	太宰府市太宰府2567-2集	93S-D270と265-275の間	9.6	22.3(6)		○					8c 後	条痕跡道路	太宰府史	
大宰府条痕跡95次	太宰府市太宰府2567-2集	93S-D270と265-275の間	9.6	22.3(6)		○					~9c 後	条痕跡道路		
大宰府条痕跡95次	太宰府市通古賀401-1-7	溝95S-D040	5.2			○					8c 前~中	条痕跡道路	太宰府史	
大宰府条痕跡95次	太宰府市通古賀401-1-7	95S-D050	12			○					10c 後~11c 前	条痕跡道路		
大宰府条痕跡95次	太宰府市通古賀804-1ト7 など77	95S-D077と085を特に なす77	4	3		○					9c 後~10c 前	条痕跡道路		
大宰府条痕跡100次	太宰府市通古賀1120-1集	溝100S-F100	21	14~21		○					8c 前~後	条痕跡道路	古墳3集 太宰府史	
大宰府条痕跡108次	太宰府市通古賀1120-1集	溝118S-F100	13	3		○						条痕跡道路 約7.8m部分	太宰府史	
大宰府条痕跡128次	太宰府市那珂原町1066-30 の間	溝128S-D027と059-098 の間	243.7	15~ 37		○						条痕跡道路 全跡崩落	古墳4集	
大宰府条痕跡138次	太宰府市那珂原町1066-30 の間	128S-D000と025-030	22			○						条痕跡道路 崩落崩落		
大宰府条痕跡138次	太宰府市那珂原町1066-30 の間	128S-D000と025-030	22			○						条痕跡道路 崩落崩落		
大宰府条痕跡133次	太宰府市古宇佐323-1	133S-D010と015-S-X00				○						朱雀大路西側溝29		
大宰府条痕跡141次	太宰府市通古賀1120-3集	141S-D049と109の間	29	2~3(2)		○					10c 後~11c 前	条痕跡道路	古墳3集	
大宰府条痕跡146次	太宰府市东3丁1105-2集					○						急直~平窓	朱雀大路東側溝など?	
大宰府条痕跡178次	太宰府市通古賀4丁1022-1					○						8c 後	条痕跡道路 全跡崩落	古墳5年成年期
大宰府条痕跡181次	太宰府市通古賀4丁1120-1集					○						直直	朱雀大路東側溝	古墳5年成年期
大宰府条痕跡191次	太宰府市通古賀5丁1173					○						8c 前~11c 前	条痕跡道路	古墳5年成年期
大宰府条痕跡196次	太宰府市通古賀南4丁1120-1	196S-D001				○						直直~平窓	条痕跡道路 全跡崩落	古墳6年
大宰府条痕跡201次	太宰府市通古賀5丁1121-1集					○							条痕跡道路	古墳6年
大宰府条痕跡99次	筑前野市竹原166	道路状痕跡99SF902	31.8	9(11)		○					~8c 後	本城西門A→ト	古墳5年	
橋二月出跡	豊上郡熊田町越路1号			6		○							古跡官道の一部	古墳5年成年期
岡田地区遺跡群	筑前野市御田455-2地	{区} 道路SF(通古賀 04)の間	360	9~9.4		○	○	○	○		8c 前~12c 前	西脇遺跡後ルート	古墳6集	
大宰府条痕跡107次	筑前野市立明寺	107S-D001	25	10.1		○					~8c 後	朱雀大路西側溝	太宰府史	
大宰府条痕跡200次	筑前野市二日出700-1		56			○	○					直直	朱雀大路西側溝	筑前野市史
串木遺跡58次	久留米市光明寺字草庵	西南海跡溝SD061と02 上2号	50	~9.10		○	○	○	○			直直~平窓	西南海跡	古墳145集

Tab.73 古代官道(道路状遺構)一覧表 72

遺跡名	所在地	遺構名	長さ (m)	幅(m)	路面の状態	被覆 化	表面 性質	カット 面	切端	時期	参考	文献
古賀森遺跡4次	久留米市上津町字古賀前	道路状遺構SF130	7~23	9(3.5)	○					奈良~平安	西海道	古賀111集
古賀森遺跡10次	久留米市上津町字古賀前	西海道	7~20.5	9	○					~中世	西海道	古賀130集
古賀森遺跡13次	久留米市上津町字古賀前	道路状遺構	55?	~9	○					~中世	西海道	古賀145集
西海道跡1次	久留米市吉井町御野字3,甲田 1762~279	道路状遺構SF1	68	9(3) 前後	パラス	○				8c 前~12c	西海道	古賀50集
西海道跡2次	久留米市吉井町御木宇内261~1	道路状遺構SF1	27	9(3~ 22.5)	○	○				~11c 代	西海道	古賀140集
風見岡遺跡32次	久留米市台町御宇林内271~1	溝SD1355	2	3.5	○	○					西海道	古賀23集
風見岡遺跡45次	久留米市台町御宇林内260~1	溝SD1355	9.5	5	○	○	○				西海道	古賀26集
風見岡遺跡50次	久留米市吉井町御宇林内25~1	道路状遺構SF12308	45?	5.5~6	パラス・砂質土	○	○	○		9c 後~11c 初	西海道	古賀341集
風見岡遺跡51次	久留米市吉井町御宇林内342~4	溝SD1253	27	2	○	○					西海道	古賀41集
風見岡遺跡55次		SF12709 上層	16	~5.5 4.5~1	砂質土	○				10c 中~11c 終	西海道	
風見岡遺跡55次		下層	16	~5.5 4.5~1	小粒	○	○	○		8c 後~10c 終	西海道	
風見岡遺跡57次	久留米市東合町御宇前町10地	道路SF12701		14	砾						西海道	古賀ノキ62次で再調査
風見岡遺跡75次	久留米市御井町御坂141地	道路状遺構SF12709+下層道路	34.5	5.5 10~1	円椎	○	○	○		~10c 中	西海道	古賀54集
風見岡遺跡78次	久留米市御井町御坂141地	SF12709+1層道路	34.5	5.5 10~1	○					10c 中~11c 終	西海道	
風見岡遺跡90次	久留米市台町御宇広野171~1	道路状遺構SF12980	1	8	○	○				9c 後~11c 終	西海道	古賀67集
風見岡遺跡110次	久留米市東合町御宇前町10地	道路状遺構SF12709			円椎	○				~9c 後	西海道	古賀70集
風見岡遺跡131次	久留米市御井町1415~5	道路状遺構SF12709+下層道路	[10m]	円椎		○					西海道	古賀113集
風見岡遺跡131次	久留米市御井町1415~5	SF12709+上層道路	[10m]							10c 中~	西海道	
風見岡遺跡169次	久留米市吉井町御宇132~1	道路状遺構SF1上層道路	20	4~	粘土	○	○			10c 中~11c 終	西海道	古賀20集
風見岡遺跡169次	久留米市吉井町御宇132~1	下層道路	20	4~	パラス・土層	○	○?			7c 終~10c 中	西海道	
△ボノ木遺跡17次	久留米市吉井町御宇前町御井	道路状遺構SF13270		3面壁	砂糖	○				~12c 代	西海道	古賀45集
△ボノ木遺跡42次	久留米市吉井町御宇1320~1	道路状遺構SF1400	37	2.5~	パラス	○				10c ~12c 代	西海道	古賀121集
鹿ノ口遺跡	福岡県古賀市水木三丁清瀬	道路状遺構	60	6	砾石	○	○		○?	8c 前~12c 終	官道	豊前ハイバス

「直きおよび幅は道路の幅である。また、【】内は断定、()内は直きの芯の状況の幅である。

福岡市埋蔵文化財調査報告書第699集 高畠遺跡－第18次調査－に記載された「福岡県内の道路状遺構」を制作者の福岡県教育委員会文化財保護課坂本真一氏の了解を得て加筆修正をした。

－土器観察表凡例－

(1) サイズ

上段が器高、中段が口径、下段が底径を示す。(単位はcm)

完結しない数値は、現存長の後に + αで表記した。

(2) 胎土

砂粒の大小については、微細<細<小：1mm <中：1~2mm <粗：3mm ~の順で示し、砂粒の前に冠した。

(3) 燒成

焼成については、不良<良好<堅緻に区分した。

(4) 調整：手法の特徴

調整の用語は、カタカナで内外面に区分して略式的に記載した。

(5) その他には、器形の形態や丹彩、穿孔、被熱などの特徴を記載した。

高畠遺跡第20次調査における自然科学分析

株式会社古環境研究所

I. 自然科学分析の概要

高畠遺跡第20次調査では、弥生時代の井戸、古墳時代の河川跡さらに古代の井戸が検出された。ここでは、これら遺構の性格および当時の周囲の植生や環境を検討する目的で、植物珪酸体（プラント・オパール）分析、花粉分析・寄生虫卵分析、珪藻分析の微化石分析と種実同定を、また、周辺植生と木材の利用状況を把握する目的で、出土木製品等の樹種同定を行った。分析対象は、微化石分析と種実同定は弥生時代の素掘りの井戸（SE-04）と古代の井戸（SE-09）から採取された堆積物2試料、樹種同定は弥生時代の河川跡（SD-137）より出土した木器ほか（エブリ、杓子、作業台？）、弥生時代の138号井堰状杭列に伴う木器ほか（砧？、タモ網枠、円盤状木製品、鉄斧柄など）、古墳時代の河川跡（SD-10）に伴う木器ほか（タクリ台、タクリ軸、田下駄、建築材、鐵、編錘、杓子未製品、柄、砧、剣形木製品、柱材、板材、鍤、把手付槽、容器未製品、蓋、男根状木製品、槽、鉄斧柄、ナイフ状木製品、舟形模造品、把手付作業台、蓋状木製品など）、古代の井戸（SE-09）の構築材（板材3点と棒材2点）とそれに伴う木器類（櫛、桶底板？、桶、曲げ物）の68点である。

II. 植物珪酸体（プラント・オパール）分析

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（ SiO_2 ）が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山、2000）。

1. 分析方法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスピーズ法（藤原、1976）を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに対し直径約40μmのガラスピーズを約0.02g添加（0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20μm以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 檢鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスピーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスピーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： 10^{-5}g ）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる（杉山、2000）。タケア科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率およびメダケ率（メダケ属とササ属の比率）を求めた。

2. 分析結果

(1) 分類群

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ、イネ（穂の表皮細胞由来）、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）

〔イネ科－タケア科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等

〔イネ科－その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

(2) 植物珪酸体の検出状況

弥生時代の井戸(SE-04)と古代の井戸(SE-09)から採取された2試料では、ネザサ節型が多量に検出され、イネ、イネの初穀（穂の表皮細胞由来）、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族A、メダケ節型、ミヤコザサ節型なども認められた。イネの密度は4,400個/gおよび3,900個/gであり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている5,000個/gを下回っている。また、イネの初穀（穂の表皮細胞由来）の密度は600個/gと低い値である。おもな分類群の推定生産量によると、ネザサ節型が優勢であり、次いでイネが多くなっている。

3. 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

当時の遺構周辺は、メダケ属（おもにネザサ節）を主体としてススキ属やチガヤ属なども見られる日当たりの良い比較的乾燥した環境であり、ヨシ属が生育するような湿地的なところも見られたと考えられる。また、遺跡周辺では稲作が行われており、そこから何らかの形で井戸内にイネの植物珪酸体が混入したと推定される。イネの初穀（穂の表皮細胞）に由来する植物珪酸体も認められることから、遺構周辺で脱穀や初穀作業が行われていた可能性も示唆される。

III. 花粉・寄生虫卵分析

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。同時に寄生虫卵分析を行うことにより、生活域の確認や人糞施肥の有無、あるいはトイレ遺構を確認することも可能である。しかし、花粉や寄生虫卵などの有機物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

1. 方法

花粉・寄生虫卵の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

1) 試料から1cmを採量

- 2) 0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え 15 分間湯煎
- 3) 篩別により大きな砂粒や木片等を除去し、沈澱法を施す
- 4) 25%フッ化水素酸を加え 30 分静置（2・3度混和）
- 5) 水洗後サンプルを 2 分
- 6) 2 分したサンプルの一方にアセトトリシス処理を施す
- 7) 両方のサンプルを染色後グリセリンゼリーで封入しそれぞれ標本を作製
- 8) 検鏡は、プレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって 300～1000 倍で行う

基本的にアセトトリシス処理を施したプレパラートで花粉分析、アセトトリシス処理を施していないプレパラートで寄生虫卵分析を行う。以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、2 分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を 3 回繰り返して行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示す。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。また、この処理を施すとクスノキ科の花粉は検出されない。

2. 花粉分析結果

（1）分類群

出現した分類群は、樹木花粉 14、樹木花粉と草本花粉を含むもの 6、草本花粉 15、シダ植物胞子 2 形態の計 37 である。これらの学名と和名および粒数を表 2 に示し、花粉数が 200 個以上計数できた試料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基準とする花粉ダイアグラムを図 2 に示す。主要な分類群は顕微鏡写真に示した。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

マツ属複維管束亞属、スギ、ノグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属-アサダ、シイ属-マテバシイ属、コナラ属コナラ亞属、コナラ属アカガシ亞属、ニレ属-ケヤキ、エノキ属-ムクノキ、センダン属、トネリコ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科-イラクサ科、ユキノシタ科、バラ科、マメ科、トウダイグサ科、ゴマノハグサ科

〔草本花粉〕

オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、タデ属、ギシギシ属、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、アブラナ科、アカバナ科、タンボボ亞科、キク亞科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

（2）花粉群集の特徴

1) 弥生時代の井戸（SE-04）

樹木花粉より草本花粉の占める割合がやや高く、約 45% を占める。樹木花粉と草本花粉を含むクワ科-イラクサ科が約 10% を占める。草本花粉ではイネ科（イネ属型を含む）を主に、ヨモギ属、アカザ科-ヒユ科、アブラナ科などが出現する。樹木花粉ではスギが優占し、シイ属-マテバシイ属、

コナラ属アカガシ亜属、エノキ属－ムクノキなどが出現する。

2) 古代の井戸 (SE-09)

草本花粉の占める割合が約 80%と優占し、特にイネ科(イネ属型を含む)が高率に出現し、ヨモギ属、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、オモダカ属などが伴われる。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属、シイ属－マテバシイ属、スギなどが低率に出現する。

3. 寄生虫卵分析結果

(1) 分類群

出現した寄生虫卵は、1分類群である。これらの学名と和名および粒数を表2に示す。出現した分類群については顕微鏡写真を示した。以下に特徴を示す。

鞭虫 *Trichuris (trichiura)*

鞭虫は世界に広く分布し、現在ではとくに熱帯・亜熱帯の高温多湿な地域に多くみられる。卵の大きさは $50 \times 30 \mu\text{m}$ で、レモン形あるいは岐阜ちょうちん形で、卵殻は厚く褐色で両端に無色の栓がある。糞便とともに外界に出た虫卵は、中間宿主を必要とせず3～6週間で感染幼虫包蔵卵になり経口感染する。

(2) 寄生虫卵群集の特徴

1) 弥生時代の井戸 (SE-04)

寄生虫卵および明らかな消化残渣は検出されない。

2) 古代の井戸 (SE-09)

寄生虫卵密度は低く、鞭虫卵が1cm中 15 個検出された。明らかな消化残渣は検出されない。

4. 花粉・寄生虫分析から推定される環境

1) 弥生時代の井戸 (SE-04)

4号井戸周囲には、イネ科や乾燥を好むヨモギ属、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科などの人里植物であり耕地雑草でもある草本が生育していたと考えられる。イネ科にはイネ属型が伴われ水田の分布も示唆される。樹木花粉と草本花粉を含むクワ科－イラクサ科は、ここでは生態上荒れ地などに生育するカナムグラやカラムシなどの草本が考えられ、井戸の周囲に生育していたと思われる。周辺にはスギ林が主要に分布し、シイ属－マテバシイ属、コナラ属アカガシ亜属などの照葉樹と、エノキ属－ムクノキなども生育していた。

2) 古代の井戸 (SE-09)

イネ科にはイネ属型が伴われ、水田雑草であるミズアオイ属、オモダカ属などと共に出現することから、9号井戸の周辺には水田が分布していたと考えられる。井戸や水田の周囲には、ヨモギ属、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科、カヤツリグサ科などの草本が生育していた。またわずかに検出された鞭虫卵は、生活汚染程度の密度であり、9号井戸に比較的近接して生活域が分布していた可能性が考えられる。近隣には、コナラ属アカガシ亜属、シイ属－マテバシイ属などの照葉樹が生育し、やや遠方にはスギなどが生育していた。

V. 珪藻分析

珪藻は、珪酸質の被殼を有する单細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壤、

岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映しており、水域を主とする古環境復元の指標として利用されている。

1. 方法

以下の手順で、珪藻の抽出と同定を行った。

- 1) 試料から 1 cm²を採量
- 2) 10%過酸化水素水を加え、加温反応させながら 1 晚放置
- 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドを水洗（5～6回）
- 4) 残渣をマイクロビペットでカバーグラスに滴下して乾燥
- 5) マウントメディアによって封入し、プレパラート作成
- 6) 検鏡、計数

検鏡は、生物顕微鏡によって 600～1500 倍で行った。計数は珪藻被殻が 200 個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

2. 結果

(1) 分類群

試料から出現した珪藻は、貧塩性種（淡水生種）43 分類群である。表3に分析結果を示し、珪藻総数を基数とする百分率を算定した珪藻ダイアグラムを図3に示す。珪藻ダイアグラムにおける珪藻の生態性は Lowe (1974) や渡辺 (2005) 等の記載により、陸生珪藻は小杉 (1986) により、環境指標種群の淡水生種は安藤 (1990) による。また、主要な分類群について顕微鏡写真を示した。以下にダイアグラムで表記した分類群を記載する。

〔貧塩性種〕

Achnanthes lanceolata, *Achnanthes rupestris*, *Amphora fontinalis*, *Amphora montana*, *Caloneis hyalina*, *Cymbella silesiaca*, *Eunotia bilunaris*, *Eunotia minor*, *Fragilaria construens*, *Frustulia vulgaris*, *Gomphonema gracile*, *Gomphonema parvulum*, *Hantzschia amphioxys*, *Navicula contenta*, *Navicula cryptocephala*, *Navicula cryptotenella*, *Navicula elginensis*, *Navicula ignota*, *Navicula mutica*, *Navicula mutica v. ventricosa*, *Navicula spp.*, *Navicula veneta*, *Neidium spp.*, *Nitzschia amphibia*, *Nitzschia brevissima*, *Nitzschia clausii*, *Nitzschia debilis*, *Nitzschia frustulum*, *Nitzschia nana*, *Nitzschia palea*, *Nitzschia sinuata v. delognei*, *Nitzschia spp.*, *Nitzschia umbonata*, *Pinnularia borealis*, *Pinnularia mesolepta*, *Pinnularia microstauron*, *Pinnularia spp.*, *Pinnularia subcapitata*, *Stauroneis lauenburgiana*, *Stauroneis sp.1*, *Surirella angusta*, *Surirella ovata*, *Tabellaria fenestrata-flocculosa*

(2) 硅藻群集の特徴

1) 弥生時代の井戸 (SE-04)

珪藻密度が低く、検出される珪藻はすべて貧塩性種（淡水生種）である。特に陸生珪藻が優占し、約 80% を占める。残りを好止水性種、流水不定性種などが占める。陸生珪藻では *Hantzschia amphioxys* が高率に出現し、*Navicula mutica*, *Pinnularia subcapitata*, *Amphora montana*,

Pinnularia borealis などが伴われる。好止水性種では *Pinnularia microstauron* がやや多く出現する。流水不定性種では *Nitzschia palea*、*Nitzschia* spp. などが低率に出現する。

2) 古代の井戸 (SE-09)

検出される珪藻はすべて貧塩性種（淡水生種）である。陸生珪藻の占める割合が一番高く、流水不定性種、真・好止水性種、真・好流水性種はほぼ同じ割合を占める。陸生珪藻では *Nitzschia amphibia*、*Amphora montana* がやや多く出現し、*Navicula mutica*、*Nitzschia nana*、*Navicula contenta*、*Nitzschia debilis* などが出現する。流水不定性種では *Achnanthes rupestris* を主に、*Stauroneis lauenburgiana*、*Navicula veneta*、*Nitzschia* spp.、*Nitzschia palea*、*Stauroneis* sp.1、*Nitzschia clausii*、*Navicula* spp. などが出現する。真・好止水性種では沼沢湿地付着生環境指標種群の *Eunotia minor*、好止水性種の *Nitzschia sinuata* v. *deleguei*、*Eunotia bilunaris* などが出現する。真・好流水性種では中～下流性河川環境指標種群の *Achnanthes lanceolata* がやや多く出現し、真流水性種の *Surirella angusta*、好流水性種の *Gomphonema parvulum* などが伴われる。

3. 硅藻分析から推定される堆積環境

1) 強生時代の井戸 (SE-04)

Hantzschia amphioxys を主とする陸生珪藻が優占しており、これらは井戸上部壁面あるいは周囲の湿ったところに生育していたと考えられる。井戸自体は、止水性種である *Pinnularia microstauron* の出現から止水の状況であったことが示唆される。珪藻密度が低いことから、比較的の堆積速度が速かつたと推定される。

2) 古代の井戸 (SE-09)

珪藻密度が比較的高く、井戸内は日当たりが良かったとみなされる。陸生珪藻、流水不定性種、真・好止水性種、真・好流水性種など多様に出現することから、湿った環境で、止水や流水の混在する環境が推定される。真・好流水性種で中～下流性河川環境指標種群の *Achnanthes lanceolata* がやや多いため、湧水による流水があったことが示唆される。

V. 種実同定

植物の種子や果実は比較的強靭なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出しその群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

1. 方法

試料に以下の物理処理を施して、抽出および同定を行う。

- 1) 試料 200ml に水を加え放置し、泥化を行う。
- 2) 搅拌した後、沈んだ砂礫を除去しつつ、0.25mm の篩で水洗選別を行う。
- 3) 残渣を双眼実体顕微鏡下で観察し、種実の同定計数を行う。

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行う。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

2. 結果

(1) 分類群

樹木4、草本13の計17分類群が同定された。学名、和名および粒数を表4に示し、主要な分類群を写真に示す。200cm中の種実数をダイアグラムに示す(図4)。以下に同定根拠となる形態的特徴を記載する。

[樹木]

ヤマグワ *Morus australis* Poir. 種子 クワ科

茶褐色で広倒卵形を呈し、基部に突起がある。表面はやや粗い。

キイチゴ属 *Rubus* 核 バラ科

淡褐色でいびつな半円形を呈す。表面には大きな網目模様がある。

バラ科? *Rosaceae*? 核

黄褐色で腎臓形を呈す。表面はやや粗い。形態が変形しているため?とする。

センダン *Melia azedarach* var. *subtripinnata* Miq. 核 センダン科

黒褐色で楕円形を呈し、一端は円孔となる。縦に5本の発達した稜が走る。

[草本]

イネ *Oryza sativa* L. 穂(破片) イネ科

穂は茶褐色で扁平楕円形を呈し、下端に枝梗が残る。表面には微細な顆粒状突起がある。完形のものは無かった。

ホタルイ属 *Scirpus* 果実 カヤツリグサ科

黒褐色で、やや光沢がある。広倒卵形を呈し、断面は両凸レンズ形である。表面には横方向の微細な隆起があり、基部に4~8本の針状の付属物を持つ。

スゲ属 *Carex* 果実 カヤツリグサ科

茶褐色で倒卵形、扁平である。果皮は柔らかい。

カヤツリグサ科 *Cyperaceae* 果実

茶褐色で倒卵形を呈す。断面は扁平である。

コナギ *Monochoria vaginalis* Presl var. *plantaginea* Solms Laub. 種子 ミズアオイ科

淡褐色で楕円形を呈す。表面には縦方向に7~9本程度の隆起があり、その間を横方向の密な隆線が走る。

イグサ科 *Juncaceae* 種子

半透明の黄褐色ないし茶褐色、ゆがんだ卵形を呈す。両端は尖り、黒褐色。表面には網目模様がある。

タデ属 *Polygonum* 果実 タデ科

茶褐色で頂端の尖る卵形を呈す。断面は両凸レンズ状で、表面はやや粗い。

アカザ属 *Chenopodium* 種子 アカザ科

黒色で光沢がある。円形を呈し、片面の中央から周縁まで浅い溝が走る。

ヒユ属 *Amaranthus* 種子 ヒユ科

黒色で光沢がある。円形を呈し、一ヶ所が切れ込みヘソがある。断面は両凸レンズ形である。

ザクロソウ *Mollugo pentaphylla* L. 種子 ザクロソウ科

黒色でやや光沢がある。円形を呈し、一ヶ所が切れ込み白い種柄がある。表面には微細な網状斑紋がある。

ナデシコ科 *Caryophyllaceae* 種子

黒色で円形を呈し、側面にへそがある。表面全体に突起がある。

ヘビイチゴ属・オランダダイチゴ属・キジムシロ属 *Duchesnea-Fragaria-Potentilla* 種子 バラ科

黄褐色で腎臓形を呈す。表面はやや粗い。

カタバミ属 *Oxalis* 種子 カタバミ科

茶褐色で楕円形を呈し、上端が尖る。両面には横方向に6～8本の隆起が走る。

(2) 種実群集の特徴

1) 弥生時代の井戸 (SE-04)

ナデシコ科が優占し、統いてヘビイチゴ属、オランダイチゴ属、キジムシロ属、わずかにザクロソウ、ヤマグワ、キイチゴ属、イネ、アカザ属、カタバミ属が検出された。

2) 古代の井戸 (SE-09)

イネ、ナデシコ科、アカザ属が多く、センダン、カタバミ属、ホタルイ属、コナギ、ヒユ属、ザクロソウ、バラ科？、スゲ属、カヤツリグサ科、イグサ科、タデ属が伴われる。

3. 種実同定から推定される植生と農耕

1) 弥生時代の井戸 (SE-04)

4号井戸周囲には、日当たりがよく乾燥を好むナデシコ科、アカザ属、ザクロソウ、ヘビイチゴ属、オランダイチゴ属、キジムシロ属、カタバミ属などの人里植物ないし耕地雑草の性格を持つ草本が生育していた。イネ類が伴われることから水田の分布も示唆される。ヤマグワ、キイチゴ属は食用になり、食用となった残滓が堆積したと思われる。

2) 古代の井戸 (SE-09)

イネ類が多く、水田雑草であるホタルイ属、スゲ属、コナギなどと共に出現することから、9号井戸の周辺には水田が分布していたと考えられる。井戸や水田の周囲には、ナデシコ科、アカザ属、ヒユ属、ザクロソウ、カヤツリグサ科、イグサ科、タデ属、カタバミ属などの草本が生育しており、センダン、バラ科？は井戸の周囲に生育していたと思われる。

VI. 樹種同定

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないとから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

1. 方法

カミソリを用いて試料の新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

2. 結果

表5に結果を示し、主要な分類群については顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

マキ属 *Podocarpus* マキ科 写真1

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかである。樹脂細胞が散在する。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で1分野に1～2個存在する。樹脂細胞が散在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1～20細胞高である。樹脂細胞が多く見られる。

以上の形質よりマキ属に同定される。マキ属には、イヌマキ、ナギがあり、関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑高木で、通常高さ20m、径50～80cmである。材は、耐朽性が強く、耐水性も多い。建築、器具、桶、箱、水槽などに用いられる。

ツブラジイ *Castanopsis cuspidata* Schottky ブナ科 写真2

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管が、やや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。放射組織は、単列のものと集合放射組織が存在する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は平伏細胞からなり、同性放射組織型である。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと集合放射組織が存在する。

以上の形質よりツブラジイに同定される。ツブラジイは関東以南の本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽性、保存性とともに低く、建築材などに用いられる。

コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 写真3

横断面：中型から大型の道管が、1～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。材は堅硬かつ強韌であり、弾力性が強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

スギ *Cryptomeria japonica* D.Don スギ科 写真4

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、10細胞高以下のものが多い。樹脂細胞が存在する。

以上の形質よりスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ40m、径2mに達する。材は軽軟であるが強韌で、広く用いられる。

ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科 写真5

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅はきわめて狭い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は單列の同性放射組織型で、1～15細胞高である。

以上の形質よりヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径15mに達する。材は木理通直、肌目緻密で強韌せある。耐朽性、耐湿性ともに高い。良材であり、建築など広く用いられる。

シキミ *Illicium religiosum* Sieb. et Zucc. モクレン科 写真6

横断面：小型で角張った道管が、ほぼ単独で密に分布する散孔材である。早材部の年輪界付近に於いて、道管が少し並ぶ傾向を示す。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く50を越える。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、1～3細胞幅で、單列部が太い。

以上の形質よりシキミに同定される。シキミは、関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の小高木で、高さ10m、径30cmに達する。材は強さ中庸で、旋作、器具、薪などに用いられる。

クスノキ *Cinnamomum camphora* Presl クスノキ科 写真7

横断面：中型から大型の道管が、単独および2～数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の周囲を鞘状に軸方向柔細胞が取り囲んでいる。これらの柔細胞の中には、油を含み大きく膨れ上がったものも存在する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、道管の内壁にらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～2細胞幅である。上下の縁辺部の直立細胞のなかには、しばしば大きく膨れ上がったものがみられる。

以上の形質よりクスノキに同定される。クスノキは、関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木で、通常高さ25m、径80cmぐらいであるが、高さ50m、径5mに達するものもある。材は堅硬で耐朽性が強く、保存性も高く芳香がある。建築、器具、楽器、船、彫刻、ろくろ細工などに用いられる。

タブノキ *Machilus thunbergii* Sieb. et Zucc. クスノキ科 写真8

横断面：やや小型から中型の道管が、単独および2～数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の周囲を鞘状に軸方向柔細胞が取り囲んでいる。これらの柔細胞の中には、油を含み大きく膨れ上がったものも存在する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔または少數ではあるが、数の少ない階段穿孔が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～2細胞幅である。上下の縁辺部の直立細胞のなかには、しばしば大きく膨れ上がったものがみられる。

以上の形質よりタブノキに同定される。タブノキは、本州（暖地）、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木で、高さ15m、径1mに達する。材は耐朽性、保存性とともに中庸で、建築、家具、土木、器具、楽器、船、彫刻、薪炭などに用いられる。

イスノキ *Distylium racemosum* Sieb. et Zucc. マンサク科 写真9

横断面：小型でやや角張った道管が、ほぼ単独に散在する散孔材である。軸方向柔細胞が接線方向に向かって黒い線状に並んで見られ、ほぼ一定の間隔で規則的に配列する。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は比較的少なく15前後のものが多い。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、ほとんどが1～2細胞幅であるが、まれに3細胞幅のものも存在する。

以上の形質よりイヌノキに同定される。イヌノキは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木で、高さ20m、径1mに達する。耐朽性および保存性の高い材で、建築、器具、楽器、ろくろ細工、櫛、薪炭などに用いられる。

カエデ属 Acer カエデ科 写真10

横断面：小型で丸い道管が、単独あるいは2～4個放射方向に複合して散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、内壁には微細な螺旋肥厚が存在する。放射組織は、平伏細胞からなる同性である。

接線断面：放射組織は、同性放射組織型で1～6細胞幅である。道管の内壁には微細な螺旋肥厚が存在する。

以上の形質よりカエデ属に同定される。カエデ属には、イタヤカエデ、ウリハダカエデ、ハウチワカエデ、ツツカエデ、ウリカエデ、チドリノキなどがあるが、放射組織の形質からウリカエデ、チドリノキ以外のいずれかである。北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または小高木で、大きいものは高さ20m、径1mに達する。材は耐朽性および保存性は中庸で、建築、家具、器具、楽器、合板、彫刻、薪炭など広く用いられる。

アワブキ属 Meliosma アワブキ科 写真11

横断面：小型の道管が、単独ないし2～4個放射方向にむかって複合して散在する散孔材であるが、その複合部に1～2個の柔細胞をはさんでいるのが見られる。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は少なく10本前後である。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で1～4細胞幅である。

以上の形質よりアワブキ属に同定される。アワブキ属は本州、四国、九州に分布する。アワブキ、ヤマビワ、ミヤマホウソなどがあり、落葉または常緑の低木から高木である。

ヤツツバキ Camellia japonica Linn. ツバキ科 写真12

横断面：小型でやや角張った道管が、単独ないし2～3個複合して散在する散孔材である。道管の径はゆるやかに減少する。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は8～30本ぐらいである。放射組織は平伏細胞と直立細胞からなる異性で、直立細胞には、大きく膨れているのが存在する。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、1～3細胞幅である。直立細胞には大きく膨れているものが存在する。

以上の形質よりヤツツバキに同定される。ヤツツバキは本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で、通常高さ5～10m、径20～30cmである。材は強靭で、耐朽性強く、建築、器具、楽器、船、彫刻

などに用いられる。

サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科 写真13

横断面：小型の道管が、単独ないし2個複合して密に散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く60を越える。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で単列である。

以上の形質よりサカキに同定される。サカキは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑高木で、通常高さ8~10m、径20~30cmである。材は強韌かつ堅硬で、建築、器具などに用いられる。

ネジキ *Lyonia ovalifolia* Drude var. *elliptica* ツツジ科 写真14

横断面：小型でやや角張った道管が、ほぼ単独で密に散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は10~20本である。放射組織は異性である。道管と放射組織との壁孔は階段状である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、数個の直立細胞からなる単列のものと、2~4細胞幅で、1~10細胞高の單列部をもつ多列のものとからなる。

以上の形質よりネジキに同定される。ネジキは、本州、四国、九州に分布する。落葉の低木で通常高さ6m、径30cmぐらいである。材は旋作、器具（ことに櫛）、木炭などに用いられる。

タイミンタチバナ *Myrsine seguinii* Lev. ヤブコウジ科 写真15

横断面：小型で角張った道管が、単独あるいは2~3個放射方向および不規則方向に複合して散在し、全体に放射方向に配列する傾向を示す散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で極めて高く、鞘細胞を有し、3~6細胞幅である。

以上の形質によりタイミンタチバナ同定される。タイミンタチバナは、近畿以西の本州（千葉県以西）、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の大低木または高木である。

ガマズミ属 *Viburnum* スイカズラ科

横断面：小型でやや角張った道管が、ほぼ単独で均一に散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は数十本である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、1~10個の直立細胞からなる単列のものと、1~4細胞幅で、細長い紡錘形の多列のものとからなる。

以上の形質よりガマズミ属に同定される。ガマズミ属には、ゴマキ、サンゴジュなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑の小高木で通常高さ10m、径30cmぐらいである。樹木は庭園、生垣、防火樹などに、材は旋作、小細工物などに用いられる。

散孔材 diffuse-porous wood

横断面：小型の道管が散在する。

放射断面：切片は採取出来なかった。

接線断面：切片は採取出来なかった。

以上の形質より散孔材に同定される。なお、本試料は木製品であり、形状を損ねる畏れがため広範囲の切片採取及び観察が困難であったことから、散孔材の同定にとどめる。

3. 考察

高畠遺跡第20次調査で出土した木器はか木材について樹種同定を行った。その結果、弥生時代の河川跡（SD-137）より出土した木器ほか3点は、コナラ属アカガシ亜属1点、クスノキ1点、アワブキ属1点、弥生時代の138号井堰状杭列に伴う木器ほか5点は、マキ属1点、ツブラジイ1点、ヤブツバキ1点、サカキ1点、ガマズミ属1点であった。古墳時代の河川跡（SD-10）に伴う木器ほか47点の内訳は、スギ10点、ヒノキ1点、ツブラジイ6点、コナラ属アカガシ亜属8点、シキミ1点、クスノキ1点、タブノキ3点、イスノキ1点、カエデ属1点、アワブキ属2点、ヤブツバキ4点、サカキ6点、ネジキ1点、タイミンタチバナ1点、散孔材1点であった。古代の井戸（SE-09）の構築材のうち、板材3点はスギ、枠材2点はツブラジイ、それに伴う木器類7点は、スギ2点、ヒノキ1点、クスノキ1点、イスノキ3点であった。

マキ属はタモ網枠に使用されている。材は耐朽性、保存性が高く水湿に強く、やや重厚で強靭である。スギは井戸（SE-09）の板材のほか、建築材、剣型木製品、蓋、槽、舟形模造品、曲げ物などに使用されている。材は加工工作が容易な上、大きな材がとれる良材であり、建築材はもとより板材や小さな器具類に至るまで幅広く用いられる。ヒノキは不明木製品などに使用されている。木理通直で大きな材が取れる良材であり、特に保存性が高い。ツブラジイは井戸（SE-09）の枠材のほか、建築材、田下駄、容器未成品などに使用されている。耐朽性、保存性は低い材である。コナラ属アカガシ亜属は鍛、鋤、エブリ、把手付槽、把手付作業台などに使用されている。硬堅な材であり広く用いられるが、西南日本では弥生時代以降、特に農耕具を中心に用いられる傾向にある。シキミは板材に使用されており、やや硬い材である。クスノキは柱材、杓子、桶に使用されており、坚硬で耐朽性が高い材である。タブノキは建築材、垂木？、鍬に使用されており、強さ耐朽性とともに中庸の材である。イスノキは櫛、ナイフ状木製品に使用されている。重硬で耐朽性にすぐれ、細かい細工にも良好で、器具類にも適する材である。カエデ属は蓋状木製品に使用されており、やや堅硬な材と言える。アワブキ属は柱材、男根状木製品、作業台？に使用されており、概して強さ中庸の材と言える。ヤブツバキは編錘、砧などに、サカキは編錘、鉄斧柄、杓子未成品、柄に使用されており、どちらの材も強靭、坚硬な良材である。ネジキ、タイミンタチバナは、編錘に使用されており、ネジキは堅硬、イミンタチバナは重硬で耐朽性、保存性は高い材であるが、どちらの材も反り、捩れなどの狂いが生じやすい。ガマズミ属は、円盤状木製品に使用されており、概してやや硬い材と言える。

マキ属は、温帯下部の暖温帯から亜熱帯に分布し、極めて温暖な気候下の針葉樹である。スギ、ヒノキは温帯に広く分布する針葉樹であり、スギは特に積雪地帯や多雨地帯で純林を形成し、ヒノキは温帯中部に多い。広葉樹では、ツブラジイ、コナラ属アカガシ亜属、クスノキ、タブノキ、イスノキは、西南日本に分布する照葉樹林の主要高木である。シキミ、ヤブツバキ、サカキも照葉樹林の構成要素である。カエデ属、ネジキ、アワブキ属、ガマズミ属は、温帯から温帯下部の暖温帯に広く分布し、タイミンタチバナは温帯下部の暖温帯から熱帯に分布する。

以上のことから、高畠遺跡第20次調査の木材は、当時遺跡周辺に生育していたか、もしくは地域的な流通の範囲でもたらされたと推定される。また、照葉樹林の構成要素である樹種が多く、当時遺跡周辺に照葉樹林が分布していた可能性が示唆される。

参考文献

- 杉山真二・藤原宏志（1986）機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－、考古学と自然科学、19, p.69-84.
- 杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）、考古学と植物学、同成社、p.189-213.
- 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－、考古学と自然科学、9, p.15-29.
- 藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）－プラント・オパール分析による水田址の探査－、考古学と自然科学、17, p.73-85.
- 金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原、新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法、角川書店、p.248-262.
- 鳥倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態、大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集、60p.
- 中村純（1967）花粉分析、古今書院、p.82-110.
- 中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ(*Oryza sativa*)を中心として、第四紀研究、13,p.187-193.
- 中村純（1977）稻作とイネ花粉、考古学と自然科学、第10号、p.21-30.
- 中村純（1980）日本産花粉の標微、大阪自然史博物館収蔵目録第13集、91p.
- Peter J.Warnock and Karl J.Reinhard (1992) Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils.Journal of Archaeological Science, 19, p.231-245.
- 金子清俊・谷口博一（1987）線形動物・扁形動物、医動物学、新版臨床検査講座、8、医歯薬出版、p.9-55.
- 金原正明・金原正子（1992）花粉分析および寄生虫、藤原京跡の便所遺構－藤原京7条1坊－、奈良国立文化財研究所、p.14-15.
- 金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原、新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法、角川書店、p.248-262.
- 金原正明（1999）寄生虫、考古学と動物学、考古学と自然科学、2、同成社、p.151-8.
- 金原正明・福富恵津子・金原正子（2005）糞石の基礎的研究、日本文化財科学会、第22回、p.118-119
- 中村純（1967）花粉分析、古今書院、p.82-110.
- Hustedt,F. (1937-1938) Systematische und ologische Untersuchungen über die DiatomeenFlora von Java,Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch. Hydrobiol,Suppl.15,p.131-506.
- Lowe,R.L. (1974) Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms. 333p., National Environmental Research Center.
- K.Krammer · H.Lange-Bertalot (1986-1991) Bacillariophyceae · 1-4.
- Asai,K.&,Watanabe,T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom,10,p.35-47.
- 安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用、東北地理、42, p.73-88.
- 伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用、珪藻学会誌、6,p.23-45.
- 小杉正人（1986）陸生珪藻による古環境解析とその意義－わが国への導入とその展望－、植生史研究、第1号、植生史研究会、p.29-44.

- 小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用。第四紀研究, 27, p.1-20.
- 渡辺仁治（2005）淡水珪藻生態図鑑 群集解析に基づく汚濁指数 DAIp_o, pH 耐性能。内田老鶴園, pp.666.
- 笠原安夫（1985）日本雑草図説。養賢堂, 494p.
- 笠原安夫（1988）作物および田畠雑草種類。弥生文化の研究第2巻生業。雄山閣 出版, p.131-139.
- 金原正明（1996）古代モモの形態と品種。月刊考古学ジャーナル No.409, ニューサイエンス社, p.15-19.
- 南木睦彦（1991）栽培植物。古墳時代の研究第4巻生産と流通 I。雄山閣出版株式会社, p.165-174.
- 南木睦彦（1992）低湿地遺跡の種実。月刊考古学ジャーナル No.355, ニューサイエンス社, p.18-22.
- 南木睦彦（1993）葉・果実・種子。日本第四紀学会編, 第四紀試料分析法。東京大学出版会, p.276-283.
- 吉崎昌一（1992）古代雑穀の検出。月刊考古学ジャーナル No.355, ニューサイエンス社, p.2-14.
- 渡辺誠（1975）縄文時代の植物食。雄山閣, 187p.
- 佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞。木材の構造。文永堂出版, p.20-48.
- 佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞。木材の構造。文永堂出版, p.49-100.
- 島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧。雄山閣, p.296
- 山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成。植生史研究特別第1号。植生史研究会, p.242

表1 高畠遺跡第20次調査における植物珪酸体分析結果

検出密度(単位: × 100 個/g)

分類群	学名	地点・試料	
		4号井戸	9号井戸
イネ科	Gramineae		
イネ	Oryza sativa	44	39
イネ羽状(穎の表皮細胞)	Oryza sativa (husk Phytolith)	6	6
キビ族型	Panicace type	6	13
ヨシ属	Phragmites	6	13
ススキ属型	Miscanthus type	25	39
ウシクサ族A	Andropogoneae A type	19	32
タケ亜科	Bambusoideae		
メダケ節型	Pleioblastus sect. Nipponocalamus	19	19
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	253	169
チマキザサ節型	Sasa sect. Sasa etc.		6
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi	6	45
未分類等	Others	38	32
その他のイネ科	Others		
表皮毛起源	Husk hair origin	19	6
棒状珪酸体	Rod-shaped	158	104
未分類等	Others	133	136
植物珪酸体総数	Total	733	661

おもな分類群の推定生産量(単位: kg/nf·cm): 試料の仮比重を1.0と仮定して算出

イネ	Oryza sativa	130	114
ヨシ属	Phragmites	0.40	0.82
ススキ属型	Miscanthus type	0.31	0.48
メダケ節型	Pleioblastus sect. Nipponocalamus	0.22	0.23
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	1.21	0.81
チマキザサ節型	Sasa sect. Sasa etc.		0.05
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi	0.02	0.14

タケ亜科の比率(%)

メダケ節型	Pleioblastus sect. Nipponocalamus	15	19
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	84	66
チマキザサ節型	Sasa sect. Sasa etc.		4
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi	1	11
メダケ率	Medake ratio	99	85

表2 高畠遺跡第20次調査における寄生虫卵・花粉分析結果

学名	分類群 和名	4号井戸		9号井戸	
		計			
Helminth eggs	寄生虫卵	0		15	1
<i>Trichuris (trichiura)</i>	鞭虫卵		$\times 10^4$		
Total					
Helminth eggs frequencies of 1cm ²	試料 1cm ² 中の寄生虫卵密度	0.0			
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)		
Arboreal pollen	樹木花粉				
Pinus subgen. Diploxyylon	マツ属複維管束亞属	1		2	
Cryptomeria japonica	スギ	97		4	
Platycarya strobilacea	メグロミ	1			
Alnus	ハンノキ属			1	
Betula	カバノキ属			1	
Corylus	ハシバミ属			1	
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属 - アサダ	1			
Castanopsis-Pasania	シイ属 - マテバシイ属	18		14	
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亞属	2			
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属カガシシ属	17		25	
Ulmus - Zelkova serrata	ニレ属 - ケヤキ			1	
Celtis - Aphananthe aspera	エノキ属 - ムクノキ	10			
Melia	センダン属			1	
Fraxinus	トネリコ属	1			
Arboreal - Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉				
Moraceae-Urticaceae	クワ科 - イラクサ科	36		17	
Saxifragaceae	ユキノシタ科			1	
Rosaceae	バラ科			2	
Leguminosae	マメ科	2			
Euphorbiaceae	トウダイグサ科			1	
Scrophulariaceae	ゴマノハグサ科			1	
Nonarboreal pollen	草本花粉				
Sagittaria	オモダカ属			3	
Gramineae	イネ科	75		231	
Oryza type	イネ属型	9		30	
Cyperaceae	カヤツリグサ科	3		5	
Monochoria	ミズアオイ属			1	
Polygonum	タデ属	1			
Rumex	ギシギシ属			1	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科 - ヒユ科	14		14	
Caryophyllaceae	ナデシコ科	3		2	
Ranunculus	キンポウゲ属			3	
Cruciferae	アブラナ科	13		5	
Onagraceae	アカバナ科			1	
Lactucoideae	タンボボ属	2		1	
Asteroidae	キク亜科	1			
Artemisia	日モギ属	39		16	
Fern spore	シダ植物胞子				
Monolate type spore	單条溝胞子			1	
Trilate type spore	三条溝胞子	2		1	
Arboreal pollen	樹木花粉	148		50	
Arboreal - Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	38		22	
Nonarboreal pollen	草本花粉	160		313	
Total pollen	花粉總数	346		385	
Pollen frequencies of 1cm ²	試料 1cm ² 中の花粉密度	8.1		2.1	
			$\times 10^3$	$\times 10^4$	
Unknown pollen	未同定花粉	0		12	
Fern spore	シダ植物胞子	2		2	
Charcoal fragments	微細炭化物		(+)		

表3 高畠遺跡第20次調査における珪藻分析結果

分類群	4号井戸	9号井戸
貧塩性種(淡水生種)		
<i>Achnanthes lanceolata</i>		50
<i>Achnanthes rupestris</i>		51
<i>Amphora fontinalis</i>		4
<i>Amphora montana</i>	9	50
<i>Caloneis hyalina</i>		1
<i>Cymbella silesiaca</i>		2
<i>Eunotia bilunaris</i>		27
<i>Eunotia minor</i>		29
<i>Fragilaria construens</i>	1	
<i>Frustulia vulgaris</i>		1
<i>Gomphonema gracile</i>		1
<i>Gomphonema parvulum</i>		5
<i>Hantzschia amphioxys</i>	81	5
<i>Navicula contenta</i>	3	10
<i>Navicula cryptocephala</i>		2
<i>Navicula cryptotenella</i>		3
<i>Navicula elginiensis</i>	1	
<i>Navicula ignota</i>	1	
<i>Navicula mutica</i>	20	16
<i>Navicula mutica</i> v. <i>ventricosa</i>		1
<i>Navicula</i> spp.		7
<i>Navicula veneta</i>		11
<i>Neidium</i> spp.	1	
<i>Nitzschia amphibia</i>		53
<i>Nitzschia brevissima</i>	1	
<i>Nitzschia clausii</i>		6
<i>Nitzschia debilis</i>	1	7
<i>Nitzschia frustulum</i>	1	4
<i>Nitzschia nana</i>		16
<i>Nitzschia palea</i>	3	9
<i>Nitzschia sinuata</i> v. <i>deleguei</i>		29
<i>Nitzschia</i> spp.	2	11
<i>Nitzschia umbonata</i>	1	3
<i>Pinnularia borealis</i>	8	
<i>Pinnularia mesolepta</i>		1
<i>Pinnularia microstauron</i>	18	1
<i>Pinnularia</i> spp.	1	
<i>Pinnularia subcapitata</i>	13	
<i>Stauroneis lauenburgiana</i>		18
<i>Stauroneis</i> sp1		7
<i>Suriella angusta</i>		12
<i>Suriella ovata</i>		1
<i>Tabellaria fenestrata-flocculosa</i>		1
合計	166	455
未同定	2	21
破片	64	43
試料 1 cm ² 中の殻数密度	5.4 × 10 ⁴	6.7 × 10 ⁶
完形殻保存率 (%)	72.4	91.7

表4 高畠遺跡第20次調査における種実同定結果

学名	分類群	和名	部位	井戸内	
				4号	9号
Arbor		樹木			
<i>Morus australis</i> Poir.		ヤマグワ	種子 (破片)	1 1	
Rubus		キイチゴ属	核	1	
Rosaceae ?		バラ科?	核		1
<i>Melia azedarach</i> L. var. <i>Subtripinnata</i> Miq.		センダン	核		4
Herb		草本			
<i>Oryza sativa</i> L.		イネ	穎(破片)	1	20
<i>Scirpus</i>		ホタルイ属	果実		2
<i>Carex</i>		スゲ属	果実		1
Cyperaceae		カヤツリグサ科	果実		1
<i>Monochoria vaginalis</i> Presl var. <i>plantaginea</i> Solms-Laub.		コナギ	種子		2
Juncaceae		イグサ科	種子		1
<i>Polygonum</i>		タデ属	果実		1
<i>Chenopodium</i>		アカザ属	種子	1	9
<i>Amaranthus</i>		ヒユ属	種子		2
<i>Mollugo pentaphylla</i> L.		ザクロソウ	種子 (破片)	2 1	2
Caryophyllaceae		ナデシコ科	種子	183	15
<i>Duchesnea-Fragaria</i>		ビオラ属-ラングリゴ属			9
- <i>Potentilla</i>		-キジムク属	種子		
<i>Oxalis</i>		カタバミ属	種子 (破片)	1 2	3
Total		合計		201	66

(200cm中 0.25mm筋)

表5 高畠遺跡第20次調査における樹種同定結果

同定No	遺物No	器種	グリッド	備考	結果(学名/和名)	
46	90	エブリ	粗紗屑	杭列内出土	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属
47	杭列No.35		粗紗屑	杭列内出土	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	ツラジイ
48	93	砧?			<i>Camellia japonica</i> Linn.	ヤブツバキ
49	99	タモ柄杓		No.104 同一個体	<i>Podocarpus</i>	マキ属
51	98	円盤状木製品		蓋? 滑座?	<i>Viburnum</i>	ガマズミ属
53	91	鉄斧柄			<i>Cleyera japonica</i> Thunb.	サカキ
54	95	杓子		杭列内出土	<i>Cinnamomum camphora</i> Presl	クヌキ
60	540	作業台?	u-15		<i>Meliosma</i>	アワブキ属
1	555	編縫			<i>Myrsine seguinii</i> Lev.	ダイミンタナハチ
2	551	タクリ台	t-11	台座	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
3	552	タクリ軸	t-11	挿入棒	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
4	545	大足	p2	ホゾ穴	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	ツラジイ
5	584	建築材	q-4	ホゾ穴	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
6	2015	旗		二叉脚	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属
7	557	編縫	t-8		<i>Camellia japonica</i> Linn.	ヤブツバキ
8	576	建築材	r+s-6・7	柱・ホゾ穴	<i>Machilus thunbergii</i> Sieb. et Zucc.	タブノキ
9	2026	杓子未製品			<i>Cleyera japonica</i> Thunb.	サカキ
10	2027	柄	p2・3		<i>Cleyera japonica</i> Thunb.	サカキ
11	538	砧?	s-7	完	<i>Camellia japonica</i> Linn.	ヤブツバキ
12	578	建築材	t-8	ホゾ穴	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	ツラジイ
13	571	削形木製品	u+v-9	抉天	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
14	531	旗	v-9	ナスビ形、半欠	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属
15	577	柱材	t-7・8	ホゾ穴	<i>Cinnamomum camphora</i> Presl	クヌキ
16	556	編縫	u-9	完	<i>Camellia japonica</i> Linn.	ヤブツバキ
17	2067	柱材	u-9		<i>Meliosma</i>	アワブキ属
18	582	重木?	u-9	切込み有	<i>Machilus thunbergii</i> Sieb. et Zucc.	タブノキ
19	2072	旗	t+u-9・10		<i>Machilus thunbergii</i> Sieb. et Zucc.	タブノキ
20	529	旗	u-9	半欠	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属
21	561	編縫	u-11	完	<i>Lyonia nezuki</i> Nakai et Hara	ネジキ
22	562	編縫	t-16	完	<i>Cleyera japonica</i> Thunb.	サカキ
23	560	編縫	u-12	完	<i>Cleyera japonica</i> Thunb.	サカキ
27	554	編縫	u-13	板切	<i>Ilicium religiosum</i> Sieb. et Zucc.	シキミ
28	532	旗	u-13	三叉・四又	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属
29	2115	田下駄	s-14		<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	ツラジイ
30	2119	柄	u-13	半欠	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	ツラジイ
31	537	砧?	t-13	半欠	<i>Camellia japonica</i> Linn.	ヤブツバキ
32	559	編縫	t-14		<i>Cleyera japonica</i> Thunb.	サカキ
33	543	不明板材	t-14	孔有、小口板	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
34	542	把手付槽	u-16		<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属
35	587	建築材	u-16	孔有	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
36	2148	容器未成品	u-16		<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	ツラジイ
37	2159	不明製品	v-17	抉入	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
38	544	蓋	y-18	丸板、円孔有	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
39	574	男根状木製品	y-18		<i>Meliosma</i>	アワブキ属
40	SD-10	中層			<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	ツラジイ
41	2197	槽	f-18・19	側板	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	ツラジイ
42	581				<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属
43	86	旗		二叉脚	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属
44	92	鉄斧柄			<i>Cleyera japonica</i> Thunb.	サカキ
55	567	ナイフ状木製品	III区上層		<i>Distylium racemosum</i> Sieb. et Zucc.	イスノキ
56	575	船形模造品	III区中層		<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
57	94	把手付作業台	III区下層		<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属
58-a	569	蓋状木製品	p-3	鏡板: 傘骨付	<i>Acer</i>	カエデ属
58-b	569	蓋状木製品: 軸	p-3	鏡板傘骨	diffuse - porous wood	散孔材
59	541	槽	c-18・19		<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
24	714	柄	SE-09		<i>Distylium racemosum</i> Sieb. et Zucc.	イスノキ
25	716	楊	SE-09		<i>Distylium racemosum</i> Sieb. et Zucc.	イスノキ
26	715	楊	SE-09		<i>Distylium racemosum</i> Sieb. et Zucc.	イスノキ
45	723	柄: 底板?	W-15		<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
61	722	曲げ物	SE-09		<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
62		柄	芦戸櫛		<i>Cinnamomum camphora</i> Presl	クヌキ
63		不明木製品	SE-09	曲げ物内出土	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
64		裏板材E-7	SE-09		<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
65		裏板材E-9	SE-09		<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
66		裏板材E-17	SE-09		<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
67		側枠材E-3	SE-09		<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	ツラジイ
68		側枠材E-4	SE-09		<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	ツラジイ

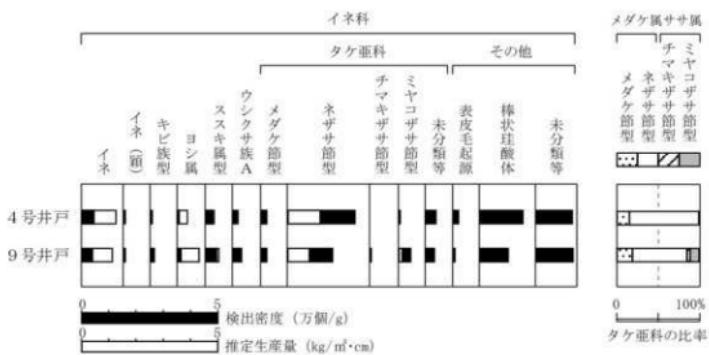


図1 高畑遺跡第20次調査における植物珪酸体分析結果

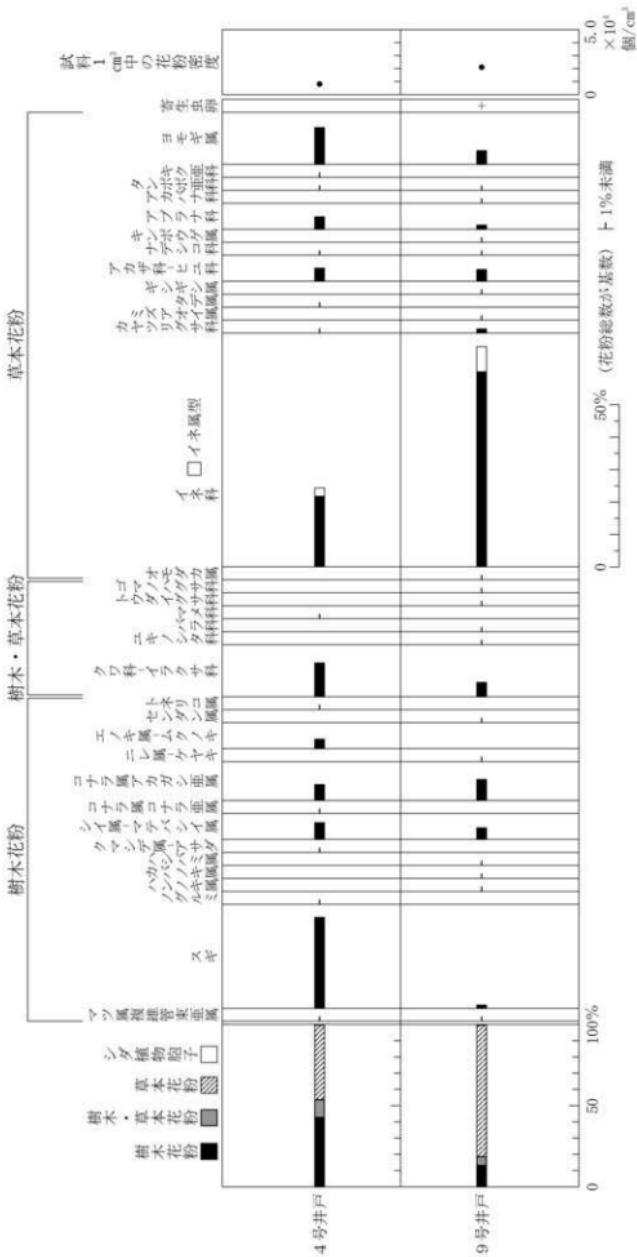


図2 高烟遺跡第20次調査における花粉ダイアグラム

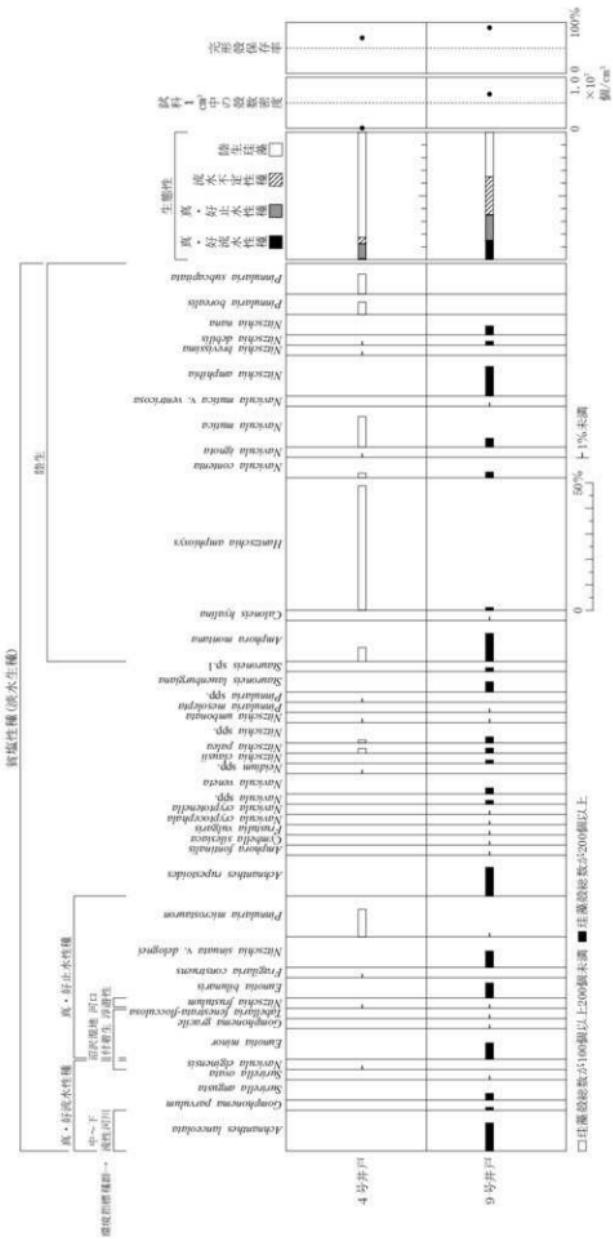


図3 高煙遺跡第20次調査における珪藻ダイアグラム

本草木樹

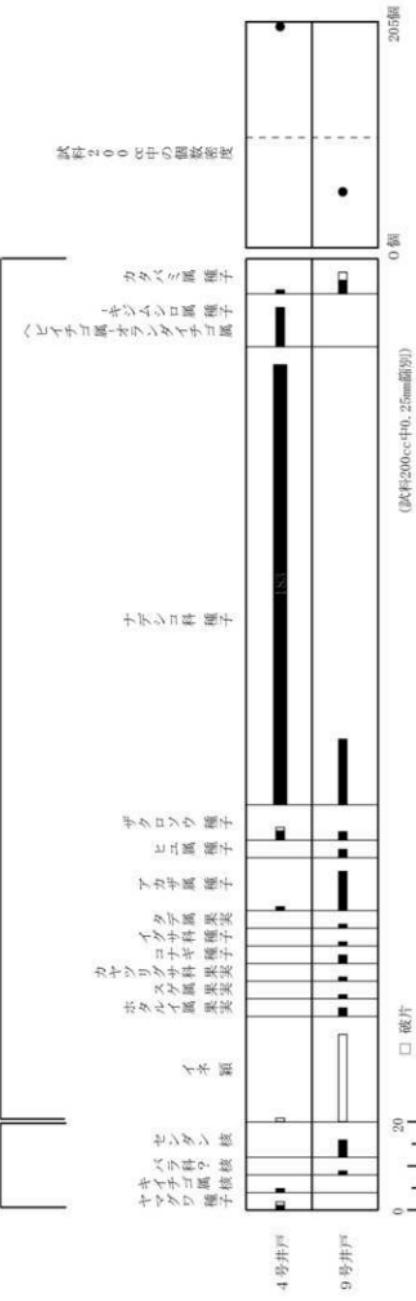
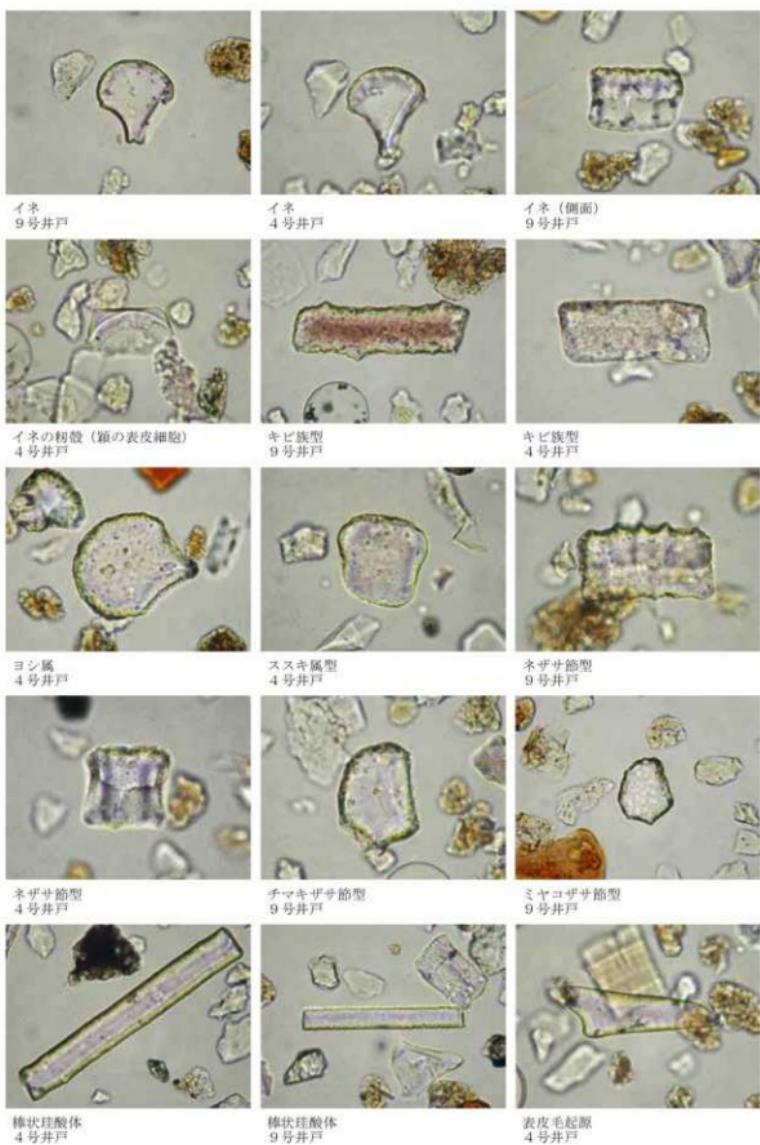


図4 高畠遺跡第20次調査における種実ダイアグラム

高畠遺跡第20次調査の植物珪酸体（プラント・オパール）



— 50 μ m —

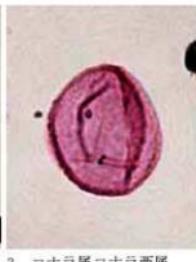
高畠遺跡第20次調査の花粉・寄生虫卵



1 スギ



2 シイ属-マテバシイ属



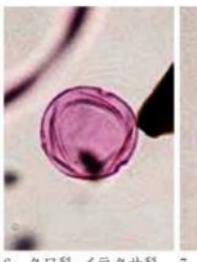
3 コナラ属コナラ亜属



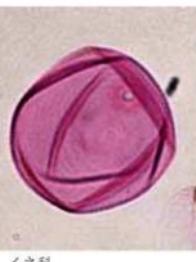
4 コナラ属アカガシ亜属



5 エノキ属-ムクノキ



6 クワ科-イラクサ科



7 イネ科



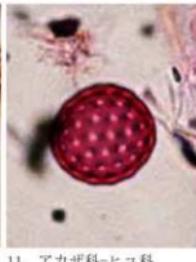
8 イネ属型



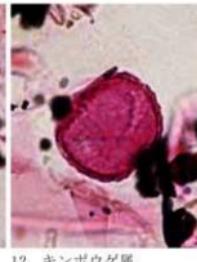
9 カヤツリグサ科



10 ミズアオイ属



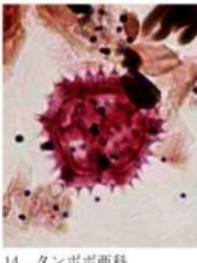
11 アザダ科-Hydrocharaceae



12 キンボウゲ属



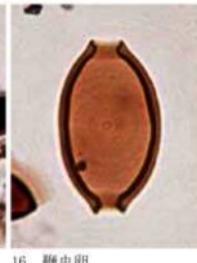
13 アブランカ科



14 タンポポ亜科



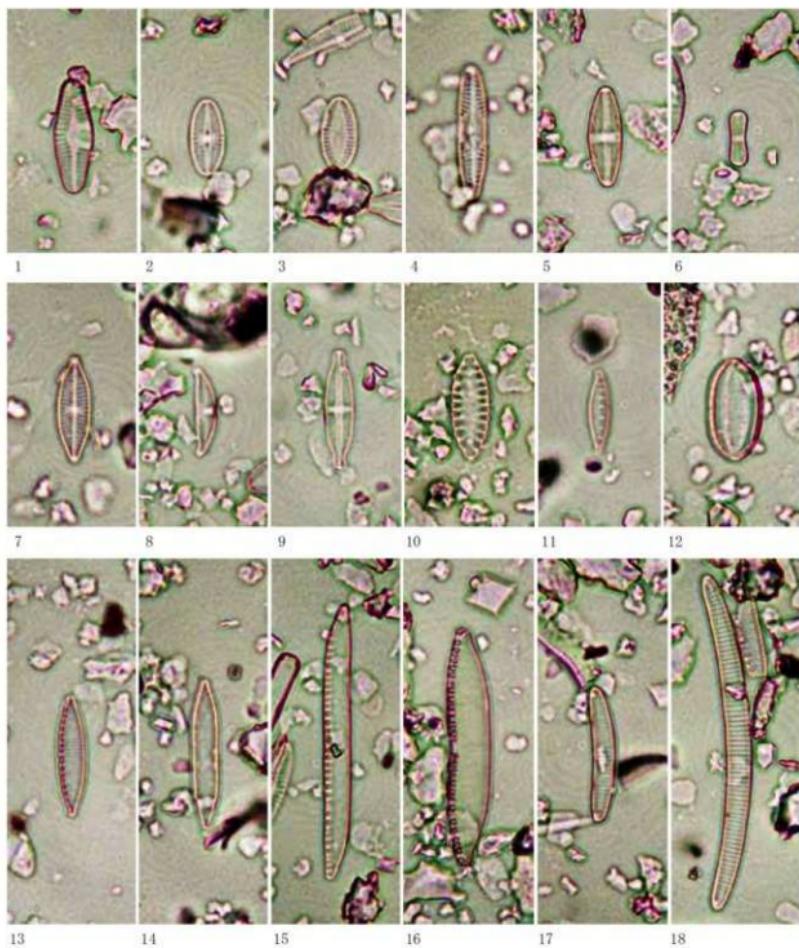
15 ヨモギ属



16 雜虫卵

— 10 μm

高畠遺跡第20次調査の珪藻

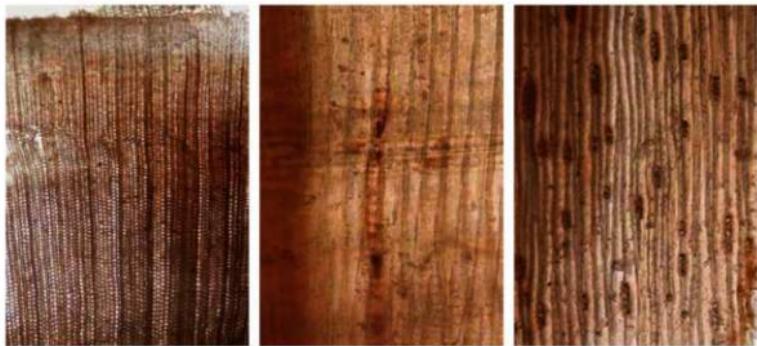


1. *Achnanthes lanceolata* 2. *Achnanthes rupestris* 3. *Achnanthes rupestris* 4. *Pinnularia microstauros*
5. *Navicula mutica* 6. *Navicula contenta* 7. *Navicula veneta* 8. *Amphora montana* 9. *Staurodes lauenburgiana*
10. *Surirella angusta* 11. *Nitzschia sinuata* v. *delognei* 12. *Nitzschia debilis* 13. *Nitzschia amphibia* 14. *Nitzschia palea*
15. *Nitzschia nana* 16. *Hantzschia amphioxys* 17. *Eunotia minor* 18. *Eurotia bilunaris*

高畠遺跡第20次調査の種実



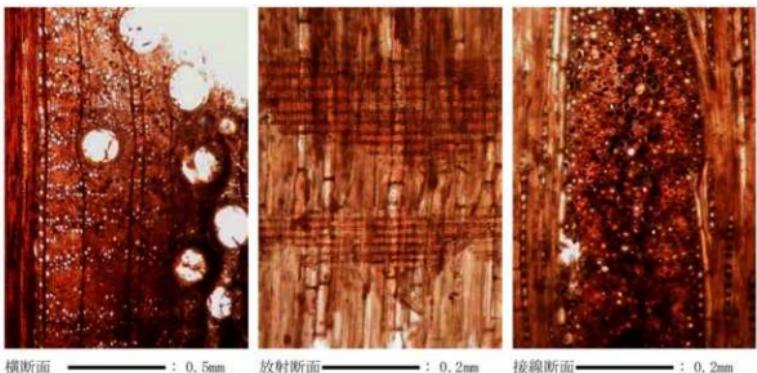
高畠遺跡第20次調査の木材 I



1. 杭列No.103 タモ網枠 マキ属
横断面 : 0.5mm 放射断面 : 0.1mm 接線断面 : 0.2mm



2. 2010 田下駄 ツブライイ
横断面 : 0.5mm 放射断面 : 0.2mm 接線断面 : 0.2mm

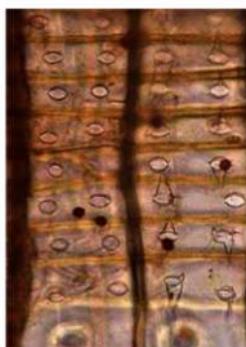


3. 2015 銀 コナラ属アカガシ亜属
横断面 : 0.5mm 放射断面 : 0.2mm 接線断面 : 0.2mm

高畠遺跡第20次調査の木材 II



横断面 : 0.5mm



放射断面 : 0.05mm



接線断面 : 0.2mm

4. 2004-a タクリ台 スギ



横断面 : 0.2mm

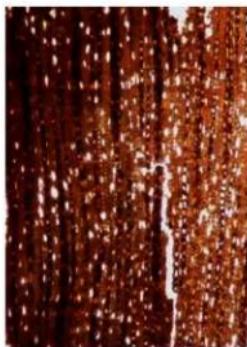


放射断面 : 0.05mm

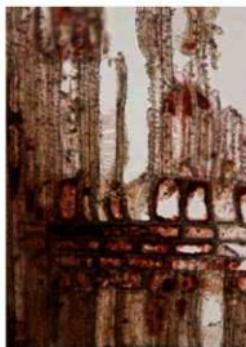


接線断面 : 0.2mm

5. 不明木製品 曲げ物内出土 ヒノキ



横断面 : 0.5mm



放射断面 : 0.2mm



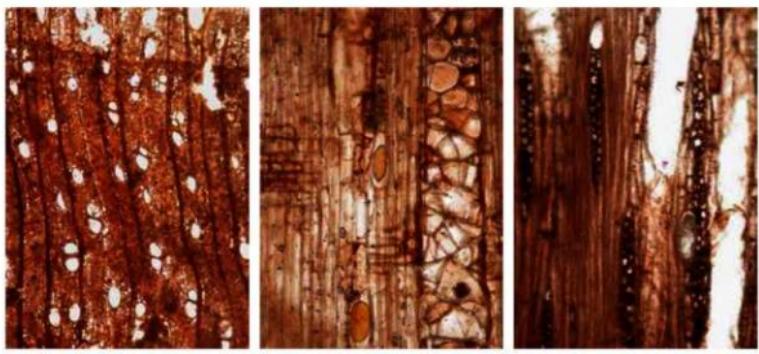
接線断面 : 0.2mm

6. 554 編縫 シキミ

高畠遺跡第20次調査の木材 III



横断面 : 0.5mm 放射断面 : 0.2mm 接線断面 : 0.2mm
7. 桶 井戸側 クスノキ



横断面 : 0.5mm 放射断面 : 0.2mm 接線断面 : 0.2mm
8. 2024 建築材 タブノキ

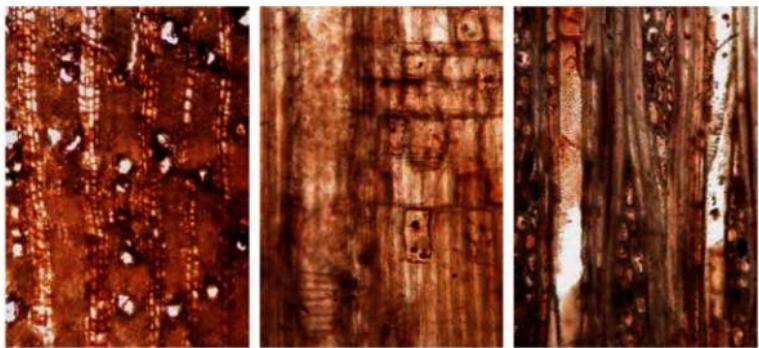


横断面 : 0.2mm 放射断面 : 0.1mm 接線断面 : 0.2mm
9. 井側内SE-09N22 樅 イヌノキ

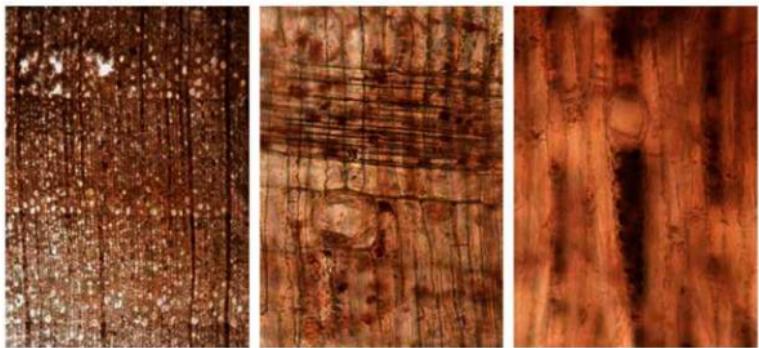
高畠遺跡第20次調査の木材 IV



横断面 : 0.5mm 放射断面 : 0.2mm 接線断面 : 0.2mm
10. 蓋状木製品 鏡板：傘骨付 カエデ属



横断面 : 0.5mm 放射断面 : 0.2mm 接線断面 : 0.2mm
11. 作業台? アワブキ属

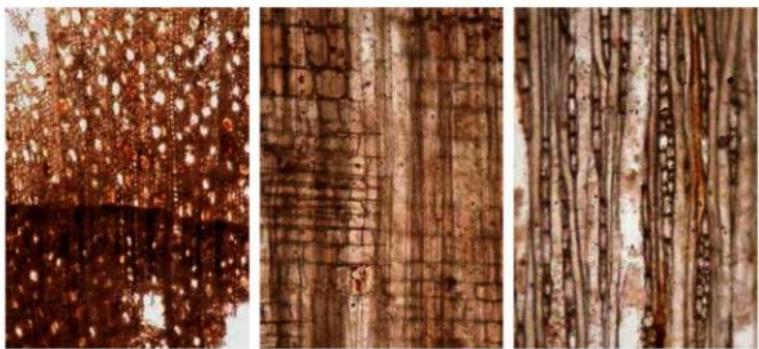


横断面 : 0.5mm 放射断面 : 0.1mm 接線断面 : 0.1mm
12. 538 砧 ヤブツバキ

高畠遺跡第20次調査の木材 V



横断面 : 0.5mm 放射断面 : 0.1mm 接線断面 : 0.2mm
13. 2128 編錐 サカキ



横断面 : 0.5mm 放射断面 : 0.2mm 接線断面 : 0.2mm
14. 2097 編錐 ネジキ



横断面 : 0.5mm 放射断面 : 0.2mm 接線断面 : 0.5mm
15. 555 編錐 タイミンタチバナ

P L A T E S



調査区全景(西から)



(1) 調査区東南部全景(西から)



(2) 2号住居全景(西から)



(1) 2号住居全景(東から)



(2) 2号住居遺物出土状況(南から)



(1) 5・6号住居全景(北東から)



(2) 5号住居全景(北東から)



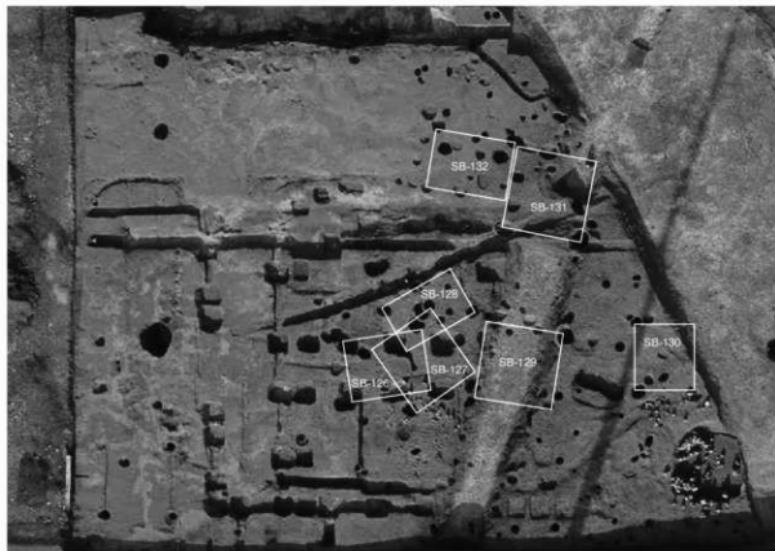
(1) 6号住居全景(北から)



(2) 6号住居遺物出土状況(東から)



(1) 126 ~ 132 号掘立柱建物(西から)



(2) 126 ~ 132 号掘立柱建物(南から)



(1) 4号井戸全景(西から)



(2) 4号井戸上層遺物出土状況(西から)



(1) 4号井戸下層遺物出土状況(東から)



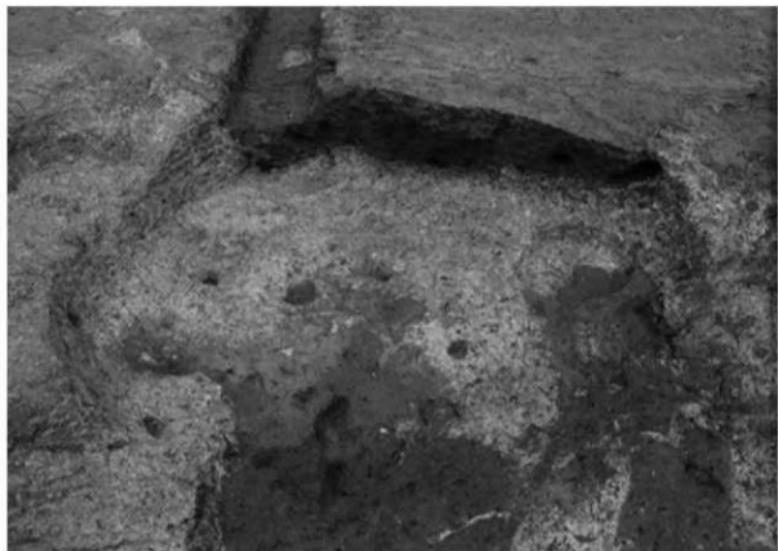
(2) 4号井戸全景(西から)



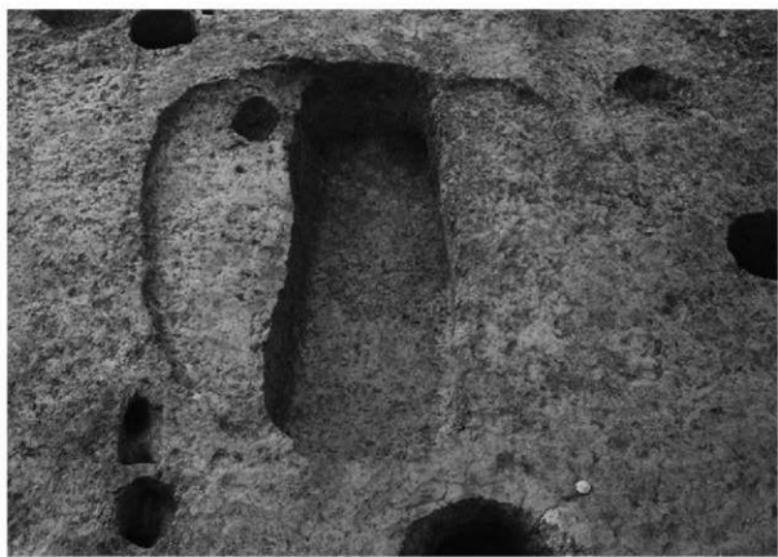
(1) 99号井戸全景(南から)



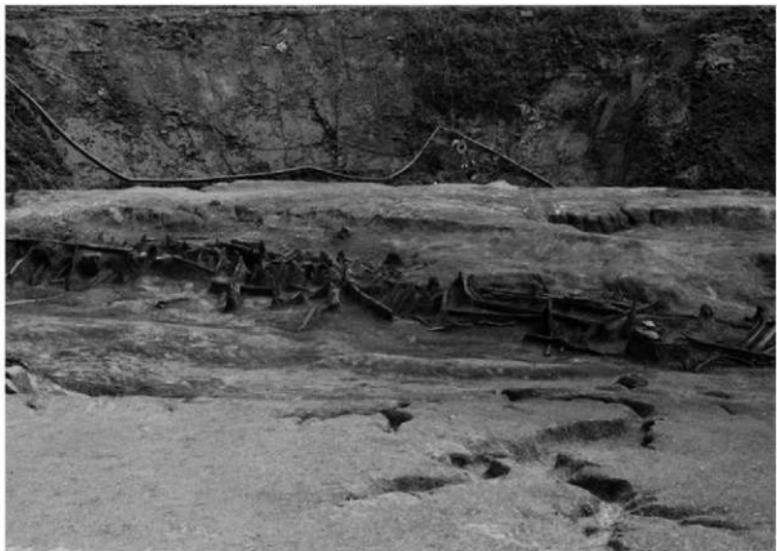
(2) 99号井戸断面(南から)



(1) 135号貯蔵穴全景(東から)



(2) 8号木棺墓全景(南から)



(1) 138号井堰状杭列全景(北から)



(2) 138号井堰状杭列(東から)



(1) 138号井堰状杭列東側(北から)



(2) 138号井堰状杭列断面(東から)



(1) 138号井堰状杭列タモ網出土状況(西から)



(2) 138号井堰状杭列鉄斧柄出土状況(北から)



(1) 138号井堰状杭列エブリ出土状況(北から)



(2) 137号河川III・IV区全景(南から)



(1) 12号土壤全景(東から)



(2) 10号河川全景(南から)



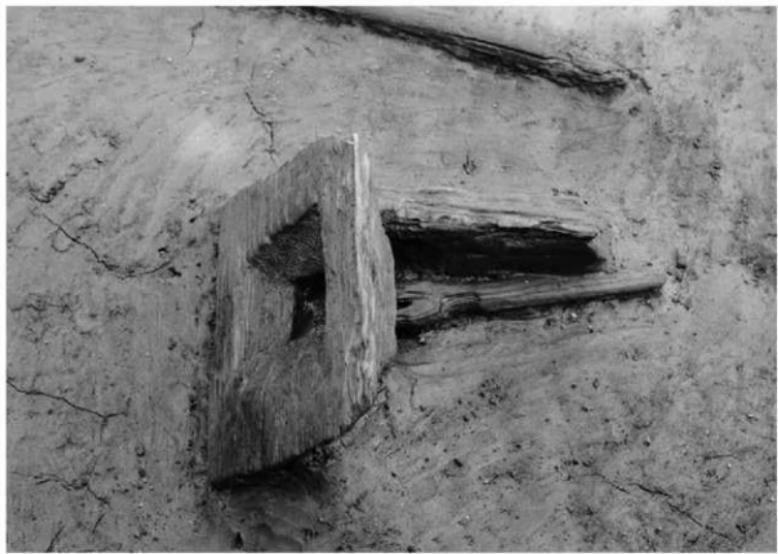
(1) 10号河川Ⅰ区全景(東から)



(2) 10号河川Ⅱ区全景(西から)



(1) 10号河川舟形模造品出土状況(西から)



(2) 10号河川紡織具出土状況(南西から)



(1) 10号河川I区遺物出土状況(南から)



(2) 10号河川I区遺物出土状況(東から)



(1) 10号河川Ⅰ区遺物出土状況(東から)



(2) 10号河川建築材出土状況(東から)



(1) 10号河川鍊・横槌出土状況(西から)



(2) 10号河川I区大足出土状況(北から)



(1) 10号河川自在カギ出土状況(南から)



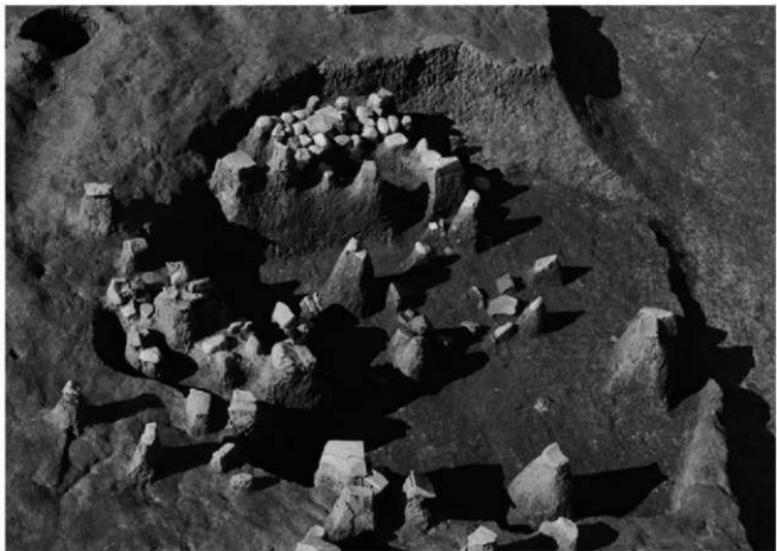
(2) 10号河川II区編錐出土状況(北から)



(1) 10号河川容器出土状況(西から)



(2) 10号河川Ⅱ区鉢出土状況(東から)



(1) 9号井戸上層遺物出土状況(南から)



(2) 9号井戸上層鬼瓦出土状況(西から)



(1) 9号井戸全景(東から)



(2) 9号井戸柾検出状況(西から)



(1) 9号井戸神功開寶出土状況(南から)



(2) 9号井戸東側井戸枠裏込板検出状況(東から)



(1) 9号井戸東側井戸枠裏込板(東から)



(2) 9号井戸井戸枠検出状況(東から)



(1) 9号井戸底検査状況(南から)



(2) 9号井戸幹断面(東から)



(1) 9号井戸底桶検出状況(東から)



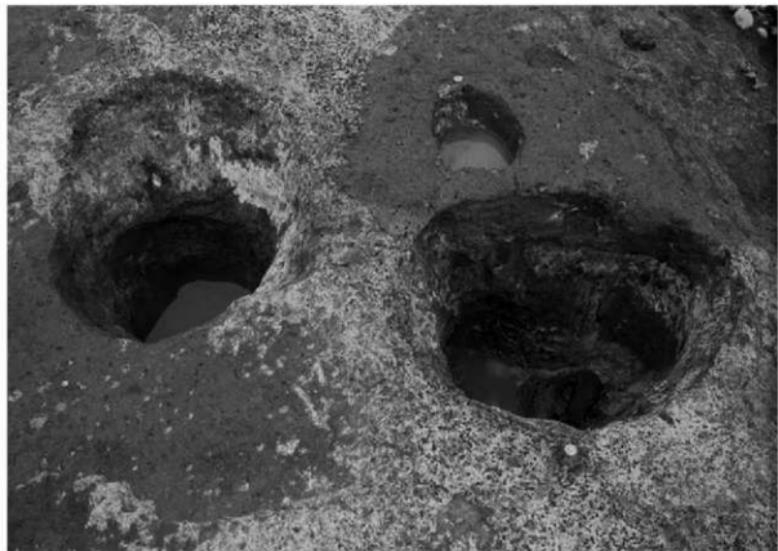
(2) 9号井戸底桶(東から)



(1) 9号井戸遺物出土状況(東から)



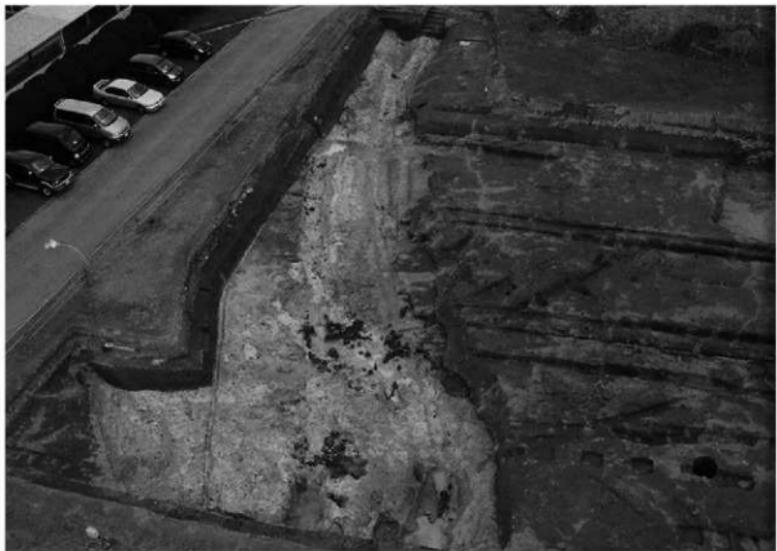
(2) 9号井戸底桶内遺物出土状況(北から)



(1) 133・134号井戸(南から)



(2) 133号井戸遺物出土状況(南から)



(1) 100 号道路遺構南半部(南から)



(2) 100 号道路遺構南端部(南から)



(1) 100 号道路遺構北半部(南から)



(2) 100 号道路遺構北端部(北から)



(1) 1号溝(西から)



(2) 1号溝南半部(南から)



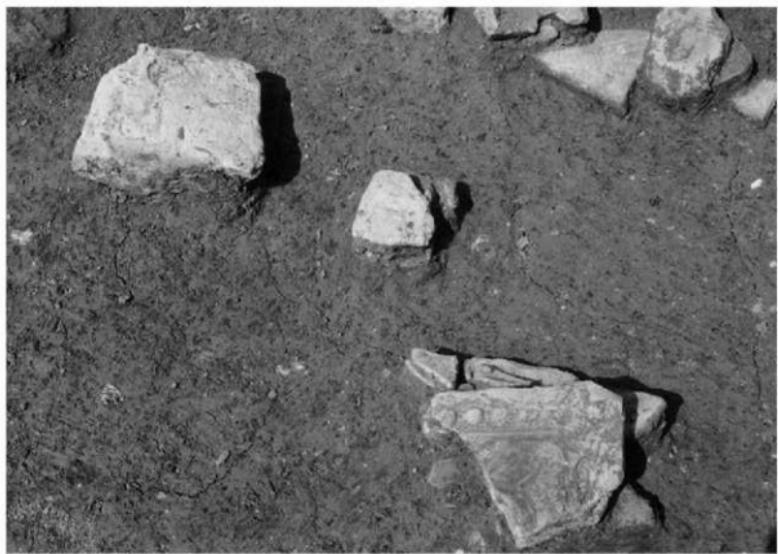
(1) 136号溝南半部(南から)



(2) 136号溝中央部遺物出土状況(南から)



(1) 136号溝北半部遺物出土状況(南から)



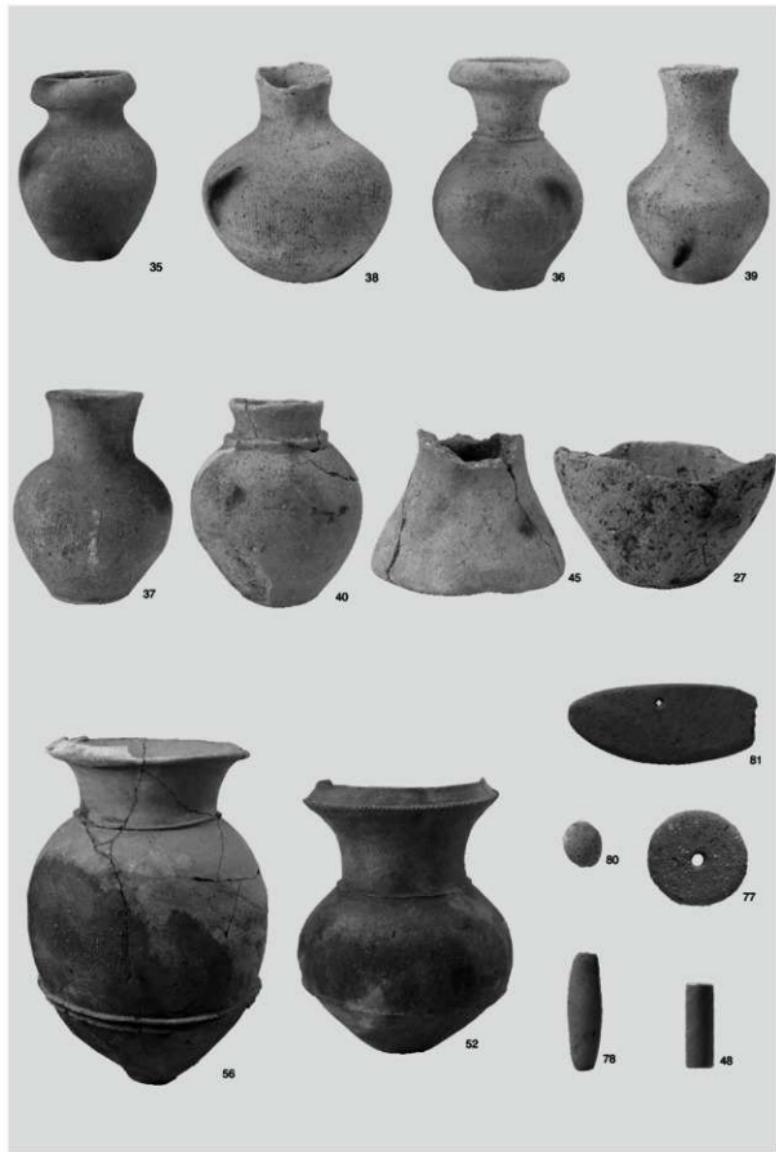
(2) 136号溝鬼瓦出土状況(西から)



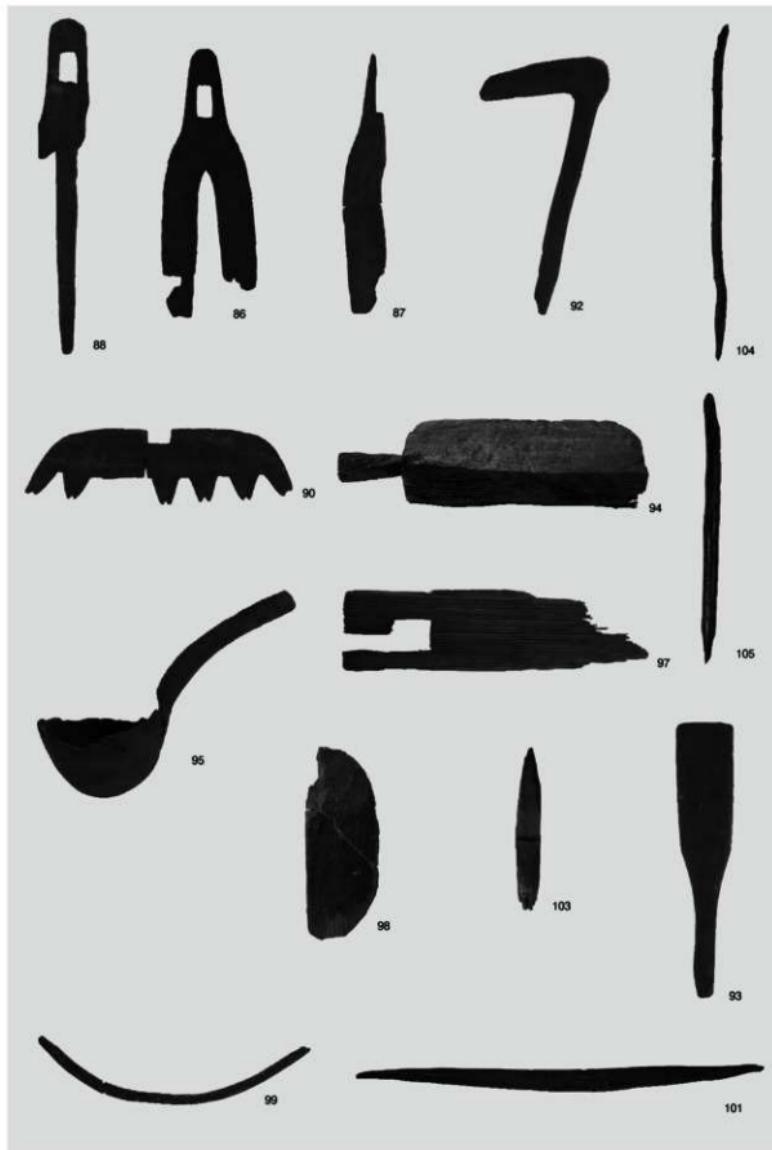
(1) 101・102号溝(南から)



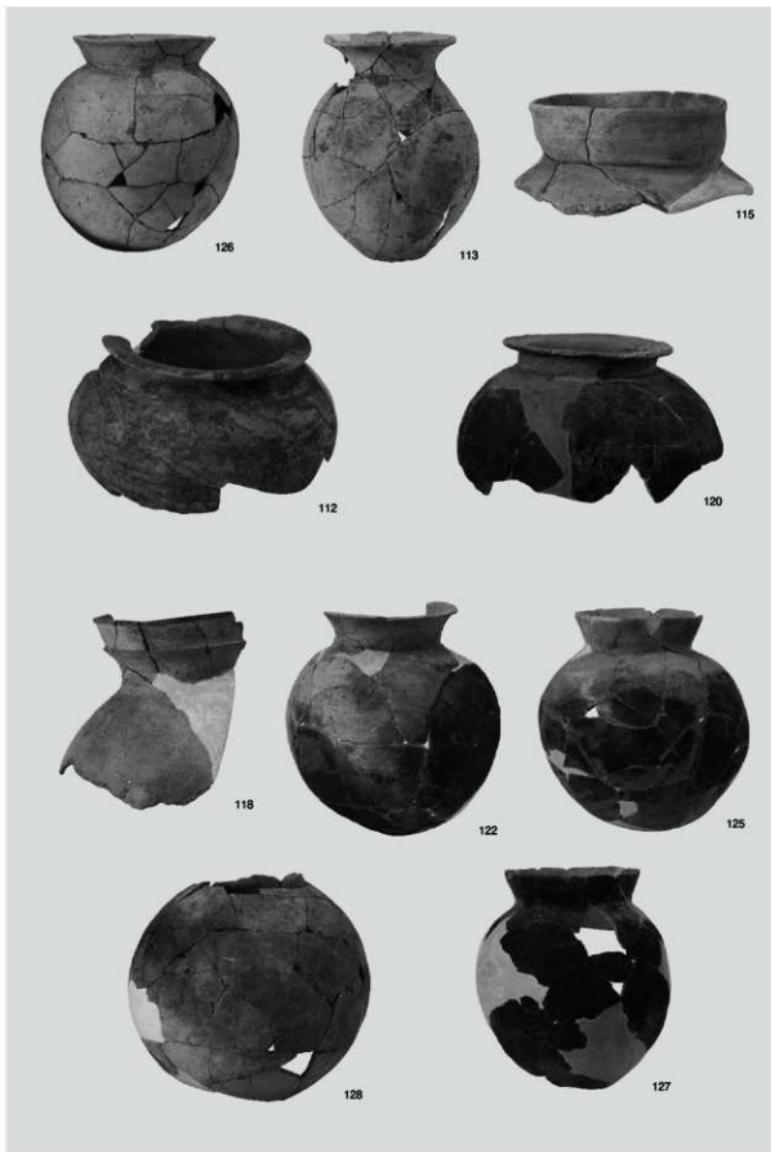
(2) 101号溝遺物出土状況(南から)



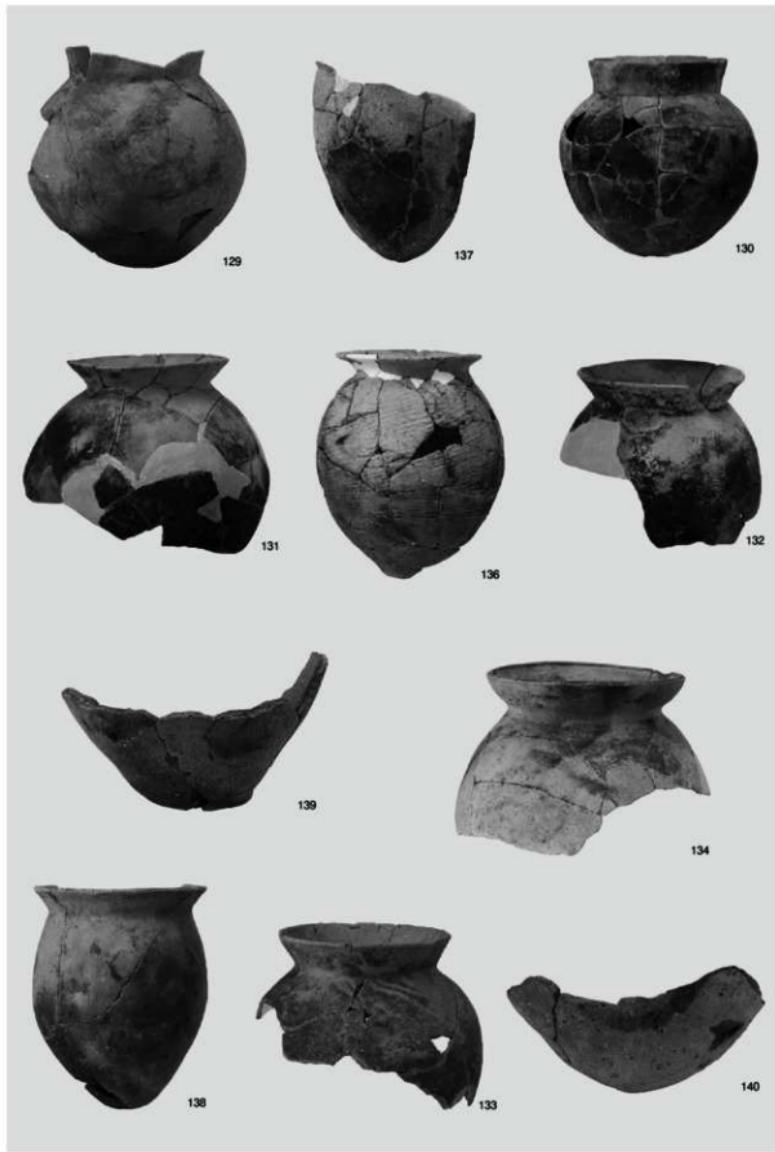
出土遺物 1 (縮尺不同)



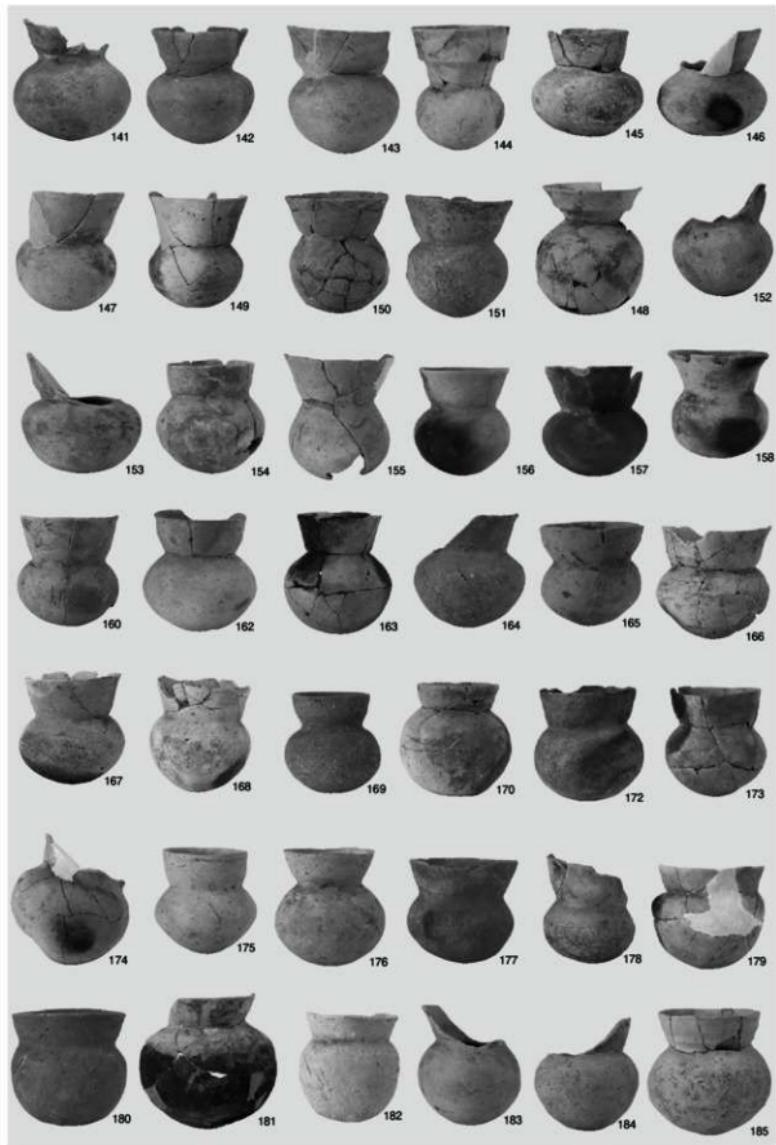
出土遺物 2 (縮尺不同)



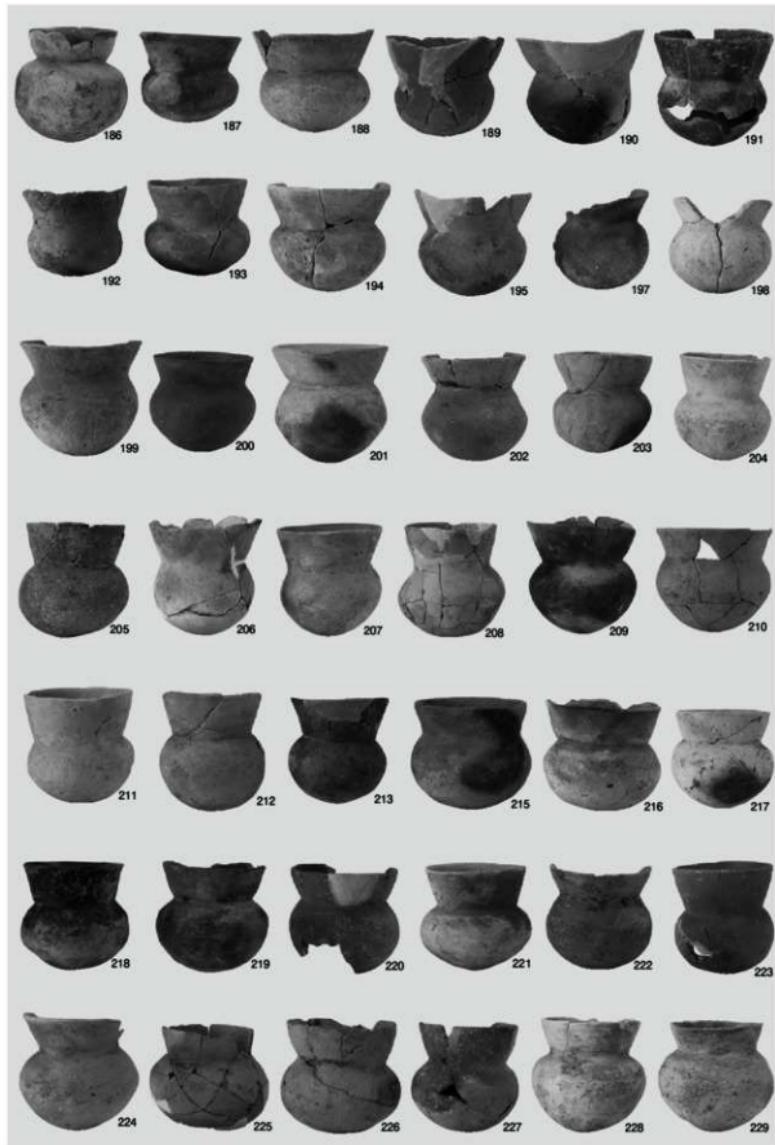
出土遺物 3 (縮尺不同)



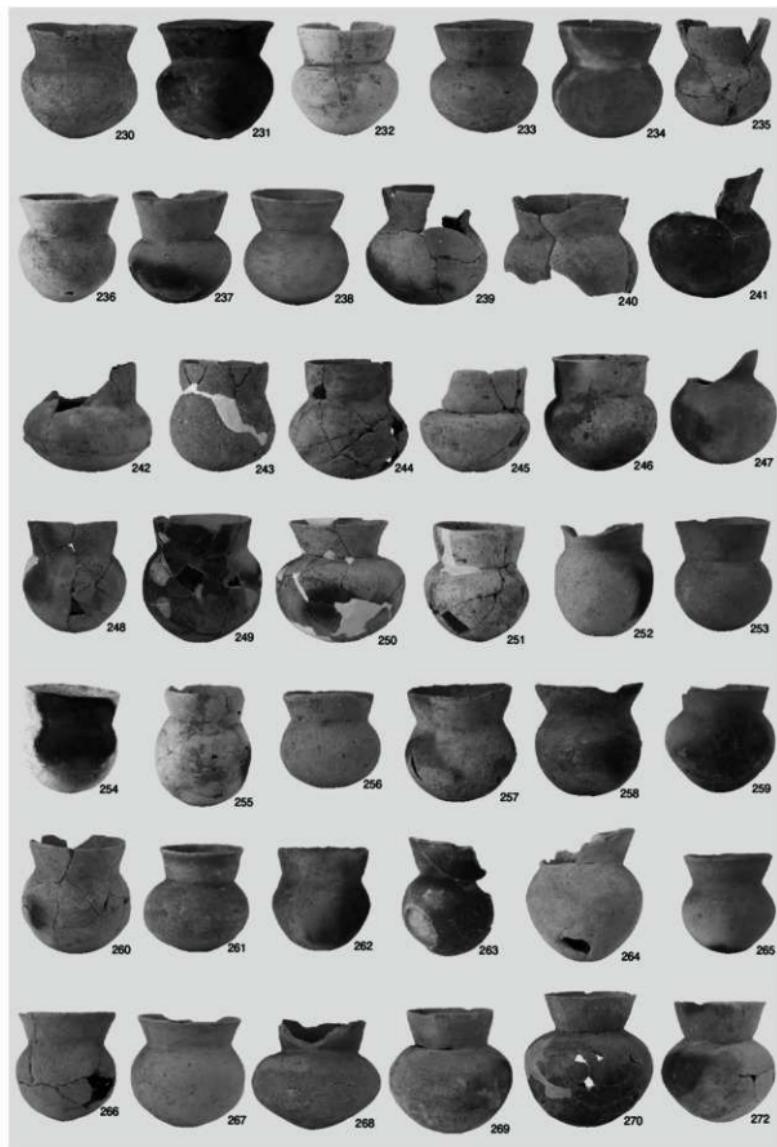
出土遺物 4 (縮尺不同)



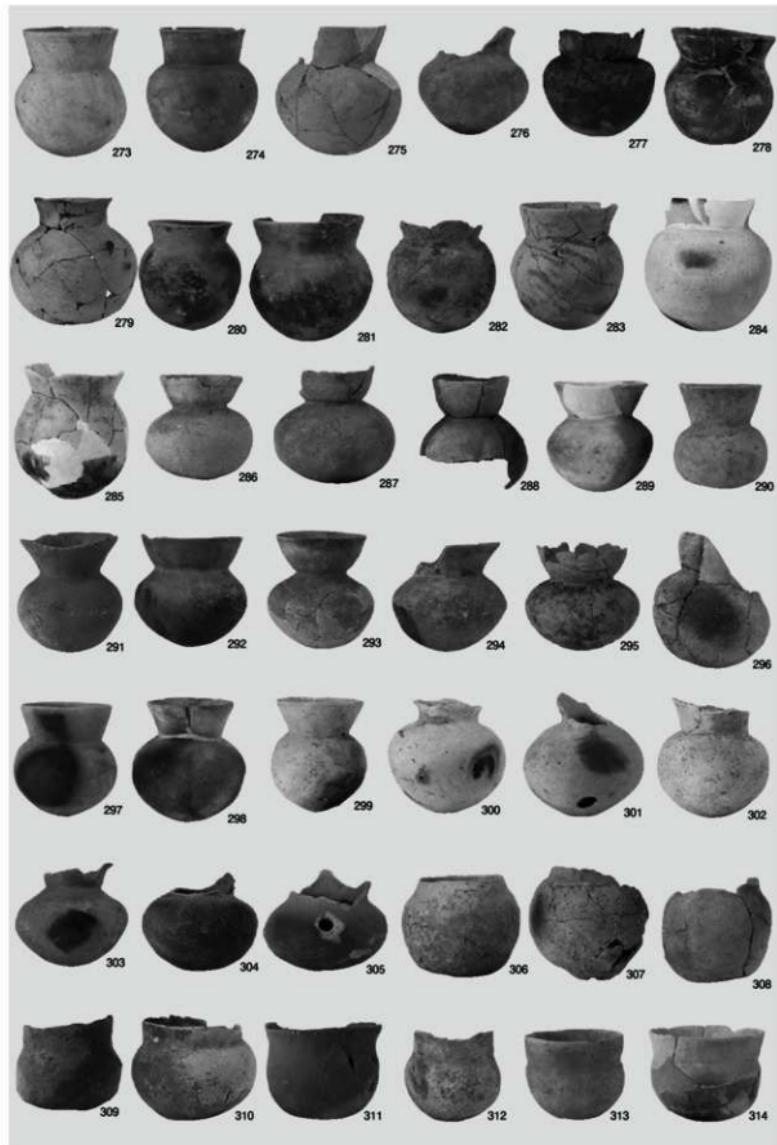
出土遺物 5 (縮尺不同)



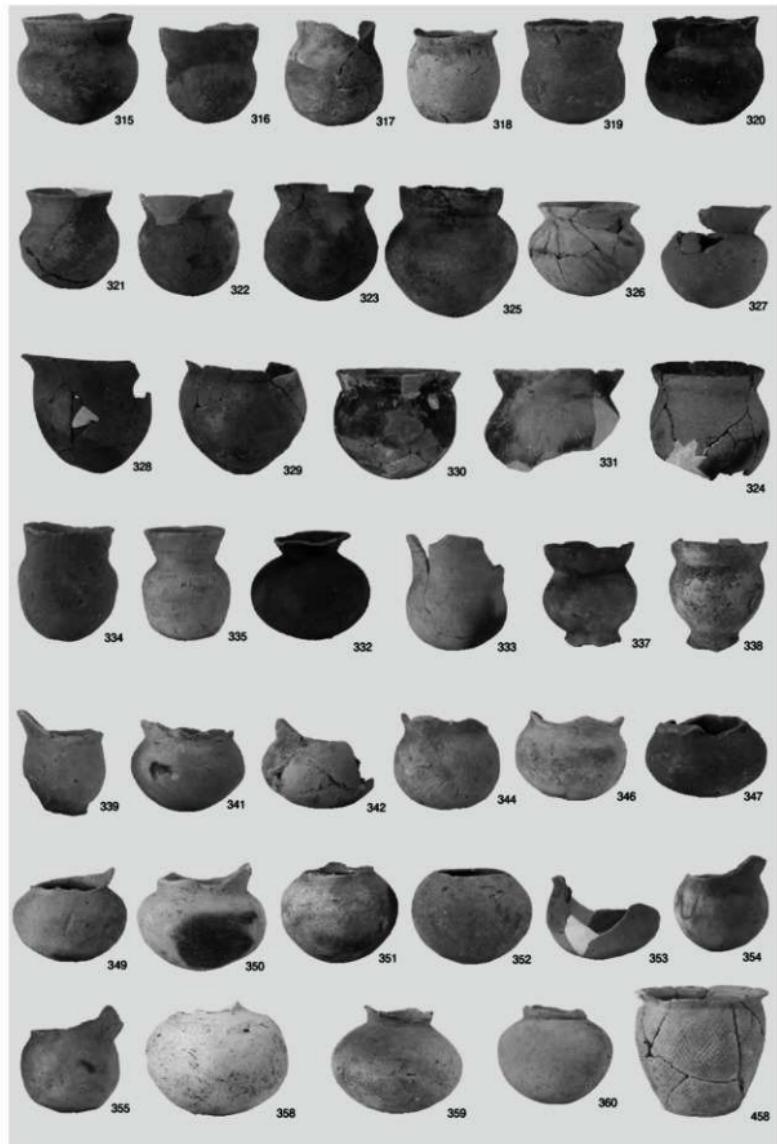
出土遺物 6 (縮尺不同)



出土遺物 7 (縮尺不同)



出土遺物 8 (縮尺不同)



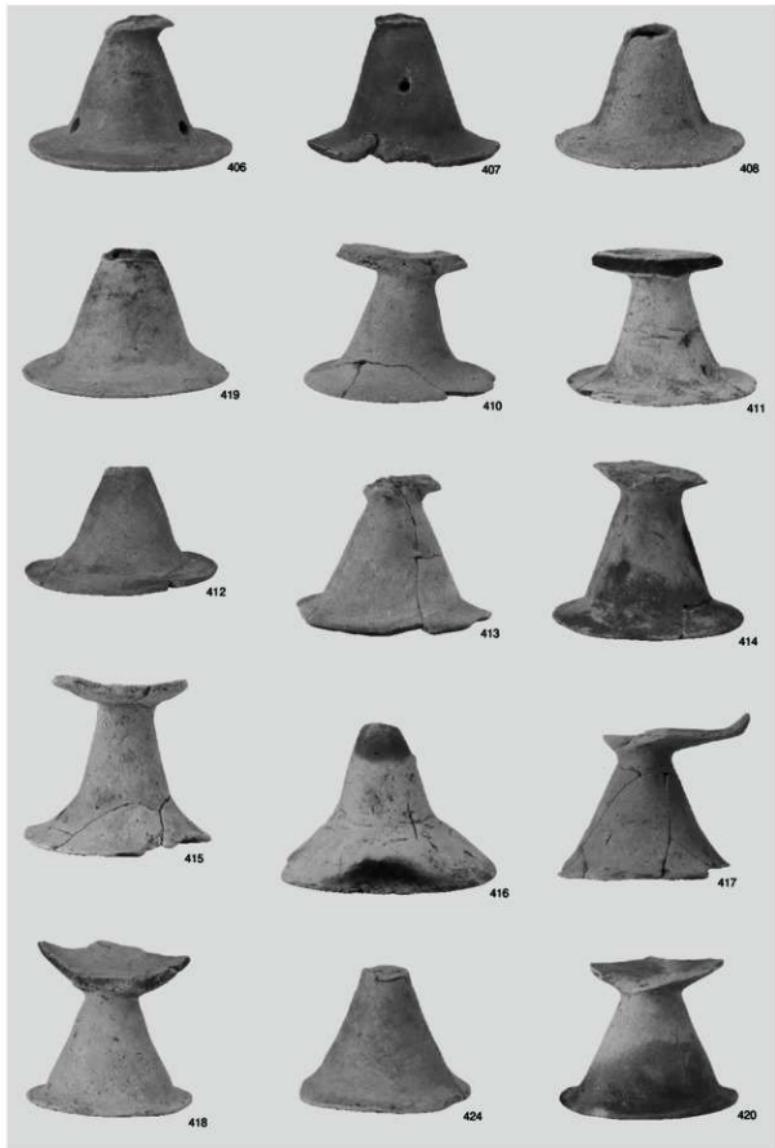
出土遺物 9 (縮尺不同)



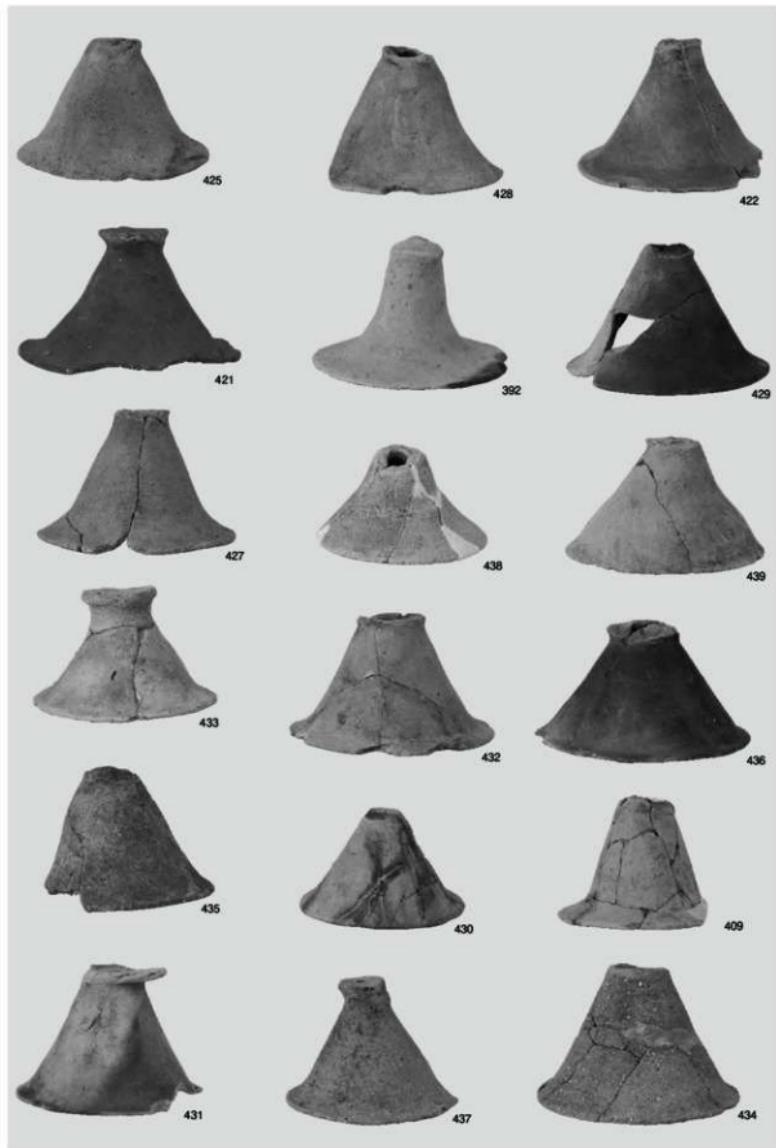
出土遺物 10 (縮尺不同)



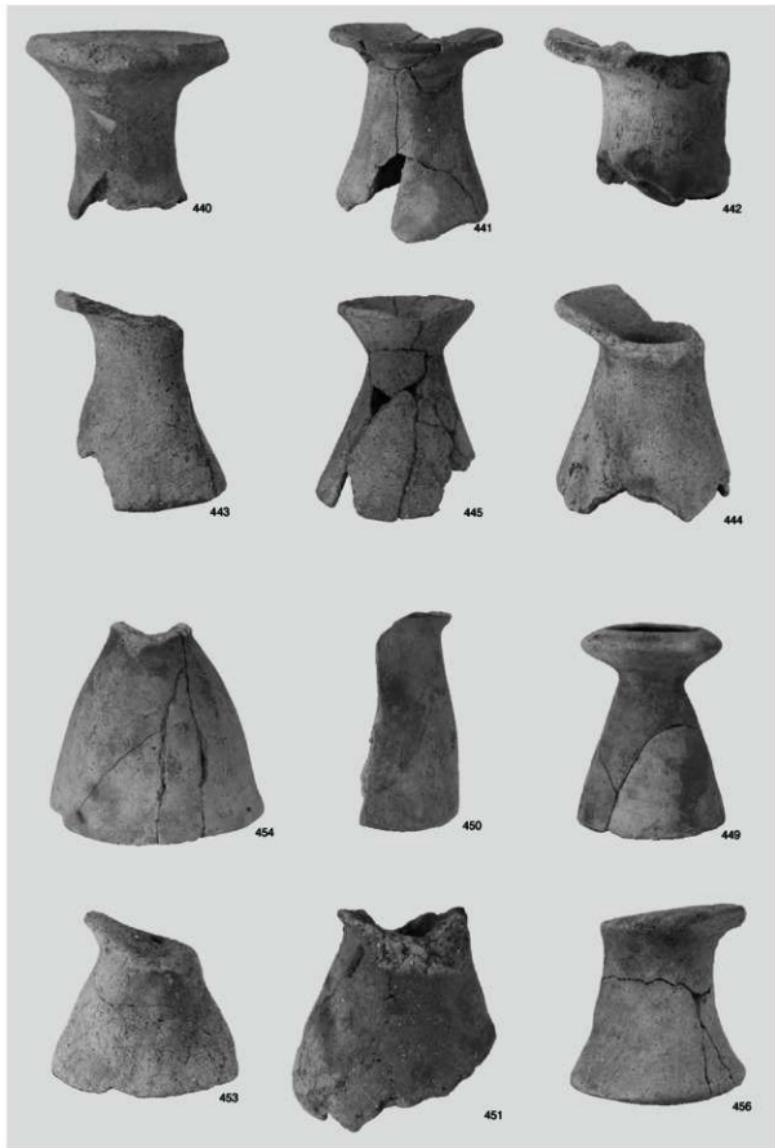
出土遺物 11 (縮尺不同)



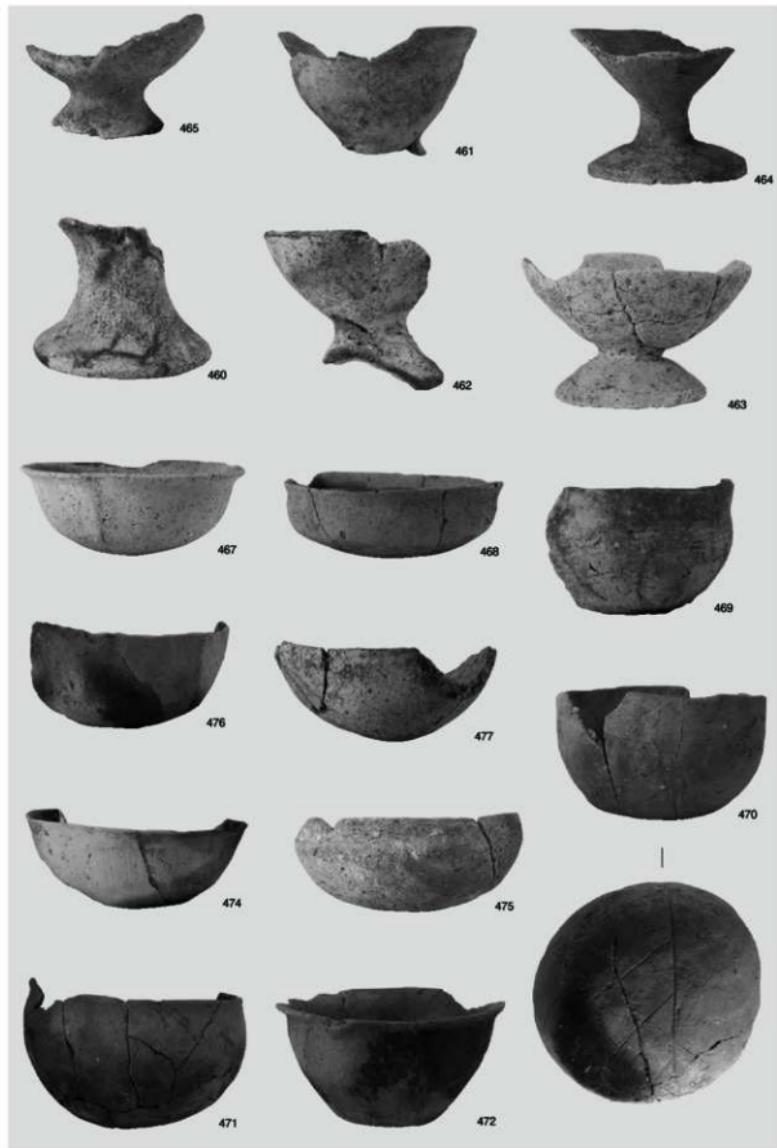
出土遺物 12 (縮尺不同)



出土遺物 13 (縮尺不同)



出土遺物 14 (縮尺不同)



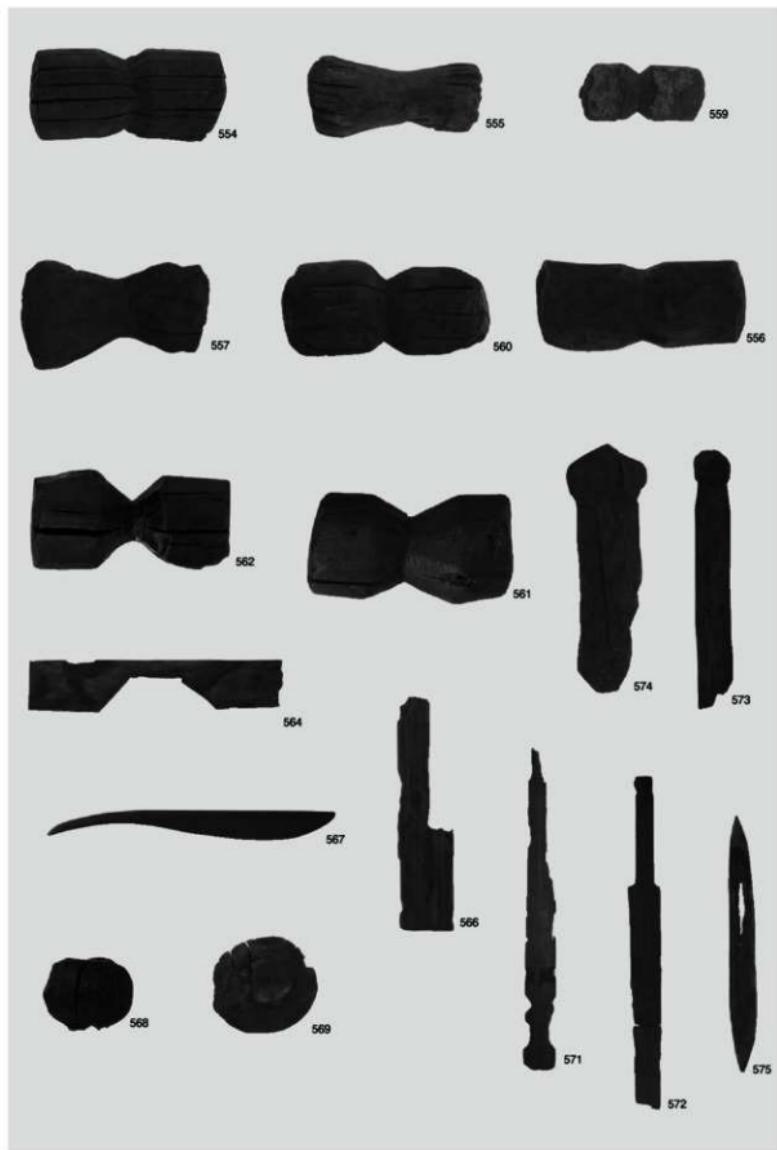
出土遺物 15 (縮尺不同)



出土遺物 16 (縮尺不同)



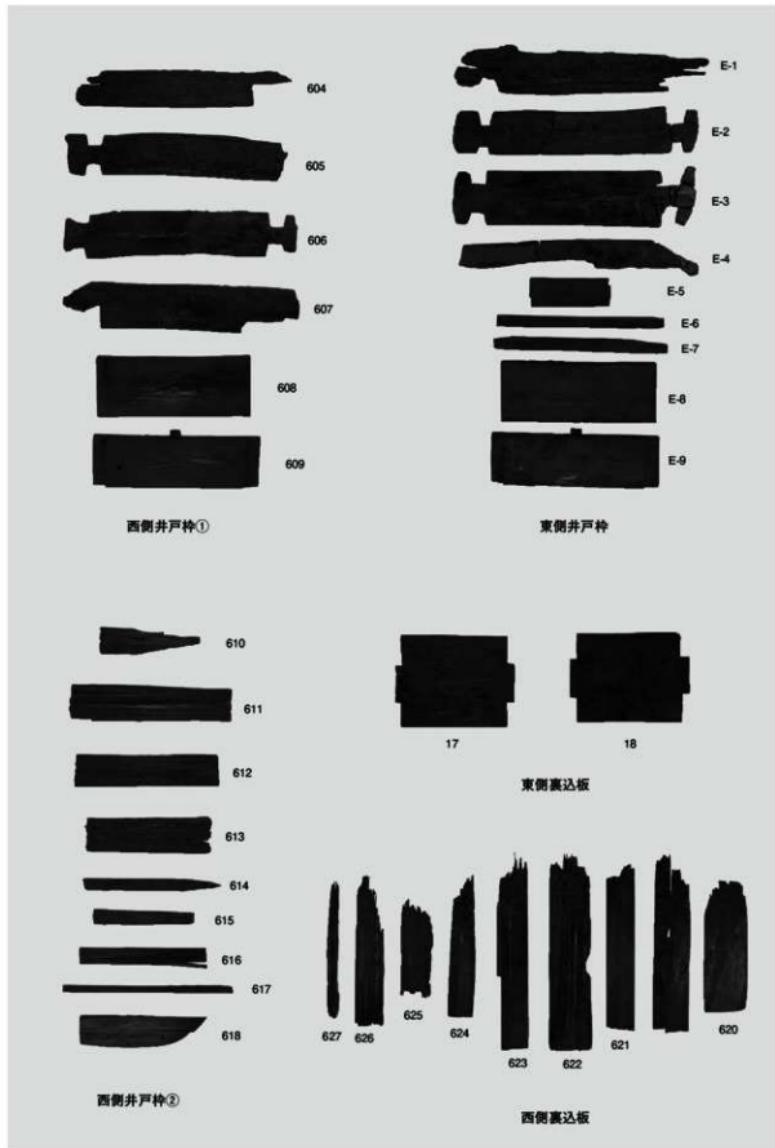
出土遺物 17 (縮尺不同)



出土遺物 18 (縮尺不同)



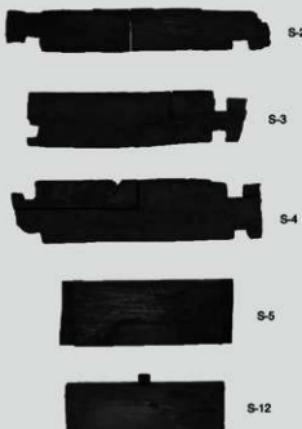
出土遺物 19 (縮尺不同)



9号井戸井戸枠 1 (縮尺不同)



北側井戸枠



南側井戸枠

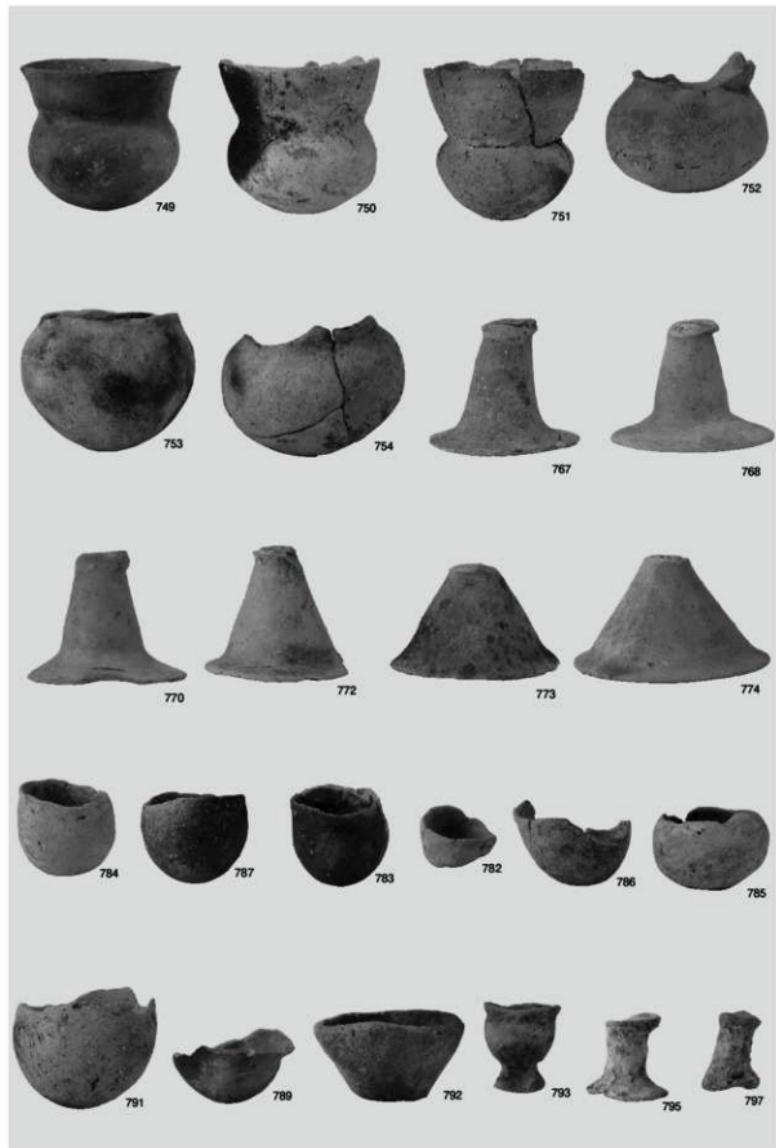


井戸枠

9号井戸井戸枠2(縮尺不同)



9号井戸出土遺物(縮尺不同)



136号沟出土遗物(缩尺不同)



1·10·136 号沟出土遗物(缩尺不同)



(1) 9号井戸井戸枠回桶(縮尺不同)



(2) 鬼瓦(縮尺不同)

報告書抄録

ふりがな	たかばたけいせき 2							
書名	高烟遺跡 2							
副書名	-高烟遺跡第20次調査報告-							
巻次								
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号								
編著者名	小林義彦、谷直子							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号							
発行年月日	2012年3月16日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
高烟遺跡	ふくおかしはかたくいたづけ 福岡市博多区板付 6丁目1番1号	市町村	遺跡番号	33°	130°	2008.08.18	5,067	記録保存
33'	40130	95	33'	27'	~	2009.08.02		
			1836"	18"				
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
高烟遺跡第20次	集落 ・ 墓地	弥生時代～古代	竪穴住居・井戸・ 木棺墓・土壙・溝・ 旧河川・官道	弥生土器、土師器、須 恵器、青磁、石製品、 木製品、土製品、銅錢、 管玉	高烟遺跡は、御笠川中流域の左岸に拡がる河岸段丘上に立地する。古代の井戸は、木組みで井戸底には底を削り貯いた桶が掘えられていた。井筒内からは、鬼瓦や平・丸瓦と埠が出土しており、古代寺院の存在を裏付けている。水城東門から博多方へ延びる官道も検出された。また、5世紀代の旧河川からは、農耕具や建築部材と土師器高环や小型丸底壺が多量に出土した。			

高烟遺跡 2

-高烟遺跡第20次調査報告-
福岡市埋蔵文化財調査報告第1101集

2012年(平成24年)3月16日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1-8-1

印刷 久野印刷